THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1916

十一月號

337 12 31

第三十一年第十二號 第三百三十七號



染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タッタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 東京 大阪 丹平商會
全國化粧品賣薬店にあり

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

【參版】

死後は如何

四六判總クロース
全一册
正價壹圓貳拾錢
郵税拾錢

▼附錄「交靈術とは何ぞや」

人間の死後は果して如何、**絶滅**か、**永生**か、將た「醒むる無きの睡眠」か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中に一道の光明あり**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす。**現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者、即ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。附錄とせる**「交靈術とは何ぞや」**に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は、之を讀んで將に大なる**戰慄と畏怖**とを禁じ得ざるべき也。

參版

デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

四六判總洋布製
全一册
正價金八拾五錢
郵税八錢

東京本郷西片町 **玄黃社** 電話下谷一三九番 振替東京七九九五番

長田幹彥氏作

長篇小說 浮草

（新刊出來）

紙數五百頁
定價金八十錢
送料八錢

運命の波に弄ばれて、男の胸から男の胸へ、浮草のやうに漂ひゆく可憐の美人志保子が半生の哀史を描ける長篇。「美しさ」の限りと、「悲しさ」の限りとを一つに集めて、作者一流の艶麗の筆を心ゆくまで揮ひつくせるもの、凡そ這種美人小說の感興は、此篇に於てとゞめを刺す。且つ作者の眼は常に現實に開く。背景には現下時勢粧のさま〴〵を描き、人物の心理亦よく現代の眞を寫して、一篇の情話尙ほ時代の鏡たる藝術の異使命に負かぬてあらう。

■情話新集■

第十一編

小山內薰氏著

江嶋生嶋

竹久夢二氏裝 ■定價四拾錢 送料六錢

發賣中

大奧に仕へて美貌を一世に謳はれたる上﨟江島が、克ち難き慾の故に、禁を犯して俳優生島新五郞に戀し、遂に悲しき終りに滅びたと云ふ、史上に名高き物語を、作者一流の筆を以て描けるもの、艶彩目くらめくばかりの繪卷物である。

大町桂月著

八犬傳物語

四版 價九十五錢 郵送料八錢

前作の複雜なる結構を其まゝ著者一流の快筆に縮寫せるもの。非常の歡迎を受け發行後忽ちにして第四版發賣せり

長田幹彥著

鴨川情話

七版 定價八十錢 郵送料八錢

近代中の傑作を收めて此篇成る何れも京都を背景とせる濃艶無比の戀物語也

竹久夢二著

三味線草

五版 價九十五錢 郵送料八錢

作者獨特の繪入小唄集・三色版極彩色版木版コロタイプ凸版等四十數葉。小唄百四十章を添へたる挾入の極美本也

獨步書簡

第十七版 ■價六十錢 送料八錢

獨步の書簡數百通を收め、戀に悶え藝術に悶えし赤裸々の面目躍如たらしむ

東京市牛込區
矢來町中の丸

新潮社

電話番町二二二三番
振替東京一七四二二番

最新刊

蓮宗大學講師 『法華』編輯主幹 文學士 小林一郎先生新著

日蓮主義講話

(好評激甚)

口繪コロタイプ版三葉入

四六判上製美本全一冊
紙數五百五十頁箱入

正價金壹圓卅五錢 郵稅八錢

現代的解釋に成れる聖日蓮の教義は之れ

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸着點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れる者は之によりて現今の時勢と宗教との關係を領解し得べし。

内容目次

●吾等と日蓮上人●時勢の推移●切迫した世間●眞の愛國者●世界大戰爭の後●三種の低い信仰●自力と他力●科學と信仰の回顧―佐渡ケ島―身延の隱棲―入滅と其の後●日蓮上人の遺風●信仰的生活●日蓮主義の將來●五綱のこと●近世文明と日本國●哲學と信仰●一念三千●妙法蓮華經●本佛について●現世安穩●日蓮上人以前―現世の爲めの信仰―念佛と禪―鎌倉時代概觀●日蓮上人の事蹟―遊學時代―立正安國論―大難四度―半生

稻毛詛風先生新著

好評激甚

批評論

四六判上製美本 全壹冊五百頁

金壹圓 郵稅八錢

著者が最も專念苦心に成れるものにて我出版界只一つの著述

思想界の混沌今日の如く甚だしきはなく批評の力に俟つ所今日の如く切なるはなし。著者玆に見る所あり。批評の研究に專念すること多時。今や漸く體を得て『批評論』一卷を成す。勿論本邦最初の著述なり。斯くして批評乃至批評家の意義價値及び職能始めて明白となる。而して本書の特色は批評の體系的研究にあるは勿論なるが更にいふ所の研究が在來の文藝批評といふ如き一面に偏せず又單に索漠なる論理形式的考案にも執せず。最も廣汎にして根柢的なる立場より見ると共に生ける生活に綜合して論議する點に存す。此の意味に於て本書は正に批評主義的見地に立てる著者の生活態度を明にせる一個の哲學觀乃至倫理觀なりといふを得べし。隨て專門批評家は勿論苟くも自覺的に卽ち批評的に生活せんとする人は必ず本書を一讀して確實なる根柢と正しき標準とを得るを要す。敢て薦むる所以なり。

東京市神田區表神保町七番地

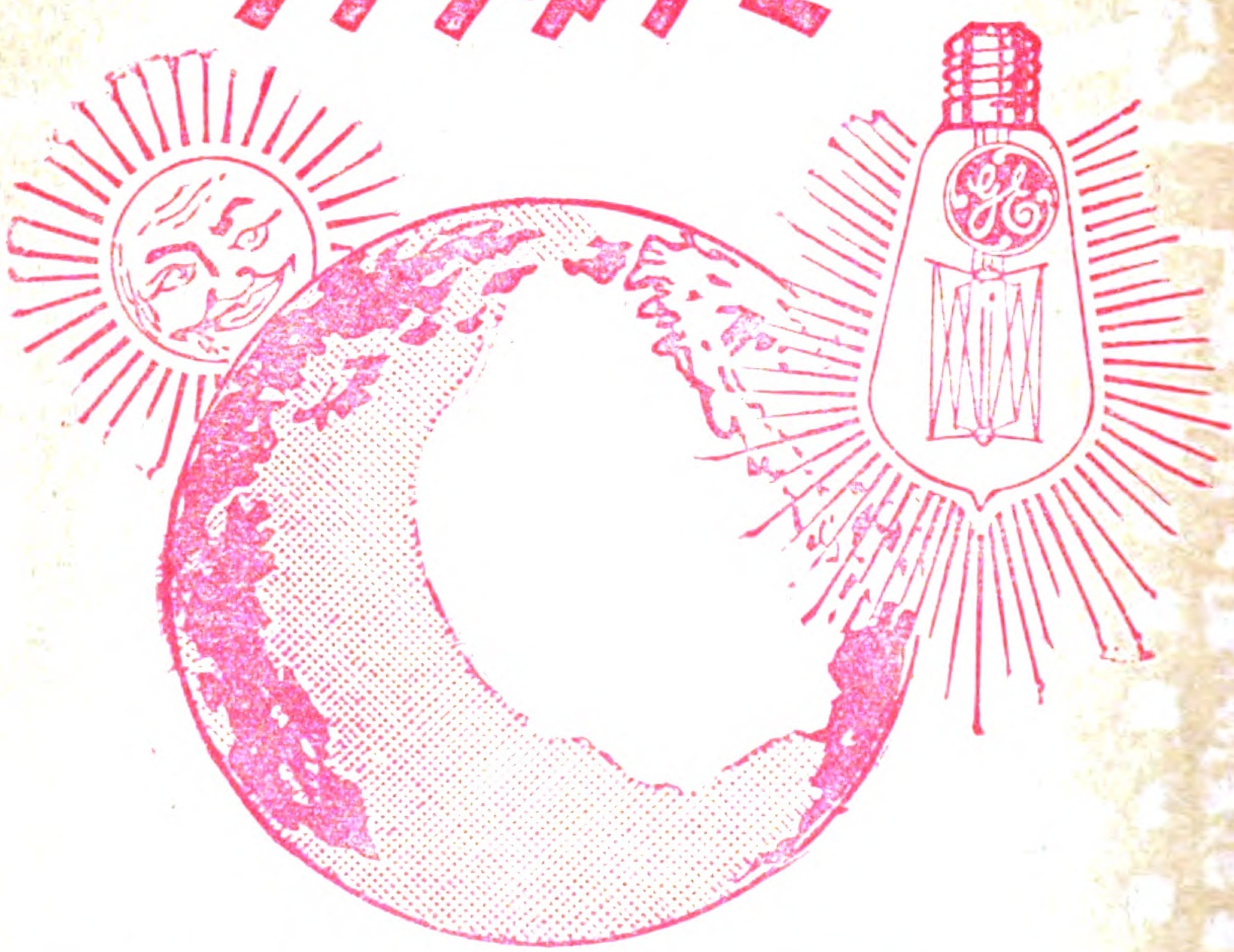
大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話京橋一九三・三二一二・長一〇五九

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話長一七一一

大阪出張所　大阪市内淡路町堺通一丁目五番地　電話長四一〇九五

御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な說明書を差上ます

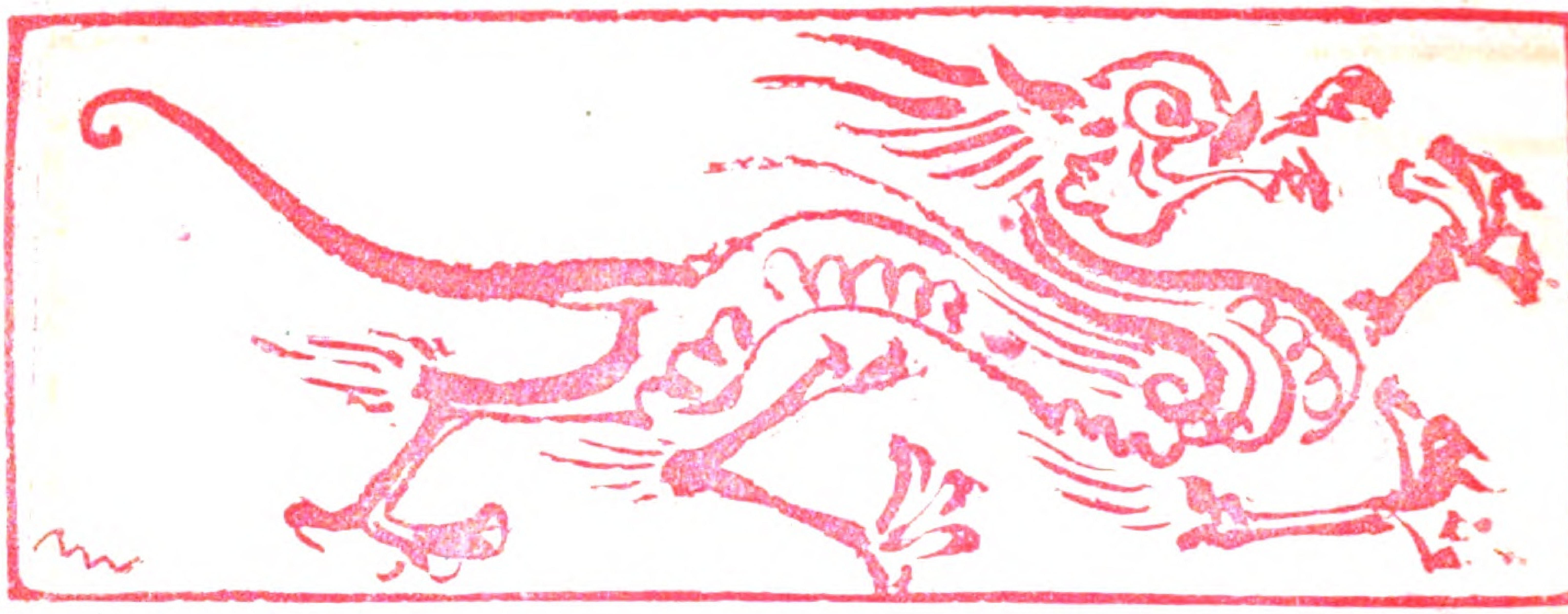
御住所

御姓名



中央公論第卅一年十一月號目次

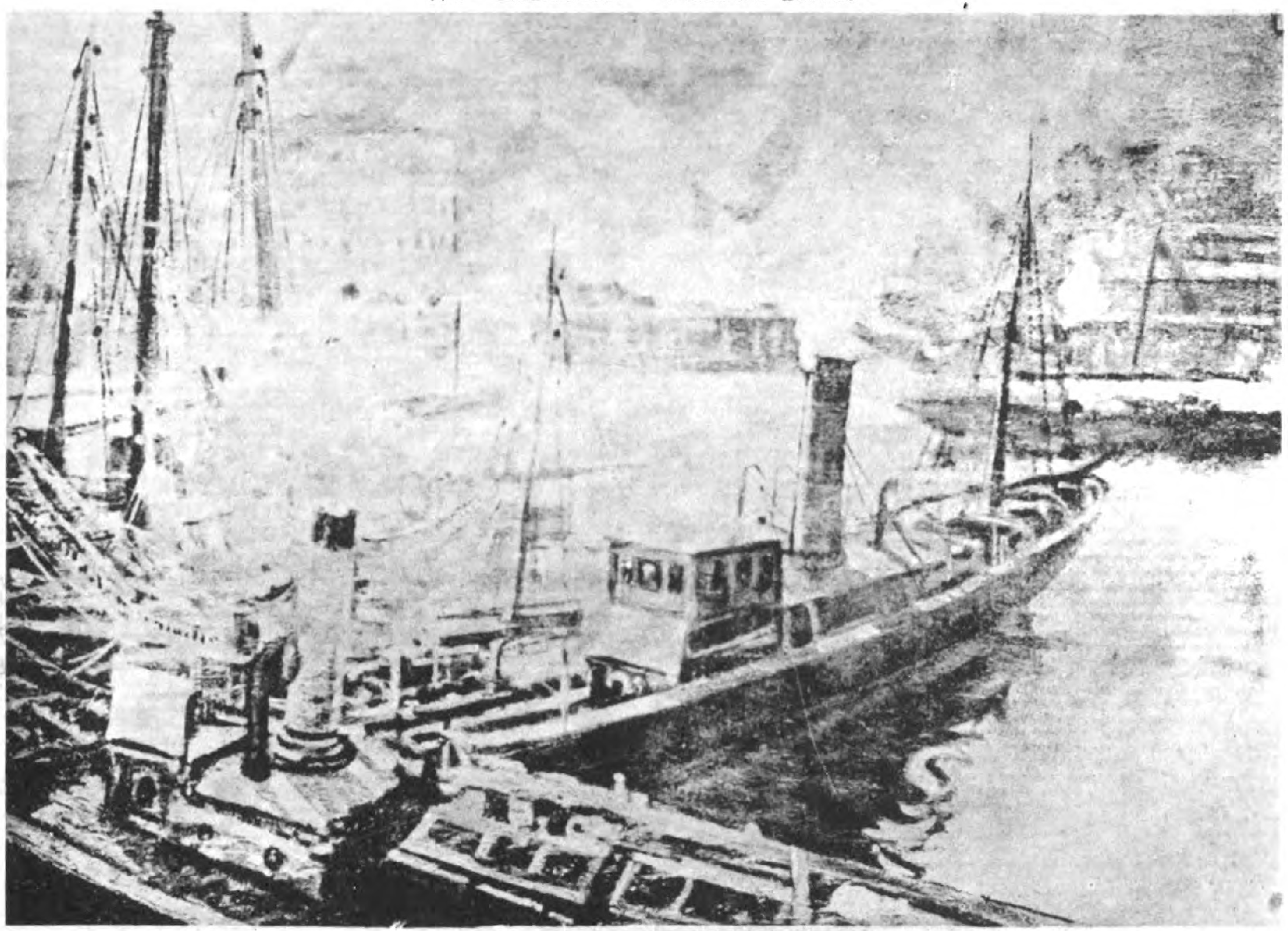
▼公論





12
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話長新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七
商品目錄御入用の方は郵券六錢御送附を乞ふ

W. ELMER SCHOFIELD



The Harbor of Boulogne.

十一月一日發行

婦人公論

定價二十三錢
郵稅一錢四厘
中央公論社

◀比類無き十一月の内容一覽▶

● 未婚男子の求むる **理想の妻**（都下各學校の秀才三十名が本誌の爲め眞面目に此問題を研究せる有益にして興味ある文字）

● **婦人の職業を排す**（現今婦人の職業問題を論ずること懇切叮嚀にして著者一流の見地より之を非とする現今女子必讀の大文字）堀江博士

□ 婦人と政治……石川半山

□ 「現代女ぞろひ號」を讀む　中村孤月

□ 菊の花の見方……有川ヒサヱ

□ ミル夫人（良妻傳）……矢野良曉

□ 今の閨秀畫家……笹川臨風

女と芝居

▼ 舊劇と新劇との見どころ……島村抱月

▼ 西洋婦人の芝居見物……坪内士行

▼ 女に芝居を見せる可否……下田次郎

▼ 女は何故芝居を好くか　岡田八千代

▼ 旅役者と田舍の女……長田幹彦

▲ 樂屋の俳優……岡本綺堂

▼ 女に毒な芝居道の空氣……小山内薫

□ 男子の暴戾……岩野清

□ 色を白くする法……マリー・ルイズ

□ 日本婦人の食物……二木醫學博士

小說（連載）　益々面白くなった

□ **拾兒**　森田草平

□ 兩國の秋　岡本綺堂

□ 新長編人情劇 **嫉妬**　中村吉藏

□ 新短篇 紅白の眞綿　上司小劍

□ モデル女（職業調べ）……一記者

□ 妖怪變化夜話……井上博士

● 祇園情話 **操を破られた女**（骨肉の緣薄きお梅が歡樂の中に人となった波瀾ある一生を細叙して讀者をして萬斛の同情を禁ぜざらしむる實話）鈴木秋風

● **女性と羞恥心**（羞恥心の如何なるものなるかを解剖し羞恥心の起る理由と共に樣々な狀態とを面白き例を擧げて說明し、羞恥心の女性に缺くべからざるを平易に說ける有用の文字）高島平三郎

第四輯新刊

漢籍國字解全書

豫約出版

本書目錄

第壹輯（孝經、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、小學、近思錄、老子、莊子（內編）列子、唐詩選、古文眞寶、（前後）（拾貳冊七千九百餘頁）

第貳輯（左傳、傳習錄、楚辭、管子、墨子、荀子、韓非子（拾參冊八千百餘頁）

第參輯（禮記、莊子（外篇）、唐宋八大家文（八冊四千七百頁）

第四輯（國語、淮南子、戰國策、正續文章軌範、十八史略、蒙求（十二冊凡そ六千餘頁）

講述者

熊澤蕃山、中村惕齋、眞勢中州、松井羅州
大田錦城、山本洞雲、毛利貞齋、太田玄九
荻生徂徠、服部南郭、榊原篁洲、林羅山
鵜飼石齋、加藤正庵、三輪執齋、淺見絅齋
菊池晩香、牧野藻洲、桂湖村、松平康國

豫約申込要項

	甲種（即納）	乙種（壹圓卅錢宛分納）
第壹輯	金拾參圓五拾錢	金拾五圓六拾錢
第貳輯	金拾四圓五拾錢	金拾六圓九拾錢
第參輯	金九圓	金拾圓四拾錢
第四輯	金拾貳圓	金拾四圓四拾錢

（各輯共、外に送料を要す）

申込期限　大正五年十一月卅日限り

送本期限　各輯とも大正五年十二月より毎月一冊宛發行す

▲各輯內の書は選擇豫約を受けず▼

嚮に發行せし本書の三十三冊を以て經書、諸子類、詩文集等の重要なるものは殆ど網羅し盡したりと雖も、子類の巨臂にして特に難解なる**淮南子**、**戰國策**と左氏傳の姉妹篇として併せ研究すべき**國語**と過去現在の學界に於て最も廣汎の讀者を有する**十八史略**、**文章軌範**、**蒙求**とは尙ほ其選に漏れたるを以て本書の至便を感じたる讀者は其續刊を熱望して已まず、本大學亦其必要を認めたるを以て漢文科専攻教授の講述を求めて**第四輯**となし豫約方法により既出の三輯を加へて廣く之を江湖に頒たんとす、期間極て短く、豫約以外に販賣せず、請ふ此好機を逸する勿れ、

菊判總布製美本
第壹輯拾貳冊　七千九百餘頁
第貳輯拾參冊　八千百餘頁
第參輯八冊　四千七百餘頁
第四輯十二冊　凡そ六百餘頁

内容見本　申込次第直に進呈

◎豫約申込所　東京市牛込區早稻田　振替東京一一二三番　**早稻田大學出版部**

豫約取次　全國書肆

（縮寸　二の二）

奉祝立太子式

十一月三日は是れ何たる幸ある日ぞ、久しく明治大帝聖誕の日として歡迎せられ今復た皇儲裕仁親王殿下立太子式の記念日たらんとす、恭しく按ずるに　裕仁親王殿下は明治三十四年四月二十九日を以て　今上陛下の皇長子として降誕坐しまし、夙に英明仁孝の御聞へあり、帝國憲法、皇室典範の規定に從ひ自然に東宮に備はらせられ、詔書儀禮を以て始めて其位に立たせらるるに非ずと雖も、今此詔書儀禮に由り既定の事實を燦然として中外に發揚せられんとするなり。

敬んで承る處に由れば當日公布せらるべき　詔書は御親署の後御璽を鈐し內閣總理大臣及宮內大臣の副署あるものたるべく、賢所大前に於て行はせらるべき儀禮に付ては、我文武官百官列國の大使公使之に參列し、　今上陛下皇后陛下と共に出御あり、皇太子殿下亦た參入せられ、皇祖の神靈に拜禮及御告文ありて後、皇太子殿下に對して敕語ありて御手づから震位の表徵たる歷朝相傳の壺切御劍を授け給ふべしと、斯くて實質に於ても法式に於ても皇儲の位確定し茲に皇位繼承の大義始めて全きを得べく、一系の皇統を萬世に傳ふる道に於て至れり盡せりと謂つべし。

金甌無缺の我皇室は我大和民族の世界に對する最大の榮譽たる耳ならず、亦た實に國家統一の中樞にして禮儀政刑の本源なり、立太子式により示さるゝ皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮にして、現今隆々たる我國勢と相待ち帝國の前途に向ひ更に一道の光輝を發つものに非ずや、吾社同人亦た何の天幸ぞ此盛事に遭ふ、茲に七千萬の同胞と共に恭しく滿腔の祝意を表し奉る。

中央公論



十一月號
第卅一年第十二號
第三百三十七號

這般の政變を論ず

（一）

憲政擁護運動起りて故桂公及び一派を政界權威の地位より逐放し元老閥族の徒をして輿論の前に恐怖畏縮せしめしより未だ四年に滿たざるに政權は再び長閥頭目の手に歸し、最近特に極端なる憲政主義を唱へて多數黨を擁し强ゐて國柄を掌握せんと試みし大隈侯加藤子の徒も乍ち口を鍼して復た猥りに憲政の常道を云々せず暫く形勢を觀望して機に臨み和戰兩樣の使分けを爲すの用意に出づるもの丶如く、政友會亦た中立を標榜して好意を表せんとするもの丶如く、國民黨すら非立憲呼ばりの先鋒たるを避けんとし寧ろ新内閣に責むるに外交の刷新を以てし隱忍其成績を見んとするに似たり、同時に曩に桂黨とし

て逆境の極度に陷りし同志會は政憲會の新名稱の下に絶對多數黨の名聲を馳せ當時憲政の兩柱神の一位として最も桂黨に反對せし尾崎行雄氏は舊同志會員と握手し新政黨七總務の筆頭を占め、却て桂公の參謀長たりし後藤男は疾くに桂黨を去り今や內相として舊桂黨の最も恐る敵手たらんとす、而して元老なるものに至りては一時殆んど滅せんとして滅せず山縣公久病より全快し松方侯依然頑健に、西園寺侯亦た宿痾全く癒へ元老中の新鮮要素たり、最近の政變に處せし電光石火の英斷の如き以て元老團が其前日の重威を回復せるを見るべし、而して新首相寺內伯に至りては武斷主義者として世間の氣受甚だ面白からず又た衆議院に於ては殆んど一人の與黨を有せざるに關はらず、其就任匆々各派の首領を歷訪して敬意を表し新聞記者團を招筵して同情を求むる等概して襟度謙抑寧ろ世人をして意外の感を催ほさしむるものあり、實に人間萬事塞翁が馬、其形式立憲的なるが如くして其實放縱橫恣、非立憲なるあり、其態度非立憲なるが如くして其心非却て熱心に民意を汲まんとするあり、現下の我政局に就て觀れば所謂政客の多くは內心權勢熱の患者に外ならずして昨是今非殆んど理路を辿りて解釋す可らず、我々邦人は常に支那政界の紛々として中樞の安定なきを笑ふ、然れども我政界の近狀に對し靜かに之を觀察せば北京の政界と東京の政界と果して著しく擇ぶ處ありと謂ふべきか、是れ吾人が時局に向ひ長大息を禁ずる能はざる所以なり。

大正五年の今日超然內閣の成立し且つ其寧ろ世人の氣受甚だしく惡しからざるは蓋し何人も頗る意外とする所たらずんばあらず、大隈侯は其在職中常に立憲主義を號呼して政黨內閣の基礎を作らんとして怠らず、時宛も日獨開戰中に屬し反對黨に向ひ寧ろ擧國一致を强要す可きに關はらず强ひて政戰を挑發

し議會を解散し大に選擧干渉を行ひしは國家本位より之を觀れば頗る非議すべき點多しと雖も多數黨の基礎の上に立たんことを欲する其心事に至りては一面之を諒とすべきものなきに非ず、蓋し多數の反對黨を大向ふに廻はし少數黨を基礎として政府に立つことの不自然にして、且つ困難なるを感ずるの結果茲に出でしと想像せざるを得ざればなり、若しも侯をして一層廣くして高き見地に立ち擧國一致の策を廻らすを得せしめば國家の慶福之の上なかりしは天下識者の認むる所なるべきも、人各々其天禀に超越す可らず侯としては寧ろ戰時を利用し總選擧を行ひて反對黨の跋扈を打破し侯を中心として政界の樞軸を安定するの道に出でんとするを以て自然の順路とせん、而して其政黨主義の貫徹に努めたる一事に對しては吾人亦之を多しとせざるを得ず、然れども過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、侯の熱心は大に同情するに足るも其目的を達せんとする方法に至りては甚だ亂暴に過ぎ權變に失して本旨に背悖するものありしは吾人毎に之を深く遺憾とせり、例せば前云ふ總選擧に際する干渉の如き之を反對黨の云へるが如く明治二十五年の大干渉に優るも劣ることなしとは信ず可らざるも、決して尋常一樣の選擧に非ざりしことは幾多の證績ありて蔽ふ可らず、當時大隈首相の聲望を以し且つ内閣總懸りの勸誘を以てせしことなれば假令官權の具體的干渉なしとするも政友會の絶對多數を打破するは難事ならず、但だ選擧の結果與黨三派をして彼が如き較著なる絶對多數を制するを得しむるに至れるは偏に容易ならざる官憲干渉の賜なりと斷ぜざる可らず、殊に總選擧後幾許もなくして所謂大浦事件の起るあり議會解散に先だち時の農相大浦子の議員大買收に關する罪跡露顯して其退隱を見るに至り、首相の辭職申出あり、加藤若槻八代三相の辭職・るありて、立憲主義を標榜する大隈内閣は此の前後の大失態の巨細を天下萬衆の前に

晒け出されて到底拭拂す可らずなれり、此時に當り大隈首相にして若し能く責任の何たるを解せば斷然其辭意を貫徹すべく、如何に優遲なる恩旨ありたればとて決して進退の節を誤ることある可らざりしなり、論者或は言ふ當時首相は實に時の議員操縱掛たりし大浦農相の手に由り大買收の行なはれし事實を知らず故に責任は大浦子個人に屬し首相の關すべき處に非ずと、蓋し首相の關知せざりしと云ふ一事は形式的に觀れば或は事實なりしならん、然れども大隈侯ほどの政界の苦勞人でありながら當時大浦子の手にて計畫されし操縱の模樣を眺めつゝ其間少しの曲事もなしと信じたりとせば是れ侯の耄碌を意味する耳、侯の耄碌せざる限り必ずや何等かの曲事の行はれしことは自然に推測せし所ならずんばあらず、若し幾分にても之を推測せりとせば何故に直に其事實の有無を調査糺問する所あらざりしか、假りに一歩を讓り侯は全然之を關知せざりしとするも其董督不行屆の責は形式的の辭職申出のみを以て消滅せず、況んや内閣組織の初より常に立憲主義を標榜し、政界刷新を唱道せし侯其人なりしに於てをや、往昔米國建國の名士アレキサンドル・ハミルトン政爭の結果として前副大統領アーロン・ブルに決鬪を挑まれしことあり、ハミルトン素より挑戰を受くるの理由なき耳ならず彼や決鬪の蠻習なることを知るものなり、而かも彼れ之を快諾し自ら大空に向ひ發砲しつゝ却てブルの銃彈に中りて斃れたるもの、他なし彼自ら其友人等の諫止を退けて云へりし如く、若しもブルの挑戰に應ぜずば時人は彼を以て死を恐るゝ卑怯者と見做すべく、一たび卑怯者と見做されては國士の體面を保つ可らずと思惟したればなり、大凡國士の其信用を重ずる生命よりも甚だし、大隈侯たるもの大浦事件に關して一たび其節を失す、此より以後其朝に立つこと一年有餘の久しきに及ぶも世人は偶々侯の殘骸を廟堂に見る耳、侯の生命威望は第

一の居据の爲めに全く失墜し盡されたり、單に老首相の威望の盡果てたる耳ならず所謂絶對多數の威望も亦た大浦事件を機として大半失はれたり、何となれば議員買收を常犯とする大浦内相が選擧干渉の爲めに如何に惡辣の手腕を振ひしは容易に想像すべく、官權干渉の結果として生れ出でたる多數黨は到底國民の信望を繋ぐに足らざればなり、果して昨年の議會に際し大隈内閣は衆議院の多數に擁せられ傲然として貴族院に臨みたりしも、上院は還元問題其他の政策に關し政府と抗爭し之を窮地に陷れたりしかば老首相の懇請により某元老の斡旋を見るに至りて政府と貴族院の間に曖昧なる妥協の成立するに至りて僅かに無事なるを得たり、然れども此時より大隈首相の辭職説は此妥協の不文條件として世間に傳はり、政局の不安定は益々甚だしくなれり、而かも議會閉會後に至るも大隈首相の掛冠は容易に事實とならずして政界は惰氣滿々として變を思ふの情益々切なり、遂に六月初旬三浦子の斡旋に由り加藤、原、犬養三首領の會合ありて其頗る不自然の會合なるだけ世間の奇驚を惹起せしこと亦た大なり、蓋し是れ大隈首相が其貴族院と妥協當時の質言を食みて省みず、元老亦た其履行を迫るの勇氣なきを觀て之に對する一種のプロテスト、又は催促として識者の間に理解せられたり、即ち昨日まで犬猿啻ならざりし三首領が三浦子の宅に會合して『外交の方針は勉めて一定し之が遂行の途に當りては外界一切の容喙を許さず』と云ふに至りては之を言ふは易く之を行ふや至難なり、世人は其實行し得べきを期せずして唯だ『外界一切の容喙を許さず』と云ふの一句に不相應の重きを置けり曰く是れ首相掛冠の約束を履行せしめ得ざる元老及貴族院に對する面當てなりと、斯くて變を思ふの世情の低氣壓は元老にも大隈首相にも殆んど堪ゆ可らずなれり、六月末日頃に至り、大隈首相が遂に辭意を内奏せりとの説乍ち世人の耳朶を側で

しめしが七月五日に寺内伯其筋の勸誘により入京し大隈伯との間に内閣讓渡の交渉を開始せり、玆に於て世人は内閣交迭の愈々近けるを思ひ稍々意を强ふするものあり、八月始に至り山縣公入京せしかば必ず政變の解決を見るべく期待せられしも其事なく、大隈首相は寺内伯の首相提出の條件を容れざるを名として談判を打切り、宛も再度の居据を爲さんとするものゝ如き態度を示せり、然れども辭意内奏の一事遂に取消すべからず、九月に入り與黨三派合同の運動起り復た政界の惰眠を破り人をして自ら政變の遠からざることを思はしめしが、十月四日に至り流石に思切惡しき大隈侯も遂に内閣會議に於て辭表提出のことを發表せり、但し其辭表は老軀重任に堪へずと云ふを理由として圓滿辭職を標榜せるが故に、首相單獨に辭表を提出すべく、他の閣僚は其職に留るべく勸告せり、然れども閣僚孰れも首相の推擧に由り大命を拜せしものなるが故に侯に殉するを至當なりとし侯が閣議の席を去りて後ち孰れも辭表を決議し取纏めて侯の手許に差出せり、斯くて翌五日大隈首相參内して辭表を提出すると殆んど同時に元老會議は開催せられ未だ數時間を出でざるに新内閣組織の大命は早くも寺内伯に下り、玆に今春議會以來の宿題として久しく解決を待ちし内閣交迭問題も遂に全く解決せらるゝを得たり、但だし辭職の前後に於ける大隈侯の態度主張に因り端なく一二の憲法問題を惹起せしが故に吾人は更に此等の問題に付て研究する所なかる可らず。

（二）

大隈侯及び一派は云ふ首相の辭職は圓滿辭職なり幸に在職二年有半の間大政奉行に大なる過失なく、老軀重任に堪へざるを以て其職を辭するものなるが故に之が後繼者たらんものは憲政の常道に則とり自

然に大隈侯の推擧に係る所の人たらんことを要すと、斯くて大隈首相は辭職の上奏文中に加藤高明子を推擧して左の如く云へり、曰く

伏して惟んみるに子爵加藤高明は練達湛能の士にして亦久しく世の重望を負ふ、願はくば　陛下哀憐を垂れさせられ玆に臣が重任を解かせ給ひ臣が後繼として高明を擢用し給はんことを即ち恩命を得ば高明亦匪躬の節を致すべく政務亦異動を受けざるべしと、

以上の奏文に就て觀れば加藤子を推擧するに當り子が多數黨の首領なりと云ふの故を以てせず、其練達湛能にして久しく世の重望を負ふを以て推擧の理由となせり、然れども大隈首相は辭表と共に就任以來大政奉行の成績を別册に認めて　闕下に奉呈したり、此別册に於て首相は「立憲の大道は平靜の裡に政務を圓滑に進行するに在り、而して如何に　聖上陛下の御信任厚きも聖旨に應へ奉公の誠を效す上に於ては貴衆兩院の協贊を得るの必要あり、卽ち輿論の援護なくんば聖旨を奉體するの途ある可らず」と云ふの趣旨を明かにせりと云へり、之に由て觀れば加藤子推擧に附ては其裡面の理由として子が多數黨の首領たるの一事を含めるに相違なく、又た侯の辭職　聯關して與黨三派の合同の速成に努めし一事を以て察するも加藤子推擧の一大理由が暗默の間子が多數黨首領たりと云ふに在りしや多辨を待たずして明かなり、玆に於て大隈侯の辭表提出と聯關して自ら三個の疑問の提起せらるべきを見る、一に曰く大隈侯の辭職は果して侯及び一派が唱ふる如く圓滿辭職なりや否、二に曰く假りに之を圓滿辭職なりとするも斯の如き場合、將に辭職せんとする首相は自ら進んで後繼者を推擧すべきを以て憲政の常道と做すべき否や、三に曰く我邦政界の現狀に鑑み內閣組織の大命は必ず多數黨の首領に下るべきを以て憲政の

常道と解すべきや否や、即ち是れなり。

大隈侯の辭職は果して侯及び一派が繰返し唱ふる如く圓滿辭職なりしや否や、侯は果して其重任に堪へずと思惟せらるゝ程に其健康を損し居れるやと云ふに、若し老齡を云はゞ就任當時と多く擇ぶ處なく其健康また侯の豪快なる氣象より察すれば大任に堪へずと思惟せらるゝ程に衰弊し居らず、其老齡重任に堪へずと云ふを文義通りに解釋せば今日堪へずとせば二年有半以前に於ても同じく堪へざりしものと推定せざる可らず、而かも事實は然らずして健康の一端を以てせば今日の健康は多く就任當時の健康に劣れりとは見へざるなり、即ち近來に至り特に老齡の重荷を加へ來りし所以は肉體の健康以外侯の政治上の事情侯をして辭職の止むを得ざるに至らしめしものなくんばあらず、侯の政治上の事情と稱するものゝ中には侯個人に關するものあり內外政務に關するものあり、即ち政務によりしては豫算問題、特に還元問題に關して貴族院との衝突免れ難きあり、又た近來の我が對支政策は支離滅裂、言語道斷にして、北京政府に對する交渉案件亦た停滯して進行する能はず、日支親善の基礎亦た大破損を蒙れり、即ち大隈內閣として內治外交一大窮地に陷りしことなれば、譬へば行路病者の野邊に斃臥する如く、今期議會前に於ける大隈內閣の崩壞は殆んど數の免る可らざるものあり、且又た侯一身上の關係より觀るも亦た今次の辭職は免る可らざるものあるに似たり、抑も大隈首相は吾人が前段に論せし如く大浦事件に對し引責辭職の意を貫徹し以て大臣補弼の責任を全ふし元勳政治家たる至誠を天下に披瀝すべかりしなり、其計遂に玆に出でず中途辭意を撤回し居据に決定したる以來天下亦た侯の至誠純忠を云ふものなく、侯の政敵たると味方たるを問はず侯を目するに政權熱に浮かされたる豪快なる權謀家を以てして憚る處な

きに至れり、而して侯亦た竊かに世論の機微を察し幾分心に疾しきことを感じたるにや、第一居据の後よりして或方面に對しては屢々相當の時機に於て辭職すべきを仄めかすに至れり、而して世間一般に侯の辭職する時の遠からざるを思ひ、侯は即位大典を首尾よく終了すれば必ず辭職すべしと云ふものありしも事實と爲らずして議會開會に至りしかば、貴族院に於ても政治道徳上大隈首相の不謹愼なる居据を以て看過すべからずと做して還元問題に托して其所決を促がせり、首相も流石に上院の呼吸を察したるにや議會閉會後適當の時機に辭職を爲すべきを以て不文の條件として還元問題に關し妥協を求めて一時の小康を贏ち得たり、斯くて六月下旬遂に辭職内奏を爲すに至り、後ち寺内伯と交際の結果第二居据を試みんとするの觀あるを免れざりしも、元老總懸りの大努力に由り遂に辭職内奏を反古にせしめずして最後の辭表提出を決行せしむるに至れり、之に由りて之を觀れば大隈首相の辭職は實質上決して圓滿辭職に非ず、形式上より論ずれば帝國議會の不信任決議に遭はず又儼として與黨三派の絶對多數を擁するあるが故に大隈侯一派が天下人心未だ我黨を去らずと傲語せしも一理なきに非ざりしも、是れ單に形式の論のみ、之を實質に就て觀れば大隈内閣は其當初の後援たりし元老貴族院より見限られたる以上、假令一夜作りの絶對多數なる與黨三派及び御用新聞に支持せらるゝも、疾く已に天下の人心に見離されたるものなり、其土崩瓦解は勢の免れざる處にして之を稱して圓滿辭職なりと云ふは一種の詭辯たるに外ならず、故に吾人は大隈首相の圓滿辭職を認めず、寧ろ之を以て晩蒔ながら其失政失職に對する德義上の責任を果せる必然の結果なりと斷定せずんばあらず。

然れども假りに數歩を讓り大隈内閣の辭職を以て圓滿辭職なりとせんに、圓滿辭職なるの故に後繼者を推擧するを以て憲政の常道なりとすべきや否や、蓋し是れ當時大隈侯一派の盛んに唱道せし處にし

て、此主張を根據として侯の奇怪なる辭職上奏文は起草せられしものなること毫も疑を容れず、然るに其所謂常道とは何れを標準として云へるものか、大隈侯は或る場合に於て一種の憲法論を試み我日本の國情は英國とも獨逸とも異なり大隈には大隈の憲法論ありなど放言せしことあり、即ち憲政の常道とは英獨其他の常規を指さず侯一流の憲政論を指すと做すべきか、然れども『常』の字を冠するは慣行を意味す侯個人としての見解を指して之を常道とは云ふ可らざるに似たり、蓋し侯の言說多くは臨機應變、其時の都合次第にて立論せらるゝものなるが故に或る場合英獨の『常道』を排するが如き言をなせしとて必ずしも之に固執すべしとは思惟せられず、寧ろ所謂常道とは後繼者を推薦せんとする場合の便利上例を先進國の英國に求めんと欲せしならんか、蓋し世に立憲國少なからずと雖も退職者が敢て其後繼を推擧するの先例を求めんと欲せば英國以外に於ては更に斯くの如き先例あるべしとも思はれず、然らば英國には果して斯かる實例ありやと云ふに之あるべしと思ふは大なる誤解なり、君主大權の發動最も隱微にして政黨の勢力全盛を極むる英國に於ては時に元首の諮問ある場合に辭職せんとする首相が後繼者を推薦することあるも、其諮問なきに關はらず敢て辭表中に後繼者を推擧するが如きは英國の憲法史上未だ曾て之ありしを聞かず、今次の大隈首相の辭職と頗る事情の類似せる一八九四年三月廣翁退職の場合に就て之を觀るに廣翁は若し女皇の諮問に接せば上院のスペンサー卿又は下院のサー・ウイリヤム・ハーコート氏を推擧するの意ありしが如くなるも遂に諮問なきが故に後繼者を推薦する能はず、大命は却て比較的年若きロースベルリ卿に下り、爲めに自由黨の折合思はしからず幾許もなく內閣瓦解し自由黨亦た分裂の不幸を見るに至れり、此時に於て世間往々ロースベルリ卿の首相に任ぜられしは廣翁の推擧に由るべきを想像し其失當を咎めしものありしも、廣翁は累を皇室に及ぼさんことを恐れて終世沈默して當

時の苦衷を語らざりき、僅かにモルレー卿の虞翁傳出づるに及んで世人は初めて當時の事情を明かにするを得たり、英國の政治家が大權を尊重して其擁護に努め、進んで責任の衝に立ち累を皇室に及ぼすなからんとする床かしき勤王の心事に至りては眞に敬服に堪へざるものあり、甚だ申し惡きことながら之を以て大隈侯が辭表中に猥りに後繼者を推擧し、且つ直ちに其奏文を天下に公表して責を他に歸せんとするが如き行動に比較せば眞に霄壤の別ありと謂ふべし。

更に憲政の常道より觀れば內閣交迭の場合に於て新內閣組織の大命は必ず多數黨首領に下るべきや否やと云ふに、此れ極めて實際上の問題に屬し時の政界の實相、殊に政黨の實相を窮めざれば答解す可らず、若し英米二國の如く二大政黨主義に則り政機は交代的に二大政黨に由り運轉さるべき慣行已に確定され居るに於ては政柄の每に多數黨の手に歸すべきは必然の約束にして、我が國體に取りて考ふるも果して二大政黨樹立して交代に政柄を執るに至る場合ありとするも必ずしも大權の作用を干犯するものとは謂ふ可らず、斯の如き場合に於ては政權の必然に多數黨に歸すべきを立憲的常道と云ふ素より妨げず、然れども政黨の基礎未だ定まらず二大政黨主義未だ樹立せず時の多數黨果して國論を代表するや否や容易に分明ならざる場合に於ては、即ち現在の我政界の如きに於ては、政黨を以て政權の唯一の基礎と做す可らず、蓋し政黨は近年漸く重きを加へ來り何人と雖も之を眼中に置かずして政府に立つこと能はざるは勿論なるも、多數黨の首領なるが故に必ず廟堂の首班に立つべしとは尙未だ論斷す可らず、現に論より證據、大隈侯が加藤子を後繼者として推薦するや練達湛能の士にして世の重望を負ふと云ふを理由とせり其間一言の多數黨の首領たるに及ぶなし、論者或は侯が辭表を草するに當りては新政黨未だ成らず加藤子未だ絶對多數黨の首領たらざりしが故に之に言及し能はざりしならんと云ふべきも、吾人

を以て之を觀れば、假令新政黨の組織已に行はれて加藤子絕對多數黨の首領となり濟まし居りしとするも、侯は其辭表中果して此事に言及したるべきや否や大に疑問とせざるを得ず、知るべし立憲の常道を踏むを標榜とする大隈侯遂に多數黨首領の必ず政權を執るべきを表面主張するに至らずして止みしを、又た加藤子に至りては最も明かに政黨の政權授受に對する意見を表發せり、子が同志會に對する告別演說中に曰く、

政黨の代表者たらずんば國政の任に當るに足らずと斷ずる能はず又た其代表者なるが故に國政の大任に當る可らずとの理由なしと、

加藤子の此一言の如きは目下排閥運動を起さんとする憲政會員中の一部に對する頂門の一針にして、若しも『政黨の代表者たらずんば國政の任に當るに足らずと斷ずる能はず』ば何の根據に由りて超然內閣若しくは擧國一致內閣を排斥せんとすべきぞ、吾人は加藤總裁の此一言は必ずや其黨員中少なからず物議を惹起すべしと豫想せしに關はらず爾來其事なきを以て察すれば新黨亦た遂に排閥運動を捲起さんとする意氣地なしと斷ぜざる可らず、此れ一面より見れば頗る心細きの感なきを得ざるも、他の一面より之を觀れば今日の憲政會として此姑息の態度を執る外別に策の出づべきものなく、之を褒して利巧なる遣口とでも評すべきか、論より證據、放縱横恣なる前內閣に代はれる寺內內閣は善政主義を標榜して現はれ已に意外に世間の氣受も惡からざるに非ずや。

(三)

政治は勢なり、大勢の許さゞる處は如何なる大英雄と雖も之を行ふこと能はず、之に反して若し能く大勢の歸趣を察して之に乘ずることを知らば豪傑の士に非ざるも往々にして大任に堪ゆるの例に乏しか

らず、建武中興の大業中途に挫折し政權再び武門に歸せしは必ずしも正成義貞の努力足らざりしに非ず時勢非なりしを以てなり、王政維新の大業成り今日の隆運に際會するを得るもの元勳の功を認めざるに非ざるも職として天下の大勢之に利なるものありたればなり、刻下の我政界の情僞を察するに寧ろ擧國一致を標榜する超然主義の現内閣に利する少なからずして、各政黨亦た此際隱忍自重し妄動輕擧を戒めざる可らざるものあり、其故如何と云ふに政友會が多年政權に接觸して遂に山本内閣と共に甚だしく失脚したる後を承けたる大隈内閣の與黨は遂に隈侯失政失職の責を分たざるを得ず、政友會と憲政會とは今や喧嘩兩成敗の態に落ち、長閥の代表者たる寺内伯出てゝ乍ち漁夫の利を占め得たるは頗る大勢に順應したるの觀なからず、且つ元老閥の重望回復の如き一面甚だ意外の事に屬するが如きも、之を餘儀なくするの事情自ら存在せずんばあらず、他なし我邦政黨の基礎尙ほ頗る薄弱にして未だ以て全く上下の倚信を繫ぐに足らざるの一事は元老閥の存在を必要とする一大理由に非ずや、試みに總選擧の狀態に就て觀るに各政黨孰れも及ぶべき丈け官權を利用せんと努め、殆んど主義政策を忘却して顧みず、前年政友會が全盛を極むるや是れ必ずしも國民が其主義政策を贊成して之に謳歌したるが爲めならずして寧ろ官權を謳歌したる爲めなり、當時の非政友各派久しく不遇を歎し政友會の橫暴を憤慨せしも、是れ眞に國政を燮ふるよりも寧ろ政友會の隆盛を羨んで速に之に執りて代らんと欲じたるに外ならず、素より各政黨中國士の志あるもの皆無と云ふに非ざるも其大多數の心理作用は官權に接觸して威勢を振はんと欲するに在り、故に政權一たび大隈侯に歸するや、侯及び一派は一方政界の肅整を標榜して天下に叫號すると同時に最も露骨に官權金力を濫用して與黨の急造に着手し遂に大々的絕對多數の與黨三派の出現を見るに至れり、斯の如き奇怪なる方法に由り急造せし多數黨なるが故に多數は即ち多數なりとするも案

議院に於て有力なる程に國論の代表者として重きを爲さず、前年の政友會が絶對多數を誇りし場合も今日の憲政會と多く擇ぶ所あらず、唯だ政友會は人格高き總裁を奉じ居りしが故に一大權威たるの觀を呈せし耳、我政界の情勢已に斯の如しとせば之を改善して大に政黨の信用を增進するは焦眉の急務たるも、其弊の由りて生ずる處我國民度の低きに在るが故に一躍して此弊を一掃す可らざるは何人も首肯する處なるべし、蓋し超然主義の寺内首相が頗る謙抑の態度に出て各政黨と意思の疏通を謀るに努むるが如き前年の超然内閣に比せば確かに一進歩にして亦以て政黨の位置の上進を示すものと謂ふべきか。

斯くて多少の進歩は即ち之を認めざるを得ずと雖も憲政擁護運動以來の各政黨の抱負に顧みれば其の甚だ意氣地なき現狀に對しては必ずや各政黨孰れも深く慚愧する所あらんか、即ち絶對多數を誇る所の新政黨は素氣なく政界の一隅に封鎖されて顧みられず、政友會の境遇亦た毫も羨むべき所なし、彼等は大隈内閣の崩壞を歡喜するも進んで現内閣と握手する能はず隱忍して好意中立に出でんとするが如き決して光榮ありと云ふ可らず、然れども兩黨たるもの亦た誰をか尤めん、是れ皆な自ら招ける災たればなり、唯だ須らく過去の行路を顧み能く反省して大に將來を戒めんことを要す。

斯くて吾人は我邦刻下の形勢を觀察して其憲政の理想に及ばざるの甚だ遠きを觀て、深く之を悲まざるを得ず、吾人は政黨の信用乏しきを悲しみ超然内閣の出現を餘儀なくせられしを悲しみ元老團の存在を必要とする事情あるを悲しむ、殊に元老の如き其人ありて初めて用を爲すものにして、其人に非ざるに之に其位置を與へんとするが如き一大危險を含む、故に一日も速に元老の存在を必要とせざる狀態に移らんことを希望せずんばあらずと雖も、不幸にして我政界の現狀に對して之を觀れば元老團の存在を必要とする理由なきに非ず、試みに思へ、多數即ち信用なりと云ふ極めて幼稚なる觀念に驅られて橫暴

の悪名を蒙りて政友會が一敗地に塗みれたるを觀たる與黨各派が亦た同一觀念に驅られ多數と云ふ威力を盾に政柄を握らんと企てし短見淺慮に至りては傍觀者に取り一の悲劇なり、政黨已でに斯の如き狀態に在る以上は、若しも一大野心家ありて大政黨を指揮し、盛に場當り政治を事として人氣を博し、汎く利益を分配して人心を收攬し、又た種々惡辣なる手段を弄して永久に絕對多數を制するの謀に出づるあらんか、何人か能く君側を擁護して災害の大權に及ばんとするを防ぐべき、立憲の理想より之を論ずれば斯の如き多數黨の橫暴を制して政機の運轉を謀るの責任は一に繫りて國民に在りと云ふべきも、我邦の現狀を以てせば唯だ之を輿論の制裁に一任して晏如たること能はざるものあり、斯る場合に際し元老の如き正に高處よりする一種抑制機關たらずとせんや、若しも形式政治の問題なりとせば立法、司法、行政の三權互に相抑制して一方面の橫暴を未然に防ぐを得べきも、實際政治の問題に就ては形式機關以外に平衡を保持するの機關なかるべからず、即ち元老の必要未だ否む可らざるものあり、然れども元老の如きは極めて不自然の機關にして決して之を以て永久常設すべき機關と云ふ可らず、故に輿論の發達政黨の自制速に或る程度にまで進み元老の出動を煩はすを須ゐざるに至らんことを希望せずんばあらず。

之を要するに憲政擁護以來の我邦政界の變遷は宛ら活動寫眞の變化捕捉す可らざるに似たり、然れども靜かに其歸趣を察すれば自ら是れ憲政進步の一過度なること疑ふ可らずして、超然主義の寺內內閣の出現の如き亦止む可らざるの勢に由ると雖も殆んど是れ閥族最後の幕と見るべく、其命數亦た甚だ久しからざるは察するに難からず、吾人は大に現狀に慊たらずと雖も毫も憲政の前途を悲觀すべき理由を知らず、政界の領袖諸若し能く大勢を察して指導宜きを得ば憲政の進步數年を出でずして必ずや大に觀るべきものある可き也。

現文壇の巨匠が鏤骨の苦心を拂へる泰西近代名著の永世的全譯

新版・泰西近代名著文庫

刊行書目——詳細は「見本」について御覧を請ふ

會員募集

第一部【小説】拾貳冊

- ジャン・クリストフ 五冊 【佛】ロマン・ロオラン著 後藤末雄譯
- 消えぬ過去 二冊 【獨】ズウデルマン著 生田長江譯
- 犠牲 一冊 【伊】ダンヌンチオ著 森田草平譯
- 死せる魂 二冊 【露】ゴオゴリ著 森田草平譯
- 我意の人 二冊 【英】メレディス著 平田禿木譯

第二部【論文】拾貳冊

エマアソン全集 八冊

内譯

- 論文集 二冊 平田禿木譯
- 代表偉人論 一冊 平田禿木譯
- 社交及孤獨 一冊 戸川秋骨譯
- 英國印象記 一冊 平田禿木譯
- 文學及社會 一冊 戸川秋骨譯
- 自然論 一冊 戸川秋骨譯
- 人生論 一冊 戸川秋骨譯

カアライル 佛國革命史 四冊 高橋五郎譯

◉全二十四冊 津田青楓氏裝釘意匠、四六判總クロース製天金、一冊平均約五百五十頁

◉入會申込十一月三十日限（非賣品）

▽内容装釘詳細・見本（冊頁）は御申越次第逕呈

略規

◉第一部、第二部とも各部毎月の會費は金壹圓拾錢とす
◉第一部、第二部兩部を纏へての會費は毎月金貳圓拾錢
◉來る一月より各部毎月一冊宛配本し壹ケ年を以て完結す
◉入會金各部金壹圓を要す。但是は最終の會費中に補充す

東京市神田區小川町一番地
電話長本局七三二番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

（中付一〇一）

國寶的大辭典第二卷愈々出づ

東京帝國大學文科大學長文學博士 上田萬年
東京高等師範教授 松井簡治
兩先生著

大日本國語辭典

全部四卷 紙數 約五千頁 包容語數 二十二萬

第二卷 四六倍判背革角革千二百五十頁挿畫三百五十 正價金七圓

特價金五圓五拾錢（貳圓七拾五錢宛二回拂差支なし）

郵税 市內四錢 市外廿四錢 臺樺四十五錢 鮮支五十五錢

第一卷現在數一千部限り此際特價五圓―此部數盡くれば直ちに正價に復す

天覽 台覽

大正

十有五年苦心の大著

昨年十月曠古の大典に際し大日本國語辭典の完成を發表して先づ第一卷を公刊するや夙くも國寶的大辭典の盛名を博し、

新日本の

(中付一の二)

の聖代を飾る一大著作

前後二回の特價提供二萬部忽ち賣盡し、出版界の沈靜を破りて奇蹟的最高新レコードを作りたるは世の記憶に新なる所なり。かくて本書は標準的國語大辭典として需要益々旺盛を極め、海外有力の新聞雜誌亦頻りに本書の成功を稱讃して止まず。爾來出版者は豫定の印刷効程に從ひ着々工を進め、幸に公約の期たる今年十月を以て第二卷を江湖に提供するを得たり。茲に謹んで第一卷購讀者諸君の愛顧を鳴謝し、更に第二卷の申込の快速機敏ならんことを大方の諸賢に祈る。

本書の如き標準的國語大辭典は單に學者の專有物に非ず、國民最高の典籍として各人各家庭の絕對的常備品たり。乞ふ先づ內容見本を請求せられて、速かに本書の眞價を確認せられんことを。

編纂費實に拾餘萬圓

內容見本進呈
往復葉書申込

東京神田 **冨山房** 振替五〇一

東京日本橋 **金港堂** 振替八六一五

(中付一の三)

ウェブスター

賣捌 全國書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▽鵜崎鷺城先生新著

現代の歴史を造る人々

▽定價九十錢

▽送料六錢 ▽四六判
總布金文字函入

(中付一の四)

◀最新刊製本出來▶

時代は英雄を生み
英雄は時代を生む
騒然たる過去二年
歐洲の大動亂は多
數新人豪を到所に
輩出せしめたり!

△内容

▽獨逸の戴冠皇子
▽數奇なる白耳義國王
▽希臘のヴエニゼロス氏
▽ニコラス大公
▽ロイド・ジョルヂ氏
▽土耳古の風雲兒
▽ウイルソン氏
▽佛國政治の首腦
▽エドワード・グレー卿
▽墺のベルヒトールド伯
▽獨逸の大兵法家
▽露國のゴレムキン氏
▽陸上の英佛將帥
▽海上の英雄
▽塞爾維の代表的人物
▽キッチナー元帥
▽獨逸海軍の建設者
▽墨國動亂の主要人物
▽英國の出征詩人
▽白耳義の戰爭詩人
▽メーテルリンクの英雄主義
▽文豪の獨逸非文明論
▽伊太利國歌の作者
▽バーナード・ショウ氏
▽羅馬尼のプラチアノ氏
▽段祺瑞と馮國璋
▽巾幗殉難者
▽彗星の如き蔡鍔將軍
▽駐外三大使論

東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社發行
▶振替口座東京三二六番◀

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

公論

繪畫と書法

文學博士　瀧　精　一

(一)

書と畫とを接近せしめて特に畫に於ても書に見る如き風致を現ぜしめやうとする考は支那に於ては古くから行はれて居る。支那は六朝に於て既に書畫兩道の發展があつたから、此時代に於ても幾分か兩者接近の事實を見ないではない。併し明白に畫に於て書法の應用を實現せしめたのは唐の呉道子ではあるまいか。呉道子は共始め張旭に就て書を學んだが、書を以てしては張旭には及び能はぬことを覺つて遂に畫家になつたのである。併ながら彼が書法に於て得た所のものは即ちその畫に於ても現はれざるを得ないので、その長安の常樂坊趙景公等の壁に白描で書いた地獄變の圖の如きは筆力勁怒、觀者をして覺えず毛髪を立たしむるものであつたと云ふ。その他釋迦降魔圖、鍾馗圖などの畫も皆な雄拔の筆法を用ひたものらしい。唐末の張彥遠が書を論じて書畫一致を皷吹する所以のものも、呉道子の畫を見て、それに刺激された結果と云はざるを得ない。爾來支那に於て畫の筆力を尙ぶ事書法に於けるが如くするの習は熄むことがないが、五代趙宋の世に於て、一方に畫院の精密なる畫風が勢力を得てからは畫

畫一致に反對するの傾向も亦あつたのである。
然るに元朝に至つては更に書畫の關係を密接ならしむる氣運の萠ざしある事は、趙松雪の「石如二飛白一木如レ籀、寫レ竹還應三八法通一」と云ふ有名の句のあるのを以ても明である。而して兩者の一致は遂に此時代に於ける文人畫なるもの丶大成をなさしむるに與つて大なるものがある。元代に於て所謂文人畫の祖と仰がる丶は黄子久、王叔明、呉仲圭、倪雲林の四大家である。是等の人の畫は各〻特殊の趣を有するものであるが、所謂逸格の畫にして、情趣を重ずる磊落態のものである事に於ては皆な一致して居る。而して殊に其畫に於ては書道の影響が著るしく認められる。
四大家の事は人の善く知る所であるが、元末には其外に尙ほ著明なる人がある。それは例へば釋溥光である。溥光は雪庵と號し、玄悟大師と呼ばれた人で、山水墨竹も畫いたが、重もに羅漢の如きものを得意とした。その畫風は石恪又は梁楷に似て居るが、今ま一層洒落な所がある。より多く書法を應用したるものと見る事が出來る。近頃は溥光の畫に就て言ふ者が尠いやうであるが、それは如何にも面白い畫で、文人畫の成立に重大の關係を有する點に於て決して看過する事の出來ないものである。
書畫一致主義の實現が元末文人畫の興隆と共に旺盛となつたのは疑もなき事實であつて、それから明代に於て沈石田、文徵明、董其昌等に依て更に其主義の尊崇が標榜されて、明末は殊に筆法活達たる文人畫の多くを出した。それには當時に於ける草書の發達も亦影響して居る事は勿論である。日本の江戸時代の文人畫は主としてその明末に於けるもの丶畫風に化せられて出來たものである。
固より日本に於ても明末の文人畫が輸出される前から、漢畫と總稱する所の畫法には書畫一致の傾向が既に著るしく認められて居る。狩野派が南宋馬氏の筆法を摸倣して、偏へに描線の剛堅なる趣致を尙ぶ如き即ちその最も著るしきものである。松花堂の道釋畫が殊に書法に得る所のある事も、其畫を見れば何人と雖も

直ちに看取する所であらう。唯併ながら我國の文人書以前に於ける書法の應用は之を文人書に於けるものと對比すれば、廣狹の差異著るしきものがある。雪舟、元信と云ひ、將た松花堂、探幽と云ひ、其用筆が如何に大切のものとなつて居つても、それは專ら輪廓線の範圍に在つて意味を持たしめらるゝものを多しとするのである。卽ち是は宋元時代の所謂北宗的なるものゝ感化である事は言ふ迄もなく、大雅、蕪村、竹田、華山等の運筆は固よりそれ等と同一でない。

(二)

支那人は書と畫とは倶に象形にしてその根元を同うするものであると云ふので、兩者の接近をも主張せんとするものが多い。けれどもその實書に於ては象形が構成の唯一なる原則とはならぬ。所謂書の六義なるものに於てすれば、象形は其一に居るのである。書は元來標示的のものであつて、之を美術的に書する上に於ても自然形の直接なる擬似は之を離れて、寧ろ抽象的なる形を以て形となすべきものである。

それであるからして多くの美術の種類の中で書に近い性質を有するものは何にかと云へば、第一が建築である。建築は其枝葉の部分に於ては自然模倣とも關係するのであるが、大體に於ては模倣を離れて居る。要するに書と建築とは倶に長短、大小、斜正、方圓等の抽象的可見の形狀を基礎とするものである。けれども書態にも種類は多くあつて、楷書の如きは元來平正齊肅を以て長所となすものであるから、殊更に建築に近いと云へやうが、行書は少しく異ふ。草書に至つては寧ろ運動的なる節奏の美を味ふべきものとなつて、遂に音樂又は舞蹈に近づくのである。古人が或は江聲を聞き或は蛇鬪劍舞を觀て草勢の妙を悟つたと云ふのも尤なる理由がある。

而して畫は假令形似以上に目的を有する場合と雖、一度は必ず自然の形相を模擬する必要がある。畫は書の如くに自然と直接關係なき形を以て形となす所以のものではない。畫は書よりも表出の範圍の廣いものである。表出の範圍が廣い故に其一部に於て書法を取り

ふるの便宜をも有して居る。書畫一致は狹く云へば線、廣く云へば一般用筆の上に於て行はれ得るのである。用筆以外には用墨なるものが、又書の影響を受くるの處である。殊に水墨に於てそれが事實となる。元來東洋用では單色の畫は之を白畫又は白描畫と稱して極く古くから行はれて居るが、それは別物である。白畫にあらずして特に水墨畫と稱するものに於て一方用筆に意味を持たしめると同時に、又墨調を重んずる所以に於て書の影響を認めるのである。

次に支那の書論家の説を聞くと、書は其形の本來模倣に關係なきものなるにも拘らず、それに於て別に又自然世界との關係があるやうに云はれて居る。「山水崖谷鳥獸草木日月列星風雨雷霆歌舞戰鬪天地事物之變」皆な之を書に寓すと云ふのがそれである。如何にも書に於て鳥の飛ぶが如き、龍蛇の動くが如き、露の垂るゝが如き、雲の興るが如き趣ある事は容易に考へられるのである。それは或は稱して書に於ける「動的象徴性」と名くるも可なるもので、要するに自然界の力を標示するのである。それは多くの場合筆者には無意識に行はれるのであるが、又或場合に於ては意識的である。それは空海の飛白體の如きを見れば思半に過ぐるであらう。けれどもそれと畫の形似とは異るのである。畫は別に自然的形似を有するものであるからして、書が畫に應用されたる場合に於ては如上の象徴性は存在する餘地がないのである。或は全く存在しないとは云へないかも知れないが、多くの場合にはそれが無用となる。

然るに今ま書に於ける表現として更に大切なるものは何ぞやと云へば、それは筆者の心である。揚子が書は心の畫なりと説いたのは動かざるの言である。書は實に人の歩行、音聲乃至手指眼目に於ける自發的運動と同樣に其人の個性を表發するものである。然るに支那の學者は隨分と之を極端にまで考へて、書に依ては君子小人の別が判り、道德上の善惡も判る、書は實に人の心術の微に關するものであると説くのである。道德上の善惡までが常に現はされると見るのは少しく過

きたる考であるが、とにかく書に於て個性の表はれの著るしい事は疑がない。

従つて又書の美的性質は主観的であると云ふ事が考へ得られる。然るに畫は通常書の如くに左様に主観的とはなり得ないものである。畫は本來書よりも客観的である。而して又其主観的なる所以のものが悉く書と同一なりとは云へぬ。畫には先づ其布置結構に於て書に見られざる所の主観的經營があり得る。文人畫なるものゝ約束としては書畫一致もその一であるには相違ないけれども、その外に尚ほ詩畫一致と云ふ事がある。王摩詰を仰いで文人畫の祖となすのも、要は「詩中有畫、畫中有詩」の理由に基くのである。而して畫に於ける詩的主観性と書法的主観性とは別物である。

即ち書に於ける精神性は畫のそれに比しては狭きものたるを免れない。けれども今ま書法が畫に應用せられたる場合に於ては畫はその主観性を増大せざるを得ない。中古以來支那の論畫家が「氣韻生動」の義を解して主観に偏するものゝ如くなすのも固より書畫一致論の結果である。氣韻生動は人品に基くものであるとの議論は宋朝に於て既に見る所である。同時に古の衣を解いて盤礴する畫史の心掛や、顧駿之の高樓を築いて畫室となした事などが重きを置かれて居る。近世に於ても畫道の工夫を外に向はしむるよりも、內に向はしめなければならぬと云ふ方の議論は益々勢力を得て居る。石濤和尚の畫語錄なども其一例であるが、それには「一畫之法」なるものを說いて、次の如くに云ふ。

世人不ㇾ知所㆓以一畫之法即自ㇾ我立㆒立㆓一畫之法㆒者蓋以㆓無法㆒生㆓有法㆒以㆓有法㆒貫㆓衆法㆒也

是れ自我を主とする主義で、又頗る哲學的である。或はフヒフテの哲學でも讀むやうな趣がある。近世の這種の議論には甚だ極端なるものもあるが、書畫一致論を推しつめて行けばさうなるのが當然である。要するに東洋の文人畫に於ける表現主義の特色を窺はんと欲すれば、書畫一致論の考察を怠るべからざる事は明である。

（三）

支那の事は暫らく措いて、我國に於ては一たび明末式の文人畫が開けてから、表現主義の尊崇は益々盛んであつたが、それは明治時代に入つて一時衰へた。其衰へたのは、一方尙古主義の勃興に依るもので、古代的繪畫、殊に佛畫や古土佐の繪卷を重んずるの趨勢はいたく文人畫一流を抑壓したのである。又他の一方に於ては日本畫歐化の現象が之を抑壓するに與つて居る。然るに最近に至つて又形勢は一變して、批評家の間にも南畫の妙を說くものも起つて、新らしい畫家の中に之を學ばんとするもの多く、西洋畫家の中にも之を學ぶものが生ずるに至つた。

加之ならず、歐羅巴に於ても近頃は表現主義の流行が盛であると共に日本の文人畫を學ばんとするものがある。數年前の巴里のアンデパンダンの展覽會には三角派や未來派一類の畫の外に全く東洋の南畫の山水の極めて減筆なるものを眞似た單色の畫も出でゝ居つた。ベルリンのゼセッションの會にも大雅か蕪村かと云ふやうな風致の風景畫が旣に見られたのである。概して歐羅巴に於ける新派の畫に東洋の表現畫の影響の大なるものゝある事は疑ふの餘地がない。近頃我國でも問題となつて居るカンヂンスキイの畫論を讀めば益々其消息が判る。氏の「精神的調和の藝術」と名くるものは如何にも東洋論畫家の主す張る所に似たるものである。それで近頃の我日本畫家の新運動も一つには西洋の新派の影響のある事は事實である。

けれども既に久しい年代の間和漢に行はれた文人畫が復興される機運に會するのは何等不思議はないのである。唯その復興に就て、それが如何なる方法を以て行はれるであらうかが問題である。然るに今日新たに文人畫を學ばんとする畫家の試み、例へば美術院一派のそれの如きを見るに、それには大雅らしき所もあり、蕪村らしき所もある。種々の點に於て彼等を學ぶ形跡は見られるのであるが、唯其用筆に至ると案外に書法的風趣を欠いて居る。そも書は力を以て生命とするものであつて、それが必しも剛堅勁利を以て特色となさざる時に於てもそれには速度の感じが必要である。速

度のみでは不足である。決斷的で且つ速度の感じを有する事がなければならぬ。決斷と速度の感じがなければ力の現れはないのである。此二つの感じがあつて其處に聯綿循環の趣が生じて始めて表現もあり得るのであり、又美的なる書も成立するのである。古の文人書は書法に於けるそれ等の要義を忘れずして之を書に應用して、所謂意をして筆先に在らしむる事を努めたのである。然るに院派は曾て没線を主義となした時代があつた位で、線を用ひても之を一氣に揮灑することが少い。一點一畫微細を積んで之を作らんと欲するが如き風がある。即ち是と彼れとは非常の相違である。此點の相違は寧ろ重大ではなからうか。殊に大觀氏を始め諸家の近頃使用する片隈の線は大雅堂其他の文人畫にも類似のものを見るのであるが、實際はそれとは異ふ。諸氏のは寧ろ新派の油繪から來て居ると見るのが適當であらう。微細を積んで之をなすの趣向よりすれば、洋畫の方が親み易い道理である。作家は或は此片隈線に於て和洋兩畫の一致點を捉へ得た如く考へて居るかも知れんが、兩者の性質には大分の懸隔がある。

（四）

將來を忖度する事は容易でない。過去に於けるものを以て見ると、書畫一致を標榜する所の文人畫は、之を其畫論の上から見ると、全く超脱的のものたるを要する。即ち其畫は黑人らしからざるものであつて、普通の畫とは根帶から性質を殊にするものでなければならぬ。倪雲林が

僕之所謂畫者不過逸筆草々不求形似聊以自娯耳

と云つたのは善く其意を現はして居る。尚ほ明清人の畫論に於ても超脱の必要を說かないものはない。けれども畫論と實際の畫とは常に一致して居る譯ではない。古來の文人畫をその作例の上から見ると、概して左様に甚しく變態と思ふべきものはない。

後期印象派の洋畫には隨分と奇怪なるものがあつて人をしてその畫意を汲むに困却せしむるものはあるが、東洋では如何に主觀的で形似を重んぜずと稱する畫であつても、左様に奇怪なるものはない。倪雲林の

畫とてもその通である。元朝では寧ろ因陀羅が甚だしく形似に遠ざかるものであが、是とて畫も意を汲むに苦しむ程のものではない。石濤和尚は書論に奇說があつて、飄逸の畫をなすとは雖、奚んぞ之をカンヂンスキイに比する事が出來やう。鄭板橋一流の怪畫と稱せらるゝ輩の畫も別に驚く程のものではない。日本の文人畫に於ても矢張同樣である。文人畫が概して他種の畫よりも形似に拘泥しない事は事實であつても、畫としては必しも甚しき變態でない事は和漢に通じて同じである。

然るに其理由は察するに難くない。それは恐らく一方に書道と云ふものが存在して居るからであらう。一方に立派な藝術たる資格を有する書道が發展しつゝあると云ふ事は、即ち畫の脫逸を制限するのである。書畫の併立は東洋に於ける特殊なる現象である。書道が盛んである爲に畫道はその影響を蒙つて、益々主觀的ともなつたのである。けれども畫に於て殆んど全く形似を沒却したる甚だしい標示的性質のものを得んと欲すれば、それは書に於て求むるに若くはない。西洋では東洋の書の如きものが缺けて居るが故に變態を極めたる一種の畫を作る必要も起るであらう。けれども書道を有する東洋に於ては其の必要を認めなかつたのであ



因陀羅筆祖師問答圖

る。

併し我國に於ては書畫併立の發達は最早過去の事實である。さうすれば日本に於ても西洋に於けると同じやうな必要が起らないとは限るまい。併しながら衰へたりと雖も東洋には固有の書道があるのであるから、寧ろ之を復興するのが適當ではあるまいか。萬年筆の使用盛なる今日に於て之を說くのは愚であるとの議論もあるであらうが、予輩は將來に於ても書道が通俗的藝術の一として國人間に行はれる事を希望するものである。書家が書道に携はる事も望ましい。書道の修養は單に文人書を復興する爲にのみ必要ではないのである。



石濤筆山水圖

書畫一致を主義とするものには往々それに伴ふ所の弊害をも見る。それは筆墨の工夫にのみ走つて、他の大切なる要義を輕視する事である。換言

すれば書をして偏狹ならしむるのである。是は確かに其弊害と云はざるを得ない。狩野派は早くから其弊を露はした。天保以來一時我書界は一般に其弊に堪へなかつた。明治初世の下谷文人の餘毒は久しく畫界を惱ました。けれども書法の適當なる應用は亦利益なしとは云ひ能はぬ。一本の線を線として描かず、幾多の染渲に依て作り上げるのは所謂細工に陷るものであらう。それでも同じ形のものが出來れば差支ないと云ふであらうが、それは決斷と速度とを以て一氣に揮灑されたものとは感じに於て異ならざるを得ない。形而上の要義に於て重大の區別がある。大なる線を用ふる事が必ずなければならぬか如何は問題であるとしても、既に線を用ひつゝあつて、それを細工的に作り上げる事の可否が先づ考慮を要する。

西洋の畫家は既に東洋の文人畫に熱歎し、又その書論を聞いて、それに化せられて意外なる試をなしつゝあるけれども、彼等は未だ我々の書の趣味を理解するには至つて居らぬ。併しながら將來彼等は我等の書に對しても研究を進め來るであらう。その研究は彼等に取つて容易ではないが、彼等はそれまで進まずには止まぬであらう。彼等の研究が如何なる結果を齎らすであらうか、それも今から注意する必要がある。

内田魯庵氏に呈して

大學生の兵役問題を論ず

陸軍步兵大尉　櫻井忠溫

尊敬する內田魯庵氏は十月號「太陽」に於て「大學生の兵役義務を免除せよ」といふ意見を發表されて居る。その要點は「本來學術を以て貢献せんとする者を學事を廢せしめ兵營に收容せんとするは、人物經濟を

知らざるものである。軍事も亦科學の力に負ふこと極めて大であるが故、軍事のために學術の進歩を妨げざるの趣旨より、兵役を免除するが至當である。全く免除出來ざるものとすれば自由なる制度の下に少時間の兵式訓練を與ふるに止むべし。」といふのである。

それについて小生は部分的に聊か愚見を開陳してみたいと思ふのである。小生もとより爭ひを好むのではない。また小生如きものの言もとより一顧の値だになきものであるが、一應思ふことだけは言つて置きたい。

先づ、魯庵氏は、「今日の戰爭は科學の戰爭である。獨逸の強いのは數百萬の兵員よりも四十珊砲、毒瓦斯の如き新兵器の力である。兵の多寡よりは武器の優劣が勝敗を決する主因である。」といふやうに言はれて居る。偶々歐洲戰に於て四十珊砲だの、毒瓦斯だのといふ新兵器が戰場に現はれて威功を奏して居るのを見て、直ちに今日の戰爭は兵器の戰爭である、戰爭の勝敗は一つにこれ等の兵器によつて左右せらるゝものである、といふのは早まつた議論でないかと思ふ。

なるほど、これ等新兵器の出現は歐洲戰の一異彩であるが、しかし歐洲戰に於て最も活動すべくして活動せざるものは軍隊であることを見逃してはならぬ。決戰的の戰鬪たる運動戰を避け、專ら塹壕に膠着して、砲戰機械戰をこれ事として居る。臆病な子供の喧嘩のやうに、長の竹竿を以て遠方から叩き合つてゐる。そして決戰に於て起るべき彼の慘烈を極むる歩兵戰を免れんとして居るのである。一途に機械力にのみ依賴して、肉體の戰鬪を避けて居るのである。其の陣地は三線四線に配備せられ、第一線は第二線によりて收容せられ、第二線は第三線によりて收容せらるゝ如く、退守的陣地である。其の死傷者は白兵に因るもの極めて尠なく、主として彈創であり、又砲彈の費消數の驚くべき多數なる、又捕虜の數如何に多きかに見ても一途に決戰的戰鬪を避けて居ることが明かである。これ到底我國民性と相容れざる戰法であつて、かゝることが將來の戰鬪の原則などゝ考へられてゐては大變である。

魯庵氏のこの說は決して好い反響を與へないと思ふ。かゝる說が勢力を占むるとなれば實に危險至極である。氏の議論は奇拔過ぎるやうに思ふ。

しかしかゝる戰法は歐洲戰には有勝のことで、これで五年でも十年でも辛棒しやうといふのである。一連不斷の要塞を東西國境に連ねて攻者も守者もそれに噛りついて居るのであるが、今少し命を棄てる算段をしなければ到底戰局は開展しない。たゞ押したり押されたりして日を暮して居るに過ぎぬ。

日露戰爭の經過が割合に速かであつたのは、日本軍の前進又前進、攻擊又攻擊の結果であつて「日露戰爭は時間に對して寬大なる人間と、熱中的なる人間との爭ひである。」と評した外國通信員があるが、露軍は往々日本軍の急激なる攻擊に對して餘儀なく之に應じたといふ傾向があつた。

歐洲の戰報が主として兵器機械の威力を傳へて居るのを見て、戰鬪の勝敗は科學の威力を以て決せらるゝものなりと考へるのは聊か極端である。科學以外に超越せる精神力が戰場に於て最も激烈なる効驗を奏することは昔も今も變りはない。將來とても「兵の勝敗は器にあらず(機械力を無視するのでない)人に存す」ることは不易の眞理である。四十珊砲は一彈に千五百人を殺したの、毒瓦斯が一聯隊を全滅したのといふ報道に驚いて、戰鬪の勝敗をたゞこれ等のもので決せらるるといふのは少しく粗雜な考へである。一發に千五百人を殺すから、十發には一萬五千人を殺すといふわけに行かぬ。千五百人を殺すこともあらうが、一人も殺さぬこともある。兵器機械の威力は大である。また決して「學術を輕視し、學者の研究を恰も老人の骨董を翫ぶと同じ好奇なるが如くに見做し」ては居らぬのである。しかしあまりに兵器機械の力にのみ過大な信用を置いて、何者もこれに比すべくもないといふのは極端である。

ことに、科學心醉の結果として「獨逸は經濟若くは食物の關係上半年ならざる中に倒れて了ふと豫言されたが、二年の今日ピクともしないのは學者や技術家や

生産業者の賜物である、もし獨逸に是等のものがなかつたら、たとひ兵數を倍加しても戰に勝つより先きに饑餓に殪れて了つたであらう。」とも言はれて居る。もとより獨逸の現狀は學者技術者生産業者の力極めて大である。しかしこれが「戰鬪者よりヨリ以上に獨逸の武力を維持する支柱となつてゐる。」とは思へぬ。糧食について言つて見れば、なるほど獨逸は平時準備の糧食を大部分開戰第一年に費消して居る。しかし第二年第三年も依然として勢力を維持してゐるのは主として糧食行政の施設宜しきを得て居るにあるので、これが最もその効果を奏して居るのである。最近に至つては麵麭は一日一斤とか、肉は一週間二回とかいふ風に極端な制限をして居る。馬鈴薯バタに至るまでも制限を加へて居る。而かも國民は今日一椀の食を減じても明日の勝を獲んとしてあらゆる缺乏に忍んでゐるのである。

中央部は地方自治團體、資本家、地主等を鞭撻して公平分配、價制限に力を注いで居る。そして一面には中立國よりの輸入に努め、巴爾幹半島方面にも物資利用の口を開いて居る。もとより廣い意味に於ては學者技術者生産業者の力は大であらうが、直接それが「武力を支持する支柱」となり「これ等の者なければ餓死するならん」といふほどでもない。ビールの滓を動物の飼料にしたり、樹の皮を食料にしたり、馬鈴薯の皮までも利用して居るが、これは立派な發明である。全く學者の力である。しかしそれが、いくらも國民の食料として利用されてゐない、殆んどいふに足らぬものである。氏のいはるゝ如く學者のかゝる發見なかりせば、獨逸は兵數を倍加するも戰ふに先ちて餓死するならん、といふほど重大な問題となつて居らぬ。

また兵器機械の發明についても、元來軍事に何の知識もないものによつて軍用兵器機械の發明は事實多くを望まれぬのである。獨逸人は平素から頭が軍事的に傾いて居る。少年時代より軍事には餘程接近して居る。そのあたりにブラ〳〵してゐるものを連れて來て、戰場へ送つても相當に働けるといふ風である。我國人の

如く軍事には全く無關係の態度でゐるものは極めて少ないのである。我國の學者技術者は殊に軍事に接近しないで、寧ろ城壁を築いてゐるといふ風である。氏は、たゞ獨逸の例を以て、我國にそのまゝ當て篏めやうとされても、それほどまでに國民の頭が軍事的でない。七十年役以來軍事的に鍛へられてゐる獨逸國民と我國民とを同一に考へて、戰爭に當り俄かに戰爭的學者、戰爭的技術者、戰爭的生產業者を求むることは到底出來ぬ話であると思ふ。

又一面からいへば軍隊は決して學者、技術者を冷遇してゐるのではない。無頓着に兵卒同樣に取扱つてはゐないのである。もとより學者たると何たるとを區別すべきものでないが、事實に於ては、なるべく其の特有の技能を發揮せしむるやうに努めて居るのである。また實際學者技術者が軍隊に入つたために研究を中絕せねばならぬといふやうにはなつて居らぬのである。戰場に於ては殊にさうである。一兵卒としての學者、一兵卒としての技術者であが、大なる貢獻を爲して居るのである。日露戰爭に於てもその實例は極めて多いのである。氏は、兵卒をたゞ「無智」「無能」の如くいはるゝが、一兵卒の行動もなほ全軍の運命に關することは極めて多いのである。某々國兵の如き無智な兵卒は指揮官を離れると全く用をなさぬが、有爲の軍隊にあつてはたゞ「無智無能」ではすまされぬのである。

氏は、學者技術者を兵卒として戰場に送る必要はない、塹壕の埋草とするに忍びぬとはいはるゝかも知れぬが、かゝる人こそ戰場に出でゝその蘊蓄を傾けて勝利の道を講ぜねばならぬと思ふのである「學者技術者は後方にあつて働き、無智なる兵卒こそ戰場へ出すべし。」といふやうな態度は甚だ面白からぬことであると思ふ。

魯庵氏は今少しく「一兵卒」の價値を認めて貰はねばならぬ。歐洲に於ては一度臺閣に列した政治家が步哨に立つたり、女兵少年兵が出たりするのは、もとより國家存亡の場合であるが、一面より見れば、一つの小說的行爲である。かゝることは由來彼國人の好んで

なすところで、日露戰爭に於ても男裝の女が傳令使となつたり、戰線に現はれたり、又少年兵もあつたが、これが何も戰鬪に重大なる關係を持つてゐない。一つの愛嬌であるといふも不可でない。精神的には志氣を鼓舞し、國民を激勵するであらう。しかしそれを取除いては一兵卒としての價もない。兵卒といへば何でもい丶、頭數さへ揃つて居ればい丶といふわけのものでない。

又魯庵氏は後方勤務卽ち衞生、糧餉、交通等に從事する非戰鬪員は軍隊的訓練の必要なし、といはれて居る。一例をいへば醫者は平時の醫者も戰時の醫者も醫者に變りはない、治療が出來ればい丶、軍隊教育などの必要は毛頭ないといはる丶のであらう。又實際急場凌ぎに地方醫師を徵集したこともある。しかし平時に於て軍隊教育を施した結果は冥々の內に非常なる効果を奏してゐるのである。獨逸に於てもこの種類の醫師がこの戰爭に於て最も秩序立つた職務振を見せて居るといふことである。

後方勤務に於て最も弊とするところのものは、其の從業者に團隊觀念の極めて乏しいことである。また不規律放縱に流れ、ために業務の澁滯、粗漏を來し、軍の行動に多大の障害を及ぼすのである。軍需品の輸送、軍後方の通信に於てもその從業者には大に軍隊教育を施すの必要があるので、軍隊教育者に於ても最も力を入れて居るのである。中學卒業以上の教育があれば直ちに之に從事し得られるといふ譯に行かぬ。彼等の多くは指揮者の下を離れて働くものが多い。また特別の技術を要するものも多い。寧ろ第一線兵よりもなほ一層の訓練を施すの必要があるのである。「中學卒業以上のものならば、國家緩急の場合に臨んで召集しても直ちに間に合ふ筈である。」「銃を取つて戰線に立たなければならぬならば、その頃一部有志者間に行はる丶やうに、彼等に乘馬、操銃を教ゆるなり、一週一回乃至二回ぐらゐ學事を妨げざる範圍に於て兵式教練を行へば事足る。」ともいはれて居るが、教育があれば直ちに軍隊的の訓練を受けたも同樣であり、戰線に出すも立

派な兵隊として働けるといふのは、歐洲の戰場ならば知らず、日本軍の戰線には全く役に立たぬのである。氏は軍隊及軍隊教育の性質をよく了解されてゐないかと思ふ。

教育さへあれば兵隊として訓練する必要なしといはれるのは、非常の時には非常の力を出し得るものである、火事の時には思ひもかけぬ重い者を出したなどゝいふこともあるから「非常の時は又非常の時である。」といふに等しい。しかし一人の兵隊としても學ぶべきことは極めて多い。大學生などから見れば馬鹿氣切つたことのやうであるが、それでも一生懸命である。乘馬操銃を遊戯的にやるのとは大違ひである。戰鬪的の動作は教育があるから出來るとしたものでない。二年なり三年の特別な教育を施さなければ戰線に立つて立派な一人前の働きをさするわけに行かぬ。乘馬操銃大に可なり、しかしこれを兵役の代償とし、軍隊教育を受くる必要なし、とするのは軍隊教育の實際を了解されない結果でないかと思ふ。

日露戰爭に於て、露軍敗因の一つは、豫備師團の無能なるにあつたのである。戰線の裂け口は屢々豫備師團の正面にあつたのである。即ち在郷兵の成績は極めて不良であつた。我國もこゝに思ひを致して在郷兵の素質向上に力を入れて居るわけである。在郷兵即ち一度軍隊に於て教育を受けた者ですら斯の如くである。ましてやそれ以下にある未教育者(軍隊の)が、たとひ大學生であらうと、中學生であらうと何程の實力があるものでない。

又鲁庵氏は「最高教育を受けて自由思想を抱く大學生は兵種として劣等で、服從を原則とする規律づくめの兵舍に收容するは軍隊のためにも不利益ならん。」といはれて居るが、これはまた意外の事を聞くものである。最高教育を受けて自由思想を抱く大學生が服從規律を重んぜぬ者とは驚くの外ない。最高教育を受けて居ればこそ服從心にも富み規律をも重んぜねばならぬ筈である。それが反對に大學生は放縱で兵種として劣等だとはなさけない大學生である。放縱を原則として

兵役免除の一理由とするのは亂暴な議論でないかと思ふ。却つて大學生は氏によつて侮辱されてゐるのである。大學生こそ大に抗議すべきであらうと思ふが、實は賛成してゐるかも知れぬ。

　大學生は兵種として劣等であるといふが、兵種として優等なものは何かといふに、見渡すところこれはと思ふものはない。職工も勞働者もいかぬ。商人も適當でない。たゞ百姓ばかりが兵隊として適當するやうである。氏の論法によると、兵隊は百姓に限る、他の者は悉く免除すべし、といふ議論も成立するやうである。「銃を取つて戰線に立つばかりが國民の義務でない、器は用に從つて用ひなければならぬ。」しかしその一理由として、不規律放縱なる大學生を規律づくめの兵營に收容するは不利益ならんといふのは亂暴である。

　大學生を三ヶ年間學業を廢止せしむる必要なしとのことは、學制案と徴兵令とが旨く調和せなければならぬことであるが、「非常の時は非常の時」といつて平時の敎育を無視して徴兵を免除せよといふのは無謀であると思ふ。

　帝國大學學生の卒業年齡は二十三四である筈だが、事實は二十六七才であるといふことである。もし徴兵猶豫期限を二十五歳に短縮すれば學年も三ヶ年短縮するが適當かも知れぬ。つまり卒業後入營することになるのである。たゞ無暗に猶豫期限を短縮するといふのではあるまいと思ふが、これは小生は何とも言へない。これは全く氏の想像にすぎぬのでないかと思ふ。全く未定の問題を取り立てゝ遂には國民皆兵主義の精神にまで匕首を擬するに至つては聊か穩當を缺きはせぬかと思ふ。尤も徴兵精神の上からいへば、かゝる議論は問題にもならぬから、それは避けるが、一言せざるを得ぬのは大學生と限定されたことである。大學生は學者であるから、徴兵を免除して非常の時のみ働かせばよいといはるゝのであるが、つまり知識階級の者は免除して「無智なる職工、勞働者、農夫」を徴兵すれば足るといふのは、百圓出せば徴兵を免れることの出來た時代と少しも變らぬことになる。貧乏人ばかりが兵隊

に出るといふことになると同じに、無學無智なるものばかりが兵隊になり、智慧のあるものは命に別條ないところに居やうといふことになりはせないだらうか。

又「大學生を收容すると否とは日本の武力を輕重するに足らぬ。」といはるゝが、最近の調査によれば全國壯丁の百分の一は專門學校以上の學力を有するもので、中學卒業程度以上のものを合すれば實に百分の五、五を占めて居る。これは決して少數とはいへぬ。如何に教育の程度が進んで居るかゞ察せらるゝと共に、決して氏のいはるゝ如く「物の數ともならざる少數」ではない。教育あるものを取除くとなると、今後年と共に壯丁數を減じ、遂に國軍は如何なるものによつて編成されるだらう。日本の武力を輕重するに足らないどころの問題でない。

終りに一言したいのは、一年志願兵のことである。三年を一年で兎も角も終るのであるから、大に都合のいゝわけである。また將校となる特典も與へられて居るのである。即ち一面には指揮官となり、一面には立派なる技術者學者として、非常の場合には特有の技能を發揮し得る位置にあるのである。然るに往々時々の召集を忌んで、極力將校試驗に合格せざらんことを努めて居るものがある。試驗でもわざと間違つた答案を出すといふ風である。そして戰爭は滅多にないと思つてたゞ平時の召集を免かれんとしてゐる。これは一種の兵役忌避だと思ふ。實に卑劣千萬である。そして戰時になると、堂々たる學者を一下士として追ひ使ふなどゝ不平を鳴らしてゐる。全く自業自得である。かゝる傾向があるに拘らず、兵役免除などゝいへば、平時は喜んでゐるだらうが、戰時には一兵卒として召集されるかも知れぬ。それでは恐らく滿足するまい。大學生は反對に魯庵氏の說に反對せねばならぬ立場でないかと思ふのである。

（十月十一日）

近世史、現代史に於ける 澁澤翁の位置（中の二）

山路愛山

（一）心界の狹隘寂寞

長州人元治元年に闕を犯して大敗し一旦賊名を蒙りたれども、其心事決して尊王の大義に背きたるに非ず。されば薩長同盟して幕軍を破りたる後は誰も長州を賊と云ふものなく、自然に汚名も消へたり。此理は戊辰の役に於ても同樣なり。伏見、鳥羽の戰爭は其跡より言へば犯闕に相違なけれども幕人の心事より裏面の消息を語れば彼等と雖も決して王命に抗する賊たるを甘んぜしに非ず。元來江戶人の尊王主義は敢て薩長人に讓らず、幕末の世に於ては何人も君臣の大義に迷ひたるものなし。されば榎本武揚子なども上野の宮を長鯨丸にて奥州に落し參らする時、築地の或船宿にて宮に謁し、奥州へ御開きに相成りし後、南北朝の昔のやうなることを御勸め申すものありとも決して御同意遊ばすなと申上げ、宮より其趣を御約束なされし書付を賜はりしと聞きたり。都を指して出陣したる東兵も其心事は唯だ君側の姦を除くと云ふだけのことにて天朝に對し不忠を存じたるに非ず。唯だ不幸にして大敗したるが故に其迹も其名も賊となりて終りしのみ。此段世の諺に勝てば官軍、負れば賊と云ふものにて人事に免れ得べからざる餘儀なき運命なり。新田、楠なども今日にてこそ忠臣、孝子の模範となり、勤王の親玉として學校先生に歎美せらるれども足利氏の時世には吉野の天子は僞主を以て稱せられ、新田、足利の子孫は朝敵の末として世を狹めたり。是れ則ち負けたるが故に賊たりしのみ。されば伏見、鳥羽の戰も官賊の論は暫らく別として單に慶喜公の事跡に就て論ずるに、公若

し誠に先供の不心得より戰塵を輦下に揚げたるを悔ひ、皇室に對する純忠の志を顯はさんとせば何故に單身、闕下に趨りて罪を謝せざりしや。何故に心事の豫期と違ひたるを表白して謹愼、謝罪の實を示さゞりしや。誠に恐入りたりとて從軍の士卒を其儘に棄て置き獨り軍艦に乘りて江戶に遁れたるは餘りと言へば家臣を蟲介同樣に見做したるものに非ずや。人、各其主の爲にす。幕臣、人物なしと雖も家を離れて征戰に從事し、死生の途上に往來して忽ち其主人に見離さる。其境遇眞に愍むべきに非ずや。世に袖振り合ふも多少の因緣なきに非ずと云へり。況んや主人となり、家來となり、共に征戰の苦を同じくしたるをや。何程天朝に恐入りたりて遠征の途に在る家臣を置き去りにして其儘江戶に歸りたるは其不實、薄情の迹、斷じて恕すべからずと謂つべし。況んや自身の始めたる仕事は自身にて始末を付けざるべからず。公たとひ王師に抗する意なしとも幕軍、公の名を以て都に攻上り、天朝、公を賊と唱へて討伐の師を起したる上は公、誠に恭順、謹愼に意あらば大阪に於て直ちに皇師の軍門に降り、一身を天朝の制裁に委ね、家臣を諭して悉く反正の實を擧げしめざるべからず、家臣若し聽かず猶ほ天兵と戰はんとせば、公は城を遁るゝも可なり。一身の潔白を表すべき途は此時に於ていくらもあるべし。斯くてこそ自ら蒔きたる種子は自ら刈り、罪は罪、義は義、黑白分明にして情盡し、義至らん。公、是に出でず、始は猶ほ大阪城を守るが如く聲言し、忽ち城を棄てゝ去り、家臣全體を主人もなく、節制もなき、破れたる蜂の巣の狀態に委して顧みざりしは所謂「迹は野となれ、山となれ」と云ふ無責任の甚しきものにて貴人の不人情を最も明白に現はしたるものに非ずや。斯く言ひたりとて我等は公を以て天性無情冷淡にして自利一偏の小人なりしとするに非ず。公の美質は固より人をして泣かしむるに足りしものありしならん。翁の如き公に親炙したるものに取りては公は眞に親切なる仁君なりしならん。さりながら公の位置と境遇とは公の同情の範圍を狹隘にし、從て不知不覺貴人の不人情に陷らしめたり。我

等は少年の時、靜岡に生長し、祖父母より數ば紺屋町に隱居したる先樣(前將軍の義)の事を聞きたり。我等は又公の遊獵を好み、圍碁を好み、何事も器用にて黑人を驚かす程の聰明なるを聞きたり。我等は又或年の冬。清水山に上り、公の遊獵するに會し、小供心に畏ろしく思ひ、身を樹陰に隱くし、窃かにその一行の過ぐるを待ちたることもありしと覺う。さりながら其時代にても靜岡の舊幕臣と公との關係は冷淡眞に氷の如し。舊幕臣の中には隨分非常の難儀をして乞食同樣の境界に陷りしものなきに非ず。其子弟は牧者なき羊の如く漂泊人に均しき運命に浮沈したり。我等は少年ながら斯樣の目に逢ふも薩長人の爲に敗られたるが爲なり。我等若し成長して男とならば是非とも復讎せざるべからずと想ひたり。さりながら靜岡に於ける舊幕臣の地獄の苦みは紺屋町の先樣とは全く無關係なり。靜岡の少年子弟、未だ嘗て先樣に其心事を訴へて救援を求めたるを聞かず、先樣も亦何となされしと云ふ噂も承はらず、荏苒年を經し後に、或年、龜之助樣洋行より御歸りとやらんと云ふことにて先樣、龜之助樣御一同にて草深町の新御殿に於て舊臣に謁見を賜はると云ふことあり。我等も雜魚のとゝ雜りとやらん、人の後に從て御殿に參り、衆人と二行に並んで拜謁したり。其時慶喜公は久々にて卿等に逢ひ云々と挨拶致されたり。田地何程、山林何程、龜之助樣御土產として舊臣の子弟に賜はるなど云ふことも其前後誰やらに承りたり。二公に謁見したる舊臣の中には感極まりて淚を流したるものもありし樣子なり。古老の心にてはさもあるべし。さりながら我等は淚も出でず。正直の所、心中には少か不平なきに非ず。仔細は公、若しそれ程、舊臣を思はるゝならば今まで靜岡縣の幕人子弟を牧者なき羊の如く放棄し置かれたるは何故なりや。凡そ人の長上たらんもの、何程の長所ありとも、人に忍びざるの仁なければ取るに足らず。西鄉南洲に百の過失ありと雖も身を棄てゝ百二都城の健兒に與へたる義膽愛腸ありたればこそ健兒も彼の爲に一國の火となりて日本國を燒かんと欲したるに非ずや。幕人の先輩、長者、

何ぞ其子弟に對して冷淡の甚しきや。駿遠二國に星散したる幕士の子は暗夜に歩み、荊棘に彷徨す。先輩長者、朝廷に榮仕し、利祿に飽きながら、之を曉諭、誘導して其才を長し、器を爲すの道を講せず。之を視ること路傍の人の如し。所謂三百年の舊誼、果して何處に在りや。所謂先輩、後輩の情、何の所に存するや。慶喜、家達二公、上に在ますと雖も、今日に至るまで幕人子弟の之を見ること吳越の如し。今に至りて舊君の、舊臣のとて珍らしさうに騷ぐこと抑も何の理由なりや。田地何町、山林何程、頂戴したりとて今まで放棄し置きたる子弟の心の荒地は如何にして恢復すべき。眞に馬鹿馬鹿しき空仁義に非ずやとは我等の心に湧き出でゝ禁ずべからざる憤慨なりき。されば我等は父祖の舊君に拜謁したりとて涙のこぼれさうにも非ず。窃に一絕を賦して友人に示したり。其轉結のみは今も記臆す。二公慇懃不臣視。便將爾汝相呼來と云ふもの是なり。今に於ては男兒唯だ獨立して他人に賴る勿れ、舊君なりとて今は同じ明治天皇の臣民なり。流石に二公は賢明なれば獨立の人民たる我等を家來同樣には思はれずとて、暗に人に賴る勿れ、唯だ自ら賴めとの意を寓したるものなり。二公の境遇より言へば舊臣の世話などを燒き兼ねし情實もあるべし。其段は我等も推察し得られざるに非ず。さりながら公、若し誠に舊臣の境界に同情せば隱くれたるより顯はるゝはなし。舊臣子弟必ず之に感激するものあらん。物質を以て助けずとも唯だ同情の涙あらば、是が爲に子弟も奮ふべし。然るに公の門深沈として他人の窺ふを許さず。幕人の子弟窮地に落ちながら公に哀呼するものなし。我等は幕人の子弟の牧者なき羊たる運命を憐むよりも寧ろ公の心界の狹隘、寂寞なるを氣の毒に思はざるを得ざりき。

(二) 彰義隊論

我等は慶喜公の短所に就て無遠慮に思ふ所を告白したり。翁は必ず此論に不同意ならん。翁の慶喜公傳編修所には或は此斷案を覆へし得べき材料あらん。さらば我等は謹んで之を聽かんことを欲す。學問の道は意

もなく我もなし。若し我等の慶喜公に對する反感を和らげ得べき材料あらば我等は切に其多からんことを希望す。さりながら我等は正直に告白す。我等の今日まで學びたる所に依れば慶喜公の短所は實に貴人の不人情に在りと云はざるを得ずと。島津齊彬は嘗て公に逢ひ、其聰明の公子に相違なきを識認し、當時の聲望甚だ高きを以て公の爲に前途の危險を慮り、書を同志の友人に與へ『御慢心の所を折角御愼み御座候樣被二仰上一可レ然と奉存候』と云ひ、川路左衞門尉は嘗て公に謁見して公の怜悧にして才力餘りあり、何事にも迅速に氣の付くに驚き、利口なる人をのみ好かるゝやうになりては御爲あしかるべしと云ひたり。公の聰明は何人も疑ふものなし。松平慶永の談話を或る人の記したるものなりと云ふ逸事史補には公は自ら才略のあるを知り家定公の嗣とならんことを自身も窃に望まれたりと云へり。孰れにするも公の聰明の貴人たるは何人も異論なし。思ふに公若し現代貴族の家に生まれたらば平民の子弟と技を大學に競ひ、常に學級の首席を占め恩賜の時計を拜領し、貴介公子、俊才ありと新聞紙に賞讃せらるる程の事は容易の業ならん。我等も公の聰明に就ては何等の疑惑を挿むものに非ず。さりながら將に將たる器と云ふは又格別の事なり。家茂公などは若年にて死去せられたれども勝伯は其人君の襟度に感服し一部の海舟日記は家茂公の德を稱して餘蘊なし。曰く『いまだ御若年と雖も、眞に英主の御風あり、且御勇氣盛なり』と。人海は情海なり。何程の德ありと雖も唯だ情の一字に於て缺けたらば何を以て衆人を統御するを得ん。英雄豪傑とは畢竟大有情の人に過ぎず。人に忍びざる心を以て家人父子の如く其家臣を愛撫し、生死を之と共にする仁愛の情ありてこそ群雄も其指揮に從ふなれ。慶喜公、聰明絶倫にして、善く其尊王の祖訓を遵奉し、大義に當りて惑はず、恭順謹愼して忠臣孝子たる義務を盡くしたりと雖も、筑波の義徒に對し、德川家の家臣に對しては不幸にして終始所謂貴人の不人情に陷るを免れず。一言にして曰へば公は才識殆ど完全したれども唯だ首領の器としては全然其必要の性格を缺きしと

云ふも可なり。然るに翁は一橋家に出仕する始に當りて公に望むに天下の人才を其幕下に集むべきことを以てし幕府に對しては已むを得ざれば燕王棣の事を行ふも致方なしと建言したり。公は其時唯だふん〳〵と言ひて聽き居りたるのみなりと云ふ。想ふに是ほど相手に不相應なる建策は無かるべし。公若しそれ程の英雄兒ならば筑波の義徒も空しく死せざるべし。八千の新式陸軍も、當時の日本には比類なき海權たりし榎本氏の海軍も、薩長氏に對して男らしき對揚をなし得べし。旗本八萬騎もまさかに流人同樣の悲境には陷らざりしなるべし。世に大厦の傾くは一木の支へ得べき所に非ずなど云へども一國の盛衰、興敗も一人の人物に關係すること少きに非ず。公にして若し天下の俊傑を鼓舞作興し得べき大有情、大力量の人ならば幕人に於ても今少し面白き芝居の打てさうなることなり。然るに其斯の如くなる能はざりしは公の人と爲り其位置に似合はざりければなり。今の世にても世間より首相の器なりなどと稱讚され、當人も近き内には首相になり得べしと心構へし居れども、其實埒もなき小さき人物にして當人に接近して其人と爲りを熟知するものは內々其小才子に過ぎざるを爪彈きするものもありと聞きたり。人を見て法を說くべし。翁が其器に非ざる慶喜公に向て德川氏を倒して又起つる英雄豪傑の事業を望みたるは下戶の門前に酒を賣るに均しきものにて是又若氣の無分別に依り、貴人の前に壯士の氣焰を吐きたるに過ぎずと謂つべし。さりながら翁が人才を集むべきことを公に勸めたるは全く無結果なりしに非ず。伏見鳥羽の敗報、江戶に達し幕府の上下狼狽して爲す所を知らざりし時、兎も角も彰義隊と云ふ有志の一團を結び、一面には慶喜公の爲に寃を雪ぎ、一面には薩長氏に對し關東男兒の氣焰を吐かんと試みたるは陸軍諸隊に在る一橋家隨從の士にして翁と喜作氏が慶喜公に建白して關東を巡廻し集め得たる人々なり。されば其中心的人物も大抵翁の一家一門と目すべきものにて所謂尾高惇忠、澁澤成一（則ち喜作）澁澤平九郞（翁の養子）須永於菟之輔など云ふもの是なり。此一團、始は尊王恭順有志會と稱

し、一轉して彰義隊となり、それより種々の變遷あり、人物の中心も入れ代はり、後には極めて複雜のものとなり遂に王師に抗する賊名を負ひたれども、兎も角も關東男兒必しも柔弱のもの丶みならず、事に臨んでは身を棄て義を取り、生命を鴻毛の輕きに比してとんと投げ出し得る氣概あることを示したるは世界の戰場に乘り出したる日本男兒の祖先としては相應の事なりと謂つべし。されば其頃彰義隊の本營上野山内寒松院の對客の間の壁に或人和歌一首を題したり。

魁て　咲けるを見れば　武士の
こゝろに似たる　梅の初花。

暫らく法家者流の酷論を止めて唯だ其心事を論ぜよ。彼等が三百年の德川家を西國武士の蹂躙に委するに忍びず。矢竹心の一筋に武門の面目を立てんとしたること是れ豈日本男兒の共有する熱血の湧き立ちたるものに非ずや。日本人民に此負けじ魂あればこそ日本帝國は世界の波瀾に立ちて押しも押されもせず其帝國的經綸を行ひ得るに非ずや。我等は福澤先生の瘠我慢論に一々贊成を表するものに非ず。殊に翁が勝伯を非難したる議論には甚だ甘服せざるものなれども幕士、若し薩長氏の爲す所に畏服して一人だも起て之に抗するものなく、唯々、諾々、其儘天下泰平に歸したらば恭順謹愼、誠に此上なき結構の事のやうなれども斯の如き無氣力の人間のみを集めて果して日本國は世界の競爭に堪へ得べきや否や。日本國の何處にも容易に他人に屈せざる氣概あり、其信ずる所に從て死に得べき節義あり、男氣あり、瘠我慢あり、國の細胞總て健全なるが故に國運も繁昌す。此點より言へば彰義隊は梅の初花に似たる武士の心を發揮したるものにして過を見て仁を知る。其心事は猶ほ愛すべきものありと謂つべし。此彰義隊の成立を考ふるに其初、實に一橋附隨の士に出でたり。是は翁が一橋家の爲に壯士を募りたる効の現はれしものなり。斯く言はゞ翁、或は拙者は彰義隊のやうなる不心得のものを養成したる覺なしと云ふやも知らず。彰義隊の心得、不心得は別問題として兎も角も一橋家の徒士より氣力ある人物を出し、そ

れが彰義隊を作る始となりたるは事實にして其源因に溯れば翁が一橋家の爲に人才を募りたる結果の現はれたるものなりと言はざるを得ず。雞鳴狗盗の雄と雖も或ものは皆無に優る。翁の一橋公の爲に集め得たる人才は何程の力量あるものなりしや、容易に之の批判すべからずと雖も、兎も角も八萬騎の旗本が唯だ狼狽を極めたる混亂の世界に一頭地を抜き、尊王恭順を標榜し、薩長氏を向ふに廻はして關東亦男兒あることを示したるもの、一橋府中の壯士に出でしことは翁の建策與りて其功ありしと言はざるべからず。唯だ慶喜公は翁の豫期したるが如き將に將たる英雄の器に非ず。且公の境遇もさる偉略を行ひ得べきに非りしを以て折角の大議論も其效果は唯だ是だけに止まり些か木に依りて魚を求めたる觀ありしこそ是非なけれ。

(三) 慶喜公將軍となる

斯くて翁は一橋家に仕へたる後追々登庸せられ隨分一橋家の爲になりたる次第は翁自身の物語に委しければ此には略す。但し翁の才覺が何程機敏なりとも、翁の工夫が何程上手にても、高が十萬石の身代を切り廻はすに過ぎざれば畢竟小刀細工にして天下の事に直接の關係なければ翁の詳傳を作るもの丶外には餘り必要なきことなれば我等も略して說かざるべし。然るに此に慶喜公の身上に一大變化を生じ、之と共に翁の位置も大に變じ翁は再び一身の進退に惑ふに至れり。そは別事に非ず。將軍家茂公の病死に依り慶喜公の代りて德川宗家を繼ぎたること則ち是なり。翁は慶喜公の宗家を繼ぐを以て公の爲にも、德川家の爲にも得策に非ずとし公の參謀原市之進に逢ひて之を極論し、幼弱の人を選んで宗家を繼がせ、此際一橋家の封を五十萬石にも百萬石にもすべしと說きたりと云ふ。翁などの其頃の身分にてさる論をしたりとてそれが行はるべき情況にもあらねば元來野人の放言に均しく何を言ひても罪なき樣なれども此論一橋氏に取りては甚だ身勝手の申分と謂つべし。德川の宗家を潰す積ならば論なし。當時の德川家が幼弱の主人にて治りの付くべきや否や甚

だ疑はしきことなり。或は世論の鋒鋩を避くる爲に幼弱の當主を立て、暖簾に腕押しの筆法を以て世間の攻撃を避くると云ふは時に取つての名案ともすべけれども其混雜に乘じて五十萬石乃至百萬石の大名になりたしとは餘りに一橋家中心の暴論に非ずや。若し此議論の通りに一橋家にて幕府に申出したらば幕人必ず言はん。それ見よ一橋家の野心現はれたり、慶喜公は火事泥棒を働かんとするものなりと。第一一橋家は其日まで隨分都合善き位置を占めたり。他なし責任は之を幕府に嫁し、功は（若し有らば）之を自身に收むるを得たることと是なり。たとへば筑波の義徒刑戮の一條も世論多く幕吏を譴めて公の不人情を責めざるは其責任の位置に立たざるが爲なり。公の賢名も此時に至りては既に久しきものなり。公が朝幕の議に參して色々口を利きたるも既に一日に非ず。大丈夫、王たらば應に眞王たるべし。家茂公既に死にたる上は公を置いて誰か宗家を繼ぐべき。公たるもの唯だ應さに勇往邁進して進んで責任の位置に立つべきのみ。或は入て宗家を繼ぐときは到底滅亡すべき家を引受くるものにて難儀至極なればそれよりはやはり傍觀の位置に立ちて之を輔佐するが安全なりとの說もあらん。此論他人より出づれば或は可なり。翁に出でしに至りては眞に解すべからず。翁、論語を好む。知らず論語の眼目何處に在りや。身を殺して仁を成すとは進んで責任を回避せず、一身を犧牲にして其主義に殉ずるを云ふなり。何程自身が迷惑するとて責任の位置に立つべき場合になりて猶ほ身をすり拔け、獨り身家の安全を計らんとするは是れ豈論語の敎ふる所ならんや。翁の考にては德川の宗家は所詮滅絕すべき運命を有す、別に新家を起して其繁昌を維持するに如かず。舊根朽ち滅ぶるとも、新根新たに芽を出せば德川家の繁昌は全體に於ては依然たりと云ふならん。一應は聞へたるやうなれども是れは百姓の芋理窟と云ふものなり。舊き芋、朽ちたりとも新しき芋が出來たらば芋の分量に增減なしと云ふは芋ならば其通りなり。汝の家は亡ぶべきものなり。我家は新に起るべきものなり。我家と汝の家は同姓なり。故に

汝の家亡ぶるとも我家繁昌せば一姓の幸福に差別なしと云ふ芋理窟は人間には通用すべからず。親の物は子の物、子の物は親の物なりとて親を裸にして子のみ重着したらんは孝子と云ふべからず。されば慶喜公も家茂公既に此世の人に非る上は自身の利害をのみ考ふべからず。是非共責任の位置に立ちて宗家の運命を支ふる覺悟なかるべからず。然るに翁の議論此に出でずして公をして何處までも傍觀者、助言者たらしめ一橋家の繁昌を計らんとしたるは餘りに蟲の善きことにて慶喜公の進退を唯だ一橋家の立場よりのみ打算したるものなりと謂はざるべからず。尤も其時代の幕人の間には慶喜公の人望甚だ薄く、第一要路の有司多く服せず、江戸大奥の一橋嫌ひなるは勿論なり。其上京坂從軍の幕士中には家茂公薨去の原因に關しても小說に有りさうなる妄說を信じたるものなきに非ず。是れ亦愈よ公の不人望を加へたり。されば公も容易に宗家相續を受合はざりしがのつ引きならぬ場合になりて遂に宗家の繼承は承知すべけれども將軍職の御請は致さぬとにすべしとの下相談にて家茂公の薨去を表面發表せざる分りし前に其趣を內奏したりと云ふ。是は慶喜公に取ては大出來なり。勝伯などは其頃まで必ずしも公に同情を懷きたる人に非ず、心中水戸嫌ひにして公の參謀原市之進を他人の功名を妬む小人なりと看破し、家茂公薨去の上は天下の事亦望なしとまで歎息したれども、それでも、將軍家の繼嗣問題に關しては一橋殿おはす上は他を問ふ必要はあるまじと言ひたり。實際其時代に慶喜公を置きて外に德川の宗家を繼ぐべき人も無く、よし有りたりとて慶喜公を其まゝ置きては折合決して宜しからず。家茂公の時代にても幕府と一橋家とは双方の誤解多く、兎角奥齒に物のはさまりたる樣なる形なりしかば今に至て双頭の蛇が尋常の蛇になり、慶喜公に依りて德川氏の統一するは德川氏に取りても不利益なる政策に非ず。或は幕士の中にはそれ見よ燕王棣遂に宿志を達したりとて慶喜公の將軍となるは當初よりの希望にして家茂公の死去は遂に公の大望を成就せしめたりなど云ふものもありし樣子なれども是は公を

大豪傑と買被りたる批判なり。天下を望む野心家など云へば道德家より言へば甚だ好ましからざる性格のやうなれども、天下を望むは則ち天下の治亂を以て自己の任とするものにて、古今の英雄、何れも野心家ならざるはなし。漢學者は謙遜の德を重んじ古今の英主賢者は好んで其位地を取りたるものに非ず、自身の初念は功名に在らず、幾人か他人を推し他人に讓りたれども衆人許さず、是非共あなたならではと依賴せられ已むを得ず其位置に就きたるものにて、所謂三たび讓りて而る後に始ていや〳〵ながら其職務を引受けたるものなりなど云へど、斯樣に俳諧を樂む樂隱居の樣なる功名の垢の全く脫けたる聖人を引張り出したりとて治國平天下の事業が成就すべきや否や。此段畢竟漢學者の空言に過ぎずと謂つべし。世の諺に好きこそ物の上手なれと云へり。之を好むものは之を樂むものに如かず。野心家なればこそ仕事も出來るなれ。德川家の先祖家康公は世界に比類少き俗氣滿々たる野心家にして元和元年、大坂夏の陣の終るまでは七十翁を以て天下の政務を總攬し、大阪の事終りて後、始て眞實の隱居樣となりたり。されば、家康公は七十五年の長き生涯に於て手足を伸ばして樂隱居となりたるは僅に數月に過ぎず。其數月の間すら猶ほ天下の將來、德川家の始終を思慮せざるに非ず。誠に以て御苦勞千萬の事にて畢竟齷齪たる俗務に一生を埋め終りし老人にして高人逹士より見れば大俗物に相違なけれども、當人に於ては樂亦其中に在りしものならん。故に我等は慶喜公も始より是非將軍になりて日本國を治めて見たしと云ふ大野心ある程の人ならんには德川家に取りては至極結構の事なりしと存ずるなり。さりながら如何せん公はそれ程の野心家に非ず、從てそれ程の俗物に非ず。執着心に乏しく、思切りは善過ぎ、好んで難局に當らず、難局に當る趣味をも解せざりしが如し。其人物を燕王棣の如き野心家なりとしたるは倫を失したるものなり。議論は別として兎も角も慶喜公は德川の宗家を繼ぐことゝなりたり。翁は之を不可とし、

一橋公も今日將軍家を相續なさるようでは最早望みはない。賢明なと

いつても矢張り大名は大名だから仕方が無い。詰り我々の建言が十分に腹に入らぬであらふ。言が行はれぬ以上は止むを得ぬから去るの外はない。」

とて喜作氏とも寄々相談したりと云へり。勿論翁が此處に「望なし」と云ふたる意義は不明なり。慶喜公も斯様に進退の大節を誤まるやうにては賢明とも云ひ難ければ其將來に望なしと云ふ慶喜公中心の論なりや、若くは仕て望なしと云ふ翁自身を中心とする論なりや、一寸分かり難ぬる口振りなれども多分は仕て望なしと云ふ譯ならん。さればこそ翁は仕を辭することを思ひ付きたるなれ。

(四) 長州征伐

此處に少し翁の自叙傳を訂正したきことあり。翁の夜雨譚に依れば家茂將軍在世の時慶喜公は長州征伐を以て自ら任じ、愈よ出陣と云ふ事となりたれば翁も腰拔役の勘定組頭にて留守を守るを屑とせず、自ら進んで戰場に馳驅せんと欲し、御供を願ひたれば勘定組頭より使番格に轉じて從軍し、慶喜公も是より征途に上らんとしたる處に大坂に於て家茂公薨去の事ありたれば長州征伐は自然沙汰止となり、慶喜公は宗家を相續する事となりしと云ふ。是は一場の座談にて當時の歷史を語る積にて話したるものならねば翁が故らに史實を枉げたるには非れども慶喜公の人と爲りを見るべき材料ともなれば長州征伐止兵の眞相を語るべし。翁は慶喜公の長州征伐は將軍の薨去に依りて中止したるものなりと云ひたれども事實は決して然らず、將軍の薨去は却て慶喜公をして一時長州征伐に熱心せしめたり。其證據は松平慶永侯の書に「大樹重病大漸(其實薨去)慶喜は德川家の繼續を承諾に決し、將軍職は請けざる決心にて朝廷にも內奏したれども征長の儀は思止らず。」とあるにて明かなり。其頃慶永侯は始より長州征討の非を鳴らしたる大諸侯の一人にて慶喜公の在京中は言を盡くし、止兵の儀を建言したれども公は一切取上げず、朝紳にも止兵論の盛んなりしに關はらず、賀陽宮の同志を得、

八月四日參朝し、自身出征の御裁可を得たり。海舟日記に依れば將軍薨去は七月十九日頃なり。それより十餘日を經て始て慶喜公自身出陣の決議あり。されば翁の夜雨譚に

慶喜公出陣の間際に將軍薨去の事あり、長州征伐沙汰止みとなりたり

とあるは事實を顚倒したるものにて其實は

將軍薨去の事ありて而る後に慶喜公出陣の朝裁ありしものなり。

慶喜公何故に斯く將軍薨去の後に於て却て長州征伐に鋭意したりやと云ふに、どうせ本家に乘り込むならば先づ長州に大打擊を與へ、赫々たる武勳を建て、其威に依りて群不平を壓倒したらば所謂上樣となりての重味も強く、天下の群雄を抑ふるにも都合善からんとの思付きに相違なかるべし。思ふに原市之進などの建策ならん。市之進の如き才覺者の思付きさうなることなり。公は是に於て八月八日を以て御暇乞の爲に參内し、十二日出陣と定めたるにその日になりて長州征伐の全く失敗たる事實は公の耳に達したり。則ち是まで賴みに思ひたる小倉方面も散々の失策にて肥後藩を始め長州征伐に贊成したる佐幕の諸侯も解兵し、總指揮官たる小笠原閣老も落人同樣長崎に引取りたること始て公の知る所となれり。自ら信じて決したることは容易に他人の說を容れず、邪が非でも押し通すと云ふ剛情を示しながら、氣が易れば忽ち前勇後怯の體を示すを常としたる公は此場合に於て例の癖を出し、遽かに將軍薨去を口實として止兵する氣になり、斯くて長州征伐は遂に沙汰止みとなれり。是時も公は宗家は相續すべけれども將軍職は辭退致すにつき、天下の公論を待ち朝命を以て前田、島津、伊達、其外德川親藩の中より適任者を選びて御任命ありて然るべき歟など申上げ、梅澤孫太郎を西國に派遣し薩摩、土佐、肥後諸大藩の集會を求め輿論政治を行はんとする意思を示したれども、後にはそれも貫徹せず征夷大將軍となりしにやはり長持ちせず、出し拔けに政權奉還の擧に出で江戸人を驚殺したり。亂世に均しき其世なれば、人事の豫期に違ふこと多かりしを以て公の進退のしどろなるも強て酷論すべからざれども、斯樣に一面には剛情を極

め、他の一面には獨斷にて方針を急變する主人を持ちては家人の心勞容易ならずと謂つべし。

(五) 亡國の自己暗示

翁は斯樣の次第にて此上は浪人するの外なしとて喜作氏と共に苦慮し居りし際、慶應二年十一月二十九日原市之進より徳川民部卿を佛國博覽會に派遣せらるゝに付それに隨行すべしと云ふ慶喜公の御內意なりとのことを聞きたり。翁自ら此內命に接したる時の心事を語りて曰ふ。

自分が其時の嬉しさは、實は何とも譬ふるに物がなかつた。自分が心で思つたには人といふものは不意に僥倖が來るものだと。速に御受けを致しますから、是非御遣しを願ひます。どの樣な艱苦も決して厭ひませぬと原市之進に答へました。

よく〳〵嬉しかりしことゝ思はる。さりながら既に慶喜が將軍となりたる上は德川氏の事全く望なしと考へたる翁が其德川氏の命を受けて民部公子の御供をして洋行するを以て恰も一場の活路を開きたる如く感じ大喜びに喜びたるは餘り自己中心の樣にて論語宗の翁にも似合はぬことなりと云はば云ふべし。尤も翁も愈よ日本を去ると云ふ場合に臨み、喜作氏に對し

「自分は此の命を受けたから誠に高運だが、其れに附ても貴契の身上が思ひ遣られる。といつて再び浪人になる譯にはいかぬから、寧そ運を天に任せて慶喜公に昵近し得らるゝ位地を求める樣になさい。併しながら德川の天下はもう長い事はないから亡國の臣となることを覺悟して居なければならぬ。勿論これは海外に居つたからといつても同樣である。御互に最初は德川の幕府を滅する意念で故鄕をも離れた身體であるけれども、今日此位置になつた以上は、急に變換することも出來ぬから、亡國の臣たることを甘んずるより外はないが、それにしても、只末路に不體裁な事がないやうにしたい。僕は海外に居り、貴契は御國に居て其居所は隔絕することになつたが、此末路に關しては共に能く注意して恥しからぬ擧動をして、如何にも有志の丈夫らしく死ぬべき時には死恥を殘さぬやうにしたいものだ」

と話したりとの事なれども喜作氏は此話を何と受取りしや。總じて之を言へば此時代に於ては自身と云ふ二字は始終翁の念頭を離れず、海外に行くを得るを高運と感じたるも自身にして、有志の丈夫らしく死にたしと覺悟したるも自身なり。翁の自身を思ふや誠に厚し

と謂つべし。さりながら翁は自身以外の天下國家を如何にせんとする。日本の民衆を如何にせんとする。抑も亦翁の仕へたる徳川氏を如何にせんとする。その問題に較べては翁が海外に行くも行かざるも、有志の丈夫らしく死するも、乞丐の如くのたれ死にするもさまで深き注意を拂ふに足らず。一身を犧牲にして尊攘主義の陳勝呉廣たらんことを覺悟したる當年の壯士としては餘りに自身の問題が先に立ち過ぎるやうなり。試に吉田寅次郎のやうなる人物を以て翁に代へたらば如何。彼は此際に於て海外に遁がれ出で得るを高運と感ずべきや否や。抑も亦徳川氏はもう滅亡と思切りて、せめては有志の丈夫らしく死なんと一身の覺悟にのみ沒頭すべきや否や。翁の如き人物さへ自身の問題が先に立ち亡國の民と諦めるやうになりては徳川家の敗北したるも怪むに足らず。されば我等の履歴話を讀で此に至り言ひ現はし難き不快を感じたり。世に自己暗示と云ふことあり。亡國も心からなり。徳川氏の黨、何れも聰明にして餘り早く亡國を覺悟したり。たとへば其新造の軍艦に回陽、回天など云ふ名を命じたるも衰世亡國の運を盛り返さんとする意味なり。小栗上州が横須賀に製鐵所を起し、どうせ幕府は亡ぶべければ此製鐵所も他人の手に渡るべし。其節になりて是程の物が殘りたらば猶ほ土藏付きの賣家たる面目だけは殘るべしと謔したるもやはり亡國を覺悟したるものなり。此聰明は甚だ惡し。斯樣に亡國の自己暗示が强くては徳川氏の末路が振はざりしも、尤の次第なり。たとへば大病の病人にても、自示暗示、甚だ樂觀的にして、我病氣はきつと直ると確信するものは難病も思の外に直ることあり。大病ならずとも自己暗示極めて消極的にして悲觀し易きものは氣で氣を病みて重病に陷ることあり。日本國は遂に亡ぶべしと自脈を取り其覺悟をするもの多くなりては亡國は眼前に起らん。されば自ら見るを明と云ふ共聰明も實は程度問題にして人間は少々自惚れ强く、少々時世に盲目なるが却て善し。西國武士は自藩を滅亡すべきものと見拔きたるものは一人もなく、自己に對する運命も極て樂觀的なりしに反し

德川黨のみが早く亡國の自己暗示に陷り、翁などさへ身を海外に脫したるを喜び、まさかの時は唯だ有志の丈夫らしく死にたしとて自身の覺悟にのみ汲々たりしことを思へば德川黨の遂に振はざりしこと眞に宿命に似たりと謂つべし。

(六) 翁の洋行

さりながら翁に取りては翁の洋行はたしかに高運なり。獨り翁のみならず、日本國の將來に取りても翁の洋行は大益を齎らしたり。仔細は翁の一身より云へば此時翁若し洋行せざれば幕府の末路に當りて翁の爲し得る所はやはり喜作氏並に尾高惇忠などゝ同樣彰義隊を組織し關東男兒の氣を吐く位が關の山ならん。或は翁は利口者なれば何か別に面白き趣向を思ひ付き一芝居打つことを得たるならんとも想像せられざるに非れども、既に一橋府中に籠絡せられたる翁は言はゞ池中に放たれたる鯉鮒も同樣なれば世間も狹く、同志も少きを以て見聞も亦限局せり。慶應元年の晩春、翁一橋家の役人として備中に下向し同國寺戶村の興讓館に於て始て坂谷朗廬先生に逢ひし時、坂谷は古賀洞菴門下の外交通なれば開國論を主張したるに翁は依然たる攘夷論者にして議論合はず、討論に花を咲かせたりと云ふ。此時代に於ては漢學者の朗廬先生、識見に於ては逆まに若年の翁を壓したりと云ふべし。されば翁の見識も其頃は要するに彰義隊の隊長天野八郎などゝ大差なきものなりと見て可なり。眼界既に高遠ならず、意氣投合の友人も其數甚だ少し。翁たとひ英雄の士なりとも、我等は其能く爲す所なきを知るなり。然るに此境界より超越して海外に飛び去るを得しは翁をして武州の百姓より轉じて一橋の役人となる更に一轉して幕吏たりし有志の青年と云ふ井底の蛙より世界の同情に呼吸する文明の紳士たらしめたる一大關頭にして翁が諸友の位置を超越し現代の貴族たるを得しも實は是が分水嶺なり。抑も亦德川の藩士より朝廷の拔擢を蒙り、一躍して租稅正に任じ間もなく大藏次官の位置を占め得たるも此洋行の御陰なり。翁は始に自身を明治政府

に推薦したるもの丶何人なるやを知らざりしが後になりて翁を薦めたるものは郷純造にて其時の大藏卿伊達宗城侯も兼て翁の名を聞き居りし爲なりしことを知りたりと云へり。さりながら其實、明治政府に最も強く翁を推薦したるものは洋行者と云ふ翁の履歴なり。世界の形勢に始て眼の開きたる其時代の事とて日本政府の洋行者を買込むこと猛烈にして、洋行書生の俄かに大官を博したること珍らしからず。翁も實に其一例なり。翁若し洋行歸りと云ふ肩書なければ一橋家の勘定組頭として何程の成績ありとも、直ちに大藏省の重官に任ぜらる丶には至るべからず。されば此點より言ふも翁が幕府の末路に洋行者たるを得しは實に高運の人なりしと謂つべし。さりながら翁一身が高運にても、或は不遇にてもそれは天下國家に直接の關係なければ我等の問題とするに足らず。我等は唯だ是に依りて翁を通じて世界の文明が我等に與へたる恩惠を感謝するのみ。翁が西遊中に得たる感想は明治三年の冬、翁の自序の文ありて刊行したる航西日記に於て其梗槪を見るを得べし。此書は翁と共に民部公子に從て洋行したる杉浦靄山氏と翁との合作にて此作にて此種の著述としては刊行の時日極て早きものに屬す。二年前までは攘夷論者たりし翁も世界の文明に觸れて忽ち西洋崇拜者の一人となりたるはその記事の語氣に依りて明白なり。明治大正の紳商澁澤翁は實は此洋行に生れたるものにして翁の模範は日本の商人道を一新したり。是れ我等が翁の洋行を以て日本國の將來に大益を齎らしたりと云ふ所以なり。

（七）

武士道は商人道

近頃は武士道大流行の世の中にして世界を相手に國を立つる上は日本國民を武士道にて鍛へ、列强の間に帝國の威嚴を押し張らねばならずとは津々浦々に行はる丶議論なり。東京に居ればそれ程にも感ぜざれども田舍にては何事か集會の在る毎に在鄉軍人會は靑年會と結び、席上の談話は軍國の事に及ばざるなく其度每に武道の沙汰のあらざる無く、德川の初世に三河出身の

青年輩が寄合ふ度に戰場の物語りをなしたりと云ふ大江戸の昔しも斯樣の光景ならんと思はるゝ位なり。全體より云へば我等も此氣風を歡迎す。さりながら武士道の繁昌と共に是非共並んで繁昌させたきものは商人道なり、或は商人道と武士道を合せ鑄りて國民道德を打建つるも妙なり。たとへば獨逸人は戰爭には極めて强けれども商業には極めて弱し。此所に弱しと云ふは意氣地なしとの意味に非ず、顧客の鼻息を伺ひ、成るべく其機嫌に投ぜんとする忍耐柔順の德、英國商人の意氣軒昂なるに均しからざるを云ふなり日本に於ても武士道は何處までも强きを本旨とし、剛も吐かず、柔も茹はず、眞直に國民の意地を立て貫きて然るべきことなれども、商人道に於ては柔和愛敬の德を失はず、世界を顧客として廣く遠く商賣する工夫ありたきことなり。然るに此商人道なるもの惜いかな近頃まで餘り發達せず。唯今にても猶ほ中途に彷徨す。たとへば、三井、三菱などの行方を見れば眞に世界を戰場として平和の大戰を試むる勇士の多きやうなれども、翻つて日本の田舍を觀察すれば自身の產物が世界の市場に於て如何なる位置を占むると云ふ自覺を有するものは甚だ稀なり。則ち日本國民は有事の時に於ては世界の戰場に乘り出すべき覺悟に就ては千村萬落、悉く其趣の說法を聽かざることなく、國民の義務は大抵は納得し居れども、無事の平日に於て世界の市場に自身の產物を賣り捌くべき商戰に於ては其敎訓親切ならず、其自覺明白ならず。極て漠然たる狀態に在るもの多しと云ふも可なり。是れ我等の竊かに不滿を感ずる所なり。さりながら是には遠因あり。則ち封建時代の餘習にして町人を輕蔑し商業を重んぜざりし風俗の今日まで祟を爲したるものなり。然るに日本帝國の近世に於て始て此點に氣付き町人の爲に萬丈の氣焰を揚げ商人道の鼓舞に努めたるものは他人に非ず。本論の主題たる翁其人なり。

（八）

翁其本色に還る

世には翁が明治六年に官途を去り銀行家となりたるを以て翁生涯の大變化とし、官尊民卑の風習に泥みた

る日本人に商人の尊貴なることを訓へたる實物教育とし翁の思切り善きを稱讃するもの多し。翁自身も此點に於ては些か自負の氣味あるに似たり。成程翁の官界を去りて浮沈定まりなき實業界に飛び入りたるは思切り善き英雄の事業には相違なし。さりながら翁が實業界に入りしは世に謂ふ士族の商法に均しくまんざら無經驗の世界に飛び込みたるに非ず。元來自身に其骨法なき仕事に打かゝりたるにも非ず。畢竟は其昔し信州あたりまで藍の葉を買ひ歩きし澁澤榮次郎の昔に返り、其仕事の範圍を擴張したるに過ぎず、謂はゞ形式を易へて祖先傳來の事業を繼承したるものなり。翁は幕末の半亂世に生れて書を讀み劍を學び武士の眞似事をしたり。さりながら是れ遂に翁の本色に非ず。翁の時世粧を去れば翁は依然たる武藏國榛澤郡血洗島の豪農澁澤市郎右衛門の惣領息子なり。其論據には翁は一橋家に仕へたる時も、駿河の德川家に用ひられし時も常に會計財賦の職に於て其長所を發揮したり。時の用には鼠の子も輕業をすることあるべし。天下專ら兵革を用ふる時節には町人の子も大刀を横たへ劍客の態を學ぶべし。さりながら是は時世の酒に醉ひたる爲なり。時世既に變じて人々平和に歸れば則ち故態再發せざるとを得ず。たとへば唯今畫道に於て大家と稱せらるゝ老人の中には幕末より維新に掛けたるどさくさ紛れに、人々美術を崇ばず、舊日本の遺物愛惜するに足らずとて全く排斥されし結果、畫工としては世に立ち難く或は政府の役人となり、或は商人となりたれども根が畫工なれば宿習變じ難く、世間の光景一轉して繪畫の再び重んぜらるゝ時となりて本色に立歸りたるものありと云ふ。翁の出處進退も是に似たり。翁は幕末に於ては攘夷黨の餓鬼大將となりて横濱燒打を計畫し、慶喜公に仕へて天下國家の經綸に指を染め、明治の初年に於ては中央政府に出仕し大藏次官となりて役人の道中を往來せんとしたれども、元來先祖以來の習慣にあらず、時勢の波瀾に動かされて色々の變相を爲せしことなれば天下既に平かにして再び商人（翁の家は豪農にして同時に藍の商賣したるものなり）たらんとしたる

は時勢の波瀾平靜に歸して其本色に還りたるに外ならず。されば我等は翁の官を棄てたるはさまでの珍事に非ず。翁の家系より考ふれば寧ろ當然の成行なりと思ふものなり。

支那民族性論

稻葉君山

一

日支關係の親善は帝國外交の本義なるに關はらず、曾つて實現されない。否な實現さるべき情態に出會ひながら、とんと逆戻りをするのであるが、これは、獨り帝國の對支外交が不徹底であるといふことや、または、不統一であつたといふこととの惡結果とばかりいふことを得ないのである。吾人の見解では、日本人は、今日までのところ、支那人の性格を了解して居ない。また深かく了解せんとはせなかつた。多くは一知半解で、それも過半は、歐洲人の見解を基礎としたものといふの外は無いのである。これは、たしかに、責の日本人側に在るものといつてよい。支那人の側に於ても、同樣である。支那人は、今日に至りても、日支關係といふ性質が、現に如何やうに取り扱はれつゝあるか、また、日支關係が、將來如何に進展する者であらうかといふことには、深く意を留めない。多くの人々は、相も變はらず、中國本位思想を鼓吹したり、さもなくば、排日熱を煽り立て、衆愚の歡心を買はんとしつゝある。これは、責の支那人側に在りといつてよい。親善といふことが、成立すべくして、而かも成立せないのは、多分は、此等の不眞面な事情に基因するのであらねばならぬ。

二

支那の民族性が、複雑的であるのみならず、今日の世界に於て、殆ど比較すべき性質に乏しいので、兎角に見當の着き難いといふことも、多くの人々の、容易に手を染めかねた原因をなすといふものもあるが、これは、たしかに、重なる事情である。第一に、支那は、土地博大人口稠多なるが上に、交通機關や、教育機關が不統一であるから、啻に南北とのみいはず、到處に各種各樣の地方色を發揮して居る。例へば、廣東語は、北京人に解せられざるが如き、即ちそれである。これ尙ほ可なり、廣東と福建とは、隣接の省會でありながら、而かも、それの言語は、双互に不一致である。甚い例をいふと、上海と寧波とは、聲息相通ずるほどの地續であるに關はらず、これまた一致せない。言語にして既に然りとせば、風俗慣習の不一致といふことも、略ぼ想像せられるであらう。尙ほ考慮すべきは、支那の土地が、崇山長川、曠原巨海を併せ有することである。一寸とした日本の田舍に往つても、平原地方の農民と、谿谷の農民とは、自らその性質に差異あることを知るのであれば、かれ支那の如き土地の人民を捉え來りて、概括的に論評するといふは、出來難いことのやうにも思はれる。更に考ふべきは、民族の離合から來る歷史的差異である。支那の古語に「洛陽は四戰の地なり」といふてあるが、支那は、東亞の洛陽であらねばならぬのである。それであるから、現に此の土地の地主たる資格を保持しつゝあるところの漢民族は、北族や東方の外人に絶えず脅威せられ、住み古るしたところの都城を開け渡さゞるを得なかつたことは、從來まで一再ならざりしことゝ知られてある。そして此の民族は、いふまでもなく、風俗でも言語でも、その都度に、大なり小なり、變化を與へて居るのである。複雑なるは、實に、現代支那人の血液であるであらう。

三

然らば、右の如き複雑にして混血的の民族の間より、普遍的性質に關する概念を抽出することが出來べからざることかといふに、吾人は、必しも、その然らざる

を確言したい。他なし、支那民族は、有史以來、統一的國家を有する經驗の、極めて饒多なる、從つて、各時代の帝王なり政治家なりが、その統治に便ぜんがために、採用したところの政策は、頗る努力的の痕迹を示して居る。但だそれらの實際上の効果に關しては。疑問とすべきことも少なくないとはいへぬが、大體に於て、此土地の民族は、それがために同一の範に鑄り出されたかのやうにも思はれる。これらの消息は、吾人の研究に一道の光明を與ふるものではあるまいか。ともあれ、かれ支那民族は、一面には、雜然として、極めて不統一なる性格を示しつゝあるに關はらず、他方に於ては、共通的、普遍的の性格を有するものといつてよい。支那研究者は、先づ此の點を顧慮して、甚しい獨斷的遍見的に陷ちぬやうにすることが、豫め肝要であらうと思はれる。

四

第一は、「卑弱」なることである。卑弱といふ文字は、後漢代の史家班固が、道家者流を論評した言の中に見えてあるが、吾人は、これを以て、啻に道家者流とのみいはず、一般支那人に適用さるべき文字であらうと考へる。卑弱とは何ぞや、平たくいへば、「卑」は徒らに競爭心を起さぬといふこと、「弱」は、消極的道德を持するといふこと、即ち支那民族は、その處世の方法としては、强ひて他と競爭する態度を表出することを避け、力めて消極的の地歩を占むる、尙ほ適切にいへば、無競爭の競爭をば、競爭の最上乘となし、自屈自損は、却て是れ自家の面目を維持する所以であると心得る、これが彼等の處世の奧義であつて、會々その性格の一端の發露したものであるまいかと思はれる。

吾人は、支那民族の此の性格を有するに關しては、少くとも兩樣の事情があると思ふ。即ちその一は、先天的に、此の民族は、柔和の民族であつて、尙武殺伐の民では無い。歷史によりて見るも、何れの時代にか、積極的に武力をば、他の民族の上に輝かさんと努力せるの痕迹ありとする。これ既に吾人の說明を要せぬことであらう。支那民族が、上古より早くも城廓生活を

始めつゝあつたといふことも、同一の理由として解せられる。何となれば、城廓生活は、密集生活で、單獨では外敵の侵剝を防ぐことを得ないといふ事情の下に、這般の生活を創めたものといつてよい。斯く觀ずれば、私人生活即ち支那人の住宅が、城廓生活の縮圖であることも理會され、同時に名高い萬里長城は、この生活の形式をば、國防上に適用したまでのことゝ解釋されるのである。第二の理由は、支那の歷代の君主而も英邁の名と仰がれた人々で、人民の智能なり、生活力なりを開發せんとしたものは甚だ少くない。反對に、彼等は黔首即ち人民を愚にせんとするの策を講じた。吾人は、この觀察の下に、歷代の崇文卑武てふ政策は、徒らに卑弱なるこの民族の性格を、倍一倍に文弱に導いたものといひたい。かの伊太利人マルコ・ポーロが「蠻子(南支那人)が若し侵略的種族でありしならば、彼等は、優に全世界を征服し得る程の多人數である。されど、讀者は、杞憂することを要せぬ、此等の蠻子は、何れも缺點なき商人、又は怜悧なる職工たるに適するのみで、兵士たるべき資格は、全然具備して居らぬ」といつたことは、頗る首肯すべき理解であると評し得るのである。

五

「卑弱」といふ言葉を、國家的に推演すれば、女性的といふことになる。支那は到底女性の國たるを免れないのである。尤も女性といつても、西洋的では無い。東洋的のそれであるといふことも、併せて知るべきであらう。支那に於ては、婦人には、絕對の從順を强ふることを以て、婦道とするが、然らば、婦人の地位は、實際に於て低卑であるかといふに、決して然かく想像はされぬのである。支那婦人は、その家庭内に於ては、女王としての權力を要求し、且つ行使しつゝあるといつてよい。それで、この事實をば、國際の歷史から見ると、支那民族は、每々、他の外族に對して、被征服者の地位を占めた、いはゞ失敗者であるか、それが、「負けるは勝つ」の諺語に洩れずして、征服者は、何時の間にやら、被征服者に降服するの奇なる結果を示し

て居るのである。古いことはいはぬが、清朝などの例をいふと、支那及び支那人は、丸るで家附きの娘で、滿人は入り婿であつた。家附きの娘などいふものは、いかに謹愼でも、我儘增長の傾きがあるが、之に反して入婿は、何程働いても、働き甲斐が無い、その關係が滿漢關係の上に、能く現はれて居るのである。支那が女性であるといふことは、今日の支那人に能く理解しつゝありや否やは覺束ないが、吾人の記憶では、昨年の日支交涉の時に、上海の漢字新聞は、自分共（支那）をば、大家の孃（むすめ）に、日本をば、豪客に比して、さていふやう、豪客は今や孃に對して結婚を要求し、白刄で嚇しつけるのであるが、いかに落ちぶれても、孃は筋目正しい大家の孃である。寧ろ豪客の手に蘭摧蕙折するとも、結婚狀は敢て認めぬのであるとあつたが、當時、吾人は之を讀みて思はず失笑した。成る程、支那は大家の孃ではあるであらう。さりながら、この孃の素行は、ちと正しくは無い、筋目を正しいといふ主張は、或る點まで肯つかれるが、それも程度問題で、孃の血は、既に混濁しつゝあるでは無いか。それはともあれ、支那人自ら、その國家を以て女性に比べたといふことは、自覺ではあるが、ともすれば、この自覺を抛擲して、男性的行動に移らんとし、その都度に、支那は損失を招くのであつた。吾人の知る範圍では、張之洞でも、乃至曾紀澤にしても、此の自覺については、大に缺くるところあつたが、今日の唐とか梁とかいふ諸君になると、殆んと話にもならぬのである。若し強て求むれば、故（もと）の李鴻章は、支那及び支那人といふものを了解して、無暗に矢鱈に男性的行動を取らなかつたのである。

六

「卑弱」の私德上に及ぼすことに就いては、一二を補足して置きたいのである。支那人には、古より私德の最上乘を以て、明哲保身といひ、巧妙に世渡りすることを以て、士君子の本務とするが、勿論これは、消極的道德によるの外は無い。それであるから、「慾は縱にすべからす、志は滿すべからず」といひ、「天地鬼神の

道は、皆な滿盈を惡む」といつてあるが、孔子の克己復禮といふことも、同一の意義に解せられぬでは無いのである。南北朝の時代に、顔之推と學者があつて、「家訓」を著はして居るが、その一節に「仕宦は二千石を過ぐべからず、婚姻は、勢家を貪る勿れ」といふことが見え、清代に名高い曾國藩は、「福あれども受け盡す勿れ、勢あるも用ひ盡す勿れ」といふ道家言を服膺することに關して、絕えずその子弟を戒飭しつゝあるを見れば、彼等の處世方法といふものも、了解されるのであらう。左の成語は、凡べてこの民族性の發露したといつてよいである。

天下有常勝之道、有常不勝之道、常勝之道曰柔、常不勝之道曰彊、(列子)
積於柔必剛、積於弱必彊、(同上)
兵彊則滅、木彊則折、(同上)
柔弱者生之徒、堅彊者死之徒、(同上)
小屈必有大伸、
唾面自乾

卑弱(消極的)といふことが、公私道德の上に、好ましからぬこととの多いことは、知れ切つた話で、今更ら繰り返へすの要は無い。たゞ、今日の日本人の如く、强く出さへすれば、成功するものと心得、出しや張りさへすれば、權利は得らるゝものと心得、同類にさへ厚くすれば、事業は成功するものと心得、無理勘定しても與の利益は收むべきものと心得、それら以外に、何等の方法をも顧慮せないといふが如きは、必しも學むべき限りでは無い。大約そ世に公德と稱せらるゝもの過半は、消極的道德に屬するものであるのである。吾人は今支那人に見習へとは言はぬが、少しく日本人は、この點に省慮することの必要があらうと思ふ。個人なるものは、既に一代限りで無いが、國家てふものは、更らに悠久である。輓近世に時めいて居る權門勢家に、紈袴子弟の頻發するを耳にするがごとき、其多半は、消極的道德を無視したる結果ではあるまいか。

七

第二は、現實的なることである。支那人は、何事に

かけても現實的で、容易に空理空想に動かされない。

人或は、虚無とか清談とか、支那人が、曾つてその前代に於て、理想生活に耽溺した時代のありしことを指摘するであらうが、それは、支那とのみいはず、貴族全盛時代に實現し易い一部階級の生活で、何にも之を以てこの民族の全體とは稱し難い。只だそれ現實的であるから、頗る打算的で、あらゆる道德でも、宗教でも、現實化せざれば、遂に已まぬのである。今、著しい事相を指摘すれば、左の如きものがある。

(イ)　道德の現實的なること

支那人の倫理道德と一概にいつても、一寸艱難であるが、彼等の思想を最も多く支配するものは、道教の教訓信條であらねばならぬ。(序に補足するが、卑弱といふことは道家言である。)道教には、バイブルにも比すべき「太上感應篇」といふ經典がある。素人考では道教は老子を祖とする、そしてその教義は、彼れの文字として知られたる道德五千言を崇誦しつゝありと思惟するであらうが、それは甚しい誤解で、近代の道教の聖經として、戶々に傳誦するものは「太上感應篇」一卷であるのである。「太上感應篇」の作者は、知られて居ない。友人妻木君には「晉の葛洪の作といふ傳説であるけれども、恐らく南宋頃の道士が、抱朴子に據つて作成したものであらう」といふ斷案があるが、吾人は、姑らくそれに與みしたい。それは、ともかく、「太上感應篇」について特に注意すべきことは、人の行爲即ち善とか惡とかいふものには、一定の報償が伴ふ。報償は天意に基くか、如何に報償さるべきやは、各人各自に算定することを得る。即ち經典の明記するところでは、天仙にならんとすれば一千三百善、地仙を求めんとすれば三百善を立てよといひ。又た、善人が一日に三善を行へは、三年目に天に感應あり、凶人が一日に三惡あれば、三年目に禍ありといふ。極めて露骨なる計算的道德が倡言されてある。道家は又た主張する。これらの計算的道德は、必しも我等(道士)の一私言では無い。幾多の古聖賢が既に之を實行してその結果を得た。即ち宋では范文正公(仲俺)韓魏公(琦)張魏

公(浚)、明では、袁了凡、劉宋周(陽明學者)等が凡べてこれを實行したといひ、名高い蓮池和尚や雲谷禪師ですらも、やはり斯道の大家であつたといつて居るが、事の眞僞は、ともあれ、その方法として採用された「功過格」といふものを一見すれば、吾人は、支那人の道德の如何に現實的であるかを了會し得るのである。「功過格」とは何ぞや、「太上寶筏」に載せたものによれば、大略下の如きものでなる。

年		月	
初一日善	過	初二日善	過
初三日〃	〃	初四日〃	〃
初五日〃	〃	初六日〃	〃
初七日〃	〃	初八日〃	〃
初九日〃	〃	初十日〃	〃
十一日〃	〃	……(以下略す)	
共善……		共過……	
除去……		實存……	

右は、各人各自が毎日使用すべき「功過表」であつて、その日その日の善と過、即ち善事と惡事を計算して記入する、そして、月末になりてから、善の總計と惡の總計とを算ひ出し、大數の分より小數を除去し、若し善ならば善何程、過ならば過何程と記入する。然らは、その善とか惡とかいふことをば、如何なる表準によりて計算するやといふに、それは、大微仙君などいふ祖神の手に出來た善過格(功過格)に準ずることになるが、それが又た仔細に點檢すれば、この國の民族性が窺はれて興味があるのである。一例を示せば、人倫關係に於て、親に對して和氣婉容あり、憂憤してもそれを擧動に形はさぬ。即ち一日一善といひ、妻子に厚うして、父母を薄うし、喪葬を草卒にし、久しく親の柩を淹らすは各々百過といひ、財産を分ける場合に、多きを讓りて少きを取る、即ち五十善といひ、奴婢を解放する場合、原價百錢毎に一善に計算すといひ、婦女から挑まれても堅く拒絶した場合を三百善といひ、反對に婢に手を出した場合は百過、人の婦女を窺ひ、美

色を評論し、さては、美形に遇ふて留盻し、家に居りて、時でも無く淫褻する。共に五過とあるなどは、彼等としては、チト手酷しい。ことに面白く讀まることは、一本の濟世善書を編輯することは十善に計算し、一個人に遇ふて報ぜざることは同じく十善とするがごときは、何處までも、この國の民族性を表示するものといつてよいのであらう。

(ロ) 宗教の現實化すること

支那に於て盛に歡迎せられる宗教で、現實的ならざるは、殆んど存在の意義を失ふものといつてよい。支那人は、數詞では「三」といふのを重ずるが、天の構成をば、道家では、下の三氣三天といつて居る。

三氣─清微天…………玉清 ┐
　　　禹餘天…………上清 ├ 三境
　　　大赤天…………太清 ┘

そして、右の三氣三天には

玉清…………元始天尊
上清…………道君
太清…………老子

が居るものと想定し、ことに元始天尊は、姓を樂、名を靜信といふとしてある。

「三」の數詞は、また天、地、水に解せられ、同時に三元といふことが唱へられる、乃ち

上元…一品天官賜福大帝
中元…二品地官赦罪大帝
下元…三品水官解厄大帝

を三元の本尊であるといひ、例の「切過格」は、官吏と同じく、月選ともに三年考績の法を取るといひ、賄賂は、三尸(庚申)といふバチルス見たいの奴に媚びて、それの氣嫌を購ふの手段と考へられてある。實際のところ、支那の宗教は、未來を説かぬ。よしや未來をいつても、それは現世の生活と幾何も差別がないといふことが、彼等の信仰を繋ぐ所以であらねばならぬ。將來とも恐らくは、この徑路を辿ることであらう。信仰の中心たる神を人格化し、そして、それに支那人一流の家族制を與へざれば已まぬといふことも面白い。例

へば、竈神の家眷に、公、母、夫、婦、子、孫、姉、妹、姐…の各神象を與へ、最も畏敬さるゝところの城隍神には夫人(妃)を與ふるが如き、即ちそれである。總じていへば、支那人は、その信仰の對象をとつて、現實化するといふことを必須條件とし、それあるによりて始めて信仰を生ずるに至るのである。かの外國傳來の佛教ですら、南宋以降は、殆んど現實化し去りて、その形式をば、支那官場のそれに模倣し、今日では三教(儒佛道)合一を唯一の保護色となしつゝあるでは無いか。

(八) 學問の現實化すること

學問を視ても同一である。第一支那の學問は、人間生活を離れざることを以て、根本義とする。第二には、學問が殆んど固着的であつて、變化に乏しいが、それと同時に徒らに外界の力に搖かされないといふ根柢的の素質を認むることを得るのである。

此のことに關して、今より四五年前のロンドン・タイムス紙上に、下の如き意見の載せられたことがあつた。

支那の建國は、數百年のことでは無いので、數千年の昔に在る、僅に數個月にして五色の旗を翻へすことを得たりとも、此數千年來の四百餘州の風物は、しかく容易に破壞すべからざるものであらう。其社會的組織に於ける各纖維は、歐米諸國中に比類を見ないほど强堅で、その纖維は、個人の性格を作り、家庭の關係を定め、遂には治國平天下の極に達し、今尙ほ永久的に現實社會の基礎を成す。之に反して歐洲の社會組織は常に理想主義のために、其根柢に於て動搖を感じ、吾人は社會的現實的の支那人に比して、著しく不安定の地位に立つものである。(支那に於ける共和政治と儒教抄譯)

この見解は、泰西の社會は、理想主義のために動搖するが、支那にはそれが無い。その原因は、支那人の個性が產出した結果であるといふことに歸着するのであるが、實に支那人は、自己の生活に、何等の疑惑を抱くことなしに、世界到るところに、その步武を進むるのである。

これも前と同一で、吾人は、必しも支那人に倣へとはいはぬが、帝國の昨今の如く、人々の思想が根本的に不安定では困つたものである。そして表面に現はれたところを見ると、燥急的で、模倣的で、取捨選擇の能力が甚しく缺げて居る。見よタゴールが來たといへば、神田の店頭は、丸るで「タゴール」で充たされ、トライチユケがよいといへば、門前の小僧までも「トライチユチ」を眞似るといふ。そして、何等基礎的恒久的の著書は、一般に歡迎せられぬのである。ともあれ、吾人は、支那民族の現實的なることに關しては、驚異の眼を以て接せざるを得ない。勿論一得一失は、免れがたいことであらう。

八

第三は、耐久性に富むことである。支那の俚語に百忍成金といふことがあるが、いかにも、この國人の特性を現はした成句であらねばならぬ。民族性などいふものは、用意の間に發露せない。多くは、不用意の間に出るものであるから、その國の民間に傳はつた俗説俚諺などいふ類は、閑過し難いものといつてよい。ことには、上古の傳説である。吾人の考では、東亞では、何ともいつても、支那が最も古く、又た最も價値多い傳説を有して居る。たゞ、惜しいことには、孔子の一派の、怪力亂神を語らずなどゝ決めたことのために、その大部分を喪失して終つたのであるが、幸にも、尚二三の徴すべきものがないでもない。第一は、愚公と智叟との問答である。この話は、名高い「列子」に出であるが、大略下の如く傳へられる。

大行山と王屋山といふ二大山がある。方七百里高さ萬仞で、冀州の南、河陽の北にあるといふ。その地に北山愚公といひ、齡九十に垂んとする老人があつた。山に面して家を構へたが、何分にも、山が往來の邪魔だといふので、家族一同に、右の二山を夷にせんことを謀つた。皆なのものも同意した。妻は獨り疑つて、君の力では、魁父といふ丘陵ですらも、損らすことが出來ない癖に、何で太行王屋などいふ太山に當ることを得やうと半ば冷笑した。老人は、そんなことに頓着せずに、その山の土石をば渤海に運び込むことゝしたのである。かくて、父子孫三人、箕や畚で石塊や土などを目的地に運び出したが、恰も鄰人に一人の孀があつて、その息は、纔に齔も行かぬ只の七歲といふのに、來り

て之を助けた。太行山から渤海までは遠い、數百里もあるであらう。彼等は寒暑節を易ひて始めて一反することを得たのである。河曲に智叟といふ者があつた。愚公を諫止してさていふやう、汝の愚かさにも、程があるでは無いか、殘年餘力を惜まずして、努めたればとて、太山の草木の一毛ほども毀つことを得ない癖に、土石を取り除くなどゝは、以ての外である。マア休めたらよい。愚公は之を聞きて長き息を洩しながら、かくいつた。汝の見識は、隣家の孀(やもめ)にも、又たその小兒にも及ばない。自分は死ぬであらう。されども、自分に子があり、子が又た孫を生み、孫又た子を生み、其子又た子を有し、子に又た孫がある。子々孫々、窮まることを知らぬ、而も山の容量には加増がないとすれば、何を苦みて平かにする得ずとする。智叟は、返答に窮した。時に操蛇之神があつて、私に愚公の言に懼れて、上帝に告げた。上帝は、その誠に感じて、夸蛾氏の二氏に命じ、右の二山を負ふて、別地に移した。これから以來、大路は開けたのである云々。

吾人は、實にこの傳説をば、徒らに荒唐無稽の物語とのみは思へぬのである。現代に於ける支那民族の發展を見よ。いづれが愚公的ならざる。而もその結果は、實に太行王屋二山の移動のみでは無いのである。

尙ほ吾人をして二三帝國との對比をいはしめよ。近い話が滿蒙である。長白山の峙つところ、黑龍江の流るゝところは、かれ愛新覺羅(アイシンギョロ)氏が、征服者の地位と、又たその卓越した武力との下に密封しつゝあつた發祥地ではないか。然るにも關はらず、何時の間にやら、その封禁の基石は、柔弱なる彼等に嚙み壞ぶられたのである。これが愛新覺羅(アイシンギョロ)氏の大御所時代といはれた乾隆帝の治世にあつたのだから駭くの外は無い。近代は尙更らのことであらう。一八六〇年代に、僅々二三百萬を計上された彼等は、今や千九百二十萬人を算ひ、東部内蒙古には、地主たる蒙古(モンゴル)が七十萬内外といふに、彼等客人は、百九十萬以上を算するのである。これ實に、支那民族の、異常なる耐久性が基礎をなし、執着力、彈力、乃至は民族の繁殖力を、益々有効ならしむるものといつてよいのである。

九

以上吾人は、支那民族性の三大特質と思はるゝを指摘したが、これに對しては、中外に異論が起るであらう。就中、第一項の支那人は「卑弱」を以て、長處とすといふことである。即ちそれが反證としては、輓近

の支那及支那人が、自強とか排外とか、あらゆる積極的態度を採ることをいふであらう。然ども、退いて熟察するに、此種の態度は、支那及支那人の、國際的に刺激せられた偏向であつて、必しも彼等が本性の發露といふを得ない。若し此等の見解に就いて聊にても疑問を抱くならば、西力東漸の歴史及び帝國の開國時代を回想するが、何よりも捷徑である。併せていつて置きたいのは、少數ながら、支那今日の先達と稱せらる人々が、徒らにその偏向性を助長するの態度を戒むべきことである。即ち腹にもない言論を振り廻はして、兩國の親善を毀くといふことや、役にも立たぬ軍備を擴張するといふことや、これらは、其最もなるものあらねばならぬ。吾人は、實に、支那民族の三大特質に察して、この民族の存在の意義の、益々恒久的に、又た倍々多望なるべきを想像せざるを得ないのである。

(完、大正五ノ八、七)

寺内内閣の出現に對する儼正批判

法學博士　吉野作造

一

純粹なる歴史家の立場より達觀すれば、寺内超然内閣の今日に出現せるは、宛かも蕩々たる潮流に對抗して細波の逆寄せするが如きもので、憲政發展の大勢を念とする者の固より齒牙にかくるに足らざるものである。蓋し我國憲政發展の方向は、大體に於て最早一定して居る。其結局に於て落ち着くべき目標に對しては今尙前途遼遠の感あるも、而かも憲政創設當時の情勢と今日とを比較して冷靜に觀ずれば、吾々は今更ながら進歩發展の方向の一定不變と其の押し寄する勢力の强

大雄偉とに驚かざるを得ない。されば今頃超然内閣を標榜して乘出して來るのは、畢竟一木を以て大河の決するを支へんとするの類に過ぎないものと言はざるを得ない。尤も我國憲政の發展が現時見るが如き方向を取るのが善いか惡いかの論は自ら別問題であるが、兎に角大正の新時代に及んで、寺内伯を戴いて超然内閣の出現したのは、其の健氣なる意氣に於てや、稱すべきものありとするも、畢竟龍車に向ふ蟷螂の如く、結局は大勢に蹂躙られて後世の歴史に哀れを止むべき運命を有するものに外ならない。

予輩は之れまで屢々古老先輩に就いて、憲政創始當時の歴史を聞いた。當時民間には西洋の文物に心醉するの餘り、其淺薄皮想の解釋に基いて隨分輕燥なる政論を爲す者が多かつたさうだ。廟堂の臣多く之を以て國家の深憂となし、之を先にしては岩倉公、之を後にしては伊藤公の如き、特に熱心に舶來思想の横行を制するに苦心し、我が憲法の制定の如きも、つまり此精神に基いて出來上つたものだといふことである。或學者の如きは、我國の憲法上英國流の憲政運用法を認めずとするの根本義は、已に明治十四年の政變の際に於て明白に確立したと言ふて居る。亦以て當時廟堂諸公の苦心を想ふべきである。而して之れ皆彼等が國家を思ふの至誠に出づるものなることは、予輩の固より疑はざるところである。それだけ又斯る思想は今日仍ほ一部の社會には、儼然として一個の勢力として存して居るやうである。中にも當時直接に此等の政變裡に馳驅して、尚今日に殘存して居る人々に取つては 之等の思想が依然金科玉條として有り難がられて居ることは言ふを俟たない。然るにも拘らず、憲法發布後の政界の大勢は如何に發展したかと言ふに、事實は全然先輩の苦心に反し、彼等の希望に逆ふて走つて居る。見よ議會創立後數年間の經驗は、超然内閣を以てしては到底憲政の圓滿なる運行を見る能はざることを吾々に教へたではないか。さればにや超然内閣主義の第一の主唱者たりし伊藤公は、やがて自ら野に下つて政黨を組織するに至つた。其後更に數年間の經驗は、吾人に教ふる

に政黨にも亦政府を組織するの積極的地位を認めざるべからざるを以てし、幾くもなくして政黨官僚相交代して朝に立つの所謂桂・西園寺の妥協時代を現出したではないか。而して大正改元早々の政變に至つては、清浦內閣の流産によつて政黨の實力の侮るべからざるを明示し、將に官僚獨自の力を以てしては到底政權を掌握し得ざるの形勢を確立せんとした。斯くして我國政界の發展の大勢は、憲政創設者の意志に反して、漸次政黨主義に向はんとして居つたのである。若し此際仍ほ政黨主義の十分なる實現を妨ぐるものありしとすれば、そは政黨夫れ自身の不完全なることに因する。政黨其物がモ少しよき發達を示して居つたりしたならば、或は今頃は政黨政治主義が我國に於て立派に確立して居つたかも知れない。

然らば問ふ。我國政界の發展の方向が先輩元勳の素思と相反するに至りしは、抑々何によるか。是れ必ずしも一般國民が元勳諸公の如く國家を思ふの念が厚くなかつたといふ爲めではあるまい。若し予輩をして其觀るところを卒直に言はしむれば、之には二つの原因があると思ふ。一つは、先輩の諸公が西洋流の立憲主義の排斥によつて以て君權を擁護し得べしとせるの根本思想に誤謬があることである。彼等は第一に民權を以て直に君權の敵と考へた。成る程西洋の立憲制の起源は君權民權の衝突に在る。又當年の我國の輕燥なる民權論は一見君權に對抗するものなるが如くに見えたといふ事情もあらう。けれども民權を抑壓することが取りも直さず君權を擁護伸張する所以なりとするの思想は、窮極に於て君民相親の美風に薰育せられたる我が國民思想と相容れない。此種の思想は今日にも存在して居ると見へて、山縣公が大隈侯の加藤子奏薦に反對した理由を述べたる語なりとして、二三新聞の傳ふる所に中には、『政黨の首領たる人を立てる譯には行かぬ云々』の言葉がある。大隈侯自身ですら、加藤子を推薦せるは子が政黨の首領たるが爲に非ずして、只國務に練達の士なればなりと辯明したと傳へられて居る。政黨の首領といふ資格に於ては內閣組織の大任に當る

べからずとするのは、民權を以て君權の敵と視るの謬想に非ずして何ぞや。斯の如き思想の今日仍臆面もなく唱へられて居るとは、予の甚だ怪訝に堪へざる所である。併し幸にして多くの識者の間には、段々此謬想は斥けられて居る。最近政黨主義の盛になりつゝあるも、畢竟君權民權和親の理想が明となつた結果である。民權の敵視するは君權に非ず、君權擁護の名に隱るゝ少數の特權階級あるの意義が明となつた結果に外ならぬ。次に彼等は大權擁護の名の下に直接に擁護せらるるものは大權其物たるよりは、寧ろ自家の特別なる地位であつたことに氣が附かなかつた。彼等は固より自家の地位を擁護せんが爲めに名を大權にかりたのではなかつた。けれども長い中には自ら大權の名の許に自家特權の擁護となるのは、自然の勢として亦已むを得ない。以上の點が年と共に明かになつて來れば、國民が自ら所謂大權擁護論なるものに反感を來たすのは、是亦當然の數である。況んや此美名に立て籠つて政權壟斷の閥を造り、其間往々私曲放恣を敢てして耻ぢざるものあるに於てをや。更にもう一つの原因は、一般國民の知見の進歩に伴ふ當然の結果として、政治上自主自由の地位を要求するの風潮が年と共に盛になつて來たことである。政治上の自主自由が、必ずしも尊王の大義に相背かざることは、茲にくど／＼しく説くまでもない。而して近代の文明が、一面に於て自主自由の國民的自覺を促せることも亦固より言ふを俟たない。而して斯る現象を見るのは、西洋と言はず、東洋と言はず、苟くも近代文明の風氣に觸れたるものゝ免るゝを得ざるところにして、此點に於て所謂政治的自主自由は近代人の普遍的要求と言つて差支がない。此意義に於て立憲政治といふものは、其最初の發現は之を西洋に於て見たけれども、其根柢は東西の別なく、所謂近代人一般の普遍的要求に存在するものと謂はざるを得ぬ。我國の先覺は、我國特別の國體を論據として、必ずしも西洋の立憲政の其儘に據り難きことを唱へたけれども、國體の異同によつて憲政運用の方法に多少の差を來たすのは免れぬとして、憲政の根本義が人類の普遍

的要求に基礎を置き、國の東西に依つて其揆を異にするものに非るの理は、何時までも國民の眼頭に蔽ひ去られ了ることが出來ぬ。斯の如くにして我國の憲法政治は、誤つたる先輩諸公の素思に反して、其自然順當の進行を平然として續け來つたのである。卽ち政黨主義は、憲政運用上の根本主義として、西洋に於けると同じく我國に於ても亦漸を以て其根據を堅めつゝあつたのである。勿論此主義の完成には、更に長き歳月を要し、其間政黨夫自身にも一層の進歩發達あるべきを要求することは言ふを俟たない。從つて又吾人は今日我國の政黨の著しく幼稚不完全なることが、大勢の順行を著しく紛更し政黨主義の發展を妨げ、却つて各種の反對の主義の跳梁を許して居ることを認むるに躊躇せざるが、然し、大勢の歸趨は既に明白にして之を爭ふの餘地なく、昨今の變態異象は畢竟洋々として奔流する大河長江上の一時的小波瀾に過ぎざるものと斷定せざるを得ないと思ふ。

二

寺内々閣の出現が、大勢論の見地より見て殆んど齒牙にかゝるに足らざることは、前述の如くである。然しながら現在の政治の得失を念とする者の立場よりすれば、尙之を細かに觀察研究するの必要がある。何となれば如何に小さき波瀾でも、大政に逆行して出現せしは、必ずや政界に何等かの缺陷あるを語るものであつて、憲政進歩の促進は實に之等の缺陷の本體を明にし、之に向つて革新的突擊を試みるに依りて爲さるゝからである。

予輩の觀るところによれば、寺内々閣の出現を許せし第一の原因は、疑もなく大隈内閣の失政である。是れ殆んど言ふを俟たない。第二の原因は政黨の無氣力である。特に政友會の軟弱なる態度である。大隈内閣が其失政の結果退かねばならぬ羽目に陷り（表面は圓滿辭職と假託するも）、而かも加藤内閣の其跡を襲ぐに故障なりとすれば、何故に政友會は自ら政界の表面に乘り出すの決心と努力とを爲さなかつたか。同志會に對抗し政界を兩斷して其一半を占有する大政黨として、

反對黨の失脚に當り、おめ〳〵超然主義者に活躍の機會を讓つたのは、畢竟彼等に非政黨主義と戰ふの鞏固なる決心なかりしの結果である。原總裁が其最近になせる演說中に、或は『單に閣員の顏觸を見たるのみにて、直ちに反對の聲明をなすが如きは、甚だ謂れなき事』たりとか、又は『暫らく其政綱と内外に對する實際の施設とを篤と見屆けたる上にて、黨の態度を決するも未だ遲からず』などゝ言ふが如きは、全然政黨存立の基礎を自ら否定するの妄論である。此點に於て政友會の斯の態度は、大隈内閣の失政と共に、超然内閣の發生を促せる二大禍根であると言はなければならない。

超然内閣發生の第二の原因としては、更に所謂官僚一派の一兩年以來の惡戰苦闘を擧げねばならぬ。固より彼等は別に集つて黨をなすものではない。從つて又結束して内閣乘取りの陰謀を企てたことはないなどゝ辨明するかも知れない。併し直接の動因が何であつたにしろ、歐洲戰亂の元兇は獨逸であつたといふと同じ意味に於て、大隈内閣の顚覆は主としては彼等の努力の結果に外ならぬ。蓋し彼等は第一に政權に參與すると否との上に、實際上大なる利害關係を有つて居る。而して最近政黨主義の益々盛んになり、漸を以て我國憲政上の固定的原則たらんとするの趨勢を見ては、恐らく彼等の胸中に煩悶焦慮措く能はざるものがあつたらう。是れ彼等が大勢の歸趨如何を顧みるに遑あらずして、政權の獲得に狂奔し、無二無二政黨主義の確立を妨害するに全力を傾到した所以である。無論多數の中には誠心誠意政黨主義の盛行を憂ふべしとする、善意ではあるが固陋なる見解に動かされたものも無いでは無からう。兎に角、彼等は、大隈内閣の成立以來政黨主義の益々確立せんとするの傾向あるに駭きて、極力此趨勢を緩さんと努めて居つたのである。其第一着の手段として彼等は之まで機會ある每に、先づ大隈内閣の顚覆を促がさんとして居つたのである。尙此外に官僚の一派をして、最近特に活躍の希望を高めしめたのは、戰後歐洲の形勢に關する彼等の豫測である。彼等は戰時に於ける歐洲の一時的變態を見て、輕率にも戰後に

於ける各國政治組織の根本的變革を豫想し、恰かも第十九世紀初頭の大變亂が一大政治的革命を結果したると同樣の効果を、今次の戰亂も亦持ち來たすものと考へて居る。而して此變亂に於て最も大なる打擊を蒙るものは卽ち政黨政治である、立憲政治であるとなし、かくて今や將に來らんとする大勢の激變を眼前に控へて、彼等に心私かに我黨の時代來れりと欣喜の情に動いたのであらう。中には殊更に斯の如き說を流布せしめて思慮淺き青年の心を誘はんと試みた政治家もあると聞いた。現に此種の說明は最近二三の小新聞にもポツ／＼散見するやうである。併し乍ら第十九世紀初頭の政治的變革は、もと自主自由の自覺といふ思想上の一大革新に伴つて起つたものであつて、此思想そのものが更に大なる變革を受けない以上は、今次の戰亂が如何に社會の各方面に多大の動搖を與へたとても、自主自由の根本的要求の上に立つ政治組織までが更に重大の變革を蒙るべしとは斷じて想像されない。從來の政治組織が戰後忽ち復た舊態に還りて、更に新しき經驗と新しき覺悟の上に進步發展を遂ぐべきは極めて明白の道理である。官僚の一派が、當今一時の變態に眩惑して、政治組織の根本的變革を豫想するのは、若し本氣で之を主張するものなれば、そは寧ろ笑ふべき妄想であると言はざるを得ぬ。が、兎に角、此等の妄想に動されて居る者の彼等の中に多少存在することだけは疑を容れないやうである。次に第四の原因としては、官僚に對する元老の擁護を擧げざるを得ない。元老の擁護なくんば、官僚一派は如何に藻搔いても、到底政權に接近するの見込はない。そも／＼元老は新日本建設の功により、國民の間に多大の惰性的勢力を有つて居ることは勿論、倘宮中に於ても奪ふべからざるの勢力を振つて居る。何人と雖も、彼等の承認を得ざれば、今日容易に政府を造ることは出來ない。今次の政變に方り、政友會が大隈内閣の後を繼ぐこと能はざりし所以も、畢竟は元老が原總裁を内閣の首班として承認せざるべきことが明白であつたからであらう。大隈侯が先年初めて大命を拜受せし時に山縣公の推薦に依れる

も、又大隈侯を戴く事によつて初めて同志會等が政府を組織する事を得たりしも、皆元老の思惑如何に關する事である。今次の政變に於て、大隈侯が元老の意志に反し敢然として加藤總裁を奏薦したるに拘らず、元老も亦斷乎として寺内伯の推薦を以て之に對抗したるを以て觀ても、如何に彼等が官僚を擁護し政黨を排斥するに熱心であるかを見ることが出來る。大隈侯も何の見る所あつて斯くまで元老に楯を突いたのか予は之を與り知らない。善意に之を解すれば、或は内閣組織の事に元老の常に干渉し來りし慣例に最後の止めを刺さんと欲したのかも知れない。此點に關する大隈侯の熱心は、政界の風雲急を告ぐると共に三派合同を促して政黨を準備せしめた事でも明である。之に先つて侯が寺内伯に加藤子との提携を奬めたのも、一面に於ては官僚との妥協なるが如く觀ゆるけれども、他面に於ては或は生後間もなき足弱の與黨を斯くして暫く慘風悲雨の災より免れしめんとの老婆心に出でたのかも知れない。而かもすべての策悉く破るゝに至るや、乃ち元老の反對あるべきを覺悟の前で加藤子を奏薦した侯の態度には、善かれ惡しかれ非常の勇氣を伴つたことは疑を容れない。何れにしても親しく　天顏に咫尺して斯かる爭を　聖斷に仰ぐといふ事は、我國に於ては極めて異常の現象といはざるを得ない。繰り返していふ、初めより元老の排斥を覺悟して獨自の意志を奏問せし大隈侯の決心も、亦常例を破つて首相の奏薦と反對の奉答をなした元老の決心も、事の是否善惡は別として、我國最近の歷史に於ては非常空前の大事件である。而して予輩はそれ丈けまた元老に於ける官僚擁護の意思の強烈を想はざるを得ないのである。斯くして官僚は兎に角遂に政權に有り附く事を得た。然り而して元老のかゝる頑强なる態度は、一に自家の郎黨たる官僚の保護に急なるの結果なりと見る者あらば、是れ又恐らくは正當の見解でない。思ふにこれ實は官僚擁護と言ふよりも、寧ろ一大隈に對する强烈なる反感が元老をして斯かる態度に出でしめたものと見るべきではあるまいか。是に於て予は超然内閣出現の最後の理由として

對大隈の反感をも數へたい。大隈侯に對する元老の反感も、之を個人的感情のみに歸するのは又大に酷に失する。勿論一つにはそれもあらう。けれども主としては矢張り主義の爭に根抵するものと觀るべきであらう。予は今次の政變の大體の經過を冷靜に觀察し、之と明治十四年の政變とを比較して、私かに無限の興味を感ずるものである。十四年に於ける大隈參議の失脚は、一面に於て :: 云ふ迄もなく其の英國流の政治主義が偏狹なる國體論と戰つて敗北したる結果に外ならぬ。當時岩倉公の如きは、天皇の大權を動搖するの甚しきものとなして、極力大隈參議の排斥を主張したと聞いて居る。固陋なる一部の憲法論者は、今日仍ほ當時の政變を以て我國の政治主義が英國主義を排斥するに確定せるの明證となし、當年の廟堂多數の私見を以て永遠不動の原則なるかの如く見做す者ありと雖も、予輩歷史家の見地より云へば、之れ亦憲政思想發達の一段階に過ぎずして、適々憲政の根本義が其當初に於ては多少誇張したる形に於て唱へられ、爲めに固陋なる保守的階級の排斥する所となるといふ各國通有の常例を繰返したものに外ならないと觀る。庶莫當年の廟堂諸公は國家の爲めに由々しき大事なりとして決然として大隈排斥に結束したのであつた。而して今次の政變は、仔細に其成行を觀察すれば正に之と全然同一徹の經路を取つて居るものではあるまいか。何となれば、大隈內閣の二年有餘に亘つて爲せる所、大小種々の施設ありと雖も、就中憲政の大局より觀て最も重大となす所は、彼が極力政黨主義の發達を計つた事にあるからである。而かも侯の之が爲めに取つた方法は頗る露骨であつた。從來朝に立つた政黨としては外に政友會あるが、政友會內閣はまた固より政黨內閣主義の發達を願はざりしに非ざるべきも、概して眼前の地位を擁護するに急にして、舊勢力との妥協疏通を厭はなかつた。然るに今や大隈內閣は百尺竿頭更に一歩を進めて全然元老を無視せんとするの態度に出でた。是に於て元老は、一つには其暴慢忘恩の態度に憤激し、一つには十四年當時と全然同一なる思想に刺戟せられて、こゝに結束して國

家の爲に大隈內閣執る所の主義を紛韲せずんば止まずと決心したものではあるまいか。元老の一派が、一兩年以來頻りに大隈內閣を呪ひ、其倒るゝに當つてや、恒例を破つて其奏薦する所の後繼者までをも排斥するに至つたのは、單純なる對大隈反感のみに歸すべきではないと信ずる。

以上の如く原因を數へ立つれば一にして足らないが、歸する所は、現在政黨の無氣力と、元老一派の固陋なる思想とが、超然內閣の出現を促した根本の原因であると思ふ。政黨の無氣力なるは今に初まつた事ではない。けれども、政黨の運命に關して非常に重大なる關係ある今次の政變に對して彼等が執る所の不徹底なる態度を見ては、予輩は更に其腑甲斐なきに呆れざるを得ない。或意味に於ては、政黨政治の發達を阻礙するものは實に政黨夫自身であると云ふも過言ではない。予は政黨政治の發達を眞に國家の爲めに希望する丈け政黨に向つてまた大なる反省を求めて熄まないものである。

三

官僚一流の舊思想には今日尙ほ之に賛成するものが少く無い。之に付ては予輩之れまで屢々言說を試みたことであるが、今次の政變に際しても、正面より之を駁撃するの論議割合に少なかつた樣だから、予は重復をも顧みず尙ほ簡單に數言を附け加へて置かうと思ふ。

第一に政黨內閣主義が憲法上君主の大權を侵すとするの說は、彼等の謬見を作つて居る根本の思想である憲法の規定に據れば、內閣大臣の任免は全く君主の大權に屬して居る。之れ因より言ふを俟たない。然しながら、君主大臣を任免するといふ法律上の原則は、如何なる內閣にも適用があるので、政黨內閣なるが故に此法律上の原則を排斥するのではない。元來世の憲政を論ずるもの、動もすれば法律上の原則と政治上の原則とを混同して平氣で居るが、大臣任免の權君主に在りといふは、國法組織の形式上の原則であつて、此原則の實際の運用に就ては、別に自ら政治上それ〳〵の原則の成立すべき餘地があるのである。何となれば、

君主は事實上全然獨自の御判斷を以て大臣の選任交迭を專行し給はざるを常とするが故である。但だ政界異常の變ある場合には、例外として其固有の法律上の權力に基いて、全然獨立の御選任を見ることはあらう。けれども通常の場合に於ては、政治上自ら定まる所の何等かの機關に諮詢して大臣の選定に與からしむるのである。故に所謂法律上の原則なるものは、謂はゞ最終の解決方法に屬するものにして、普通の場合には、其範圍内に於て他に便宜の法則の成立することを妨げず、又寧ろ之あるを以て得策とすべきものである。他の例を以て之を譬ふるに、我國の民法に於ては、子に對する扶養の義務を盡さゞる親ある時、之を法廷に出訴して其義務を强制せしむるの權を子に認めて居る。蓋し斯くせざれば國家は第二の國民たるべき子弟の敎養を十分徹底的に行はれしめ得ざるが故に、最終の已むを得ざる解決方法として、即ち子に認むるに親を訴ふるの權を以てしたのであらう。然しながら、子として親を法廷に訴ふるは、吾々の道義心の輕々しく之を爲すを許さゞる所である。故に我々の道德的常識は、扶養の義務を怠る親に對して事實上如何なる手段を執るべきやに關しては、それ〴〵道德上の手段を暗示して居る。民法定むる所の法律上の原則は、之を最終の解決方法として、寧ろ普通に之を用ゐざるを可とするのである。之と同じく、君主自ら大臣を任免するといふが如き方法も、亦之を常用せざるを得策とするものにして、結局の任命權は常に之を君主に留保するも、事實上の選任に方りては便宜上自然に定まる所の各般の方法に任かした方がよいのである。現に我國に於ける實際上の取扱を見ても、所謂法律的原則が決して常に必ず嚴格に行はれて居るのではない。其の法律的原則に抵觸せざる範圍内に於て夙に各般の政治的原則が事實に於て立てられ來つたではないか。例へば退任首相が後任者を奏薦する例の如き、又は元老會議が推薦の議を上るの例の如き之れである。然らば更らに第三の方法として、議會が其多數黨の首領を推薦するの政治的原則も亦、之を主張するに何等の不都合を見ない

のである。憲法上大臣任免の權は君主にありといふを楯として政黨内閣主義を排斥せんとするは、恰かも民法の原則を楯として、子に迫つて直に親を出訴するの措置に出でしめ、他に自ら定る所の道徳的手段に先づ依らんとするを以て民法違反なりといふの類である。況んや君主大權の名に隱れて、大臣推薦の權を永く自家の掌中に壟斷せんとするが如きあらば、それは餘りに放恣僭越である。故に若し元老の一派が强ひて從來の立場を維持せんと欲するならば、須らく大臣選定に關する政治的原則は少數者の推薦を以て正當とするや多數者の推薦を以て正當とするやの利害得失の論斷に根據すべきである。憲法々理の議論を以て高壓的に反對說を屈し去らんとするは、理に於て全然正鵠を失し、略としては餘りに狡猾である。

予の信ずる所に依れば、大臣の選叙に關する政治的原則としては、政黨内閣主義が理論上正當であり又實際上一番よく自然の進行に順應して居ると思ふ。此事は予の從來種々の機會に屢々述べた所なるが故に玆に再び繰り返さない。只之れに對する二三の批難に對しては、此機會を利用して多少の辯明を試みるの必要を認むる。第一に政黨内閣主義は議會に於ける「多數」と云ふ形式に囚へられて居ると難ずるものがある。成る程「多數」必ずしも正義に非るは言を俟たない。然しながら今日「多數」を外にして果して正義の所在を確むる何の客觀的標準があるか。少數の意見でも正理に合するの極めて明白なる場合は、軈て多數の贊同を得べく、然らざるも夫自身一種の權威を有すべきは、吾々の日常經驗する所である。然し乍ら、何を以て正理とするやの疑ある場合に於て、常に已むなく決を「多數」に取るは社會百般の事に於て悉く皆然りである。「多數」は常に正しくはないとしても、多くの場合を平均して見れば、正義が概して常に「多數」の味方である事は、また我々の經驗の疑はざる所である。又次に政黨主義は君主の大權を拘束すると言ふ批難もある。併し議會に於ける多數黨の領袖を以て政府を組織す可しと言ふ事が君主大權の拘束なりと言はゞ、何故に元老會議の推

薦が大權の拘束とならないか。而かも議會に於ける「多數」と言ふものは、之を大觀すれば形式的に固定して居るものではない。政界の變動に伴つて屈伸自在なものである。少くとも其理想的の形に於ては、國內に於ける最も健全なる思想を反映すべきものである。若し「多數」の代表する意見が少數識者の所謂「賢明なる意見」と相反することありとせば、そは多く少數者が社會の多數者を指導するの道德的任務を怠つた時に見る所の現象である。故に若し政黨の健全なる發達に依つて次に說くが如き上下相親の社會的理想を實現する事を得るに至れば、「多數」の意見は即ち最も賢明健全なる意見にして、即ち又國家の要求とも合致す可きものである。故に政黨主義は、少くとも其理想的形體に於ては、事實上大權の拘束となる可きものではない。況んや君主が最終の場合に於ける決定權を有し給ふの義は如何なる場合に於ても紛更ある可からざるに於てをや。故に國家異常の變に處して、例へば政界紛亂して何れを以て多數とするやの明かならざるが如き場合には、暫く政黨の外に超脫して純然たる大權內閣を造るも亦妨がない。是れ大權の大權たる所以である。唯大權の大權たる所以を政治上に於て十分に之を尊重擁護せんとせば、何より先づ之が濫用を愼まねばならない。大權に藉口して政黨主義の壓抑排斥を屢々するは、寧ろ大權を群議の衝に曝らすの危險を犯す者ではあるまいか。

第三に政黨主義は多數の愚者をして重要なる國務に與らしむるものであると言ふ批難がある。此論據に立つ批難は又更に二つに分れ、一つは衆愚が實際政權運用の指導者となるから惡いと言ひ、一つは衆愚は結局少數の領袖に支配せられ、所謂多數主義と相容れざる寡頭政治の弊に陷るからいけないと批難する。然し乍ら、此兩樣の批難ある事が偶々亦政黨政治の妙用を語るものである。何故なれば政黨は少數の賢者をして多數を指導せしむるの機會を作り、更に指導せられたる多數が少數の賢者を監督しつゝ、其政治的活動を後援するの政治上極めて重要なる機關であるからである。國家の運命を創出するの精神的基礎が常に少數賢者の

活潑なる頭腦の働に因る事は、何れの時代に於ても之を疑ふの餘地がないが、然し、今日の時勢に於ては、多數者の意志を全然無視しては、如何に卓拔なる思想でも決して實際政治上に重きを爲すことは出來ぬ。何となれば多數者は今日最早已に政界に於ける有力なる要素となつて居るからである。而して多數の勢力が今日非常に重きを爲す丈け、それ丈け又彼等が少數賢者の精神的指導を受くると言ふ事は、國家の健全なる發達を見る上に於て絕對的に必要である。故に現代の政治は形式に於て必ず多數政治たるべきを要すると共に、實質に於て又必ず少數者の精神的活動が最も重きをなすところの政治でなければならない。而して多數と少數と、換言すれば下層階級と上流階級との相互的交涉を巧みに造るものは、即ち政黨である。世人多くは政黨政治の衆愚の勢力の下に動くといふ外面的形式のみを着眼して、之あるによつて少數の賢者が初めて現實に多數と接觸し、之を指導しつゝあるの內面的作用を看過するのは、甚だ其當を得ないと考へる。要するに政黨政治は、一面に於て確かに衆愚の政治である。けれども、少數の賢者が近世政治の舞臺に上つて有効に其所思を實行するの途は、また政黨政治を外にしては斷じてない。故に政黨は本當の貴族政治の理想を今日に實行せしむる唯一の近世的設備であるといつてよい。第四に政黨の現狀に不滿なるよりして、政黨政治に危惧の念を抱くものがある。然しながら、不滿足は何物にもある。政黨の現狀に滿足し難きものがあつたからとて、之が直に超然主義を是認する理由とはならない。よき超然內閣は決してあしき政黨內閣よりも大に優つて居るものでないことは尙後に述べやう。而して今日の世の中となつては、最早政黨政治家なればとて、官僚政治家に比し常に必ず數等劣つて居るとは限らなくなつた。若し實際政治の當局者として、政黨政治家の方が幾分劣つて居るやうに見えるといふならば、それは政權を掌握した經驗が短いからであらう。凡そ政黨は政權を握るの經驗を積むに從つて進步し且其面目を改むべきものなることは、諸外國の實例に徵しても明白で

ある。且つ又政黨は夫自身常に進化するものである。我等は政黨の現狀を見て之を罵倒するよりも、寧ろ其進步改善を援くることが大に國家の爲になると思ふ。世人動もすれば政黨政治の弊害を擧げて頻りに之を罵倒する。けれども他に比較上政黨政治に勝る如何なる政治主義が存するか。少數の賢者に政權を托すべしといふが如きは、其言徒らに美にして其實弊害の大なるものなること、諸外國の歷史は具さに之を經驗し拔いて居る。又少數賢者の立場から言ふても、彼等にして若し政界に活躍して大に國家の爲めに盡くさんとするの念あらば、民間の勢力に超絕して獨立に超然內閣を作らうなどゝいふ態度に出でず、須らく身を挺して進んで政黨に加入すべきである。蓋し是れ彼等が一般民衆を率ゐて最も有効に其抱負を實行し得る所以である。一體に多數の人と相諮り、之を納得せしめてから遣るといふ方法を非常に面倒がるのは、本邦政治家の常である。立憲政治といふものは、元來が廻り諄い政治である。併し大臣が議會に諮り、議員が人民に訴へて、十分熟議を凝らすといふ所に、其妙味も特徴もある。然るに一々衆愚に相談しては埒が明かぬとて少數政治を主張するのは、憲政の根本思想と相容れない。我國に於ける政黨罵倒論は、之等の政治家の短慮から來るのである。併し之と同じ缺點は實は政黨にもある。政黨の腐敗墮落も、實は多く此缺點に基因すると思ふ。何となれば、政黨者も亦一々人民の意思に訴ふるを面倒がり、反對黨との競爭などに迫られて、動もすれば買收請託等の姑息なる權道に據らんとするからである。故に予は在朝在野を問はず、我國の政治家が憲政の要は迂曲にあり、理路の徹底に倦まざるに在り、衆と諮りて納得せしめずんば已まざるに在りとの覺悟さへ極めるなら、自ら政黨政治も行はるゝに至り、又政黨其自身も發達進步するに至るだらうと思ふ。其れが爲めには、是非とも上流者の奮起を望まざるを得ない。上流者の政黨に加入して大に活動せんことを望まざるを得ないのである。

若し又彼等にして趣味境遇等の點から政黨に入るこ

とを欲せざるならば、彼等は直接に政權爭奪の渦中に投ずるを避けて、須らく批評家の地位に立ち國論指導の任に當るを以て甘んずべきである。此點について予輩は我國今日の樞密院貴族院に蟠踞する一部の貴族諸公に慊焉たるものがある。彼等は或は衆議院に對し、或は政府に對し、獨立の見解を以て國政を論評するの法律上の權能を與へられて居る。其獨立の見解を以て時として衆議院の妄を正し時として政府の曲を抑へるのは、一面に於て彼等の國家に對する公の義務である。然しながら、此法律上の權能を口實として、事毎に衆議院や政府と爭端を開いて國務の進行を阻むのは、決して國家の彼等に要求するところの最上の義務ではない。彼等は國家の爲めに止むを得ず衆議院乃至政府の非違と爭ふと言ふけれども、多くの場合に於て爭端の因は畢竟彼我意見の相違に過ぎない。而して單純なる意見の相違に止る以上、一應は十分に所思を披いて大に爭ふても、結局の場合に於ては衆議院若くは政府に讓歩するのが彼等の執つて然るべき態度であると考へる。否らずんば國政は常に澁滯するの外はない。抑も彼等は少數の階級を以てして、全國民の代表者に對抗して獨立の一勢力たるの貴い地位を與へられて居る。それ丈け彼等の地位は、少くとも道德上に於て、重大なる責任を負ふて居る。斯くの如き重大なる地位は、輕々しく之を濫用すべきものではない。故に平常の場合に於ては、常に侃々諤々の正論によつて國民と政府とを警醒しつゝも、結局の場合に於ては一歩を彼等に讓るが、得策なりと思ふ。たゞ稀に起る國家最重の大問題について異見を有する場合には、其時こそ敢然として奮起すべき時である。平素陰忍讓歩して居る彼等がたま／＼奮然として起てばこそ、國民も反省し又同情もするなれ。最近の我が貴族院や樞密院のやうに、極めて微細なる問題についてまで、衆議院と爭つたり、政府と爭ふたりするやうでは、成る程法律上よりは何等尤むべきものはないが、我々の政治的常識は、寧ろ彼等の輕擧妄動に對して轉た顰蹙せざるを得ないのである。之を要するに、我國の貴族は、其政界

に活動するに方つて、僣にその執るべき方法を謬つて居る。而して現在の政黨が十分に發達し得ざるのも、一つには貴族の態度の正當ならざる結果であると思ふ。

何れにしても――假令今日の政黨に色々の缺點があるとしても――今日爲めに超然内閣主義を是認せざる可からざる理由の存せざることだけは明白である。否却つて超然内閣主義の出現は、政黨の順當なる進歩を妨ぐる點に於て、結局國家の爲めに不幸である。なんとなれば、超然内閣主義が一時なりとも實現すれば、政界に活動すべき有爲の人物をして暫時たりとも政黨に遠ざからしめ、斯くて上流下流疏通の道は阻害せられ、上には少數政治の弊を釀し、下一般の政論をしては自ら輕佻浮薄に流れしむるからである。世人今次の政變を見て、大隈内閣よりも寺内々閣が勝るとか、寺内々閣でも善政を布かば可なりとか言ふて、深く超然内閣の出現を憂へざるは、予輩の甚だ怪訝に堪へざるところである。前内閣の失政に比較して多少政界の面目を刷新するの小益ありとするも、根本的に國運の發展を阻害するといふ見えざる大害の潜在は之を看過すべきでない。吾々は前後兩内閣の現前の比較論に惑はされて、超然内閣の、主義として絶對に排斥すべきものなることを忘れてはならない。

（四）

超然内閣が主義に於て憲政の敵なること極めて明白である。善政を布くとか布かぬとかの標準に依つて、超然内閣の辯護を試むるは、恰かも頭の曇りがとれたとか、腰の痛みが癒つたとか言ふて、阿片飲用の效能を述ぶるが如きものである。一時の效能に迷ふて自然と蒙るところの中毒の恐しさを忘れてはならない。此點に於て吾人は、日本憲政の發達上、寺内々閣の出現を非常に悲しむものである。又寺内々閣を出現せしめたる昨今の政界の形勢に對して、非常に遺憾を感ずるものである。

然しながら、又一方から考へれば、超然内閣は憲政の途上に於て時々出現するのは亦絶對に之を免るゝこ

とは出來ない。凡そ政治上の原則は、法律上の原則の如く、客觀的の形式的標準があるのではないから、例へば夫の憲法違反即ち違憲と云ふ問題は、憲法の解釋上概して極めて明白であるけれども、立憲政治の常道に悖るといふ所謂非立憲と言ふ問題に至つては、何を以て政治的原則と爲すやの主觀的判斷の差によつて、人により必ずしも一定しない。固より超然內閣を以て憲政運用上の常道にあらずとするは今日多數の認むる政治的原則なりと雖も、之に對しては仍ほ善意若くは惡意に色々異議を挾むものが少くはない。而して政治的原則の確立はもと繰返し繰返し行はるゝ所の慣行によりて自ら定まるものたるが故に、我國の如き憲政發展の未だ幼稚なる國に於ては、超然內閣の出現は、希望すべき事ではないけれども、事實上全く不可能でもない。

尤も我々歷史家の立場から觀れば、前にも述べた如く、寺內々閣の出現の如きは、政黨內閣主義が其確立を得んが爲めにする奮戰苦鬪の途上に於ての一小蹉跌に外ならざるものであつて、固より大勢の上からは深く咎ふるに足らざるものではある。けれども世間には、寺內々閣の出現に對していろ／＼積極的の意義を附せんとするものがある。中には眞面目に之等の說に動されて居る者もあるやうに見ゆるから、茲に其一二につき聊か辨駁を試みやう。

新超然內閣辯護說中一番尤もらしい說は、擧國一致內閣と云ふ事である。國家異常の變に處して擧國一致の强固なる內閣を作ると云ふ事は、今次戰亂に於ける歐羅巴諸國の流行である。予輩一己の考としては、假令交戰國の一つであるとは云へ、我國は目下擧國一致の名の下に渾體的政府を造るの必要には迫られて居ないと思ふものであるが、假りに一歩を讓りて擧國一の政府を必要とするとしても、そは必ずや各派和親妥協の基礎の上に築かれねばならぬ。されば若し寺內首相にして眞に擧國一致內閣を組織するに意ありしならば、曩に大隈侯より加藤子との聯立を勸奬せられた時、更に原、犬養の二氏をも之に誘ふべきの反對提議を侯に迫るべきであつた。然るに膠なく大隈侯の要求を拒

絶して、少くとも先づ加藤子との聯立を斥けた以上、何處に擧國一致內閣の成立を促すべき基礎があるか。寺內伯が後に夫れ〲三黨首領を歷訪して其援助を求め、後日政界紛亂の際擧國一致を破るの責任を彼等に嫁せんとするの素地を造つたのは、頗る狡猾なる手段であつて、眞に擧國一致の成立を破つたのは、豈圖らん哉寺內伯の大隈侯要求の拒絶其ものである。現寺內內閣が若し擧國一致を標榜するならば、是れ羊頭を掲げて狗肉を賣る者に外ならぬ。第二に人材內閣を標榜するものがある。政黨內閣を排斥して自ら人材內閣を標榜するのは、黨界に人材なし、國家有用の材は獨り我々のみといふに同じく、少くとも現在の顏觸では傍觀者たる吾々に寧ろ滑稽の感を抱かしむるのであるが、餘人は暫く之を措き、暫く寺內首相について之を言ふに、我々は決して寺內伯を以て政界の異才とは認めぬ。寺內伯の朝鮮に於ける施政に付ては、毀譽各種の判定あらんも、寺內伯の眞價は、殖民地政治家としてすら未知數である。況んや立憲政治家としてをや。故に伯を以て政界の偉才となし、伯によつて眞乎國民の幸福に資する政治の施行を見得べしと今日に期待するのは、少くとも早計の譏を免れない。孰れにしても今度の內閣は從前の內閣に比し多くの人材を集めたりといふのは僭越に非ずんば滑稽である。前內閣が餘りに失政をやつた御蔭で彼等は僅に國民の冷酷なる批評を免れて居るに過ぎない。第三に政界の混亂を妨ぐ爲めに寺內內閣の出現が必要であつたといふ說もある。政界混亂の場合に一種の超然內閣の出現を見る事は、西洋にも全く其例が無いではない。尋常の方法にて內閣の組織を見難い場合に、元首が其親近する者を擧げて一時經過的の政府を作り、之して暫く政務の施行に當らしむるは間々あることである。而して斯の如き混亂は、多數黨內閣が失政によつて其地位の繼續が困難となり、而かも之に代るべき新內閣の組織も亦容易に出來難いといふやうな場合に最も多く起る現象である。而して斯の如き事情は大隈內閣に一度ならず起つた。例へば彼の大浦事件の失態の如きは之である。當時の政府が如何に辨明

しても、彼の事件の如きは確かに政府の總辭職に値する問題であつた。あの場合若し大隈內閣が責を引いて辭職する者として、扨て政友會に後を引受くるの準備なしとせば、そこに一時經過的の超然內閣の成立する餘地はあつた。さればこそ官僚はあの際非常に奮起して大隈內閣の攻擊に餘力を殘さなかつたのである。然るに大隈侯は何の見る所ありてにや、斷じて官僚に引渡さゞらんとするの態度を執り、徐ろに政黨をして準備せしむる爲に、內閣の一部を改造して居据りを決行した。此居据りの魂膽が實に政黨をして他日の準備を爲さしむる爲めであつた丈け、それ丈け官僚は一刻も早く乘つ取つて政黨の基礎の固まるを妨げんとして焦つた。是れ彼等があらゆる流言を放つて大隈侯の居据りを惡樣に言ひふらした所以であらう。予はもと居据りを以て適當とは思はない。けれども元來が政界混亂して他に之を收拾する適任者なしとして擧げられた大隈侯であり、今俄かに其地位を去れば政界は再び山本內閣倒壞當時の狀態に戾るのであるでから、政界の混亂を收めるといふ點から言へば、或は居据りも亦已むを得なかつたかとも思ふ。然し何れにしても、改造後の大隈內閣は、其性質を一變し、政界の混沌たる形勢が治まり政黨の準備の出來る迄の一時經過的の性質を有する內閣と觀るべきものとなつた。然るに此改造後の內閣も亦いろ／＼失政を重ねて幾くもなくして其職に留り得ざる事になつた。大隈侯は老齡職に堪へずなどと言ふて圓滿辭職の體裁を裝ふて居るけれども、然しながら、事實外交上の失敗が遂に其職にあるを許さゞるに至つた事は疑ひなからうと思ふ。そこで官僚は再び猛然として運動を開始した。然るに大隈侯は飽く迄政黨政治主義を貫徹せんと欲したものと見えて、之に對して急遽三派合同を決行せしめて、無理押しに政黨をして大任引受けの準備に狂奔せしめた。政黨側でも亦いよ／＼決心を堅めたらしい。それ丈け官僚元老の一派も斷然最後の決心をなすの必要を見、其對戰の結果として寺內內閣が出現したのである。して見れば寺內內閣の出現は政黨撲滅の官僚派の熱望に促されて起れる

ものにして、別に此内閣が出現せずんば政界の混亂は避け難かつたと言ふ程の重大なる理由はないと信ずる。現に彼等は超然主義を標榜して政黨内閣を排斥しながら、他方に於ては密かに手を延ばして政黨の操縦を策し、之との提携を計つて居るといふではないか。故に我々歴史家の立場から觀れば、寺内内閣の出現は、當然出づべくして出でたものではなくして、政權に渇する一部の官僚が、元老の擁護と、誤つたる固陋の憲法論とに援けられて、大勢に逆行して出現したものに外ならぬと見るのである。元來予は此内閣に多くを期待しない。遠からず馬脚を露はして一敗地に塗るゝだらうと想像するが、然らざるも、大勢に順應せざるの點よりして、到底永續すべき性質のものでないことは疑を容れない。其時はまた政界再び大混亂となることだらう。又しても大勢逆行の解決を執らんとせん乎、其時こそは憲政擁護などゝいふ不祥なる運動も起るかも知れない。庶莫之を達觀すれば大勢は既に決して居る。予は世上同感の識者に向つて、切に此一時の變態に惑ふて我憲政發展の大勢を誤解せざらん事を希望する。又政黨界の諸君子に向つては、近き將來に於て必ず來るべき光明ある前途を豫想して一時の變に失望落膽する所なく、大に自重し堅實に準備する所あらん事を希望する。一時の名利に焦つて兜を敵門に投ずるは、啻に我國憲政の進歩を害するものたるのみならず、政黨其物の爲めにも決して賢明なる方法ではない。更に予輩は一般世人に向つて、擧國一致人材網羅等の美名に眩惑して國運を少數者の手に委する事なく、常に政黨に對して正しき理解と深き同情とを傾けられん事を希望する。（十月二十二日）

太平洋及び東亞大陸にも膨脹の翼を張りつゝある 米國の研究

▽米國の富力

男爵　澁澤榮一

「中央公論」の如き有力なる雜誌が、今日卒先して亞米利加の研究を發表されるのは、洵に時宜に適した結構な企で、私も深く其主旨を多とする。御承知の通り米國と我國との關係は、政治上に於ても極めて長く且つ深いものがあると同時に、貿易上に於ても亦大切なる顧客として充分に研究に値する。嘉永六年コンマンドル、ペルリが初めて浦賀に軍艦を率ゐて來てから六十四年、安政五年の條約締結から五十九年になつて居る。尤も是より先き旣に英吉利又は露西亞なども人を派し船を出して通商を求めて來たが、米國の如く深切に誘導して吳れたものはない。安政の條約は時の總領事で後に公使になつたタウンセント・ハリスと云ふ人が之を取扱つたものであるが、眞に日本の爲めを思ふた扱ひ方であつた。私は無論其當時の事は知らず、其後の事と雖も政治に關與しない身であるから、細かしい事は分らないが、當時親しく外交の衝に當つた人などに聞いても、ハリスの締結した條約は正しいものであつたと云ふて居る。

爾來今日に至るまで米國は政治上の先輩として、我國に對して誘導的に好意を示して吳れた許りでなく、貿易の上から云つても我國の物產は多く米國に輸出されるのである。而して此大顧客たる米國の現狀は、更に際限のない富を作りつゝある。元來廣大な土地である上に天惠が豐かであつて、農產、牧畜は申すまでもなく鐵、銅、石油、石炭に至るまで皆豐饒で年々巨大の產額を示してゐる。加之國民は極めて學問を重んじ、それを能く實際に一致させ、而して勇決事に當る氣象に富んで居る。然も一昨年以來大に其富力を增大すべき機運に逢着したのである。即ち歐洲戰爭の勃發で、軍需品又は各種の農產工業品を盛んに交戰國に供給して莫大の利益を得てゐるのである。旣に農工業の豐富なる上に、それ等を發展すべき資本と學問の力が充分なのであるから鬼に金棒で、多々益々辨用に應じて行けるのである。今や米國は殆んど際限のない進歩を見るやうに思はれる。

以上は極く概括的の觀察であるが、元來米國は國民の氣風が無邪氣で快活で、至つて交際ひ好いが、唯或點は甚だ無遠慮で、他人の思ひ遣りが少い。直情徑行にして他人に對して一向用捨をしないから、東洋風から考へると謙讓が足りないやうに思はれる所もある。然し實に活潑で光風霽

月の心境を持ち、貧富に拘はらず多く物質文明を謳歌してゐるが、同時に又正義を愛し人道を重んずる事に熱心である。然し國民全體が同一氣風であるとは言へぬ。例へば東部の古くから開けた土地と、西部の新に開拓された地方とは文野の度の異なる處があつて、正義人道に對する觀念も亦一樣とは云はれない。土地が廣くして新らしい世界だけに他國から移住する者が非常に多い。而して其移住した者は米國に入つては米國化するが、全然各國民が固有の國民性を失つて了ふのは容易の事でないと見へて、皆一分の本色を何處かに存して、何かの際には發現する。

我國がコンモンドル・ペルリの渡來によつて國交を結んでから、明治三十五六年頃即ち日露戰爭以前までは、米國の日本に對する交情は恰も先輩の後進に接待するやうな關係で、彼我の友誼は至つて濃かであつた所が日露戰爭の結果、日本が各國の間に畏敬せらるゝやうになつてから米國中或る地方の人々は日本に對して恐怖の心を起しそれが嵩じて漸次嫉惡の念と變つて來た。折から日露戰爭の結果ポルツモースの條約が日本人民中に滿足と思惟し得なかつた事などが益々兩國の交情を妨げるやうな傾向となりて、爾來太平洋沿岸に益々不穩當なる議論が生じた。明治四十年頃には例のカリフオルニアの學童問題を初めとして、職業問題土地問題などが續出し、最近歐洲に戰亂の起つた結果、米國が其富を蓄積すると同時に、是迄は比較的軍備に緩漫なるに引替へて俄に盛大なる軍備擴張の觀念を强めて、海軍に手を着け初めると、之を機會として日本を嫌ふ米國の人の間にも、我國民の間にも種々なる謬傳が流布されて、中には日米必戰論といふやうなる聞も忌はしい妄言も生ずるに至つた。想ふに是等は多く彼我の事情に明かならぬ人の謬見に過ぎないが、中には私利を圖る目的で恁かる煽動的の經營を爲すものもある。何れにしても兩國の親交を害する點に於ては實に憂慮すべき事である。眞に國を愛し國を憂ふる有識の者は素より恁かる不道理なる妄言に動かされはしまいと思ふが、特に我國に於ては政治家も學者も實業家も心を一にして米國が我國に對して懷く處の誤謬を解くやうに努力すると同時に、米國に移住してゐる同胞も其實行を誤つて米國民の嫌惡を受けぬやうにしたいと思ふのである。斯く云ふ私抔も米國の人に逢ふと談必ず此點に及び眞相に立入つて論議を盡さぬ事はないのである。而して私の接觸する方面の人々は皆異口同音に現今の日米間の親交を妨げるやうな說は、事情を知らざる者の臆論か若しくは爲にする處ありて故意に發する捏造說であると斷言してゐる。蓋し眞に愛國憂世の人士ならば、心から然う云ふ感じを懷いて居るのは當然の事と私は確信する。

亞米利加現在の富力發展の眞相をお訊ねなされたのに對して、談の日米兩國の關係に及んだのは、或は橫道に逸れた感はあるかも知れないが、然し一國の富は唯其國の產業の發達とか、財政が豐富だとか云ふやうな經濟上のみに止まらず、廣く國際事情も加味されねばならないから、私の以上の說も決して無用の意見であるまいと思ふ。

▽米國の政黨と輿論

マスター・オブ・アーツ 島谷亮輔

憲法の運用と政黨

今日の米國の政黨は一個の法律上の制度である。憲法の運用に缺ぐべからざる機關である。然し合衆國の憲法を調べて見ても政黨なる文字は記載して無い。實際憲法の制定者は政黨なるものを豫期しなかつたのみならず、政黨の發達を氣遣した傾がある。然るに米國の政黨は憲法制定後輿論が批准を可とするものと否とするものとに別れた爲めに發生し來つたのである。即ち米國の政黨は憲法と共に起原を有してゐる。日本の政黨は憲法の制定以前に基礎が出來上り、爾後幾度の變遷を經て今日に至つてゐるが、憲法の制定者は出來る丈け此發達を抑制する意志を以て條文を編纂した。幾して永世不磨の寶典と稱せられてゐる帝國憲法の存在する間は日本の政黨は先づ十分なる發達を庶幾することは不可能であると思はれる。然るに米國に於て何故今日の如く政黨が旺盛を極め得るに至つたであらうか。

第十八世紀の政治思想は云ふまでも無くロック、モンテスキュー心酔であつた。當時は總ての人間は平等に造られてあるとか、人類は生命、自由及び幸福を追求する權利ありとか、支配する權利は被治者の同意より出でたるものであるから、ある政府が人民の生命、自由幸福の追求を保障し能はざるに至つた時は、人民はこれを改革廢止するの權利があるものと信じられてゐた時代で有つて、政府の權限を出來る丈け制限して人民に害惡を爲し得ぬやうにする爲めには三權分立の必要があると說かれてゐた。米國の憲法は此政治學說を基礎として編制されたもので、立法部行政部司法部の權限は各獨立して互に相侵犯するを許さぬことになつてゐる。それであるからどんな專制的な大統領が出て來ても憲法を破壞せぬ以上は過度な暴慢は爲し得ない譯である。米國は是れまでワシントンは別としてジヤクソン、テーラー、ハリソン、グラント等の軍人を推立して大統領としたが未だ一回も憲政擁護運動の必要に會しなかつたのは其用心深い憲法制定の精神の御蔭である。

所が實際に三權分立などゝ云ふことが政治の運用上行はれやう筈が無いのである。ロック等の說は誤謬で有つたとは後世の學者は氣がついたが、米國の憲法は其誤謬の上に築き上げられてゐるのである。從て若し立法部は東せんと云ひ、行政部は西せんと云ひ、司法部は南すべしと云ひ、三部の意志を異にする場合が發生せぬとも限らない。單に條文を解釋すれば斯の如きことも起り得るのである。而して若しかゝる場合が起つたならば米國の政治行政は實行不可能となつて國內は無秩序の狀態となるべき危險に臨む筈である。

然るに實際政治の運用は比較的圓滑に行くのは何故であるか。それは政黨なるものが存在してゐるからである。一個の政黨が勢力を獲得する場合には行政部の長官たる大統領も其黨派から選出され、上下兩院も其

黨派によりて多數を制せられ、又多くの場合に於て司法部も其黨派の政見に接近するやうになつて來る。先づ司法部は別として置いて立法部と行政部とは同一政黨の勢力の下に置かれるから、其要素たる各政治家の政見は比較的同型のものである。憲法上の解釋に於ても、時事問題に對する意見に於ても大同小異であるのを原則とする。而して此政黨の指導者たり spokesman たるものは大統領であるから大統領たるものが其黨派の意味を斟酌して發表した教書(ウイルソンの時になつてからは多く自身で國會に臨み朗讀演說を試みるから教書を呈出する場合は少くなつた)は其黨の意志と認めらるゝ譯である。

以上はウイルソンが憲法學者として米國の政黨の地位を說明したものであるが、政治界の現狀は能く之れが例證を爲し得るのであるから深く論ずる必要は無いかも知れぬ。即ち民主黨は大統領ウイルソンをリーダーとして上院に於ては目下十六名の多數を有し、下院に於ても約三十餘名の多數を有してゐる。憲法學者としてのウイルソンが多年の理想と抱負を實行し民主黨を統率して行く所は實に見上げたもので同じく憲法學者たる前大統領タフトの稱讃を惜まぬ所であつた。

所が事實に於ては理想通りに行かぬ場合が起つて來る。タフトの時代の如きはそれで、其後半期に於ては下院は民主黨の爲めに多數を制せられ、タフトの治世は散々の失敗を招くこととなつた。

政黨の領袖

前述の如くウイルソンが其黨員を制馭してゐて行政部の政策に一致せしめ行く手腕は見上げたものが有るが、然し彼と雖も黨員に盲從を強ゆる事は絕對的に不可能である。日本の政黨では大會の決議に對しては黨員に向つて絕對の服從を要求し、之れに違反したものに對しては除名の罰則を適用する等頗る専斷的であるが、米國ではかゝる事は行はれない。勿論コーカスなるものが有る。上下兩院內の政黨は秘密會である所の院內議員會によりて黨員たる議員を束縛し得る事になつてゐるが、此コーカスの決議は日本のやうに手輕に無造作に行はれるものでない。黨員は自由に其意志を發表し得るのみで無く決議に對し時に除外例を要求し得るのである。米國の政黨が日本の如く中央集權的むしろ專制的で無い例證としては實際總裁とか云ふやうな形式的なものすら無い事を以て知り得る。

何故に然るかと云へばやはり憲法上より來るので有つて聯邦と各州と權力に制限のある如く中央の政黨と地方の政黨との間には自ら權力の制限があるからである。即ち各州から選出された上院、若くは下院議員の地位は各州內の地盤の上に据ゑられてゐて、其地位は中央に於ける政黨の幹部の態度によつて動搖するものでは無いからである。即ち議員たるものは其選擧區の信用を有してる間は幹部の意志によつて妄りに動さるゝものでは無い。下院議員は其年限が僅かに二年であるのと政界の經驗は淺いから比較的幹部に服するが、上院議員となれば其地位は多年の奮鬪で築き上げられたもので有つて一州に於ける首領である。又大統領の後補者たる輿望を有する人であるから容易に其獨立の地位を他をして使

かしむることを欲しない。大統領が斯る議員を操縦するのは容易で無いが是れを味方にせんとする場合には多く交換問題を持ち出すの外はない。即ち大統領の官吏任命權を利用して、其有力議員の推薦したものを定吏とするに盡力する如き其一例である。上院議員は總て政界の苦勞人であるが、其中には有力な所謂「ボス」と稱せらるゝものが有る。現在で此のボスと云はれてゐるのは先づペンシルヴエニア州のボア・ペンローズ(共和黨)である。共和黨の全盛時代には上院議員でボスを兼ねたものが多かつた。紐育州のコンクリング、プラット、前記ペンシルヴエニア州のクエー、オハイオのマーク・ヘンナの如きは顯著なものであつた。ローゼヴエルトの壯年時代には此プラットに頤使されたもので、彼を副大統領に强制的に命令したのはプラットで有つた。是等のものは何れも實力大統領を凌ぐ有様で、米國の政治は二三の有力な上院議員と有力な下院議員(例へば鐵帝(ツァー)リードと呼ばれた議長のトーマス・ビ・リードの如き叔父(アンクル)さんジョーと呼ばれた前議長のジョセフ・キヤノンの如き)とによりて左右せられ、是等の徒が實業家と結托して私腹を肥してゐたと云はれた時代の有つた。米國では別に總務委員とか總理とか云ふ一種の官職は政黨内には無いが普通 Inner circle だとか云はれる幹部たる實力を握るものは上下兩院内の有力な委員會例へば歲出、歲入、又は外交だとか陸軍海軍だとか云ふやうな委任會の會長たるものである。此内で歲入委員會(ウエースエンドミーンス)會長は下院の院内總理となる譯だ。

選擧政治とボス

米國の政黨で最大のボスは前記の上院議員であるが、それ以外のボスに至つては無數ある。其地位は多く日本流に云へば各政黨支部の部長であつて地方政黨の實權を握つてゐる。例へば現今タマニー・ホールのボスたるチャールス・エフ・マーフイーは一カウンチイー(郡)たる紐育(マンハタン島)の民主黨支部の部長に過ぎない。マーフイーと比肩するに足るボスはインデイアナ州のスリヴアンであるが、此男も民主黨である。其他の中ボス、小ボスに至つては至る處に跋扈し、夏の蠅と同樣容易に驅除されない。

米國にボス有るは普通選擧の結果である。日本では選擧權を擴張しさへすれば善良なる代議士が選出さるゝものと早合點してゐるものがゐるが、米國の實際は之れを反證するものである。米國は普通選擧の國である。此事に就いては別に說明を要するが、兎に角選擧の國に有つては巧みに多數の投票を集め得るものに政權は來るのである。此ボスは此點に於て拔群の技倆を發揮してゐる(ボスの掌握してる支部の組織を machine 又は Organization と云つて軍隊的に活動してゐる)元來一般民衆は政治を顧みる餘裕がない。むしろ冷淡で有り且つ理解力に缺乏してゐる。政治が良からうが惡からうが、自己の懷工合に直接に響いて來ぬ限りは決して傾聽するもので無い。衣食の足りて餘裕のある人間で初めて政治趣味を味ひ得る。然し投票の點になつては無學無產者の一票は有識者の一票に勝ち、百萬弗の企業家も其日暮しの勞働者も其能力に於て變る所は無いから、前者を味方とするものは政權を得ることとなるのである。

ボスは常に此二票の方を得むと心懸けてゐるのである。無學者の對手となり貧民の中にあつて、是等の徒と交り、其心服を得るをば普通の人間の爲し得る所で無い。ボスは進んで之れをやるのである。政治道樂はボスの生命で、一年三百六十五日孜々として此投票を蒐集することを苦心してゐる。

政治家は演壇に立つて其思想を吐露し之れによつて國民を鼓舞し指導せんとするを以て職務と心得てゐるが、ボスにはそんな藝は出來ない。ボスの仕事は極めて地味である。彼は思想を有しない。然し乍ら直ちに利害によりて他と離るべからざる關係を結ぶのである。玆に有權者が病氣に罹つて醫藥になやんでゐるとする。之れに向つて滔々衛生の重んずべきことを説くものは彼の政治家であるが、直ちに走つて自ら看護し、醫者をすゝめ病院に入れる面倒を見てやるものはボスである。政治家とボスとの職分には自らこんな相違がある。それであるからボスの手元には必ず算盤に入れて差問の無い丈けの投票數が握られてゐる。其地盤は堅い。是れと同時に其地盤には制限が有つて、利害關係の無い範圍には及ばない。

斯く如く病人の世話から職業の周旋まで引き受けるボスの仕事は容易でない。政治家には斯る面倒な事は出來ない。

然し乍らボスは常に政界を禍してゐる。彼等が孜々として集めた投票によつて何をするかと云へば、其目的は公共の財源を私するにある。玆に州で經營する運河の請負工事が有るとする。ボスは之れを配下の請負人に請負はし種々の方法によつて出來る丈け多額の經費を分捕り、其利益を辨服し配下のものにも分配する。其他是れに類似の事は極めて多い。日本の如き國のあつては此種の事業から絞り得る利益は高の知れたものである。米國の如き富んだ國では其額は極めて多くなる。

それから政黨なるものの本來の性質は營利事業で無いから、寄附金に依らなければ維持が出來ぬのは明らかである。米國の如き大仕掛の選擧運動の行はれる國では選擧費は驚くべき巨額に達する。其費用は實業家から絞り上げるか、請負事業で誤間かすより外は無い。そこで其實權の下にある州若くは市をして無用の事業を起さしめ租税を高め若くは公債を募集し遂に州政市政を攪亂し去るを常とする。紐育州廳やペンシルヴェニア州廳の工事の如き、イリー運河工事の如きは最近の適例であるが是迄此ボスで最も顯はれたのはウイリアム・ツイードである。

新聞紙とボス退治

彼はタマニー・ホールの首領で紐育の市政の實權を握り、州政にも其手を擴げてゐた。大統領の候補を選定したり、知事を任命する實力を操つてゐた。其籠絡手段が妙で有つた爲めに初めは誰も氣に付かなかつたが僅かに二年半の間に紐育市の負債が七千萬弗増加したのには誰も驚かされた。所謂ツイード・リングと稱するものは後になつて摘發されたが、此ツイードと云ふ男は紐育生れて消防夫から立身し、紐育の東區（イーストサイド）の貧民を懷柔し、廣く同類を集め後に市の機關即ち市長も會計役も檢事の裁判官も悉く同黨を選出せしめ、新聞紙を買收し、輿論をあざむき盛んに

横暴を極めた。丁度此時代はグラント將軍が大統領であつて、米國の政治思想はどん底に墮落した時で有つた。

然し二年半餘の短日月間に市の負債が理由無く七千萬弗增加したのに對して疑問が起らずにはやまなかつた。市政の腐敗に對して第一に攻擊の矢を放ち市民の覺醒を促したのは紐育タイムス紙であつた。同紙の主筆は英國人で有つたが、犀利なる筆鋒で堂々たる論陣を張つて連日タマニー・ホールを攻擊した。而して實例を擧げて其批政を攻擊した。例へば新築した許りの地方裁判所の修繕費と稱して三百五十萬弗を支出せしめ、内部の裝飾費として七百萬弗を支出せしめ、一會社インガゾールのみに五百六十萬弗を拂つた如き是れで有つた。是れ丈の費用を投ずれば裁判所は六七個も出來上つた。一脚の椅子の價額は五六百弗で有つたと云ふことで有つた。ツイードの醜類は之れに對する策としてわざと輿論を瞞着する爲めに市の財政調查委員會を選んで之れに調查せしめ其公明天地に恥づる所なき體を裝ふた。實際ツイードは市民殊に貧民側には常に孤兒を憐み病者を慰はり寄附金をなし懷柔してゐたから同情こそ得たれ反感を抱かれるやうな事は無かつた。從て市民はやゝ安心して又もや冷淡となりかけたので有る。『タイムス』以外にツイード等の醜行に着目し初めたのは週刊新聞ハーパース週報で有つた。是れは有名な諷刺畫家トーマス・ネーストが筆陣を張つて側面攻擊を始めた。ツイードは其諷刺畫を見る毎に貧民は新聞紙を讀み得ないから恐るゝに足らぬが此畫だけは彼等が了解し得るから困ると云つて歎息したと傳へらるゝ。一方タイムス新聞は手をかへ品をかへて攻擊したが其反響は極めて微々たるもので有つた。調查會が市の財政に不都合無しと斷言した時には流石の主筆も失望落膽して社長に向ひ己はペンを投じて英國に歸ると云ひ出したが、社長は漸くなだめて思ひ止まらしめた。

彼等の努力は如何に大なりと雖も證跡を得ることが出來なかつた。從て彼等の呼號如何に大なりと雖も畢竟空砲たるの觀が有つた。然るに忍耐は彼等に味方した。醜類もあまりに世間が煩さくなつたので何人かを犧牲として此難關を切拔ける策を必要とした。其犧牲になつたのがコンリーと云ふ會計役である。然しコンリーは聞かなかつた。聞かない許りで無く裏切者となつて市の會計帳簿を携へてタイムス社に飛び込んで來た。主筆と社長は雀躍して喜び且つ泣いた。一年餘の勞力と耐忍とは酬ひられたのであつた。

的確なる證據を握つた市民は勃然として起たざるを得なかつた。七百人委任會と稱せらるゝ有志者の團體は起つて新選擧に於て醜類を驅逐し後之れを捕縛し獄に投じた。(警察權は市長が持つてゐるから新選擧までは手の下しやうがなかつた)ツイードは獄中に死んだ。醜類が私腹を肥した高は七千萬弗であつたと傳へられる。(J.F. Rhodes' The History of the United States 第六卷及び G. Myers' The History of Tammany Hall殊に前者中に詳細な記事がある。)

米國政界の進步

ツイード以後にツイードは無い。彼は空前のボスで有つた。然し爾後に

至つて紐育の市政は屢々民主黨のボスに支配された。ケリーの如き、クローカーの如きは夫れである。而して少なからぬ醜聞を流した。紐育市が傳來的に民主黨であるは周知の事實であるが、敵手たる共和黨も地方的には民主黨と結托して其殘羹を啜るに甘んじてゐた。こうなると二大政黨の對立も何も有つたもので無い。今日でも地方政黨の間には共同して公益を害してゐるものが無いでも無い。何故然るかと云ふと地方政治殊に市政の如きは政見の相違が有り得べきでなく、其問題は主として行政上に限られてゐるからである。最近に至つて市政を政黨以外に立たしめんとする一般的傾向を生じ來つた。紐育市に於てもタマニー・ホールの首領マーフイーと民主黨の立てた紐育州知事ソルツアーとの權力爭ひよりボス排斥の聲が盛んに起つて、政黨より獨立した聯合委員會の擁立した青年市長ジヨン・ミツチエルを選出した。

輿論の冷淡なるが爲めに政黨の横暴を來す弊害は前述の如き有樣であるが、米國の輿論は最近十餘年間に顯著なる發達を來した。有名なゼームス・ブライスがAmerican commonwealth を著して輿論を論じた當時と今日とは全然面目を新たにしてゐる。其理由は第一に教育の發達普及したことゝ第二には餘裕のある階級が増加した事である。第十九世紀の終頃までは米國は富源開發の時代で普通の人間であれば一生涯に百萬弗や二百萬弗の身代を作るのは別に困難では無かつた。むしろ當り前であつた。從て國民の心理は此方に集中され吾も〳〵と資金の獲得に熱中した。移民の倅からカーネギー、ロツクフエラーを出したのは誰も知つてゐるが、今日米國の各州で三千萬弗五千萬弗の金滿家は掃で捨る程居る。況んや五百萬弗や百萬弗の身代をやである。是等の財産家は今尚自分で作り上げたものもあるが中には親讓りのものもある。所が親父は無學で一生世間に恥を曝したから、せめて倅には教育させようと云ふのが人情であるので、今日の青年は多く大學教育を受けさしてある。是等の青年の理想には嘗て福澤先生の洋行された當時のやうな拜金宗は見出し得られない。彼等は最早 all mighty の權威を認めてゐない。彼等は金以外のものを欲し初めた。政界は少くとも彼等の要求を滿たし得べき一方面となつた。最近の進歩運動の勃興の一面には此學問の普及と至大の關係がある。ウイスコンシン州の選出元老院議員たるロバート・ラ・フオレツトが同州のボスを驅逐して進歩主義の旗幟を米國の政界に最先に舉げて玆にウイスコンシンの思想（アイデイア）なるものを天下に布くに至つた立志傳は青年政治家の一顧すべき所であるが其方法は彼が同州の大學と提携して其知識をかりた點にあつた。大學それ自身が同州の進歩思想の泉となつて全州を潤ほした結果は州民の政治思想を革新してボスの如き醜類をして漸次に繁殖するに所なからしめたのである。是れは獨り同州に限らない。各州が大學教育を盛んにし資金を投じ、遠く歐洲より一流の學者を聘するに怠らざると同時に、學生に對しあらゆる勉學の機會を與へてゐる點は驚くべきものがある。而して各州自身が絶えず輿論を教育するに努力してゐる。何國でも議員中には無學者が多くて困るのだが、米國では此議員と教育する方法とし州廳所在地の圖書館に特別の學者を置いて各問題を研究せ

しめ置き、代議士が或る問題につき調査したいと云ふと直ちに之れに要するあらゆる材料參考書參考法令同法令の比較研究が一目の下に明瞭になるやうにした圖表等を提出し、議員をして面倒なく問題の要點を捕へしめ、尙不明の時は學者自らをして說明の勞を執らしむるやうにしてある。例へば選擧法を調査せんとすれば歐州列國並びに米國各州の法規參考書類が直ちに其机上に運ばれ、且つ要所〳〵は完全なる索引がつけてあるから、短時間に容易に要領を得能ふ如き是れである。日米文化の差は斯の如き點に於ても發見せらるゝ譯だ。此制度は我國の議員を教育する爲めに是非欲しいものである。無學な代議士で立派な憲法政治を行はんとしても無理な注文である。

輿論の製造と教壇

斯くの如く輿論を作る教育の力は恐るべきものであつて、最近の進步的法制の多くは此教育の生んだ所であると云ひ得る。米國で大學總長及び教授の意見が社會的に重きを爲すことは羨望すべきである。此國では新聞紙と大學とが輿論の製造所であると云へるが、然し宗教の力を無視してはならぬ。日曜の說教は有力なる輿論の製造の役に立つ。日本の僧侶や說教者は政治を談ずることを禁止されてゐるが、米國にあつては何等の束縛はない。政治を改善することは市民としての義務であるから、米國の說教者は盛んに政治を論じ、進步を說く。又第一流の說教者の說は眞に耳を傾けしむるに足るのである。政治に冷淡なものでも教壇(パルピット)の上から人生の向上としての進步思想の養成を說かれるのであるから米國の政界の進步を促がすことは非常のものであると思ふ。

▽何事にも「新」と「大」の米國

若月紫蘭

一

△北米合衆國——東西二千五百哩、南北の平均千三百哩を有し、面積大凡三百萬方哩に及べる米國を思ふ時に、私は何時も其自然の如何にも雄大なるを驚かずにはゐられない。東部に於けるアレガニイ其他の諸山脈は海峽二千三十八米突より千百五十八米突に及び、西部連山ロツキイ、シエラ・ネバダ、カスケード等の諸山脈は皆多く、四千四百米突の上に出て、從つて河流の多くもリオ、グランデ、デル、ノールテ河や、コロラドやコロンビアの如く、流程千四百哩の上に出でたるもの多く、湖水も亦二萬三千方哩の面積を有するミシガンや大鹽湖の如きあり、雄大の一語は以て米國の自然を概括し盡したるの觀がある。

△斯の如き雄大なる自然と廣大なる面積を有する米國に於ては、其氣候遂に一様なる能はざるは自然の勢なれども、大體からいへば日本と同じやうに米國は溫帶に位してゐる。其處に種々の天產物殊に鐵、石炭、石油、鉛、亞鉛、水銀、アルミニウムの如き有用たる鑛物が、汲めども掘れども盡くる所なくして、其產出高は世界の首位に在る。米國の工業が

近年驚くべく勃興して、年々の產額四五百億圓を算するに至つたのは蓋し當然でなければならぬ。

△けれども米國人は所謂逐はれたる烏合の民である、逃れたる寄り集りの民である。英國人は勿論獨佛露伊墺有ゆる國民と有ゆる人種との混合である。彼等の多くは食へなくなつて本國を逃亡するか、然らずんば滿々たる冒險心に驅られ野心に煽てられて、遠く海を渡つて新なる自由の天地を求めた人々である。そして其處に新なる故鄉を求め新なる生活を始めた、云はゞ再生の人である復活の民である。彼等が新なるものに向つて趣味を求め、常に先進國たる祖先の國に對して戰を挑み、絕えず其祖先の國に勝ち祖先の國に優らんことを理想としたのは蓋し怪むに足らぬことであらう。

△斯の如くして英人一般の趣味が依然として古典的なるに反して、米人一般の趣味は新と大との二つに向つて進んだ。富と努力、此二つが即ち彼等の新しき生活の根源であり努力であつたからである。ワシントンを生み、リンカーンを生んだ國は、斯の如くしてカーネギイを生み、エヂソンを生んだ。其前半生の經歷や性行に對する世評は兎に角に、晚年に於けるカーネギイの米國文化に於ける功獻は實に驚くに絕えたものにして、電氣發明界に於ける不滅なるエヂソンの世界的努力と共に米國の花であり光でなければならない。

二

△米人の國民的趣味と理想とも見るべき新と大との二つに於て現はれたる實例は之を最近に求めても擧ぐるに暇がない程である。例へばカアネギイ理學研究所はウイルソン山上に直徑八呎四吋即ち正に百吋といふ世界一の大望遠鏡を据附けて、太陽の觀測を行ふと同時に、出來得べくんば、火星に於て果して人類の棲息するや否やを發見せんとし、或は米領アラスカの北方百哩のホオプ山に於ては、一時間二十哩以上の速力を以て此邊一帶に絕えず吹きつゝある風を利用して、大規模の風車を設け之によりて電氣を起し、一大電燈會社を設けて、燈料の高價なる此地方に光熱兩用の目的を達せんことが計畫せられ、或は飛行船の如き車體をケーブルカー式に仕掛け、空氣プロペラアを使つて一時間百哩の速力を得んとして熱心に實驗するものあり、或は大反射鏡を使用して其焦點に太陽熱を吸集し、水を沸騰させて、水蒸氣の力を他の機關に集めんことを計れるフランク・シウマンあり、或は更に本國を離れて亞弗利加に渡り、サハラの沙漠に一種の藥品を散らして日光に曝露し、之によりて得たる動力を蓄積して他の工業地に送らんことを計畫してゐる米國人もある。と傳へられてゐる。

△而も此等の計畫や企圖の中には、今日の處では猶ほ未だ頗る漠然として、雲を攫む以上のものなきに非れども、既に其設備の着々として進捗し、若しくは驚くべき大工事の立派に完成したものも甚だ少くはない。新メキシコに於けるシエーラ大貯水池の一たるエレフアント・バット堤防は即ち米國に於て人工化されたる自然の一例にして、堤防の長さは四十五哩に及び、幅は平均一哩四分の三を有し、最も深き所は約九十三呎

平均六十三呎にして、全水面積は四萬八千エーカー及び、水量は八千六百二十六億ガロンにして、附近二十萬エーカーの地に對し、優に二年間を給水するに足るといふに至つては、如何に其莫大なる工事たるかを知るに足るべく、一九一〇年の起工にして本年五月を以て完成し、築造の方式は最新グラウイツチ型にして、石材六十萬八千方呎を用ひた點丈けでも、世界に於ける近代の諸工事中第一に押すべきものといはれてゐる。堤防は三百六呎の高を有し、基礎に於て二百十五呎、頂上に於て十八呎の道路をなしてゐる。

三

△ナイヤガラの瀑布は米國に於ける自然の最大偉觀中の一たるのみならず、又世界に於ける奇觀の一に加ふべきものである。ホースシウ瀧により分たれた加奈陀瀧と米國瀧を合して、百六十二呎の高より落つる幅二千六百呎の一秒間の水量五十萬噸、水勢實に七百萬馬力にして、石炭を用ひて此勢力を作らんとするには實に全世界一日の石炭の産額たる二萬噸を要する。カナダ政府及米國政府は以前風致を害することを慮つて、協議の上此水力を利用することを禁止し、ついで米國政府は動力利用及風景保護の名の上に瀑布附近を陸軍省の所轄としたが、工業の進歩は遂に此水力を利用して今では五十八萬馬力の電力裝置を完成し、一年五十圓、一時間に積ると殆んど一馬力一錢にも足らぬ低價を以て、二百五十哩を隔てたシラキウス市電車や、百五十哩のイリノイス鐵道に對して電力を供給し、更に三百哩の遠くに供給せん計畫が熟しつゝあるといふに至つては、此自然の利用が米國の發達に如何ばかり莫大なる力たるかを知るに足るであらう。ナイヤガラ瀑布が實用的方面に於て斯くの如き大なる發展を遂げつゝある一方に於て、此年々瀑布觀賞の爲に集るものゝ數實に七十萬人を算するに至つて、ナイヤガラ市は遂に此瀑布に對して夜の美觀を加へんことを計畫し、本年の夏に至つて、瀑の附近に大アーク燈二十五個を點火し、驚くべき美觀を加へ得たといふが、此等は矢張米國人でなければ出來ない藝であると思ふ。

△漸く完成に近いたといふ紐育の水道工事や、三千萬圓を投じて着手されたといふロスアンゼルス市の水道工事は、世界最大の工事中に數ふべきものであるが、ミスシツピー河をキオククに堰きとめてセントルイ市に送る十一萬ヴオルトの電力を起す三十萬馬力の水力發電裝置も亦決して小さいものといふことは出來ないであらう。

△斯の如くして莫大なる富の力を以て自然を利用し自然を征服することに着々として其歩を進めつゝある米國が如何なる方面に於ても其新と大とに於て世界の先進諸國を凌駕せんとした一例は、之を昨年の巴奈馬博覽會の所謂寶玉塔にも求めることが出來る。其數十二萬五千に及ぶ寶玉を吊つて、晝夜の差別なく五彩燦然たる光輝を發せしめた趣は何でもないが、彼は此塔の高さを四百三十五呎となし、嘗て巴里博覽會に於ける有名なるトロカデル塔の高さ二百三十呎を凌駕すること殆んど其二倍に及んだ。米國は此によつても世界人殊に歐洲人の肝玉をつぶす積りであつたらうが、惜し哉歐洲大戰の勃發は、折角の米國の計畫をば物の見事

に蹉躓してしまつた。それでも當り前に會期を終つて、愚痴一つこぼさなかつたといふのは、米國が、戰爭繼續のお蔭を蒙つて、全世界貿易の利益を殆んど一年に壟斷したが如き地位に立つに至つたが爲である。

四

△かうして米國の富は戰爭のお蔭でいやが上にも增加し、工業の發展實に眼覺しいものがあるといふが、必ずしも戰爭がなくとも、近年に於ける米國の工業が如何ばかり盛な勢で發達しつゝあるかは、戰爭前に於ける米國の自動車製造業のみに見ても其大勢を察することが出來よう。まだ戰爭の始まらない、一昨年の六月迄の統計を見ても、米國に於ける自動車の數は既に二百萬に達し、其一臺に毎日乘る人間の數を試に四人としたところで、米國に於て自動車は乘る一日の總人員は八百萬人であるから、之を日本の人口に比すると一寸その十分の一で、謂ば日本人の十人に一人は毎日一回宛自動車に乘る割合である。さて此二百萬臺の自動車に消費さるゝガソリン一年の總額が十億ガロンであるから、之を價にすると當時の相場で一億三千萬弗、一年間の機械油の消費高が二千萬ガロンで八百萬弗、タイヤが千二百萬で、價の總額二億弗、其他の種々の費用を合して、二百萬の自動車に對して一年間に七億三千萬弗の費用が入り、更に、此前年から一ケ年間に六十萬臺が新造され、其價が十二億五千萬弗に上つたといふから、總計二十四億といふ莫大なる金額が一年の間に自動車の爲に消費された勘定で此年の三十の護謨タイヤ製造會社の製造額實に五億弗の上に出たといふに至つては聊か驚くの外はないのである。

△米國に於ける凌雲閣の流行は、必ずしも人口の增加と土地の高價とのみが、自然に建築物をして上空に向つて延びしめるものと解することは出來ないで、米國に於ては斯の如き高層建築も平氣で完成するのだといふことを先進國に對して誇示する意味も少らずあるだらうと思ふ。六百萬圓を費して建築されたシンガア、ビルディングは四十一階の高層にして、地上六百十二呎地下二百呎を有し總計八百十二呎の驚くべきものであるが、メツロポリタン・ライフ・ビルヂングは更に之より高きこと七十呎にして、一二年前に完成した許りのウルウオース・ビルヂングは五十五階、地下百二十呎、地上七百八十五呎にして、總計九〇五呎の高さを有し、文字通りに世界最高の摩天樓である。試にウルウオース・ビルヂングの建築材料を調べて見ると、鐵材のみにて二百三十噸、煉瓦が千七百萬噸、各種の建築用テラコッタが七千五百噸、床用の瓦及壁用の瓦が各百八十萬平方呎、石材が二千五百平方、混凝土が二萬四千ヤード、混凝土用鐵筋三百五十噸にして、總費用三千萬と算せられてゐる。建物は總稱して事務用といはれてゐるが、中に無數の家庭と事務所とがあるのみならず、敎會がある、禮拜堂がある、商店がある、舞踏室がある、澤山の音樂堂がある、料理店がある、小學校や中學も二つや三つではないのみか、皆各獨特の光と熱の設備と昇降裝置を有し、嘗ては此建物を造るに三萬人の職工が從業しつゝあつたといふに至つては、其厖大なること蓋し吾々の夢想だもする能はざる所である。

△ウルウオース・ビルヂングと殆んど同じ意味に於て、米國が世界一の名聲を誇りつゝあるものは紐育の動物園である。面積三十三萬坪を有し、五百萬圓を投じ、十三年を費して、一昨年漸く成つたもので、二百五十四の猿小屋の爲にさへ十五萬圓を費し、哺乳動物九百五十、鳥類二千八百、蛇類でさへ二千近くゐて、其總數六千に及ぶは必ずしも大したものでないといはゞそれまでゝあるが、月曜と木曜とに限つて、少額の入場料を徴するの外、日曜大祭日は勿論、其他の日は無料入場を許すといふに至つては、日本の諸種の博覽會が、日曜大祭日に限りて寧しろ高價の入場料を徴し、貧民に對して却つて迫害を加へて恥ぢざると全然其趣を異にしてゐると思ふ。

△紐育の動物園とは聊か異つた意味に於て世界に於てユニイクなものは、紐育の盲人舘と、ボストンの浮遊園とである、前者は盲人に對する教育と救護の機關としては世界中最も完備したものにして、此意味に於て之を光明館と稱し、後者は湖上に浮べたる一個の汽船にして、夫婦共稼ぎの爲に朝から外出するものに對して其足手まとひとなるべき幼兒を預つて、之を保護し、監督し遊樂せしめ、其親をして安心して働かせると同時に、其子をして面白く一日を過させることを目的とせるものにて共に單なる恩附を以て目すべきものではなからう。

△近年に於ける活動寫眞の隆盛は、殆んど世界一般の風潮と見るべきものであらうが、殊に米國に於ける活動寫眞工業は驚くべき勢を以て種々の製造工業を壓し、鐵道織物製鐵及石油について、遂に米國實業の第五位に上り、年々のフイルム產出額五億七千五百萬弗の多額に及び、日々の活動寫眞舘入場者は二千五百萬人を超え、入場料の總額少くも三百萬弗を下らないとは蓋し驚くべきものである。けれども斯の如き活動寫眞の流行が淺薄なる喜歌劇の隆盛と共に、一般社會の趣味を代表するものであることを思ふ時に、露西亞人や獨逸人の趣味と比較して、米人のそれが頗る淺薄にして低級であることを憐まずにはゐられない。大はあつても新はあつても、流石に米國は新開地である、寂がない、趣がない。私には私の藝術の爲に好奇心は毛頭起らない。

△それにつけても、私は生きた子供を小包で送ることが出來たり、三年前三十五日二十一時間と二十五分四秒で世界一週の最短時間記錄を作つたジヨン・ヘンリイ・メエヤアを有し、十二萬分の一吋の尺度を造つたミシガン大學のマイケルソン教授を有し、金剛石を顆でも顆でも勝手にちりばめる裝置を發見して特許を得たフランクネルを有する米國のやうな國が、日本の發展と勢力を恐れるのは別として、日本の米國移住者が『悉く訓練を經たる日本の兵士であつて、一朝事あらば彼等は立所ろに十萬の兵をなすべく密に兵器を貯藏してゐる』と論じ、而もそれを單なる軍備擴張の材料としてゞなく、眞面目腐つて堂々と議論してゐる大新聞があるに至つては流石に氣の毒の感を禁ずることは出來ない。今の米國はまた粗大の大である、實用の新である。深みがない、床しみがない、一般の彼等はまだ一輪ざしの生花を味ふことが出來ないで葉のない花ばかりの大仕掛の投ざしにしか趣味を感ずることが出來ないのである。バナ

▼運河は蓋し米國の代表的趣味と理想ではなからうか。

「米國の研究」は今後の我國に取つて最も重大の問題なれば、廣く各方面の名士に乞うて材料を蒐集せるの結果、到底之を一時に掲載し盡すと能はず、已に前號に於ては大山早大教授の『アメリカニズムとパンアメリカニズム』末廣博士の『日米問に横はる三大問題』、原口早大敎の『米國的精神』、金子子爵の『日米親善の二方策』を發表せるが、次號には更に、

米國の對東洋政策……吉野博士
米國海軍の將來……佐藤少將
米國陸軍の大擴張……某將校

等發表せらるべし。



黒頭巾 **横山健堂先生著**

快心録

小杉未醒畫伯裝幀

四六版總クロース極製頗美本
著者寫眞挿入紙數四百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料八錢

忽再版

著者常に曉起快心の筆を執る、或は飄然去つて大自然の風景に親しみ、史實を探り、風光を論じ、其文を行るや一瀉千里、時に偉人に接して觀察縱橫、其眞面目を捉へ論ずる處些の忌憚を止めず、本書收むるところ悉く著者が快心の近作にして、其想や卓拔、其文や剛健、行くとして可ならざるなし、讀者一度本書を繙かば無限の感興に恍惚たらん、江湖に一讀薦む

重要目次

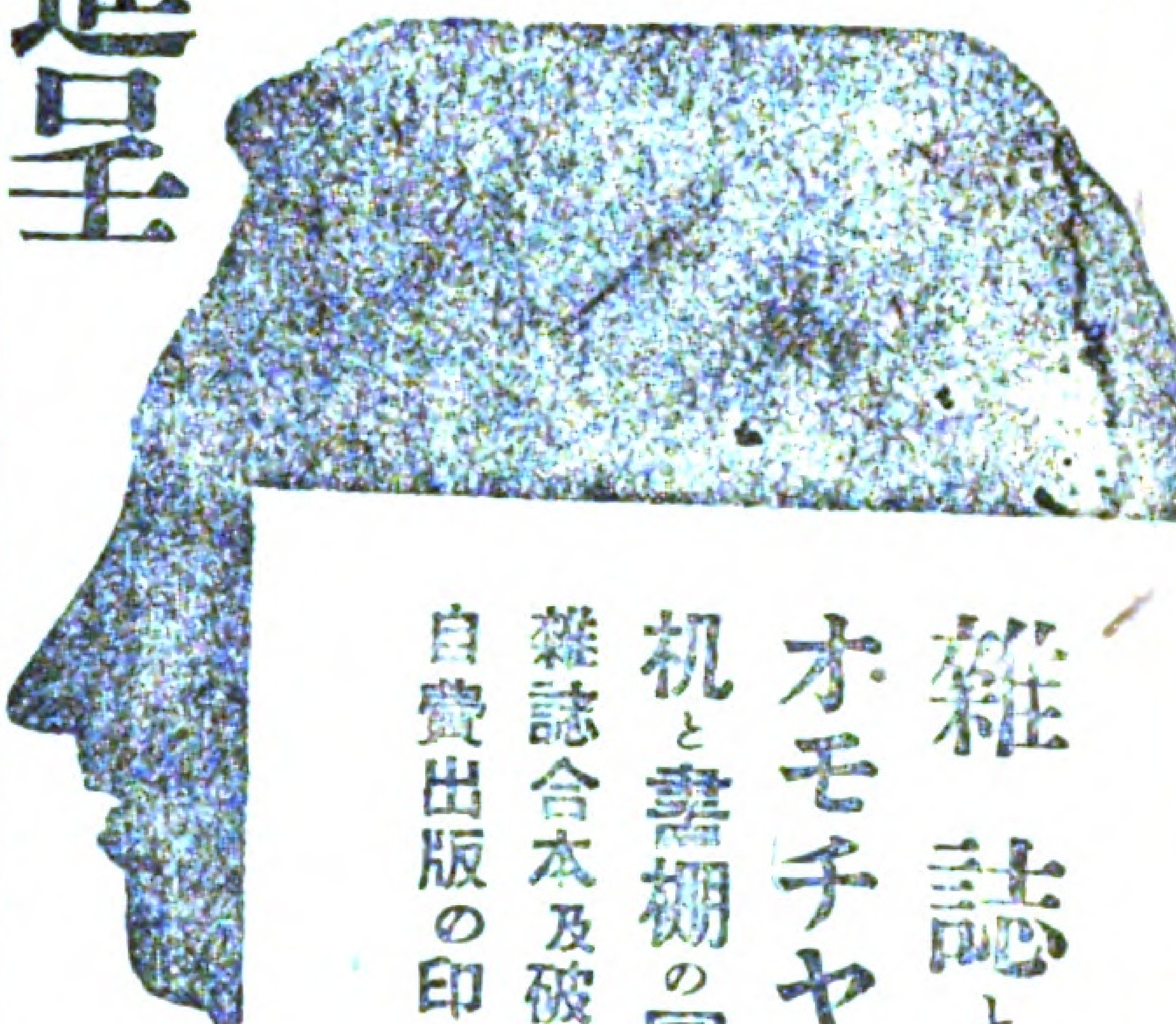
- 醉中語
- 勝敗
- 天才奇説
- 雷神論
- 出たら芽の記
- 吐月峯
- 目白の大御所
- 梅花
- 吾輩の見たる大錦と栃木山
- 能樂の春と櫻
- 勝利？敗殘？
- 鎮西八郎と流球統一

發行所 東京市本郷一ノ大通 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八 日東堂

（中付二の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊 雜誌總目錄 送料二錢封入申越次第 進呈



雜誌と書籍
オモチヤと文房具
机と書棚の圖案及製作
雜誌合本及破本の製本
自費出版の印刷製本及發賣引受

電話芝四二三七番
御呼出し御用命次第配達致し候
振替東京二八二五六番へ御拂込次第送料無料にて早達を計り可申候

■他店にては販賣せぬ■

化粧用 カワイヤ石鹼

■原料に不純物を含まざるは現品が證明し當店は斷言す
■他の同質の石鹼に比して安價なるは多額の廣告料を費さゞるが故なり

カワイヤを
一個入 十三錢
三個入 三十七錢
一打 一圓四十錢

河合書店 カワイヤ

東京下澁谷廣尾橋通

●●● 卅圓にて教授せし秘書 特價金壹圓書留送料拾貳錢 頗高評忽八版

山口博士講述

催眠術秘書

本書は警部郡長醫學士辯護士師範校長視學等に一人卅圓で教へた秘書也今回特價一圓送料十二錢で何人にも傳授す本書は從來世間ありふれた詐欺的の書と全然異り人の心をも身體をも自由自在になし得る書也之を惡用する時は婦女等に對し危險なる事をもなし得るにより本書讀者は之を惡用せず且他人に敎へぬと云ふ契約書を要す▼本書讀者の爲得可事▼月經不順▼無痛分娩▼ヒステリー▼男女色情變更▼リョーマチス▼齒痛▼胃痛▼肩凝▼不眠症▼神經痛▼テンカン▼有意運動支配▼强直狀態▼感覺變更自在▼精神變更▼禁酒禁煙▼記憶增進▼惡少年矯正等其他

東京市神田區金澤町四
帝國催眠學會
振替東京三〇三六二番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記を乞ふ

最新版

日米關係研究新資料

米國研究

米國の内面的大解剖

世界の大勢に通ぜんとする者は讀め
米國を識るは刻下の最大急務也

今日の米國		編輯同人
米國の陸軍	砲兵大尉	森田宣
米國の海軍	海軍中佐	日高謹爾
米國の政治	法學博士	浮田和民
米國の外交	慶應義塾大學教授	田中萃一郎
米國の經濟	法學博士	鹽澤昌貞
米國の交通	鐵道院運輸課長	木下淑夫
米國の教育	文學博士	吉田熊次
米國の商業	早稲田大學教授	吉田良三
米國の社會	ドクトル、オフ、フイロソフイ	北澤新次郎
米國史觀	文學士	若宮卯之助
米國の鑛山業	工學博士	桂辨三
米國の化學工業	理學博士	加藤與五郎
米國の機械工業	理學博士	關口八重吉
米國の倫理哲學	文學博士	中島力造
日米經濟關係	法學博士	神戸正雄
米國の新聞事業	毎夕新聞記者	小野瀨不二人
米國の圖書館事業	帝國大學助教授	植松安
移民問題	法學博士	末廣重雄

菊版五百頁美本
正價金壹圓
送料二十錢

東京神田區鈴木町十六
同文館雜誌部
振替東京三一六七番

好評嘖々たる本書の姉妹篇

五版 **獨逸研究** 菊版五百頁全一冊 正價壹圓

再版 **支那研究** 菊版五百頁全一冊 正價壹圓

再版 **露國研究** 菊版五百五十頁全一冊 正價壹圓

（中付二の四）



支那の興敗を双肩に擔へる段祺瑞の人物

小山田劍南

一介の病夫

支那共和民國の國務總理兼陸軍總長たる段祺瑞は不治の病を有す。彼れは多年惡性の肺患に苦み、最初の夫人も、其次の夫人も共に此病に感染して斃れ、今の夫人も亦た此病に感染したり。以て其病症が如何に强烈なるかを知るに足らん。彼れは倘ほ阿片中毒に惱まされ、其れが爲め、近來甚しく健康を損じ、精力衰へ、身親く繁劇なる公務に鞅掌するに耐えず、官廳へも自づと缺勤勝ちとなり、事大小となく、皆秘書長徐樹錚の決裁に任かせ、自分は私邸に閑處し、客を引いて碁上の山河を爭ひなどして消遣するを愛す。而かも支那四百餘州の運命は今や懸つて此一介病夫の双肩に在り。知らず其運命の歸着果して如何。而して此人の病めるは、四萬々人蒼生の爲めに悲むべき乎、將た慶すべき乎。請ふ之を段其人の人物並に閱歷に看ん。

袁世凱の知遇

段祺瑞字は芝泉、安徽合肥の人、年五十二。幼にして父母を喪ひ、親戚の家に養はる。性、讀書習字を好

まず、武功を以て身を起さんことを願ひ、前清光緒十一年、北洋武學堂に入つて兵學を修め、精勤攻苦其効を見、最優等を以て卒業したり。該學堂は段が郷黨の先輩にして時の北洋大臣たりし李鴻章が熟ら時勢の趨向に鑑みて、新式軍隊養成の急務に應ずべく創設する所に係る。光緒十五年、李鴻章の斡旋に依り、見學の爲め、獨逸に赴き、專らクルップ兵工廠に就いて兵器研究の効を收め、併せて獨逸陸軍の實狀を觀察して大に知見を博くし、留まること一年にして歸國す。

當時清國の有識者、漸く舊式軍隊の恃むに足らざるを知り、外國の成法を取つて新式軍隊を創建せんと欲し、其事權を以て胡燏芬に委任す。胡乃ち外國の式樣を參酌して、定武軍十營を組織し、鋭意之が訓練に當り、頗る面目を煥發したるが、其後天津蘆溝橋鐵道の督辨に轉任したるを以て、廷議其後を襲ぐべき適任者を物色して、時に浙江の兵備道臺たりし袁世凱を得たり。袁乃ち定武軍の統領として任に小站に赴く。小站は天津を東南に距る七十華里なる新農鎭に在り。李鴻章が長髮賊平定後淮軍を屯田せしめたる處にして淮軍解散後久しく廢壘と爲り居たるを、袁赴任の後、之を修繕して兵營を擴充して其規模を一新し、副將吳長純等をして安徽、山東、河南等の地方に赴いて壯丁を招募せしめ、又た都司魏德清等をして新民廳に赴いて騎兵を選募し、併せて軍馬を購入せしめ、又た舊銃砲が不統一にして用を爲さゞるを以て軍務所に請ふて步兵銃騎兵銃速射砲の支給を受け、宿將及び新進の俊材をして營伍督率の任に當らしむ。姜桂題、楊榮泰、龔元友、吳長純、徐邦傑、任永淸、梁華殿の諸將は當時皆袁の麾下に屬したる者なり。段も北洋武備學堂の教頭たりし獨逸人某の推薦に依て袁に見え、大に其軍事の素養と人物とを認められ、格別の優待を以て砲兵聯隊長に任ぜらる。時に光緒二十一年十月なり。かの馮國璋、張勳、王占元、段芝貴、曹錕、張懷芝、陸建章、孟恩遠、馬龍標、王英楷、田中玉、陳光遠、何宗蓮、雷震春、吳鳳嶺、趙國賢の如きも、皆當時小站新軍の將校として、段の後進たりし者なり。袁の段を信任する殊

に厚く、袁の軍事を議する毎に、必ず段に諮詢し、其同意を得て後に之を行ふを常とせり。袁は素と兵を知るを以て名を中外に著はしたれども、實は段の贊襄の力與つて多きに居り、而して一時袁が其實權を掌握しゐたる北洋新軍六師團の中第三師團尤も出色の稱有りしが、畢竟段が其師團長たりしを以てなり。段の袁の爲めに忠勤を效たせるもの決して淺少にあらず。然れども段が袁の知遇に負ふ所も亦た決して淺少にあらざるは、其官界榮達の跡を見るに、多くは皆袁の推挽に依るに徵するも容易に首肯せらるべし。

軍界の聖人

袁世凱が新軍建造の功を以て山東巡撫に任ぜらるゝや、仍ほ新任總攝の任務を兼ねたるを以て、段に委するに之に關する一切の事權を以てし、併せて該軍管轄内に於ける各學堂の總辨たらしむ。

光猪二十六年、拳匪亂を倡へ、京畿大に亂れ、各國聯合軍進んで北京を攻陷し、乘輿の西狩となる、當時山東は亂匪の產地なりしも、幸に無事なりしを得たるは、實に袁世凱が鎮壓の力に由ると雖も、抑も亦た段が討伐の功多きに居らずんばあらず。二十八年五月、李鴻章の拳匪善後處分際中に薨去するや、袁其後を襲うて北洋大臣直隸總督となり、段を奏薦して北洋陸軍參謀總長たらしむ。袁の北洋に在るや、鋭意庶政の振興を圖り、軍に於て更に重きを置きたるが、悉く段をして之が董督の任に當らしめたり。是年七月、段軍を督して威縣地方の逆匪を討平したるの功を以て、花翎を賞戴し、並に奮勇把圖拉の號を賞授せらる。又た袁の奏請に係る。

二十九年十一月、朝廷練兵處を設立し、段を以て軍令司正使に任じ、副都統銜を賞敍す。三十年三月、袁の奏請に依り、常備軍第三師團の翼長心得となり、三十一年正月、第四師團長となり、八月改めて第六師團長となる。此秋、北洋軍隊と湖北河南の軍隊と對抗演習、河南の平原に擧行せられたるが、此演習は或意味に於て、時の湖廣總督張洞と、袁世凱との出世角力な

りしを以て、双方の用意ヲサ〳〵怠りなく、南軍は湖北第八師團長張彪を以て總指揮官とし、招聘武官鑄方大佐等之が參謀となり、北軍は段祺瑞を以て總指揮官とし、招聘武官坂西大佐等之が參謀となり、互に精を竭し、鋭を揮つて、輸贏を爭ひしが、審判の結果、北軍の全勝に歸したるを以て、段は少からず面目を施こし、北洋軍隊の聲名これより益々高く、袁の段を信任すること益々厚きを加ふるに至れり。次で第三師團長に任ぜらる。兼ねて北洋各武備學堂督辦となり、又た福建汀州鎭の總兵に補授せらる。



段祺瑞最近の肖像

當時北京政府は袁の兵權過大なるを慮り、之を殺いで陸軍部の統下に歸せしめたるが、陸軍部長鐵良は深く段を忌み、その職を剝ぎ、鳳山を以て之に代へたるを以て、段は引退せんことを求めたれども許されず、改めて陸軍各學堂の督辦に任ぜらる。然れども事皆志と違ひ、鞅々として樂まず。光緒三十四年兩宮崩御後、袁の失脚して河南に歸臥するや、人皆段の運命を氣遣ひしが、幸にして徐世昌の庇護に依り、復た第六師團長たることを得たり。彼れも復た多倖の人なりと謂ふべし。宣統二年、江北提督に昇任す。是れ實に攝政王醇親王が會ま納賄の醜

事有りて、世間に漏洩したるにより、特に彼れを重用して以て廉潔を愛するの意を示すの手段たりしなり。蓋し段は夙に「軍界の聖人」の稱有り、彼れの知人は彼れを評して、服官に服すること二十年、家に長物無し。古人の所謂臣が心水の如き者、これに過ぎずと言へること有り。

第一次革命時の奔走

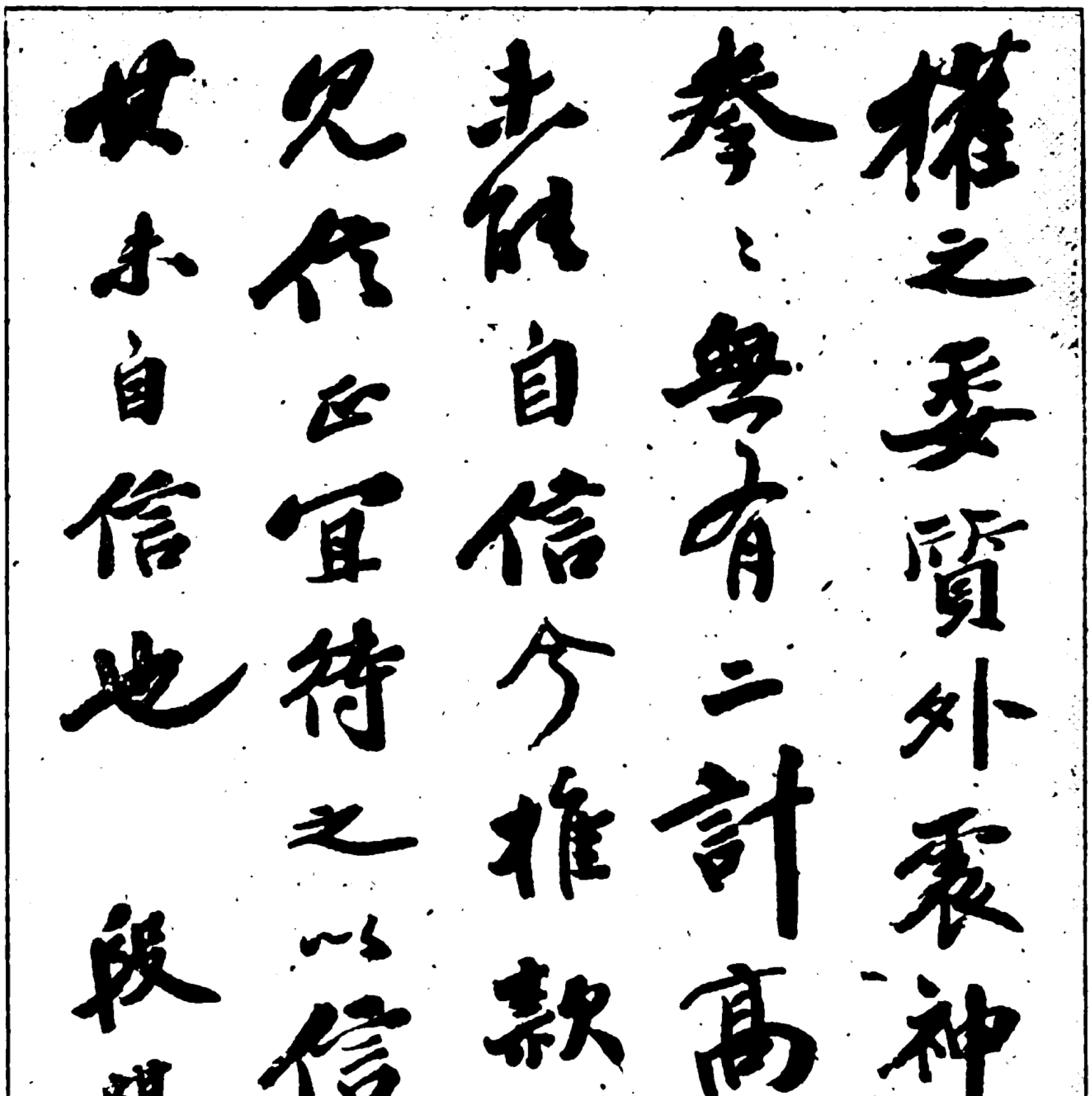
宣統三年八月、革命の烽火、武昌黄鶴樓下に打揚げられ、全國響應の勢有るや、愛親覺羅氏の朝廷、愕錯措く所を知らず、甚だ出征其人なきに苦みたるが、遂に河南の草廬に蟄居中なりし袁世凱を起たしめ、命じて湖廣總督と爲し、授くるに征討の大任を以てせり。抑も袁が攝政王と深讎あり、從つて北京朝廷を怨望するや一日の故にあらず。然り而して其北京朝廷の命に聽いて起てるは、其實決して北京朝廷の爲にして起てるにあらず、唯だ自己の野心を遂げんが爲めにして起てるのみ。彼れは河南に雌伏中、夙に天下の大勢の應さに向ふべき所を察知しゐたるなり。彼れは漢民族が滿洲人の束縛より離脫すべき氣運の十分に熟したるを看破しゐたるなり。彼れは此氣運此大勢を利用して自己の立脚地を打開すべく、歷然たる成算を立て、ひたすら乘ずべき機會の到來を待ちゐたるなり。果然、「滅滿興漢」の旗幟は江漢の風に飜へされ、事局拾收の大命は倉皇として養壽園主人に向つて降だされたり。主人の此命に接するや「事皆乃公の計に中る、志此れより展ぶべし」と獨語しつゝ、覺えず微笑を漏らしたらんこと必せり。然れども彼れは由來其態度を以て其心事を蔽ふに巧みなり。彼は此命に接して心には小躍りせんばかりに喜びながらも、外面猶ほ命に應ずるを欲せざるが如くに裝ひ、幾多の曲折を經て後始めて起てり。蓋し此の如くモッタイを附け置くに非ずば、起つて後十分に自由行動を取ること能はざるを慮りたればなり。据膳に直ぐ手を出さゞる所、是れ彼れの多智なる所以なり。彼れはかくて再び中原の風雲を叱咤するの人となるや、直ちに滿洲朝廷を利用して恩を革命黨

に實り、革命黨を利用して威を滿洲朝廷に示し、和戰緩急巧みに兩者の間を操縱し、以て漁夫の利を占むるに成功したり。而して段祺瑞は當時袁の手足となりて熱心に且つ誠實に奔走したる者の一人なり。

袁世凱の起つて南征の師を興こすや、先づ第一軍を組織し、馮國璋をして之が司令官たらしめ、陸軍大臣蔭昌を以て全軍督率の任に當らしむ。かくて戎馬江漢の天を指して急馳す。時に段は恰かも江北提督の任に在り、袁之に托するに第二軍を組織して之が司令官として南下せんことを以てす。然れども當時第二十師團は灤州に在り、第五師團は濟南に在り、第三師團は奉天に在り、其他の相懸隔せるが爲め、急に之を集合すること容易の業にあらず。且つ別に事態の轉變あり、彼れをして去つて軍に赴くこと能はざるに至らしめたり。卽ち此時大局已に瓦解して北京の形勢亦た危急に瀕したれども、袁は躬ら馬を前めて河南湖北の交、花園に在り、而して遽かに軍を離れ難き事情有り、左りとて中央の形勢も一日も忽略に附すべからず。是に於てか、恰かも天津を發して軍に赴かんとしつゝ有りたる段に電命し、改めて北京に入り、自己に代つて坐鎭の任に當らしむることゝなれり。段が北京に入るの第二日、灤州第二十師團背叛の形勢有り、山西又た革命派の翹將吳祿禎の暗殺に繼ぐに人心の動搖を以てし、將に大變あらんとす。段乃ち吳光新をして石家莊に赴き、盧永祥をして娘子關に赴き、各鎭撫の任に當らしむ。然れども天下の亂形日に益々熾んなるを以て、淸廷の惶惑大方ならず、急遽袁を召還して萬機を總理せしむ。袁乃ち段をして漢口に赴き、馮國璋に代つて第一軍司令官たらしめ、馮を召還して禁衞軍を統督せしむ。段の漢口に着したるときは、漢陽旣に陷り、黃興以下南軍の諸將皆四方に遁れ、黎元洪が僅かに敗殘の兵を提げて武昌を防守しゐたる時にして、其後幾もなくして兩軍の媾和成立したるが、段は此媾和に與つて斡旋尤も力めたり。

南北媾和の張本人は無論袁世凱にして、袁の媾和を主張したるは、因て以て私圖の成就に便ぜんとしたる

なり。袁は當時革命軍を擊碎して、滿洲朝廷の重臣となるべきか、將た又た滿洲朝廷を倒滅して、新建國の元首となるべきか、二者孰れが自己に得策なるやを計量して終に後者を取るに至れるなり。彼れが一旦武漢の革命軍に痛棒を食はせながら、終に止めを刺すことを敢てせざりしは、畢竟此下心有りたればなり。北方の大軍は漢口に駐りて荏苒三五日を經過すれども、武昌攻擊の命令に接せず、やがて休戰の約束成り、北軍は一里二里三里と次第に讓歩して、遂に何南の境界に近き武勝關を退守するに至れり。袁の意蓋しイヤ少しく革命軍の强みを示して以て北京朝廷の鼻梁を挫ぎおくにあらざれば、自己の言議を朝廷に容れ易からしむる能はずと爲せるなり。かくて袁が武昌攻擊の手を緩めつゝ有る間に、



段祺瑞の筆蹟

革命軍は四方に呼應して起り、南京に於ては總督張人駿害に逢ひ、將軍鐵良敗亡し、張勳の防戰敗れて江南の形勢全く定り、南方諸省の兵、南京、武昌、芝罘に向つて馳せ參じ、其數見る〳〵增加して約そ五十萬を算するに至り、北伐の意氣斗牛を衝くの概有り、參軍の諸將必ずや北京城下の誓を見ずんば還らざるの氣勢なきはなし。果然、事局の進展は袁の思ふ壺にハマリたるを以て彼れは更らに進んで豫定の行動を遂行したり。彼れは一面段祺瑞をして黎元洪と妥協せしめ、一面唐紹儀をして孫、黄等と和議の折衝に當らしめ、更らに段祺瑞、馮國璋以下北方四十二將校に命じて、連署して共和の承認を宣統帝に奏勸せしめたり。次で南北媾和の成立となり、次で宣統帝の退位となり、次で唐紹儀の南京差遣となり、次で南京臨時政府の撤廢となり、かくして袁は宣統帝を蹴落し、孫大總統を蹴落し、遂に自ら代つて天下を取るに至れり。

段は此の如く、黎元洪、唐紹儀と同じく、南北の媾和に斡旋して、袁の野心を遂げしめたるが、その心事は只管事局を拾收せんことを欲し、袁の野心を遂げしむることがその目的に非ざりしは、他日袁が帝位に登らんとするに至つて之に反對したるに見ても推知せらるべし。或は南北媾和に對する段の功勞を多として說を爲して曰く、君大勢の回へし難きを知り飜然計を變じて、首として南北の媾和を唱へ、一面欵を黎元洪に通じ、復た痛哭して情を清政府に陳じ、二ケ月ならざるに、共和成立し、生靈塗炭に至らず、南北崩裂に至らざるもの、英國領事の調停に出ると雖も、而かも君亦た與つて力有り云云。是れ善く段の心事を解したる者と謂ふべきなり。聞く、宣統國を讓るの大詔を降だすや、段は詔書を奉じて涕泣し[illegible]段の[illegible]き人徹つせば、清朝の[illegible]は興[illegible]るべからず。段の君心の義[illegible]て[illegible]て語るべきにあらざるなり。

帝制反對

共和民國成立して、中央政府の北京に奠めらるゝや

段は選ばれて陸軍總長となり、陸軍上將を授けられ、勳一位に叙せらる。民國二年十二月、黎副總統湖北を去つて北京に入るや、代つて湖北都督となり、三年二月、復た河南都督に轉任し、四月、陸軍總長の本任に復し、六月、建威上將軍を授けられ、將軍府事務を兼管す。此時袁の威業益々隆く、諂諛の輩、日に帝制の說を以て進め、以て獻媚希榮の計を爲し、袁も亦た分を忘れて帝位を取らんとするに至る。段は其大義名分を誤るの甚しきものなりとの故を以て、極力之を諫阻したるが、却つて袁の不興を買ひたるを以て、四年五月、遂に病に託して職を辭し、門を杜ざして出でざるもの一年。雲貴兵を起して帝制に反對し、各省紛々として響應し、京師危急に瀕して、袁が改過の令を下だし、責任内閣を組織して以て南方の氣鋒を緩和せんとするや、再び出でゝ内閣を組織し、自ら總理となり、陸軍總長を兼ぬ。時に五年四月なり。六月、袁歿す。京畿の間、變亂なきを得たるは、主として段が鎭撫の力に依らずんばあらず。蓋し袁に次いで北方軍隊の間に隆望あるは、段に如く者なければなり。

責任内閣の建造

帝制反對派の勢力は袁の殂落に由て益々强盛を加へ、黎副總統も其要望に依つて、袁の後を襲いで大總統となりたるが、彼等は、十分に帝制運動の餘弊を掃蕩せんことを期し、舊約法の復活、舊國會の召集等に先つて帝制派の撲滅に着手して其氣鋒頗る鋭く、爲めに段芝貴、梁士詒、雷震春、揚度の輩、皆四方に散亡して形影を潜むるに至れり。抑も段祺瑞は多年袁の股肱として、馮國璋、段芝貴、趙秉鈞と併せて袁門の四天王と稱せられたる程なるを以て、革命派より仇敵視されゐたるは勿論なりと雖も、彼れが帝制に反對したるの一事は適ま革命派の好感を博し、爾來革命派の段を視ること、他の袁派の人士と同じからず、袁歿後に及んでは、事勢の要求する所に鑑み、黎總統の斡旋するがまゝに、段に托するに責任内閣建造の重任を以てしたり。知らず、段の爲す所、果して能く彼等の期望に適應す

べき乎。今や南北の軋轢又た生じて其勢日に甚しく、所謂武斷派と稱する者、亦た頻りに不穩の行動あり、此の如くにして底止する所を知らずんば、天下再び亂るゝを保し難し。知らず、段たる者、果して如何の態度を以て、之に處せんとする乎。實に北方に於て個人的勢力と政治的實權とを有することの最も多大なるものは、袁歿して後、唯だ一人の段祺瑞あるのみ。黎元洪が無事に大總統となることを得たるは、南方の推擧に依ると雖も、而かも亦た段が頭を縦に振りたるが故ならずんばあらず。段にして若し南方派と一決戰せんと覺悟したらんには、勝敗の數、未だ俄かに判じ易からざりしや必せり。知らず、段の心事果して如何。

帝制問題に關する南北の議論は、袁の殂落と共に終りを告げたれども、南北をして互に爭執せしむべき問題は相繼で發生したるが、段が毎に南方民主派の勢を殺いで、北方官權派の勢力を強くし、以て自家の立脚地を鞏固にせんと圖れるは、掩ふべからざるの事實なり。

袁の死後に於て、南北は先づ第一に約法及び國會問題にて衝突を來たし、各々意見を執つて相下らず、上海に海軍獨立事件の勃發する有りて、南方の決意を示せる等、殆んど妥協絶望の形勢を呈したるを以て、段は遂に南方派の主張を容れて、舊約法の復活及び舊國會の召集を肯諾するの止むを得ざるに至り、同時に責任內閣の建造に着手したり。

新閣の閣員選任に關する段の主張と黎の修正とを比肩すれば、兩者の南北兩派に對する態度自ら歴然たる者あり。

	段の推薦	黎の修正
外交總長	陸徵祥	唐紹儀
內務總長	許世英	——
財政總長	陳錦濤	——
海軍總長	程璧光	——
司法總長	王寵惠	張耀曾
教育總長	湯化龍	孫洪伊
農商總長	張謇	張國淦

交通總長　　楊士琦　　汪大燮

陸軍總長　　段總理兼任

段の推薦に係る者の中、南方派に屬するは、張謇、湯化龍、王寵惠の三人なるが、湯化龍は國會開設を待つて衆議院議長たるべき志望を抱ける者、張謇は近來漸く政治と交渉を絶ちて、第三次革命にも關與せざりしもの、段が特に此二人者を擧げたる、略ぼ其意の在る所を忖るに難からず。然らば則ち段が眞個に南方派の勢力を示現すべく擧げたるは王寵惠一人のみ。翻つて黎の修正を見るに、黎が南北兩派の緩和劑たるを立證して明かなり。內閣の組織は結局次の如き役割にて南北の妥協を見るに至れり。

外交　唐紹儀、內務　孫洪伊、財政　陳錦濤、海軍　程璧光、司法　王寵惠、教育　范源濂、農商　谷鍾秀、交通　許世英、陸軍　段總理兼任

然れども此妥協は久からずして破綻を生じ、唐紹儀の辭職、國會に於ける陸新任外交總長の不承認等、內閣に於ける勢力の爭奪は遺憾なく南北の暗鬪を暴露しつゝあり。

唐紹儀が外交總長に推薦せられながら、久しく就任を肯んぜざりしは、畢竟彼れが認めて以て北方勢力の代表者とせる段祺瑞が內閣の實權を把握しゐるを見て中心甚だ平かならざるを以てのみ。然れども南方派よりして之を云へば、其勢力擁護上、是非とも閣歷と人望と並に隆き唐の入閣を必要とせずんばあらず。

抑も舊約法の復活と、段が國務總理たることゝは、南方派に取りて一大打擊たるは、南方派當初の豫期に反すること極めて大なり。元來舊約法は、革命派が成るべく時の大總統たる袁の勢力を掣肘せんとして制定したるものなるを以て、國會の立法權と內閣の行政權とを非常に强大ならしめあり。而して之に由るときは大總統と國務總理との權限甚しく相違し、行政の實權は擧げて段の掌握に在り、黎は徒らに虛器を擁するに過ぎずして、事皆成を段に仰ぐのみ。南方派の不滿足知るべきなり。翻つて段の心事を忖るに、彼れが舊約法の復活と舊國會の召集に讓歩したるは、尙ほ自ら內閣總

理たるの期望十分に有り、果して能く此の如くならば舊約法の規定に依り、行政の實權を掌握すること難からず、萬一此心算にして齟齬することあらば、コヽに始めて最後の手段を取るも晩からずと思惟せるものに似たり。段は結局自分の住心地好き家屋を建造し得るの程度に於て、その勢力の根據たる北方派の利害を犧牲に供して、南方派と妥協するに吝ならずと雖も、若し全然自分の居住に適せざるの家屋を建造せざるべからずんば、寧ろ一時の苦痛を忍ぶも、根柢より之を破壞して、別途の方法を取るを以て得計となすの形跡有り。左れど能き得べくんば、最後の手段に訴ふることなくして其期望を貫徹せんことを欲せるは明かなり。然るに南方派は飽くまで段の勢力を牽制せんが爲めに極力唐の入閣を主張するのみならず、其要望事毎に段の所期以上に出づ。衝突の生ずるは蓋し必然の數のみ。而して其勢の昂ずる所、總統府と國務院との衝突をも併發したり。

辛辣なる段の子分

水淸ければ魚棲まず。廉潔なる人に子分の少きこと古より然り。段は支那の官吏としては、極めて品行方正なり。曾て友人に强要せられてタッタ一度天津の狹斜に風流を學びたること有り。其昔盟を訂したる美人を直ちに落籍さして夫人となし、其後復た絕えて足を絃歌の巷に入れず。彼れの爲人は寧ろ固た苦るしきに過ぎたるの嫌ひなくんばあらず。沈毅にして言笑寡く、一語と雖も苟くも發せず、發すれば必ず行はずんば止まず。苟くも人を信せず、信ずれば必ず用ゐずんば止まず。意志の强固なる驚くべきものあり。故に鐵を銷かすは易く、段の決意を飜へすは難しとの語あり。金錢に關しても醜聞少く、從つて金錢を散じて人心を集攬することにも努めざるを以て、子分を有すること寡の如く多からず。その腹心の子分と云へば僅かに曲同豐、曾毓雋、靳雲鵬、徐樹錚等數人を擧ぐべきのみ。曲は日本の士官學校出身にして、卒業後、保定府軍官

學堂の校長となり、其後段の個人的參謀長となり、常に其帷幕の樞機に參劃せり。彼れが上海議員團に勢力有りし孫洪伊と親交有りしを利用して、段を袁歿後の大總統たらしめんと計劃して失敗したるは、人の善く知る所なり。現に山東軍務會辦として、段の爲めに極力計圖しつゝ有り。曾の段に於けるは、梁士詒の袁に於けるが如き者あり。彼れは頭腦明敏にして理財の才に富み、私財亦た萬を以て算せらる。現に北京に於て醍春店と名くる旗亭を營み、朝夕段の門に出入して、其家政に與り、政治問題の謀議にも參劃して重きを爲しつゝ有り。靳は　卒伍より身を起したる舊式肌の軍人なるが、其榮達して山東將軍たるに至りたる、皆段の推挽に依るを以て、段は實に彼れの恩人なり。徐は段の子養ひの子分にして段の信任を負ふこと尤も厚く、段の爲す所、公私細大、殆んど其關與を經ざるなし。亦た日本士官學校の出身にして、曲に比して三期後輩なり。爲人才氣に富み、其遣口の辛辣の剃刀に似たるものあり。曾て段内閣の陸軍次長たりしとき、獨逸より武器を購入して、四十萬元を納賄して罷免の厄に遭ひ、爾後新聞の勢力の偉大なるを認め、自ら出資して北京に於て「平報」なる日刊新聞を發行し、以て自己の立脚地を開拓するに努め、又た自ら規模雄大なる中學校を設立して子弟の教育に盡力したり。段の出廬後再び出でゝ國務院秘書長となれり。曩きに帝政派議員を指嗾して上海議員團に對抗せしめたる、軍人同德會を組織して南方派に對する威嚇を企てたる、又た日本の滿鮮總督設置說を各新聞に吹聴せしめたる、皆徐が曲と協謀したる細工なりと傳へらる。彼の多智多策なる誠に段の智囊袋たるの名に恥ぢずと謂つべし。然れども過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。彼の遣口の餘りに辛辣なる、段の豫算以上に事の歩武を進めて、却つて段の事業を誤るなき乎。現に總統府と國務院との權限爭ひの如きは、確かに此嫌なくんばあらず。

徐は段總理の勢力を傘にして、動もすれば黎總統蔑如するの擧動に出で、龍濟光の獨立取消の命令も、徐は黎總統を强いて捺印せしめたりと傳へらる。かくて

總統府の幹部は後の專橫を憤ること甚しく、必ず之を取捨がずんば止まずと決意し、徐の好敵手たるべき總統の秘書長を物色して、進步黨の硬骨漢丁世嶧を得たれば、こゝに國務院に向つて挑戰の火蓋を切るに至れり。かくて府、院互に其權限を爭ひ、各々對手の落度を摘發して以て快とせり。結局此問題は双方の互讓に由つて僅かに解決するを得たれども、双方感情の衝突は依然として除去すべきにあらず。

府、院の衝突は徐秘書長一個人の行動に起因すと雖も、其根本源因を求むれば、畢竟南北の勢力爭雄に在らずんばあらず。而して北方派をして此態度に出でしむる、段實に其責有り。何となれば段の實力は優に北方派の勢力を掣肘するに足る者有ればなり。

成城團同盟

南北の暗闘は、國會に於ける勢力の爭奪にも顯然たり。兩派互に多數を制せんとして、劇烈なる運動を試みつゝ有り。若し夫れ地方に於て双方勢力の扶植に至つては、其競爭更らに目醒しきもの有り。國會にて多數を占むるの望少き北方官權派は、地方に於ては是非とも優良なる勢力を占領せざるべからずとなし、活躍殊に力めつゝあり。湖南の督軍に民黨が黃興又は譚延闓を推せば、段は蔡鍔を以て之に擬したる、山東督軍に民黨は黎の子分たる藍天蔚を推せば、段は曲同豐を任ぜんとしたる、黎が湖北省長に孫武を任ぜんとすれば、段は王家襄を採らんとしたる、又た段が直隸督軍には曹錕を、省長には朱家寶を任じたる、廣東の龍濟光問題に就いても、互に其主張を固執したる、如何に兩派が其勢力の擴張に腐心しつゝあるかを窺知するに難からず。

南北爭雄の勢、日に益々熾んにして、遂に成城團同盟なる者を促出せり。成城團同盟は徐州會議の產物なり。

北方官權派中尤も頑强なるは、各省に兵權を提げて蟠踞せる武人派となす。而して徐州の張勳、安徽の倪嗣仲、湖北の王占元等其巨魁たり。此等の人士は帝制

派の殘黨と結托して、常に南方派の勢力を撃滅せんと腐心する者なるが、中央政界に於ける南北の爭雄漸く劇烈となるを見るや、遂に相謀つて攻守同盟を締結することゝなり、其結果徐州會議となれり。開會の、日雲南、貴州、廣東、廣西の四省を除く外、各省の督軍、省長、若しくは代表皆議に列す。席上同盟を誓約して之を衆志成城團と名け、同盟規約を締結し、左の事項を中央政府に要求すべく決議せり。

第一、舊國會を解散し、舊約法を廢止し、以て暴徒の擾亂を免るべし。

第二、外交總長唐紹儀、內務總長孫洪伊、農商總長谷鍾秀、財政總長陳錦濤、司法總長張耀曾を排斥す。殊に谷、陳二人は借款に關する違法行爲、張は阿片密輸入の罪に依り處罰すべし。

第三、段內閣の已むを得ざる場合には徐世昌をして後繼內閣を組織せしむべし。

第四、右之個條に對し一週間內に答辯せんことを要求す。

尙ほ成城團の同盟規約なる者を見るに次の如し。

一、本團體は國防を聯絡し、勢力を鞏固にし、中央を擁護するを以て目的とす。

一、亂暴分子が竊かに政權を簒し、國會の擾亂を來し、各省區と衝突する場合は、本團體は衆議の上聯合して之を討伐すべし。

一、本團體が國家の安寧を維持する爲め、兵力を用ゐざるべからざる場合は、各省區聯合區域の軍事總指揮として領袖を推擧すべし。

一、本團體は張勳を正長官に、倪嗣仲を副長官に推す。

一、本團體は國家の統一を妨げ、又は政府に對し、非理の要求を爲す者を公敵と認む。

一、本團體に反對し、又は本團體を破壞せんとする者は、本團體協力して之に當るべし。

又た該會議にては滿場一致、段祺瑞を大總統に推すことに決議したりといふ。

或は曰く成城團同盟の發案者は段芝貴なりと。而して其傳ふる所に據れば、段は先づ張勳を訪ひ、南方派

と北方派とは氷炭相容れず、今北方派をして萬世替ることなからしめんとせば、吾人の兵權を握りつゝある日に於て南方派を倒滅せしめざれば不可なり。且つ今廣東定まらず、李烈鈞は龍濟光を攻めつゝあり、龍は吾黨の中堅なり。若し龍にして推倒されなば、吾黨の勢力は減殺されん。故に此機に乘じて兵亂を起せりとの罪名の下に、各省聯合して李烈鈞を攻むべし。而して南方派の勢力は今廣東に集中し居れば、廣東破るれば其他は自然に瓦解すべしと說いて、その同意を得たりといふ。

北京の衆議院議員某は徐州會議の決議を聽き、慨然として語つて曰く、武人の跋扈は到底之を制すべからず、國務總理段祺瑞を除くの外、閣員皆辭職して、各議員は再び北京より放逐せらるゝの日、蓋し遠きに非らざるべしと。又た僕の一友近ごろ北京より歸りたるは、僕に告げて曰く、支那再亂の兆、今や歷然として睹るべし。而して禍源の伏する所、徐州に在りと。實に兩派の軋轢にして、緩和の途なくんば、第四次動亂の來る、必ずしも他の不測の變を待たざるべし。

外交總長唐紹儀は南方派の熱心なる希望を容れて終に北上したるが、其天津に到るや、張勳等武人派の跋扈言語に絕し、形勢頗る南方派に不利なる者ありと看破したるのみならず、唐排斥の運動非常に猛烈にして身邊には刺客の危險さへ切迫したるは、背後に操縱者有るに相違なしと推斷し、事態此の如くならば、縱令入閣するも、到底其手足を展ぶること能はざるべしと思惟したるを以て、斷然意を決して辭職するに至れり。かくて事勢は益々險惡ならんとす。匡救終に其人無き乎。吾人四萬々生靈の爲めに之を憂ふ。

唯彼れ一人有るのみ

北方支那の山川は粗大にして、南方支那の山川は光潤なり。北方支那の民情は淳朴優長にして保守を愛し、南方支那の民情は巧慧浮華にして新奇を好む。人若し北京に遊ばゝ、その物情何となくノンビリしたるを感ずべし。是れ北方支那の氣分のシンボールなり。人若

し上海に遊ばゞ、何となくコセツキたるを感ずべし。是れ南方支那のシンボールなり。北方支那の氣分は以て駱駝に譬ふべく、南方支那の氣分は以て狐狸に譬ふべし。

北方支那と南方支那とは、各々其氣分を異にするが如く、其政治上の思想に至つても、相同じからざるもの有り。

支那は古來統治者を易ゆること、其幾回なるを知らず。而して英雄豪傑の天下を取れるものを見るに、先づ實力を以て南方支那を屈服せしめて起てるもの（明の太祖の如き）は、其の威望を推して北方支那の人心を收むるに難からず。先づ實力を以て北方支那を屈服せしめて起てるもの（清の太祖の如き）は、其威望を推して南方支那の人心を得ること能はず。蓋し北方支那は常に帝王の味方にして、甘んじて帝王の節制に服從すれども、南方支那は常に帝王の叛徒にして、力めて帝王の節制より離脫せんとすればなり。北方支那にして帝王に反することあらば、そは新たなる帝王を得んが爲めに反するものにして、決して叛亂の爲め反するに非ず。南方支那の帝王に反するは、新たなる帝王を得んが爲めに反するに非ずして、唯だ叛亂の爲めに反するのみ。南方支那は自由と權利とを欲し。北方支那は服從と秩序とを愛す。要するに北方支那の思想は專制政治に適し、南方支那の思想は民主政治に適す。

南北政治思想の相違せること其れ此の如しとすれば同一政體を以て之を統治して、其紛擾なきを望むは、氷を欲する者に湯を薦め、上戸に菓子を與へて以て其滿足を得んとするよりも難し。且夫れ支那の疆域は、餘りに尨大に過ぎたるを以て、之を完全に統治し得るが如き强力なる政府を建造することは容易の業にあらず。吾人是に於てか南北分國の說有り。南北を適宜に割分して兩國となし、各々其政治思想の要求する政體を取らしめ、一政府に對する統治區域の縮少を計るなり。此の如くせば政體に關する南北の爭鬪を防止し、併せて政府の統治力薄弱なるよりする內亂を減少せしむるを得べし。然れども南北分國は目下の事情に照ら

して之を實行すること不可能なるを以て別に方法を求めて以て南北の調和を計らざるべからず。然らずんば支那の平和は永久に期望すべからず。見よ第一次二次三次の革命は皆南北各々其欲する所の政體を得んが爲めの爭闘にあらずや。

支那今日の政體は共和政體にして、共和政體は南方支那の思想には適合すれども、北方支那の思想には適合せず。是れ即ち南北爭闘の亂根なり。是故に今日の急務とする所は、實に北方支那の屈從を强ゐるに在り。屈從は苦痛なりと雖も、屈從の苦痛を忍ぶと天下擾亂の不幸を忍ぶと孰れか難き。且夫れ北人は南人よりも共性遙かに和平にして、自己の欲する所を得んが爲めに亂を爲すこと南人の如く甚しからず。況んや銕を變じて銘と爲すは難きも、人の思想に變化を施こすは決して不可能事にあらず。習久しければ性となる。暫く忍んで共和の治下に立たば、久うして遂に之に慣れ。終に共利便を感ずるに至るなきを保せず。且又た南方に適合したる政體と雖も、今日俄かに純然たる共和政體たること能はざるは、之を現在支那の國情に觀て首肯せらるべし。その交通、その敎育、その財力、その知識、觀來れば其程度は未だ以て十分に民意を代表するの議政機關を作るに足らず。是故に當分は專制政治と共和政治との合の子の如き制體を以て滿足せざるべからずして、此道理は南方の急激派にも早晩了解せらるゝに至るべく、かくて南北の接合を見んこと益々容易ならずんばあらず。然らば則ち今日支那の急務とする所、北方支那の屈從を强ゐるに在らずして何ぞや。是を以て勸說の方法にして行はれずんば、武力の手段に訴へても、之が遂行を期せざるべからず。而して今日能く此任務を遂行すべき者、段祺瑞其人を措いて復た他に求むべからず。何となれば共威望、地位、實力の若くは控制すべき者、唯だ彼れ一人あるのみなればなり。然らば則ち支那四百餘州の治亂は一に彼れの進退如何に由つて決す。段の責任や重且つ大なりと謂つべし。人或は段が第二の袁世凱たらざるなきやを疑ふ。

若し果して此の如きことあらば、吾人獨り段の爲めに之を悲むのみにあらざるなり。

ナイアガラを見物せざるの記

厨川白村

一

有名だの著名だのといふ事に寸毫の價値を認めず、名所名物はもとより名士名家などと云ふ者にろくな人間のない事を腹の底から確信してゐる僕は、天下の名所ナイアガラの瀧を見るに至つて全く愛想をつかした。

この數行を讀むだわが故國の友は、杖と義足とに縋つていま異郷を漂浪せる黄いろん坊の小男が一人、懸崖を流れ落ちる千丈の瀑布の前に立つて、ふゝんとせせら笑つてゐる妙な顔つきを、早くも眼前に髣髴し給ふや如何に。

工場の技師や測量師の使ふものさしと云ふ道具で測つて見ると、ナイアガラは成るほど田舍者おどしの案内記や名所圖繪にある通り、數字の上では何百尺何千尺の大瀑布であらうが、雄大崇高の感じから云へば、斷じて日光華嚴の瀧の足もとにだも寄れるものではない。

幽趣を解し風韻を貴び得るまでに發達したる東洋人の自然詩觀は西人の遠く及ばざる所であるが、その日本人のあたまには、瀧と云へば必ず先づ背景として幽邃なる山嶽の美を聯想する。ところがナイアガラには肝腎の此背景が一つもない。唯だもう茫々漠々たる大平原のまんなかに、大きな水の流れが二股になつて落ちてゐるといふ頗る藝のないものだ。天を摩する綠樹

欝蒼の山かげから垂れたる百尺の素絹、その水の音は谷に響き山に轟いてこそ瀧の美しさも貴とさもある。一分間に幾萬尺立方の水を落したとて、僕が水力電氣の職人でない以上、一向おもしろくも可笑しくもない。苔むしたる岩のはざまをちよろ〳〵と流れ落ちる「瀧の白糸」こそ、こゝへ來て見てひとしほ懷かしい者だと思つた。

何事にも先づ大小によつて價値を論じでりけえとな趣味よりは大味なものばかりを貴ばうとする、感性の粗硬な俗物には、一種の見せ物としてナイアガラも結構であらう。世界の四方から例の名所見物といふ事をしにくる田舍者が黑ん坊、白ん坊はもとよりのこと、黄いろん坊までが千里を遠しとせずして恁んな所へ集つてくるのは、いかにも尤も千萬な次第だ。

瀧の生命は凉味にある。大きくても小さくても夫れは問題にならぬ。綠のこかげを見えがくれに落ちてはたぎつ水の音の、遠くかすかにこだまに響くを聞いただけで、早くも所謂凉風腋下に生ずるの感あつてこそ瀧は難有いのだ。一掬の凉味なきナイアガラは、此點に於て遙に京の清水の音羽の瀧に劣れるものである。

また幽邃に伴ふ神祕の趣味も瀧の生命の一半だ。殊に日本の瀧には宗敎味の色彩があるから嬉しい。名からして華嚴般若のゆかしいのは云はずもがな、那智の文覺上人を引合ひに出さずとも、善男善女が祈願をこめての修行は南禪寺の皷が瀧にでも見られるではないか。ナイアガラに至つては、水力電氣の車がまわつてゐてそれを兵隊が番をしてゐると云ふ始末。

京見物にくる田舍者がよく淸水の音羽の瀧の小なるを笑ふが、小さくてもあれにはどこか趣きがある、風情もないではない。ナイアガラを雲突く大男に譬ふれば音羽の瀧は可愛らしいお姬さまの樣だ。燈をささげ香をたいて、合掌しながらあの美しい水をいただいてゐる若い女たちを見ると、何だかゾラが書いた佛蘭西のルウルドのやうな難有味も忍ばれる。

西人の自然美感は甚だ幼稚なもので、異常の天才を除いて一般に云へば、まだなか〳〵東洋人ほどの de-

Honey の域には達してゐない。何だか理屈めいて可笑しいが、之は東西文藝の著るしい相異の點だと思ふ。希臘の昔から歐洲の文藝は人間に即する興味を以て中心としたもので、此方面には著るしい發達をした。その代り自然美に對しては到底支那や日本の文藝に現はれた様な幽遠深邃の趣きを求めがたい。つまり希臘以來西洋の文藝には人間が主で自然は從であつた。東洋の文藝には常に自然が主で、人間は從たるの位置にあつた。西人が自然の美に目ざめて眞に天地山川そのものを解するに至つたのは、十八世記末浪漫主義（ロマンチイシズム）勃興以後僅に一世紀あまりの事ではないか。西人はゲインズボロ、コンスタブル出でてはじめて山水畫の美を解し、ウォオヅウォオス等湖畔詩人の『抒情詩集（リリカル・バラツヅ）』出でてはじめて親しく自然の靈興に觸れたのである。之をわが萬葉詩人が二千年の昔から山川草木花鳥風月の美をのみ歌つて、よく幾百篇の抒情詩の珠玉を後代に傳へたのとは、固より同日の談ではない。

自然美を感得すること深く、これを愛すること強き日本人は、人爲を加へざる自然の儘を樂まうとする。西人は人工を加へて後はじめて自然を享樂し得るのである。之は東西庭園の造りかたを比較しても明かだ。日本のは純然たる自然の風景の摸倣であり、西洋の庭園は極力自然を破壞して人工美を喜ばうとするもので自然本位と人間本位との差だ。

僕がこゝへ着いた晩は十三夜の月がむかふの山の端（は）——と云ひたいが山はないので、瀧のむかふの低い森の上に出てゐた。何萬燭光かの電燈をちやうど探照燈（サアチ・ライト）のやうに、大瀑布の一方の崖の上と他方の崖の下からと、兩方から對角線の方向に斜めに瀧の面を照らすやうに仕掛けた具合は、僕の大嫌いな活動寫眞その儘の光景である。一風呂あびてからほてるのぼおちへ出て涼みながら、月かげを宿した水の流れを見やうと思つた僕は、先づこの米國式淺草式でがつかりさされた。そして電燈の光にけおされて茫乎（ぼんやり）してゐるお月さまを氣の毒だとも思つた。

月といへば紐育（まち）の街をあるきながら、僕はいくたび

か本當に月を見たいと思つても果さなかつた。人力の限りを盡して拵え上げたあの大都の、四角な摩天樓(スカイスクレエパア)の間から見る月と、嵯峨野の奥にすだく蟲の音を聞いて軒端(のきば)にながめる月とは、似ても似つかぬ別ものでありとは知りながらも、今更のやうに呆れた。

よそごとではない、日本も今に倣うなるのだ。僕が大阪の中學の生徒であつた頃に屢々遠足に出かけて行つたあの箕面の瀧を、いつか家族を連れて二十年ぶりに行つて見たら、人間力と黄金力とが猛烈に暴威を振つてゐるのに恐入つて歸つて來た。

瀧といへば僕は先づ華嚴の瀧をおもふ。オンタリオやイイリのやうな平原の湖水とちがつて、山のみどりに深く包まれた幽邃な中禪寺湖の水が、千尺の懸崖を一息に落ちるあの水の姿には、雄大もあれば莊嚴もある。山々をゆり轟かして落ちたぎつ水の音には神秘の靈威がこもつてゐる。僕があすこへ行つたのは既う十二三年ほど昔の、忘れもしない七月一日だ。殊に其頃は藤村操といふ「神話(ミス)」でこの瀧の殊に名高かつた頃である。僕はあの話を、明治の或る時期に於てわかい人たちの思想界を支配してゐた一種の浪漫主義(ロマンテイシズム)が、日光山嶺の自然美と相結むで産み出したる近頃の唯一の「神話(ミス)」だと今も思つてゐる。

その時の一行はたしか五人であつた。樗牛の弟で今は故人になつた齋藤(野の人)君もゐた。いつも浪漫的な夢の國に住むでゐるやうな齋藤君は何だかにや〳〵笑つてゐる人であつた。詩人にして哲人のおもかげのある今は代議士のO君も其時ゐた。僕はあの人と歌が濱の湖上に舟を泛べてバイロンの集を誦した事を思ひ出す。そばには白馬銀鞍の貴公子を想はせるやうなA君もゐた。關羽のやうな美髯を振りたてゝ一喝すれば山賊も逃げ出しさうなS君が瀧を見あげてゐる顔つきが、今も目の前にちらつく。瀧壺まで降りて行つた一行は仰いで華嚴の壯麗を見てしばらく言葉もなかつた。今まで物凄い暗い色をしてゐた空は、この時俄に沛然たる雨を下して、天地も碎けよと雷鳴が頭の上で轟く。之には元氣のいゝ一行も膽をつぶして、谷底からづぶ

溺れになつて山上の茶店へ逃げ込んだ事を、いまだ記憶してゐる。

あゝ其頃――おもへば其頃の僕はまだ浪漫的な美しい戀を夢みてゐた青年であつた。いま天外萬里の異郷に、瀧を見れば故國の華嚴をおもひ、華嚴をおもへば古き友を懐ふ。そして十年まへのおのれを顧みるとき……

之ではナイアガラが妙なところへ落ちて行きさうだ。話は更に逆戻る。

二

さう云ふ自分もナイアガラ見物に來てゐるではないかと、よくそんな事を人は言ひたがる者だから、こゝに一言ことわつて置くが、僕は斷じて見物などには來やしないよ。名所などゝ名のつく所は、三尺てまへ迄行つたつて横を向いてゐる。僕は故あつて此夏休みの二月(ふたつき)を、ナイアガラの正面の加奈陀の側にあるほてるで暮してゐる。いやでも應でも、朝に夕にこの細からぬ瀧と睨みくらをせざるを得んではないか。桑港に着いたとき紐育へ行くなら途中ナイアガラを見物して行くのが順だと勸めた男があつたから、一喝に附してやつた。

「故あつて」といふのは他(ほか)でもない、この瀧に近いイイリの湖畔に別莊を有つてゐるF夫人の著作を助けるために、夏おひまならば來て貰ひたいと兼ねて頼まれてゐたからだ。

ほてるの前の川一つ隔てゝ向ふは米國、こちらは英領加奈陀。その間に大きい鐵橋が一つある。橋の上からこわ〴〵下を見ると、神經衰弱にあらずとも目がぐら〴〵しさうな矢鱈に高い物である。ところが此橋ぐらゐ渡るのに手數のかゝる厄介な橋は天下他にあまり類はなからうと思ふ。

橋のたもとには兩岸に役所がある。稅關や移民官の取調べの外にこゝで橋錢を十仙(セント)づゝ貪ぼるのである。此橋は官有でなくて私設鐵道會社が營利的にやつてゐると云ふ、日本でならば先づよほど片田舎にでもありさうな話だ。最初停車場からこゝへ來へると、金ぼたん

の役人がのこ／＼僕の自働車のそばへ來て旅券をしらべる。職業は何かと訊くから、そこに書いてあるぢやないかと云ふ。金錢はいくら持つてゐるかと聞くから懷には二千弗あると吹いてやつた。まだいろんな事を訊いて、やつとAll rightと來た。今度はまた外の男がスウト・ケエスを訓べやうとするから、おい待つて呉れたまへ、こゝで檢査をされてはあとの荷造りに困るから宿の方で調べて貰はうと、今度は頗る丁寧に、ちよと、哀願の氣味で云ふと宜しいと承知した。更にまた二十五仙出せといふ、之は自働車の橋錢だ。それも濟むで、漸く無難でほてるに着く。三個の荷物はほてるのぼおいがどこへか形付けて、稅關吏の來るまで開ける譯に行かないのだ。待てど暮らせど役人なる者はやつて來ない。いめ／＼しいからぼおいを呼び付けて訊くと、明朝でなければ檢査は濟みませんと云ふ。仕方がないからその晩は汗じむだしやつも代へずに、食堂へ出た。

その翌々日かに今度は電車に乘つて亞米利加側の町へ行くと、前のとはまた別人の見知らない老人の役人が車內へ這入つて來て一々調べる。異人種の僕のところへ來てまた旅券をと云ひ居る。旅券の調べは既う前日に濟んだから宿に置いて來たと答へる。それなら一寸こちらの上役の處まで來いと云ふ。そんな必要はない筈だと僕が頑張る。いや來いと云ふ、行かぬと頑張る。實際こゝで電車を降りて了へば、それから二三丁あるかなければならぬ。そこで"I don't like to step off the car; I'm a cripple."と、まるで僕は不具者である事の大なる特權を有するかの如くに、頑として動かずにゐる。すると、むかふから此樣子を見てゐた役人が、其人は可いんだ、わかつてゐると云ふ。夫れで事は濟むだ。

恁う初めから二度も苦い經驗をした僕は成るべく此面倒な橋に渡らぬ事にきめてゐる。石川丈山の蟬の小川ではないが、亞米利加側の町へは一週間に一度も行かない。それでも郵便局なんかに用があつたり、紐育の新聞を買ひに行つたり、やむを得ぬ時は出掛けて行

く。役人も此頃はこの界隈に唯一の日本人として既う僕の顔を覺えてゐるらしい、面倒な事は云はない。こつちから先づ How do you do? とやつてやると、笑つて其儘に濟む。こないだも新聞紙に包むだ鰻を持つて知らぬ顔をして僕が行き過ぎやうとすると、それは何かと咎める。わきには銃劍をつけた兵隊さんが番をしてゐる。之はうまい葡萄酒だよと答へる。爆裂彈(ボムシエル)ぢや無いよと附け加へる。この頃は戰爭で非常に警戒が嚴重なのださうだ。バフアロから僕の處へ筆記にくるたいぴすとの亞米利加人でさへ、半時間ばかりも取調べにかゝつたと云つてこぼしてゐた。

　河一つ隔てて米國と英領とであるが、何だか兩方の氣分が異(ちが)つてゐて面白い。ほてるの屋上高く飜へるのは、何時(いつ)見ても氣持の好い英國旗(ユニオン・ジヤツク)である。階下のほうるには先帝エドワアド七世陛下や今のジヨオヂ五世陛下の畫像が掛つてゐるのも目新しい。ほてるの隣は女王(クヰン)ヴクトリア公園(パアク)である。

　名からして氣に入つたこの美しい公園は、朝な夕なに僕が唯一の散歩の場所である。西洋の芝生(ロウン)は如何(どう)して恁う綺麗なのだらう。靑い毛氈を敷きつめたと云へば少し月並だが、全くその文字通りである。奈良の嫩(わか)草山(くさ)の春を、美しと飽かずながめた事はあつたが、日本で恁ういふ水々しい、そして柔い感じのする靑の色を餘り見た事はないやうに思ふ。その靑々とした中に女の白い衣物や赤い帽子のちらつくのは、色の配合が如何にも夏らしくて好い。紐育あたりのもさうだが、こゝの公園にも常盤木が少いために、すべての綠の色が淺くて晴やかである、新綠の頃の美しさが思ひやられてゆかしい。しなやかな枝を地上に垂れた大樹のかげに腰を卸ろして、讀書に疲れた目を休ませてゐると名も知らぬ小鳥や栗鼠(りす)のとむでゐるのに、いつとは知らず心を奪はれる蟬の聲も久し振りで聞いた。

　この公園を行き盡したはての所に一軒料理屋がある。自然石をその儘積み上げた雅味のある建物で、二階の食堂で飯を食つてゐると瀧のしぶきが凄じく吹き付けるのも面白い。階下(した)は曹達水やアイスクリイムを賣る

ところで、土曜や日曜には辨當をさげて家族連れで出てくるびくにつくの仲間が、この邊に大勢集まつて皆がさんどゐつちを頰張つてゐる。青いぺんき塗りの食卓づきのロハ臺といふものも私ははじめてここで見た。

三

黄金慾と名譽心との化合物の樣な俗物の俗腸のなかにも、じつと辛抱して交際（つきあ）つて見てゐると、どこか一つ位は人間らしい取り得の出てくるものだ。それと同じやうに、ナイアガラも毎日五十日六十日と面（つら）を突き合はして睨みくらをしてゐると、なか／＼愛すべき者もあれば親しむべき者もある。大に僕を感動せしめたる其一つは馬蹄瀧（ホオス・シユウ・フオル）である。奔湍激流一たび千丈の巖に臨むで落下するや、碧潭忽ち雲を起し霧をなして高く天に冲す、と云ふと何だか昔の小學生の作文の樣だが、全くその通りなのだから仕方がない。飛沫濛々たる雲霧をなして殆むど大河の全面を蔽ふと、之に午後の日ざかりの太陽が直射する。七つの色もあざやかな虹が河の一方から他の方へと橋渡しになるのを見たとき、斷じて褒めない積りで齒を喰ひしばつてゐた僕も、思はず知らず「ああ美しい」と口に出た。嘗てラスキンの『近代畫家論』を讀むで、水蒸氣の美を論じiridescence の壯觀を說いた一節にひどく感服された事があつたが、あの大なる自然美の批評家をしてこの光景を描かせたらば……と、如何な負惜みの僕も少々怪しくなつて來た。

この雲霧の下をくぐつて、名もゆかしい「霧の乙女（メイド・オヴ・ザ・ミスト）」といふ小蒸氣が、見物客を載せてしづ／＼と、如何にも處女の憶するが如く恥ぢらふが如くに瀧の下まで近づいて行く。偉大なる自然力の前に、さかしらなる人間力の如何に憫れむべく小なるかを象徴する者の樣に見えて、之にもなかなかすてがたい趣きがある。

紐育で同じ宿にゐたM君が日本へ歸る途中此地へも寄ると云ふので、前月ここへ來る時もシラキユウスまで同行して、そこで別れた。氣の利かない無器用な無性者の、おまけに一本足の僕のために、出發の時はM

君が荷造りまでして呉れた。そのM君が、僕がここへ來てから十日目位に、向ひの亞米利加側の町の或る宿へ着いたと云つて、僕の部屋に電話をかけて來た。日本語で大きな聲を出して電話で話をしてゐる僕の聲を聞いて、ほてるの女中が笑つてゐやがる。どうだ、日本語といふものをはじめて聞いたかいと云つてやる。あした日本人の友人がこゝへ訪ねて來るのだと、嬉しさうに僕は餘計な事まで吹聽する。

かねてM君が來たらば夕すゞみには一緒に湖水のふちをドライブしやうと思つてゐたので、翌日ほてるで食事をしながら早速其事を話す。ここには僕の自働車——實はF夫人のをいつも借りてゐるので——があるから、夫れに載せてあげやうと云ふと、なあに昨日停車場に着くが早いか早速見物自働車の切符を買はされました、とM君が云ふ。六弗とか七弗とかを奮發すべく餘儀なくされたのださうだ。それがまた大きい五人乘りで、一人ぼつちも可笑しいから、僕にも一緒に來いとM君が誘ふ。折角の厚意だから難有うと云つて承知したが最後、翌日はみんごと赤毛布のナイアガラ見物と出かけて、僕も苦笑しながら、その名所なる者を一週するの光榮を有した。

馭者は先づ僕等二人を瀧の下流七八丁ばかりの峽谷へと引張つて行く。この邊一帶には幾十軒とある貝細工だの瀧の寫眞だの土產物なぞを賣る店が、ちようど二見とか日光とか云ふ所でと同じやうに、見物といふ事をする田舍者を呼ぶのである。峽谷の入口にも夫れが一軒あつて、店を奥へ突き拔けると階段がある。それを上つて觀覽切符を賣る帳場のそばから下を見ると約四五十間もあらうと云ふ、まるで地獄の底へでも降りて行くやうなケーブル・カアの軌道が一直線についてゐる。夫れを見たゞけでうんざりしたる僕は「もう、よさうや」と云つてる間に、氣早やなM君はちやんと一人前一弗といふ切符を二枚買つてゐる、そして、そんな事を云はないでまあ行きませうと云ふ。そこで僕ものそ〳〵しりから隨いて行つて床几のやうな物に二人が腰を卸した。ごろ〳〵と車が運轉して下の方に向つ

て動き出す。何だか薄氣味のわるい道を遠く奈落の底までも降りて行く様で、尻の下がこそばゆい。いよ〳〵降り盡すと、そこの出口がちようど保津川の急流の様な所で、瀧の水がこの峽谷で巖にせかれて激してゐるのである。長さ三尺ばかりの赤硝子と青硝子とを二枚ならべてある、之を透かして奔流を見ると全く活動寫眞の通りだ。俗惡趣味はこゝに至つて遺憾なく其極致を誇してゐる。そばに老爺が一人ゐて紀念にこゝで寫眞を寫せと云ふ。相手にせずに横を向いてゐてやると今度は一枚寫眞を持つてきて之を見よと云ふ。何かと見れば、日本の何とかいふ中將だか大將だかの顏がまんなかに在つて、同じ日本人が二十人ばかりぞろりと列んでゐる。そして老爺の云ひ事が好い「私は日本人か好きです」と來た。癪に障つたから「お前がそんな物を見せたり、餘計な事を云つたりしなければ、一枚ぐらゐは寫してやるが」と云つて、さつさと引上げた。

待たしてある自働車に乘ると、今度は Table Rock と稱する處へ引張つて行く。一度もう峽谷で懲り〳〵した僕は、M君に「今度は君だけ行つて見て來たまへ」と云つて、そこの床几でぽかんと休むでゐる。二三十分もすると、そこの番人が僕を呼ぶから行つて見ると頭のさきから足の爪先まで眞黑の雨合羽で包むだ、づぶ濡れの、今海底から引上げたばかりの潛水夫のやうなM君が立つてゐる。その姿は宛として一個の怪物である。わきにゐる大勢の「田舍者」の白人も、矮小なる日本人の此異様なるいでたちを見て皆くす〳〵笑つてゐる。僕はちよと尻目でM君を見て、「そりや何だ」と云つて忽ち横を向いた。「あなたに見せようと思つて」とM君はいさゝか不平である。そこで由來を聞くと、この裝束をして隧道を降りて行つて瀧壺に近い穴から覗くのださうだ。瀧のしぶきで此通りびしよ濡れに成ると云ふ。僕も感心した。

また自働車に乘つて次はどこ、次はどこと、色んな處を五六ヶ處も引張りまわされた。M君が車をおりて見物に行つてゐる間、僕はいつも車上で主人の置き忘れた遺失品の様な顏をして、悠々たる行雲流水をなが

めて待つてゐる。いそ〳〵と車に歸つて來るM君が其度ごとに見て來た話を面白く聞かして呉れる。ふん〳〵と云つて聞く。

次の日の夕かた、今度は所謂「僕の自働車」に乘つてM君と一緒に出掛ける。

いつも來るF夫人の家の馭者に、けふは友人と一緒だから、一時間あまり景色の好さゝうな涼しい處をドライヴして呉れと云ふと、例によつてにこ〳〵して首肯く。

僕はこの馭者が無闇に氣に入つた。おほかた加奈太人か英吉利人だらうが、いつも主人のお仕着せのきちんとした馭者の服を着て、愛想もなければ追從もない無口な大男、こちらから何か云へば溫顏に笑みを湛えて簡潔に返事をするだけだ。こないだも夫人の山莊から僕が歸りがけに書物二三十册ほてるへ持つて歸るので、さきへ車のなかに入れさせて置いた。いつも僕一人で乘るのだから、本は汚れないやうに座席の上に置いてあつた。ところがけふは夫人が町まで行かれると云ふので途中まで同じ車に乘られる。乘るとき見ると書物が一杯置いてあるので、坐るところがない。そんな所へ置けば坐る所がないぢやないかと云つて叱られてゐる。わるい顏もせずに、大きな身體をまた車の中へ入れて、丁寧に本を一册づゝ下の方へ列べた。一體日本人には恁う云つたたいぶの人間が甚だ少い。車夫馬丁の徒に至るまで猪口才子風の、こまつちやくれた、利いた風な、『狂犬』の所謂「サイシ」風の、顏を見た丈けでも嘔吐を催うす樣な奴が甚だ多い。倫敦や紐育の巡査などによくある、恐ろしく大きくて、恐い樣ななつかしい樣な、どこか鈍重な所のあるたいぷは殊にアングロ・サクソン人種に多いと思ふ。恁かるconnectionに引合ひに出しては、先師に對してまことに禮を失して相濟まぬ次第であるが、昔し僕に英語を敎へて下すつたL先生が、あの四斗樽みたやうな大きいお腹を前へ突き出して、のそ〳〵と敎壇へあがつて、布袋さまの樣な可愛い、そして何だか恐ろしい樣な下膨れの顏をして、文學の話をされると、僕は云ふに云

はれぬ懐かしさを感じて、筆記する事も忘れて先生の顔に見とれてゐたものだ。

またもや話が脱線した。

ちよと用事があつたので僕がF夫人の山荘に立寄る間、今度はM君が「主人の遺失品」の如くに車上で待つてゐて呉れた。幾萬坪あるか知れない、綠樹青草に蔽はれた小山を庭にして、その中に古い英吉利風の石造の家か、ぐらんだから木の間がくれにナイアガラの奔流を見渡せる位置に建てられてゐる。いつも私が許して宗教と音樂と繪畫との部屋だといふ一室で、十分間ほど用談をする。日本の佛像の据えてある傍に、みごとな「フレミッシユ・タペストリ」と、ギイド・レニの眞筆「大天使」の一幅が懸つてゐて、よく佛蘭西語を話す家庭敎師の婦人が四つばかりになる令息と時々ぴあのを彈いて歌つてゐる部屋である。

こゝを出て今度はイイリの湖畔を十哩ばかりドライヴした。その邊の牧場にゐた四五匹の牛が、水際の柳のかげに水を飲まうとして、自働車の響に驚かされて駈け出した。車を道ばたに乘りすてゝ、男女幾人かゞ草原で辨當をひろげてゐるのも、のどかであつた。夕ばえの茜の色を水にうつした湖上のながめ、そこを吹き渡る夕風の涼しさも、日本へ歸つたら之もまた思ひ出の種にならうかとM君と語つた。

M君は其翌日かに加奈陀を經て日本へ歸るべく出立した。僕はまだ「主人の遺失品」のごとくにぼてるにぽんやり殘つてゐる。（八月二十二日記）（をはり）

次號の說苑欄には

ヤドローヲ村の一日　片上天弦

なる露國よりの趣味多き通信文を掲載すべし

菊の秋

黑頭巾

其一

●菊の秋來りぬ。天高くして、白露、野に布く。曉色微茫、秋日、爽明の氣を齎らして、林木の梢に上り來る時、野草、葉々、悉く白露を帶びて輝く。就中、菊花、花と葉と白露を聯ねて燦たる事、眞珠を纒ひて立てる艶人に似たらずんばあらず。

●秋草は都の女の如し。姿態妍冶、皆、愛す可し。草葉に、白露を帶びて、葉末の垂れて妖嬌たるは、元祿の美女が、華やかなる模樣の裾に、『鎮』を垂れしにも比すべし。

●秋草の尤も艶美なるもの菊花なり。譬へば都の女の輪廓、肉線の窈窕たるに容顏、玉を欺くにも似たらん乎。

●秋晴の午は喧暖、夕暮は漸く涼冷にして薄明なり。遠天、淡く夕照を紅染し、庭陰、暗くして、花、悉く彩色畫の花に、水を抹するの氣味あり。

●此の時、大輪の黃菊花、ひとり鮮やかに金光を溶かしつゝ、夕光の微なるに映發し、花容、審かに辨ず可き事、恰も、王昭君、薄闇に歩して、眉目、悉く精明なりしを憶はしめずんばあらず。

其二

●曉光の菊花、晩風の菊花、皆、畫く可し。然れども明月、溪邊の野菊花、天界の畫趣を象徵し得て、人間に存するものならずんばあらず。

●溪邊の野菊花、明月に白露を帶ぶ。其の淸楚、實に、天上の人の如し。若し、涼風、明月、白露地に滿る時、大輪の菊花をして、嫂婷として溪邊に立たしめよ。

●月下の、大輪の菊花は白ならずんば、黃ならしめよ。大輪の菊花、瓣々、葉々、悉く白露を帶び、森然として淸流に臨む時、知らず人間、何等の詩境か、能く之に比するを得ん。唯だ畫趣の織女星のみに似たらんのみ。

◉織女星、牽牛星と相逢ふ。瓔珞の天衣を纏ひ、明珠白玉、燦々として、花顏、盛裝を凝らしつゝ、銀河を渡る。織女星、銀河の水に映ずる時、須らく菊花、月下の清溪に映ずるに似たらずんばあらざるべし。

◉天上、又た花あらん。花あらば菊花は天上の秋を飾るらん。若し天上に花無く、花は唯だ地上の誇たらしめば、菊花は天上の畫趣を象徵しつゝあるなるべし。

◉天上、人間、言語相通ぜず。天上の美なるもの、人間より見れば恐く是、不解語の花たらざるはあらず。則ち知る、地上に存するの美なる者、解語の花は人間にして、地上美を象徵し、不解語花は天上美を象徵しつゝある事を。

◉星落ち、星飛ぶ。地上に向て星の降ること雨の如くなりし事あり。未だ天上の花の降りしを見ず。地上の花、若し星を象徵すとせば、天上の花は、月光に由つて、地上に移種せらるゝにや。

◉流星、花種を伴へりとは見へず。恐らくは人間の眼、天上の花種を見る能はざるのみ。流星は星氣と花氣とを携へて地上に來るものなるらし。天上に花無く花種無からしめば、星氣の美なるもの、地上に降るの時、花を醸成せずんばあらざるべし。

◉吾輩、これを以て、天上美と菊花との由來を考へ、織女星の精、地上に落ちて、菊花となしたる可きを想ふ。これを以て、かばかりの名花、春に開かずして秋に咲く。其の花種の來る、織女星出現の後則ち恰も金風の秋に當るなり。

其三

◉何故に菊花を貴種と爲すや。姿態、高尚。問はずして貴種たるを知るべし。花は人間と異なり、花姓に閥閲ある事無し。然れども花品に上下無き能はず。

◉地上の萬花、悉く天上萬星の精なりと憶へ。但だ星氣、散じて地上に來る時、其の來る、星氣の厚薄無き能はず。天上花種の地上に傳來するの初、星氣の厚薄は則ち花品の上下を生ずるものに非ずや。

◉花品の上乘なるものは、其の初、天上、星氣凝つて星を爲すもの、而して秋氣清爽の朝、之を地上に送り來る。則ち其の釀して名花を爲すものも、必らず色彩鮮妍、秋の夜の澄めるが如くならずんばあらざるべし。

◉吾輩、菊花の由來を、此の如く想像す。星は秋の精、而して秋の精を地上に象徵するものは菊花なり。

◉菊花の色妍に、肉豊に、滋味の津々たるを覺ふ。之

を食へば仙化するに足る。若し菊花の水を汲んで飲めば、猶ほ長壽を得ると傳ふ。多く星華を食ふ者、長壽無窮なるを得るの理に非ずや。

其四

●「天下に菊の名幅無し」といはずや。畫家、菊を描く者、徒らに其の豐麗を寫して花神を寫さず。豐麗の末に馳せて俗に陷る、名幅無き所以。菊、若し解語花なりせば、必らず吾が風神に髣髴たらずといふなる可し。

●野菊の蕭洒たる、叢菊の莊麗なる、共に可し。大輪の叢菊は、豐滿なれども、一本の菊、自然に伸びて、亭々として大輪の花を捧げたるが尤も佳し。

●蓋し一本の菊、秋風に獨立せるは、氣品、花中に獨歩するの慨あり。菊花を描く者、此の時を描く可し。

●然りと雖、大輪の叢菊を見るに、其の俗なるを覺えず。而して叢菊の畫を見れば概ね俗ならざるは無し。知る可し、人間、菊花を造るの手あり。未だ菊花を畫くの手を有せざる事を。

●畫くの手を有せざるは、畫くの心を有せざるなり。高雅の心、菊花と匹儔するに至らざれば、則ち菊花を畫くに足らず。

其五

●菊花の紋章は、唯だ其の畫趣より見るも頗る興味あり。菊花の紋章は、佛經の蓮華より變遷し、脱化し、來ると說く者あり。吾輩は與せず。吾輩は、菊花紋、必らず菊花より由來するを疑はず。

●古瓦の紋樣に見る蓮華は、或は、菊花に髣髴たるものあり。轉ずれば能く菊花に到るゝ得可きに似たり。然れども是れ唯だ蓮華の紋樣が、菊花紋に近似するの刹那を見たるのみ。

●菊花紋、十六瓣。野菊花より來る。野菊花は十六瓣なり。昔時、野菊花、日本の野に咲き匂ひし事、エルサレムの野に百合花の咲き滿ちしが如くなりしなるべし。

●バイブルには、「ソロモンの榮華の極だにも、其の粧野の百合の一つに若かざりき」と言へり。野の百合花は、彼等の理想を象徴する花なりしなり。吾輩は、吾が日本の古民族が、野菊花を捧げて、以て、理想の象徴となせし事を想ふ。

●花より見たる日本は「菊花國」なりしなり。菊花の紋章は則ち菊花國を象徵す。日本人の理想、歷史、天

分、すべて菊花の中に在り。

其六

●百合花の咲ける野を想像し、併せて菊花の咲き匂へる野を想像す。大輪の菊花、年々、繁殖し、野菊花は到處に咲き誇り、日本の秋は、菊の秋となりぬ。

●比年、帝都の菊花の盛、ます〳〵艶說するに足るものありと雖、菊花の燎亂して野に滿ち、谿に滿ち、地を擧げて花氈と爲すこと、譬へば紫雲英の畑の如くなるを得ず。日本は菊花國なり、吾輩は、菊花の全盛をして、紫雲英の如くならしめん事を夢想す。

●人間、百合花の野を見る事あり。バイブルの古國のみならず。日本の南國にも百合花の野あり。未だ菊花の野無し。夢に、菊花の野を見ばや。

●紫雲英の畑が、紫雲、地より漲つて天に達する如く、或は、春の菜花の野が、金波十里、夕陽を浸すが如く、菊花の野を出現せしめなば詩境、畫境、果して如何。蓋し、人は夢の如く、花、人を浮べ、雲、降つて來り迎へん。

●菊慈童は菊花の情、然れども必ずしも菊花の野より出でず。菊畑の牛若丸甚だ詩趣あり。菊畑といへば、未だ〳〵小さし。

其七

●今、菊花の秋なり。菊花の淸香、地を覆ひ、花彩、天に映ず。菊花の氣、天地の間に薰ずるもの、蒸して菊花の雲となりて、薄明、半透にして、高天に瀰らん。

●此の佳節に際して、立太子の嘉儀に逢ふ。滿野の菊一齊に開き、大輪を捧げ、小輪を捧げ、均しく花彩を煥發して、芳を献じ、壽を貢するならずんばあらざるべし。

●皇太子は、高輪御所を發し、田町より三田線を經て馬場先門より、二重橋を登り玉ふべし。御經過の沿道をして、菊花の路たらしめよ。

●若し、御輦に向つて、花を捧ぐるを得ば、高輪より二重橋に到るの間、吾が國民は、悉く菊花を捧げ黃、白、紫、紅、あらゆる色彩の大輪、小輪を以て、路を塡め、地を塡め、人、悉く花を挿まざるは無く、花を捧げざるは無く、彩輝燦爛、菊花の雲、地上に下り舞ひ、磅礴して、新太子をして菊花の雲を踏み、菊花の雲に載せられて、國民、仰視、讃嘆の中に、御輦は二重橋に登り玉ふなるべし。

◉國民、若し、御聲に向つて菊花を捧げて、拜することを許されなば、人は、菊花の雲をおりて、新太子を浮べ參らす可く、人平、菊花平、此の時、人と菊と、萬古未曾有の「菊の秋」を出現せずんばあらざるべし。

菊の秋に際し、菊花を記して、以て、新太子を頌し奉る。大正五年十月二十日黒頭巾再記。

人穴お糸一代記

大窪逸人

▼丸山廓の象徴▲

唐の玄宗皇帝が、楊貴妃と、枕を、ともにするために、その二人の枕は、同じ一つの枕をつくらせた。

枕の長さは、三尺あまり、蜀紅の錦につゝまれて、その錦の上に、濃紫の絹紐を菱形の目に粗く編ませた柔い綱を、遍く掛けてある、それは眞に華奢な、纖長い括り枕であつた。

さうして、枕の内部には、奥ふかく、極めて好奇な裝置が、唐の名匠の手に仕組まれて、そこに微妙の音を奏し、その枕のおもてを、掌で押せば大きく鳴き、指にさわれば低く啼く。その啼聲が、そのまゝ鶴の啼く聲に、さながらに良く似てゐるゆゑに、「鶴の枕」と、名をつけられて、爾來幾星霜の後に、いつの代にか、吾が日本に渡來して、今は長崎の、丸山廓に第一位の青樓、花月樓の奥の廣間に、恭しく珍藏されてゐる。

若し、誰でも、西に旅して長崎に往き、丸山遊廓の緩い勾配の石坂を踏み、坂の正面の花月樓を、甍のうちに訪れて、

「鶴の枕を」と、その一見を所望するならば、灰暗い長い廊下を、幾つか折れて、奥まつた、閑寂な一座敷に導かれ、黒檀の臺のうへに、嚴かに載せられた「鶴の枕」を、まのあたりに眺め、そこに玄宗皇帝と楊貴妃

との、昔貧かな夢を、偲ぶにあまりあらう。

さて、こゝろみに、枕の上を心靜かに押さへれば、今も幾羽の鶴の聲が、指にさわる、蜀紅の錦のうらにちよ〳〵と切りに美しく啼きたてゝ、またさらに、四百餘州の盟君が、錦帳朱簾の裡に、珠翠香しき瑤のごとき妃を、同じ一の枕に擁しつゝ、數奇をやりし豪華な夜を、史上憧憬の心ゆくまでに、あり〳〵と彷彿たらしめるであらう。

その憧憬の心をば、耶馬溪がへりの山陽外史、西國行脚の蜀山人などが、花月樓の晝の奥に、筆に移した詩と歌と、それも「鶴の枕」に添えられて、本朝の舊幕詩人の風流を、あざやかな墨の痕に、常に新しく匂はしてゐる。

「鶴の枕」は、花月樓の誇、丸山の廓の誇、その丸山の廓から、舊幕の末のころ、一代の毒婦、「人穴お糸」が生れて出た、そのために、「鶴の枕」と「人穴お糸」との、二つが奇異な聯想に、人の心に結びついて、丸山廓の、歴史のうへの象徴になつてゐる。

▼行燈の火影▲

天草灘の、浪の沖から、黒船が烟を吐いて、野母の岬をまわり、稻佐郷の港のなかに、入つてくるやうになつてから、江戸の幕府は、其處の長崎に、外國奉行の制を設けて、新しい通商貿易を、先づオランダの國と、始めさせた。

玉蜀黍の毛のやうな、紅い髯を生やしてゐる、オランダ人が、出島の一角に住み始めて、長崎の土地の者は、デアマン(金剛石)を、ギヤマンと訛り、それがビードロに轉じ、さては其れが硝子のことになり、その他に、ビリリといふ霍亂の妙藥、ビロードといふ滑らかな絹の布などが、町のなかに、交り始めた頃には、新しく東から下つてきた江戸の人、京の人たち、侍も學者も、商人も、それらの多くは、丸山の廓に、西の國の女の、烈しいなさけに歡び耽り、廓を綴る狹い石だゝみの、斜めな路は、他國の人で、賑はひ始めた。

丸山の、廓一帶の潤ひに、高杉晋作が『金の遁げてゆく音』と、笑つたといふ絃歌湧くがごとき、晝夜を

わかたぬ遊蕩狼藉を、廓の地の者どもは、悉く悦んだ。

まして、一流の料理屋は「大鶴」に「藤屋」、一流の青樓は「花月」に「小川」、其等は素より随一に潤ほつて厠につゞく長廊下にまで、新しい白銀の臺の行燈を、隙間もなく、立て並べるほどに、心充ちる歓待の贅奢を好く盡すやうになつてゐた。

その「小川」の、家娘のお糸は、もう十六になつてゐた。

「お糸十六、小川のむすめ……」その美しいあまりに、お糸の華やかな評判は、小川樓の評判と共に高くなつて、丸山の界隈に、無くてかなはぬ一つに、謳はれてゐた。

内所むきの豐かな、小川樓の家のなかに、誰はゞからず、我儘三昧にふるまつて、のびのびと育てられ、まして振分髪の、あどけない時分から、家の遊女たちと、朝夕に姉妹のやうに親しむできて、そのうちに、なさけごゝろの懸引さへも、いつとはなしに、我知らぬうちに心に浸み、また、我が身美しとの、女の根づよい矜りにも、こゝろ充分に慢じてゐた十六のお糸は、すでに濃く早熟してゐるのであつた。

ものごゝろのついて、遊女の部屋の、鏡のなかに、誰も及ばぬ自身の眉目と姿の、どこもかも、我ながらしみじみと、美しいのを、心あくまで、獨りで味ふをりごとに、お糸のなさけは、戀を戀するおもひに魅せられて、それも乙女の新しさには似ず、尙ほ遙かに強くて深い爛れた戀の達引を、さまざまな趣に、想ひ描いて耽つてゐた。また、それだけに、お糸は、あくまで怜悧な性に、うまれついてゐた。

さうした想に耽るこゝろに、我から深みに捉へられて、謂はゞ戀の自己暗示に悉く弄ばれ、また自分で弄びつくしてゐた最中の、爛熟しきつたお糸のこゝろを、まさしく捉へた十八の男、それは友三郎といふ、廓のなかで生きてゆく、まだ若い律義な男であつた。

絃も歇み、歌も止み、軒ごとの大きな紅の提燈も仕まひこまれて、家々の表玄關の大火鉢の底にも、やがて埋火が灰になり、大方は眠りばかりの夢の世になれ

ば、友三郎は、朱塗りの扁たい箱を、幾つか重ねて、片肩に高く擔ひ、遊女たちの空しい胃の腑を、慰めるために、裏口から、裏口へと、娼家々々の軒を傳ふて、駄菓子を賣りに廻つてゐた。

「有平糖や、飴ん棒―、薄荷の板や、肉桂糖―」

さうした類の、甘いものを、友三郎は、自分ばかりが素足で、いつも冷く踏むでゆく、寂しい廊下の兩側に並ぶ、部屋から部屋へと、小さな賣聲を、佗しい節に響かして、行燈の火影が、おぼろげに映つてゐる、障子のそばを、流れるやうに歩いてゐた。

「友兄い、どんげん菓子が有るへ」

障子の中から、憊れたやうな癇だかい、遊女の聲が友三郎の素足を、呼びとめれば、やがて障子が開かれて、そこの敷居のうへに、友三郎が肩から下す菓子箱の縁に、しどけない紅友禪の裾が、長くこぼれて疊に餘り、友三郎は、そこに若干の商ひをするのであつた。餘分の饅頭を貰ひなどして、

「大きに有りがたうございした」と、律義さうに頭をさげ、復た幾つかの箱を、重ねなをして立ちあがり、廊下を遍く一巡りしたのちに、裏二階の梯子を降りて、再び暗い裏口から、星を仰いで友三郎は、出て往つた。

さうした一夜であつた。小川樓の、森閑とした廣い廊下に、駄菓子賣りの若い友三郎は、いつものやうに佗しい節の、賣聲を響かして、跫音を忍ばしながら、障子のそばを辿つて行つた。

一つの廊下を、行きつくして、そこの角を曲らうとしたときに、思ひがけなく、角の部屋の障子のうちから、

「友兄い」と、華やかな一聲が、友三郎を、俄かに呼びとめた。

その角の部屋は、燈が消えて眞暗であり、障子紙に暗のいろが、内から黝く浸みてゐた。さうして、障子は幾寸か、僅かに開いたまゝになつてゐた。

呼びとめられて、そこに佇むだ友三郎は、廊下の角の其の部屋には、いつも蒲團が積まれてあつて、提行燈をさげて入るのでなくては、中に燈のをいてないこ

とを、前から知つてゐた。その中から、思ひがけなく名を呼ばれ、いぶかり覗く友三郎の瞳に、廊下の角の置行燈のあかりが、ゆくりなく映しだしたものは、重ねてある蒲團の層に一人で凭れて、此方を向いてゐた、家娘のお糸の姿であつた。

微かなあかりに照かされて、なほ嫋々としたお糸の細姿が、長袖を兩手にかさね、暗にも眞白な纖い足さきを揃へたまゝ、胸を斜めに蒲團に凭れて、崩れるやうに立つてゐた。それを友三郎は、息を塞めて默つて視つめた。お糸も友三郎を、そのまゝ默つて、視つめてゐた。

くつきりと分けてあかるく浮いてゐる、皎い珠のやうなお糸の顔は、暗のうちにも、ほの〴〵と媚かしい香に笑つてゐた。やがて、お糸は、かさねた兩袖を解くと、舞ふやうに片手をあげて、友三郎を、さしまねいた。はら〳〵と動くお糸の指さきに、友三郎は吸はれるやうに、そのまゝ、障子の中に身を入れて、わな〳〵と顫へて疼く胸のうちに、怖れながらも我知らずお糸の姿に牽かれて行つた。

長蠟燭の、晝より白い光に照りかへされて、摺箔の裡衣に包まれた遊女たちが、虚焚の薫のなかに並んでゐる、昔の廓は、贅澤であつた。小川樓の廊下の角の、蒲團部屋に積むであつた蒲團は、眞綿ばかりを肌ざわりの纖かな本縮緬に、絹絲で柔かく縫つたものであつたといふ。

▼お糸友三郎▲

戯れた雙つの蝶が、はしなくも同じ花粉にぬれて、闌な春のこゝろに惱まされ、童貞、處女の聖らかさを、一時に褻した友三郎とお糸とは、同じ一つの罪の道を、彌がうへにも深く、共に手を握つて分け入つてゐた。

廓の習ひは何れさま〴〵あるうちに、廓の中の律こそは、まして嚴しく、犯しがたいものに、誰にも心得られてゐるといふ。その廓のなかで生きてゐる友三郎が、小川樓の家娘、それも廓一帶の名物に讃へられてゐるお糸をば、自由に占めたといふことは、お糸と友

三郎との身分の上下といふほかに、廓の律のうへからは、まことに容しがたき大きな叛逆であつた。

友三郎は、その自身の叛逆を、さうして、お糸も、その大きな罪咎を、自分が友三郎に犯させたことを、二人とも、互によく覺りあつてゐた。それだけに、廓のなかの耳と目を、若い二人は鋭く氣にしながら、小川樓の廊下の角の、蒲團部屋の、暗のなかに、果敢ないだけに心の烈しい逢瀨を、幾度かつゞけてゐた。

その逢瀨も、長くは續かなかつた。小川樓に「お仲姐」と呼ばれて、五十を已に越しながら、未だ脂ぎつて瑞々しい肌をしてゐて、遊女たちの總取締をしてゐた内所の女が、一夜、友三郎とお糸との、暗い逢瀨を蒲團部屋に現にみとめた。さうして、それは、お仲姐にとつて未聞の由々しい大事であつた。

お仲姐は、お糸のうまれない前から、小川樓に長く勤めてゐて、年月のもたらす權威を、身につけてゐた。さうして、丸山廓の土地の者たちは、女は素より古い顔をしてゐる男にしても、お仲姐のまへには、自から口に氣をつけて物をいふまでに、誰からとはなくお仲姐を推重してゐるのであつた。

そのお仲姐から、友三郎は、叛逆に等しい自身の大罪を、現に斯うと押へられ、たとひ其の場ばかりは、一旦密かに免されて、逐はれるやうに、放たれはしたものゝ、後の吾身に必ず迫つてくる、窮命責負を思ふときに、そこに、有るにあられぬ怖しさが、友三郎自身の心を、髓の髓まで、冷く長く慄はせた。

そこに丸山廓の、若衆の群々にとつて、友三郎一人の命ごときは、まことに雜魚の一匹よりも、また廉いものに違ひなかつた。お糸との、大それた彼の一事が、若し露見されるならば、また、たとひ其れが浮名噂のたぐゐに、聞きなされたとしたところが、お糸の妍かさを、日頃渇仰して自分たちの誇りにまでしてゐるやうな若衆たちが、友三郎の存在を、そのまゝにして置く筈がないのであつた。

まして、お仲姐の唇から、若衆の親分にあたる「鍛冶鐵」の肥つた耳朶に、一旦それと囁かれたが最後、

もうそれからのことは悉く明かであつた。大波止場の岸にある、周り六尺にちかい大きな鐵の彈（島原亂の有りし時、警備の爲に造りし石火矢の彈）の影から、簀巻にされた友三郎自身が、逆さに海に沈められてしまひ、未だそれでも若衆たちの、友三郎に對する飽くまで深い憎しみが、海に沈められた後にも、尚ほ強く殘つて餘りあるとなど、それ等の一切が、すべて友三郎に、まざ〳〵と良く分つてゐた。

友三郎の身內といへば、母一人子一人の仲であつたけれども、その六十にちかい一人の母さへも、友三郎の犯した罪咎を、斯うと聞かされるならば、そこに我が子に下された死の律を、母は誰を怨みやうもなく、深く觀念しつくして、廓の外に出逐はれてゆくばかりに過ぎなからう、友三郎には、その母の姿も、まざ〳〵と想ひ描かれた。

友三郎の斯うした憂ひの心には、たゞ出奔といふことばかりが、潮のやうに、つよく溢れた。

うまれた土地に、罪をのこして、他國の空に出てゆくのには、男の強いこゝろで定めた、烈しい奢りに充たされて、そこには、蒲團部屋の初めての戀を、咒はしいものにも省ひ始めながら、それでも、天地に自分ばかりが、確かに只だ一人だけ、心ゆくまで身にしめて知りつくしてゐるお糸の濃かい眞味、その謂ひがたき眞味に牽かされる、愛着の執念も、友三郎には、また却々に斷ちきれなかつた。一度びそれを懷へば、たとひ萬人が如何に大きく憤り、分けてもお仲姐が、友三郎を寸斷し肉醬にしても未だ慊き足らぬほど憎まうとも、お糸そのものは最早や爭はれず、友三郎自身のものにもう相違はなかつた。そこにお糸は軒の高い小川樓の家娘のお糸ではなく、友三郎はしがない駄菓子賣りの友三郎でもなく、たゞお糸と友三郎との、女と男との、なさけごゝろが只だ一つになつたばかりであつた。そのこゝろは、世に換えても友三郎に悅しかつた。そのお糸を、前々どほりに土地に殘して置いて、自分が孤りで草鞋を穿いて、零落の身に流れて行き、

そうして、お糸も女であれば、そのうちに、必ず他の誰かと一つにされることを思ふときに、友三郎は強い矛盾に悉く悶えた。

「お糸と一しよに奔るならば、もしお糸が俺と奔つてくれるならば」そこに、友三郎の大きな奮りに、かけて大きい悦びが一つになつて、その心の前に、他國の苦辛などは、忽ち消散してしまうのに相違はなかつた。こゝに友三郎は、罪發覺の怖しさよりも、罪に罪を重ねて、またさらに、新しい五十歩百歩の、何れは死をもつて目すべき、あくまでお糸と一つにならうとする、深い企みを計るまでに、男の度胸を定めてしまつた。

お糸のこゝろは、さうでもなかつた。それは素より友三郎を、いとしいと慕ふこゝろは溢れてゐても、たゞ一途に心の募つて、自分をわすれてしまふよりは、まだお糸は幾段にも怜悧であつた。それは自分の操を亡くしたものは他ならぬ友三郎ではあつたけれども、亡くした操は、娼家で育つたお糸自身に餘り大事なものではなかつた。たゞ一夜、蒲團部屋の蒲團の香に心が慕ひ、やるせなく暗のなかに隠れてゐた折に、若い男の友三郎が、箱を擔ふて毎ものやうに、廊下のうへを通りあはせた、そのたま〳〵のきつかけが、ゆくりなく二人を好く結ばせたのにすぎなかつた。またそれを我から進むで結んだものは、お糸自身の仕た業であつた。さうして、お糸にとつて、自分はあくまで小川樓に人から讃めて謳はれてゐる、廓名物のお糸であり、友三郎といへば、それは寄合町の片ほとりから、駄菓子ばかりを擔つてくる、たゞ一介の若い男の一人であるやうに、お糸は始めから思つてゐた。

しかしながら、自身の流石に恥かしい逢ふ瀬秘めごとの場を、見現はしたその者は、家に住むでゐる遊女でもなく、新入の小女でもなく、若者でもなく、元來家に重さをなしてゐて、常日頃から、お糸の行狀の、綱を執つてゐるかのやうな、素振りに慢じてゐるらしいお仲であつた、そのことが、お糸には眞から深い憾みであつた。

その憾みは、お糸の裏にかくれてゐる烈しい氣象に火をつけて、それにまだ、自分の强い矜りさへも、お仲に無残々々と、傷け壞られたやうな口惜しさも加はつて、そこにお糸は、そのまゝにはすまされなかつた。しかし、當のお仲を、家から逐ひだして了ふ氣ての望みは、十六のお糸自身には、とても能きないことであるのを、お糸は素より十分に辨へてゐた。そうして、

「それにしてもお仲が、この事をば、何う始末するのであらう」といふ疑ひと共に、お糸は、お仲にたいして、猶ほ一歩も二歩も、十歩も百歩も、ずつと上手に出てやらうと、强い心にきめた。それには、自分の所業に、あくまで輪に輪をかけて、そのために、お仲を深く苦しませ、小川の家を獨りで裁いてゐるやうなお仲の顔のいろを、悉く失はせてやることが、お糸にとつて好ましかつた。

お仲にたいする其の手段を、一刻も早く、今といふより直ぐにでも執らなければならぬためには、友三郎は離せなかつた。そこに友三郎が、罪の報いを怖しがつて、廓の律の、大波止場の海沈めを嫌ふあまりに、身を躱はして、他所に奔つて出てしまひ、お糸は誰知らず取り殘されて、それもお仲一人だけは知りぬいてゐて、そのお仲の眼のいろに、いよ〳〵自分の氣を悍らなければならぬ破目になるときを、お糸は更に思ひあはせて、憤りと嫌さに顫へた。

かうした思ひのお糸も、遂に駈落の場を想ひ描いた。さうして、中途に追手が掛かれば、廓を擾かす浮名のなかに、外めには友三郎に心をたて、家では自分ひとりが、是までよりも猶ほ仕放題に我をたてゝ、さうした自分の撓まぬ勁さを、お仲の前に示してやり、お仲が不行屆きの到らなかつた大きな落度に、自分からも人からも苦しめらるゝ行體を、冷く眺めてやるときの快さゝへ、お糸のこゝろに浮いてきた。

そのときに、友三郎が、小川樓と馴染のふかい鍛冶鐵の、身の内一味の者から、如何に激しい苛責の艱難に遭はうとも、お糸自身は眉一つ動かさずにゐて、お糸の實のこゝろには、共に駈落ちの道行までもしてみ

たもの丶、友三郎づれには素から未練のなかつたところを、併せてお仲に覺らせてやり、年の差別で一概に振舞はうとしてゐるお仲の胸を、そこに烈しく愕かせ、かりそめにも、お糸の行状に眼をつけやうとしてゐたことの、決して及ばぬ自分であつたことをも覺らせて、あくまでお仲にあてつける、さながら仇をうつやうなすが〳〵しさも、やはりお糸のこゝろに繋がつてゐた。

▼背　反▲

某の月、某の日の夕ぐれであつた。

都は京の、三條小橋の袂にちかい、山城屋といふ餘り大きくはない旅籠に、旅に窶れた若い男と女とが、草鞋を脱いで、二階にあがつた。

寂しさうに、面窶れをしてゐるほどに、凄みをまして、それは視るほどに果もなく美しい、未だうら若い女の泊り客を、山城屋の宿の帳場の主人を始め、番頭女中たち、使あるきの男までが、直ぐに噂の品さだめにあらぬ時を費してゐた。その浦若い美少女が、小川樓のお糸であり、連れの小若い男は駄菓子賣りの友三郎であつた。

小川樓の階下の奥、内所の間の押入深くに、觀音びらきの小箪司の、下の抽斗にぎつしりと重ねてあつた帳の底から、お糸が密かに摘みだしてきた、重い財布を依托にして、たゞ東へ東へと、京まで旅をしつゞけてきた、お糸と友三郎とは、山城屋の二階の一部屋に、寛いでも沈着かぬ、旅の身空の二人の顏を、復た更にかたみに視あはせた。さうして、その夜は、二人の枕にちかく、礫にせゝらぐ鴨川の、やさしい響を耳につけながら、戀の不思議を、今更ながら語りかはした。

西の方、今は雲も杳かな丸山廓を、星の下に家の裏口から、三枚がさねの廊下草履をそのまゝに、脱けでて奔つたその折の、お糸のこゝろは、さながら芝居の舞臺のうへに、華やかな一齣を演じてゐるやうな、佻る思ひに我から乘つて、只だ一散に街に出た。

袂の奥に忍ばせてゐた、紫縮緬のお高祖頭巾を、臉のうへまで、しつぽりと冠り、紐を後にとめながら、軒下ばかりを、小跨にいそぐお糸の姿を、誰もお糸と

みとめる者もなく、寄合町まで忍び忍んで廻つて行つて、幼いをりの心おぼえの、友三郎の家に、男を訪ね、上框の油燈のそばに、煤をよけながら折よく坐つてゐた友三郎を、小招きして、何をためらふ隙も與へずに、お糸は友三郎を引きつれて、「元船」の船着場に、路を忍んで急いで行つた。

艫のうへに、炎々と燃えあがる多くの篝火の、大きな火の粉の塊が揺々と凄じく騰りたつ上に、眞黒な檣が、森々と森のやうに聳えてゐた。

岸の端に、お糸と友三郎は、肩をならべて、小倉がよひの便船を、艫のうへに蹲まつてゐる船人に訊ねながら、岸の上を歩きまわつた。さうして、漸く訊ねあてた何十石か何百石か、嘗て知らなかつたその船を、艀に乗つて、海の上を復た尋ね、晨になれば帆をあげるといふ、小倉がよひの便船に、二人は抱きあふやうにして乗り移つた。

稲佐郷や、瀬脇郷、彼方に續く黒い山影を新しく眺めて、また振りかへつて、一際小高い臺のうへに、紅い燈の、幾重にも横にならんで、彩しく暗を彩つてゐる、引けすぎの、ひつそりとしてゐる廓の光を、お糸は強く視つめながら、勝鬨をあげるやうなこゝろを、押へかねた。

船頭や乗合人に、好奇な思を寄せられながら、お糸と友三郎は、佐世保、唐津や、福岡、博多、船場々々に船暈を慰めあひ、幾日か浪の上にあけて、小倉の城下についた。

廣島城下や、岡山城下、山陽道の陸路にも、夜ごと〳〵の新しい土地に、旅の浮寢を、お糸は寧ろ興がつた。

歸路の、路用の費へに、事さへ缺かねば、客の噂を物めづらしく傳へ聞いてゐた、京や浪華の土地振を、隈なく見つくしたのちには、友三郎を何うになりとも諭し賺して、生れた廓に歸つてゆき、くさ〴〵の土産ものさへ、お仲の眼のまへに、抛りだすやうに差しつけて、心のそこから、笑つてやりたいのが、お糸の望であつた。山城屋の、二階の夜の旅ごゝちに、友三郎

と、戀の不思議を語りあひながら、お糸のなさけは、他國に遠く流浪してきてゐても、友三郎の心にとつて、決してしつくりとは溶けあはなかつた。それが友三郎に、旅の始めから、心もとなく思はれてゐた。

たとひ廓に、家の家業こそは賤しくても、いはゞ大家に生立つてきたお糸が、それも一旦操をゆるした男と共に危うく忍んで遙々と、海路陸路を長く旅してきたものが、未だに男のこゝろに依らうともせず、折々には、供男を連れてときめきたやうな、傲りがましい素振さへも穗にだして、丸山にゐたときと同じ友三郎を見るやうな、そぐはぬお糸のこゝろに、友三郎は既に幾度か不審をうつた。猶ほそれは、氣象の負けぬ西國男の一人に洩れぬ友三郎にとつて、强い不滿を覺えさせ、たまさかには烈しい憤りをも萌えさせた。

それでも、お糸は、たとひ友三郎が、さうした憤りを、外に大きく發さうとも、はてはお糸に抗らはうとも、いつかな平氣な美しい面もちに、友三郎の憤りも抗らひも、あでやかに笑つたまゝに退けて、そのまゝ同じ氣色でゐるやうに、友三郎に想はれた。さうして、お糸は、自分が盜みだしてきたゆゑに、自分の身に着けてゐると、尾の道あたりで我から言つて、懷中の財布を肌から片時も離さずに、小金ばかりを碎いて出して、友三郎に與へてゐた。それも友三郎の胸のうちには、去りがたき不滿の一つに、算へられてゐた。

不審と不滿と憤り、それらは友三郎を惱まして、そこに底知らぬ不安の思ひにも、塞ざゝれてゐたものゝ、また一念お糸のあでやかさと濃やかな興味に、心ゆくときに、友三郎自身の滿悅は、直ぐに限りなく充たされて、飽かぬ溫柔の悅びは、溢れしたゝるばかりに、友三郎の全心を、そのたびごとに浸たして餘りあつた。

夕と夜には悅びに耽り、晨と晝には不安に惱まされて、友三郎の心身は、そのうちに憊れ始めた。さうして、憊れの彌々增すうちに、悅びは自から飽かれ、不安は漸く怖しさに移つて行つた。猶ほ斯くて、その怖しさは、飽いた悅びに勝つてきた。そこに友三郎は、漸く始めて反省した。友三郎の心は戀の醉衣を脫ぎは

じめて、その過去の丸山廓、京の山城屋にゐる現在、さうして、測りがたい向後の我身の上を、眼覺るやうに思ひついた。その一切が、友三郎にとつて、今までは何も彼も霧にさまよふてゐたやうな夢であり、今からは、っ た悉く謎であつた。友三郎は復た更に、始めて烈しい悔のこゝろにも、冷く襲はれた。反省し後悔し、はては自身を咒ひ、それと共に、しみ〴〵と、お糸のこゝろに畏しさを覺えてきた友三郎は、あらためてお糸の所持する財布の中をも、竊かに考へるやうになつてきた。

さうした友三郎の氣配を、また直ぐに覺らずにゐるお糸ではなかつた。

苔の靜かな知恩院の、鐘樓のそばに、山城屋の案内女と三人で、立つてゐたときに、お糸は友三郎を顧みて、

「友兄い、もう歸らんへ」と、靜かに訊ねた。

「未だ時刻が早いもんな。」友三郎は答へて、お糸のお高祖頭巾を冠つてゐる麗かな横顔を、しげ〴〵と然し冷く眺めた。

「なにが早いもんへ。もう京も大概見たばつてんか、丸山へ歸らんへちうのが分らんへ。お家は歸るのが嫌だすもんのう」お糸は斯う言つて、靜かな苑に響きわたるやうな高い聲をあげて、美しく笑つた。

その美しい笑ひ聲のうちには、友三郎の有つてゐる全體を、悉く知りつくしてゐるこゝろが充分に含まれてゐるのを、友三郎は直ぐに覺つた。友三郎自身が、若し丸山に歸るならば、苟くも其の姿を現はしたが最後であつた。大波止場の海沈め、それよりも猶ほ慘虐な刑罰が、立ちどころに友三郎を死に弄ばうとする明かな事實も素より知りぬいての上の笑ひ聲として、友三郎は、笑ふお糸の美しい聲を聽いた。さうして、じつと默つてゐた。

その夜であつた。友三郎は遂にお糸と、全く離れた。お糸が湯場に行つてゐる後に、友三郎は、山城屋の帳場さきに出てきた。入用が有るゆゑにと、帳場の主人に命じて、お糸が預けた財布を受けとつて、友三郎は

そのまゝ外に出て往つた。

お糸と友三郎との、一切が其れで終りであつた。友三郎は其の後、丸山の廓にも、長崎の町にも、姿を現はさず、全く消えて無くなつた。

▼毒牙の穽▲

何人の瞳にも、あくまで讃嘆されるほどの、美しさ妍かさを、剰すくまなく具えてゐる若いお糸が、たゞ一兩一朱の蓄へも、全くなしに、孤り山城屋に殘された。

さうと知つた山城屋の主人が、獨りで頷いた、笑は私かに凄かつた。まして其れまでに、お糸が宿に着いてら、半月あまりの旅籠料、それも未だ支拂はれてはゐなかつた。

お糸は、友三郎に財布と共に遁げられたと知つたときから、即坐に心を定めてしまつてゐた。噂ばかりに聞いてゐた、語も違ふ京まで現に來て、路用を悉く失はれ、さすがに心丈夫とは思つてゐた丸山生れの友三郎に離れた後は、お糸が、自分の頼りにするものは、自分の美貌一つであつた。

よく諺に、江戸男に京女といふ、その京女、それは外出の粧こそは、媚かしさうに綺麗びやかに、柔く着飾つゐはするものゝ、若し生地のまゝな肉身の美しさで比べるならば、お糸自身の前に立ち、我こそはと思はるゝほどの女が、三條通りや四條や五條、都大路のとほりにさへも、嘗て行き逢つて見えなかつたことを、お糸は疾く私かに矜つてゐた。さらに、自身の生立から、京に着いた其の翌夜、名にし負ふ祇園島原に、先づ案内させて、流石に宏い構へには心ひそかに愕きながらも、何處の造作も同じ廓の屋形の二階に、友三郎と登つてみた折に、つくづく眺めをろした多くの遊女の顔容にも、これかとぞ心して、自分と爭はんほどのものを、みとめることは能きなかつた。

廣くて狭い世であれば、お糸が宿から出るのには、國から常に持つてきた、紫のお高祖頭巾に顔をかくしてばかり、京見物に出あるいてゐたものゝ、若しも自分が頭巾もなしに、そのまゝ戸外に現はれたとき、名

ばかりの京女が、如何な妬みごゝろを湧きたゝして、お糸自身を、瞳から瞳へ、送り迎へするのであらう。お糸は、斯うした矜りに、心みたされてゐる自身の美貌を、たゞ一つの然し其れを心づよい頼りにして、山城屋の帳場の主人を、唇にあやなした末に、早飛脚を丸山の家の小川樓にたて、絶えて久しい音づれと共に歸路には充分な路用銀、それと自分を保護すべき、男の誰かを、小川樓の生家から共に折かへして急ぎ送らせるやうな算段をたてゝゐた。

さうしたお糸の矜りは、山城屋の主人も、同じやうに思つてゐた。長年の家業のうへから、貴き上﨟や、老舗の女房たち、格子構への娘たち、或は名のある太夫、また諸國から京上りの武家の女人たち、それら方々のうちに、瞳の孔の眩しいやうな、美しいとり〳〵を覺えてゐるものゝ、遂にお糸の爭ひがたく稀なのには、及ぶべくなく主人に思はれてゐた。

その當のお糸が、まのあたり男に離れてゐるものを、お糸の算段どほりに、まして惡どい山城屋の主人が、すら〳〵と事を容易く承引くことは、決してなかつた。

こゝに、お糸の青い炎のやうな生涯は、最初の動機を友三郎にとり、躬づから作つた罪禍が基をなして、毒婦、人穴お糸としての、呪はしい發端は、山城屋の主人の巧むだ弄から、數奇な脈を牽いて、しだいに絡みついてきた。

▼山城屋の夜▲

廓の謠に、自分の年の數までも、節さへをかしく謳ひこまれて、「お糸十六小川の娘」と、家の前の街のうへを、夜更けになれば、節聲を殊さらにあげて、雪駄の音といつしよに通つてゆく、若い男の聲のつやを、謳はれてゐる當のお糸の自分が、奥の内所の隣りの部屋で、枕のうへで遙かに聞いてゐた、行燈のかげの息らかな寢ごゝちを、お糸は、今は山城屋の、二階の一部屋に、女中に床を延べさせながら、床柱に凭れて坐つて、しんみりと獨りで憶ひだしてゐた。

その旅籠の宿の夜な〳〵を、そのお糸の坐つてゐる部屋に、嘗て幾人の泊り客が、幾夜寐ざめの夢のうち

に、同じ鴨川のせゝらぐひゞきを、同じ枕の下に聽いた事であらう。『そんならお休みや』と、女中が延べて重ねて去つた、敷布團の冷たさうな表てを、獨り靜かに視つめながら、草鞋の紐を京で解いた旅人の、幾人の他し人の夢々が、現在自分が眺めてゐる床のうへに、幾つもそのまゝ殘つてゐると、想ひついた刹那に、その床のなかに自分も今から寢いらうとするお糸のこゝろは、あやしい亂れを帶びて、そゞろにときめいた。さうして、朝夕自分がいつしよに親しむでゐた、小川樓の家に抱へられてゐる遊女たちの、他の人にはない氣ごゝろの底が、始めてお糸の胸に、ぼんやりと映つて、頷くやうに會得がついた。さうした會得は、猶ほお糸自身のこゝろにしてみれば、さらに嫌はしいといふのではなかつた。

　友三郎に去かれて二日三日、また帳場の主人がお糸から仔細を聞かされ頷いて、お糸の言の下から『ゆる〳〵まあ御逗留しやはりませ』と直ぐに言ひ置いて、心得顏に下つていつてからも二日三日、その二日三日のうちに肌寂しいと、生れて始めての新しい思ひに、我とはなく、少時くうつとりともなり、又、あてもなく直ぐに紊れるお糸の心には、眼のまへの敷布團の表てを視つめながら、自から會得のついた遊女たちの氣ごゝろが、羨しいとはなくに、それでも、うつすりと慕はしかつた。そこに、お糸は先の日に、女だてらに登つてみて、紫のお高祖頭巾の端から、充分に眺めてきた祇園に島原の、それは自身が生れをちた丸山などが、及びもつかぬ大きな廓の、綺麗をつくした文彩りとさんざめく響きとが、まざ〳〵とそのまゝ胸さきに浮いてきた。

「早飛脚を家にたてゝ」と、友三郎に去かれた晨、主人に賴みこんだとき、「その家は」と、尋ねかへされて、宿帳には友三郎が、何處の何と僞つて置いたかは、前々からどこの宿でも知らなかつたけれども、「長崎の丸山廓の小川樓」と有りやうに、答へたお糸の顏を仰いで、主人の瞳は、さながらに、前の世からの謎のこゝろが、そのとき始めて解けたやうの、刹那の强い理

解に燃えてゐた。猶ほ、主人の其の氣色は、忽ち怪しく亢ぶつて、お糸の胸に燥がしく纏ひついてくるやうな、さうして、まさしくそれを制へかねた卑しい焦がれ心地が、此方のお糸の胸に烈しく映つた。

その主人は四十あまりの年配になり、顔に毛のすくない、すべ〳〵と滑らかな蒼白い膚をして、さうして眉も眼も鼻筋も、刻むだやうに緊まつてゐた。それは祖先から鴨川の柔かな流ればかりに、口を漱いできたのではないやうな、何やら一曲の苦いところが、ひきしまつてゐる面もちのうちに、匿れてゐるやうに見えてゐた。また何うにかすれば直ぐに僻んで奥に企む、底の惡どい凄い性根も、蒼白い膚のしたに、人知れぬ脈をうつてゐるやうな、それは必ず奸佞らしい、主人の裏の氣配をも、お糸は鋭い心に、それと始めから看てとつてゐた。

それゆゑに、「へい〳〵、好うおますともいな、そんならお手紙をお書きやすとくなはれ。そらまあえらい御災難やな、今ちきに飛脚を言ふてやりますさかいに」と、その主人が、顔の膚ばかりで、刻むやうに笑つたときに、その腹の底ふかくに、お糸をめあてに企む一物を、主人が何かは必ず思ひついたのに相違はないと、お糸は刹那に氣がついた。

敷布團の平かな表面に、我ながらあやしく、ときめく心の往つて、そこに遊女の氣ごゝろをも思ひ、果は祇園や島原の廓の中にでも、好もしい心が我と伴ひ、さうして、美しい自身の現在の軀には、依りどころの因縁さへも、何一つ何處にもなく、そこに自分をめあてにして、知らぬ企みを必ず編むでゐる、奸佞らしい主人の蒼白い顔が階下の帳場にゐることなどを、お糸は思ひ案じながら、紋羽二重の本紅の帶揚を、坐りながらほどいてしまつて、枕にちかく疊に投げ、續いて藤色繻子の丸帶を、縺れるばかりに激しく解くと、披けた前を指さきにかきあはせながら、中腰のまゝ、すら〳〵と行燈のそばに近づいて、靜かに行燈の戸を上にあげ、どつぷりと油に漬かつてゐる三本の燈心の、白い蕋のやうな尖に、儚なくとぼつてゐる小さな炎を、

平打の黄金簪の柄のさきにかきたてゝ、ぽつと俄かに明くなつた火影の前に、部屋の周圍を右に左に視まはししながら、髪にかへす簪とともに、兩手を添えて、ほつれ毛を撫であげて、こころもち緩む氣のする鬓のおもてを、いたわるやうに整のへてしまふと、緊しく噤むでゐた纖かな唇に、何かは知らず舌うちの、小さな響きを齒のうちにたてて、そのまゝ行燈の直ぐそばに、片膝たてゝ頸を沈めながら、睫毛を俯せて、行燈の朱塗の臺に着いてゐる玩品のやうな抽斗を、視つめ〳〵て、是からさきの成行を、こゝろいつぱいに考へつくした。

自分のこころで、操をやぶり、自分の意地に我から乘つて、それも生れた土地までも一氣に袖にふりすてて、こゝの京まで未練なくきたものが、いまさら男に去られたあげく、生れた家に逃る〳〵と、飛脚をたてて使を呼び、その使に自分一人がつれられて、またも生れた家をさして幾百里を、牛のやうに歸つてゆかうとする、その自分の心の、我ながら意久地なさ淺ましさ穢さの、どうした顔を知る人に見られて、丸山の廓の石路に、自分の足の、一歩をも踏み入れようとした自分であつたらう。それ小川のお糸が歸つてきたぞと、噂が必ず自分をつゝめば、はげしく流れる浮名こそは、いかやうに騒がしからうとも、友三郎はどうしたことの、盗むで奔つた金の殘りはどうしたことのと、浮名のほかの耻かしめは、斯うしてゐる今も今と思て ひ知られて、やるせないばかりの口惜しさに、宿の大將や、女中衆、あだの他國の他人のまへにまで、兩乳が疼くほどの慚心さを、默つてかくしてゐるものを、今更よくもまた丸山に、歸つて行かうなどゝ、蛙のやうな醜いこゝろが、たとひ片端でも、自分の胸に湧いて出たもの、それほどまでに心のかよわい、もろい穢いお糸であつたらうか。

さうではない。いかにもさうではない。友三郎が、自分のそばにゐた時こそは、まだそれまでは、どうになりとも彼の男を、諭しすかして牽いてゆき、男と自分の顔をならべて、丸山に歸つて行かうと、思つてゐた

のは確かに相違ない。若しさうした歸路ならば、何を誰に憚からう。さうして、男が捕へられ、いかばかり拷問苛責の憂きめにあはうとも、お糸はお糸、小川樓の爭はれぬやはり家娘、友三郎の男一人が何うにともなれ、お糸はお糸で立つてゆくのに、誰人が何と罵らうとも、何があらう。またお糸はお糸で立つてゆくだけの、心のしまりも、充分たしかについてゐた。しかしもう、さうした所存も、もはや泡になり、去つた男に未練は毫しもないものゝ、今は斯うした自分一人になつてみれば、家から使のこぬまへに、自分は自分で始末をつけて、そこにお糸の自分を立てねばならぬ。その自分の手前を、現在何としよう。何はあれ、よしたとひ他國にのたれ死にをしようとも、丸山には決して歸るまい。またさら〳〵歸れはせぬ。自分の手前、お糸は奈落に沈まうとも、丸山には歸れはせぬ。

　それならばお糸はお糸、京で斯うまでなつたお糸であれば、あくまでも同じ京で、お糸を一つ立てゝみようし、みせもしよう。みせねばならぬ。なにひとつ、京ではたよりどころの無いお糸が、丸山そだちの意地をみせて、京でこそ鳴らしてみせよう。その後に、さうした後のお糸の姿をこそ、丸山の廓中に、これと遍く見にくる者に見せながら、あの家の前の石坂を、憚らず踏みもしようし、あのお仲の前に立ちもしよう。その曉ならば、お糸はお糸、この顔に、なにひとつ恥のかゝらう筈はない。

　斯くまでに、こゝろひとつにきめきつて、この軀に惜しみなく、投げだすまへに、何があらう。祇園か、島原か、苦海の勤めといはれはしても、その辛苦のほどは凡そ知れてゐる。たとひ都の遊里でこそあれ、自分は邊鄙の西のものでこそあれ、廓で生れて廓の水でこゝまで育つてきたお糸の自分が、一旦こころを斯うきめて、切りぬけてゆくうへに、そのお糸の前に、物もおろかや何があらう。

　何があらう、何があらう。もしあるならば、それこそは、おしもおされもせぬまでの玉の輿が、盡きぬ果報に飽くほどの、榮耀榮華をちりばめて、自分の稀代

な美しさに、手をさゝげて迎へにくるばかり、ましてや遊女ぐらしの身のうへこそは、他し男のなさけを操なして、この世を離れて遊んでみるにふさはしい。

この宿の大將が、何をか企まば、それもあくまで企むで見るがよい。斯うと心をさだめてお糸に、搦めば搦むで手を燒いたあとに、愚かな企みであつたのを自分で思ひ知るがよい。

さうだ、さうなのだ、なにもかも、お糸の行くへは斯うきまり、この他にはなく、この上はない。

やがてお糸は、笑ひを帶びて立ちあがつた。行燈のそばから枕もとまで、裾をひいていそ〳〵と小跨をきざみ、そのついでに、解きすてゝある丸帶を、足の爪尖にほぐらかしながら、枕もとまで引きずつてきた。さうしてその上に、全身に飛紅梅の縮緬衣を下着の更紗絹と重ね着のまゝ、撫肩から柔くすべらして、後にどさりと脱ぎすてた。飛び交ふ蝶を色々に染めわけた友禪の華やかな胴着のまゝに、紅絹の扱帶を結びかへもせず、彫つたやうな軀を、そのまゝ敷布團の上に仰むけになり、兩手をあげて潰れぬやうに髮を上げ、幾度か枕の坐り具合を、搖かし〳〵直した末に、足をのばして、裾の方の搔卷の襟のあたりを、爪さきにつまさぐりながら引きよせて、乳のうへまで掩ふと、その下に兩膝を僅かに立てゝ、小さな欠伸を吐きすまし、少時く白い天井を、睫毛のしたから眺めた後に、やがて、ふよよかな瞼をふせて、額のあたりに白い匂ひの浮かむでゐるやうな、あでやかな寢顏になつた。すや〳〵と眠りにつけば漸く十六のたゞ美しい乙女の寢姿が、春のすがたの繪のやうに、鴨川の石を濯ふ響きのうちに、橫だはつてゐるのにすぎなかつた。

▼前世の輪廻▲

山城屋の家の當主『山城屋重兵衞』といへば、お糸の瞳が察したやうに、なまやさしい男では、まさしくなかつた。

お糸の望みの早飛脚、それをお糸が言ふとほりに、思ふも遙かな丸山の小川樓をさして、直ぐに仕立てさすほどの、たやすい男で、山城屋重兵衞はなかつた。

その山城屋重兵衛の魂膽は、お糸の素性を、水家業の家の娘と知つたときに、さてはと心にうなづいて、瞬くひまに描かれた。お糸の軀一つをば、先づ我が腕に抱きとつて、したゝる蹤を渇くまで、吸ひとりつくしたあげくの後に、山吹をふく黄金白銀の、重みに換えてお糸の容色を、遊里に賣らう算段が、鳴戸の瀬戸の渦のやうな、大きな渦を卷きたてゝ、重兵衛の胸の下に、一時にすさまじく泡だち溢れた。

さうした奸邪な企らみは、また豫てから、重兵衛の胸に、空な想ひで廻らされてゐた。それは友三郎が遁げて往くきわに、帳場に降りてきた友三郎から、用があるゆゑにと言ひつけられて、重兵衛自身の後にある帳簞笥の抽斗から、お糸から預かつてゐた財布をそのまゝ直ぐに取りだして、友三郎の手のうへに、たやすく渡した瞬間に、「この男このまゝ逐電してくれるなら」と、若し然うなれば、獨り儚く殘されるお糸のすがたを妄りに想ひながら、重兵衛の渇いた胸さきに忽ち萌した、幻のやうな企らみであつた。

その幻の企らみは、幻どころか眞實になり、その曉かけて友三郎は、遂に歸つてこなかつた。さうして、お糸に仔什を訊したときに、あらうことか、何といふ勿怪の幸ひ、お糸は傳へきく西の丸山の、廓の娘であると言ふ。そこに重兵衛の胸下に、泡だつ渦の彌々彩りを帶びてきた。財布を重く懷中に入れて悠々と表の敷居を跨いで去つた、友三郎のほつそりとした後姿が、重兵衛の今の瞳には、世にもめでたいものに思ひだされた。

そのまゝ幾日か、うちすぎた。

寢覺め嗽ひの湯の暖かさ。朝飯のまへの濃茶と梅干。黑漆塗りの高膳の隅に、蒔繪に東山の塔のさきを霞に繪がいた朱の露椀の、蓋のうちには匂ひのたかい潮汁の味。緣りの勝つた淸水燒の硬さうな、掌にかるい深い茶碗のうちに、眞白な淀の米粒の暖かさ。淡黃いろい手鹽皿に蕪を刻むだ千枚漬の酢の新しさ。それらは何時も變らず鄭重に、お糸の前に備へられて、お糸は嘗て友三郎と、四條どほりで自分が購つてきた圓い皆

朱の箸のさきを濡らしながら、給仕女の舌たるい京の言と二つ三つ、輕い女の戯言なども交へたり、さうして、主人の重兵衛がついぞ變らぬ欵待の企みの奥を、想ひ測つて嗤つてゐた。

その幾日を、山城屋重兵衛は、しみ〴〵滿悅の想ひゆたかに送つてゐた。

「たかゞ文鳥のやうな小娘の、それも何れは狎れそめの、戀ふ男に唆かされて、さんざ浮奔のなれのはてをつひに京まで上つてきた果てが、男から財布ぐるみに遁げられた、今も昔もよくある例し、それも未だ乳くさい十六娘」と、重兵衛は、軈てそのお糸を手かける深い悅びに、晩酌の盃の手酌のたびに、現にまかせて耽つてゐた。

重兵衛の輪に輪をかけた現には、義理柵みに、お糸をつゝみ、暴虐の手に苛み諾かせる一幕を、强いて出すよりは、娘ごゝろに男にのこる未練が去つて、さて丸山には梨の礫、飛脚がへりの便りもなく、所詮のつまつて術もない我身の果にお糸が身を悔む、それまで重兵衛はあくまでお糸を客あつかひの俠氣をつくして見せて動きをとらせず、さうして、餘儀ないと覺悟をきめさせ、始めは女中の一人に入れて働かせ、直ぐに上働きにものぼらせて、異鄕に寂しい娘の胸のうちを目に目をかける主人の懇ろな情の餘りに、最後は遂にお糸の心をほださせて、そこに悉く手なづけてしまひ、招けば靡く若い海棠の新しい露の滴りを、摘めばそれと濃かに濡れて掬ばれてくる、自然の味が、重兵衛に望ましかつた。

斯うした企みの道ゆきを、それからそれへと、肆いまゝに想ひ思ふて弄ぶときの、重兵衛の醉ごゝちは、いかにも晩ごとに甘かつた。

その晩酌の盃を、每夜几帳面に三合ぎりと、自身で堅くきめてゐた重兵衛は、その盃を伏せてしまうと箸をあげ、大きな茶碗に復た三つ、これも長年の仕來りに、腹をこさへて番茶一ぱい、その蒼白い脣の頰を、柔い微熱に染めて、未だ健かな齒の隙を襟に挾むでゐる小楊子に、ほじながらに二階に登り、一夜お糸の居

る部屋の前に佇むで、心ひそかに浮かれつゝ、「御免やす」と靜かな聲を先だてゝ、椽の障子に手をかけた。

お糸は何時も癖のやうに、床柱に優しく凭れながら、紫錦襴の脇息の上に袖を流して、左の肱を乘せ掛けた、まゝ、紅葉模樣の縮緬布團のうへに、裾を亂して坐つてゐた。そうして、重兵衛が障子の間から現はれたのを認めると、ほのやかに笑つてみせて眉をあげ、わづかに面を斜めにまげて、重兵衛の顏を仰いだ。

重兵衛は、閉めた障子の直ぐ前に、居ずまひを直しながら正しく坐つた。行燈の心の出しあんばい、床の掛軸の位置などを、慣れた瞳で、一瞬のうちに撿し視ながら、お糸の面に、何の曇りも帶びてはゐずに、親るごとに我知らず吸はれてゆくやうな妍かさを、まづ心ひそかに快く味つてゐた。そこにお糸の氣色には、何の介意もなさゝうな、それは眞からゆつたりとしてゐるのに、重兵衛は、「斯ういふ風なら好えわい」と、自分の企みのうへの安心も、竊かに覺え合せながら、今宵は、客と主人といふのでなしに、何かなお糸のこゝろをば、しみ〴〵と慰めて、娘の胸に嬉しいと深く殘されて置くやうな、恰好の語はないかとも思つてゐた。

そこに、お糸は俄かに、すらりと立ちあがつた。全身に滴るやうな美しさの波を搖々とうたせて、重兵衛の瞳のまへを、舞ふやうな足なみに、嫋々と裾をさばいて疊を蹈み、何と愕いてゐる重兵衛の膝のまへに來て、お糸は眞面に柔く坐つた。

お糸の所作に全く愕かされて、いぶかる重兵衛が、さうした仔細を訊ねる隙もなく、お糸は次の意味のことを、淀みもなく述べ始めて、愈々愕きに愕きを重ねた重兵衛は、息をもつかずお糸の朗らかな聲を聽いた。

お糸の唇は纖かく自由に搖いて行つた。

「幼いときから聞いてゐた、京の大路の華やかさを、西の國からあこがれてきて、お家の宿に、わたしは漸く着いた。やんごとなき大宮の、碧い甍の高さを驚き仰ぎ、また法輪嵯峨の御寺にも有りがたく詣り、また四方に筋目をつけたやうな路々には、衣の香、簪の影、織るやうな賑かさにも、この自分の身を交ぜて、さて

嬉しやと、望みのかなふた田舎ごゝろが、やがてお宿の此の座敷に旅の上にもおちついたと思ふたときに、たよりの男は、金子のころらず奪つて奔り、わたしはお宿の此處に殘された。

奔つた男は惡性の、それも何かの因緣事と、諦めはするものゝ、もと〳〵友三郎とわたしの二人は、もうお察しでもあらうけれども、明るい晝に嫌機よく、家の者に送られて、國を出てきたものではなく、そこの仔細は言はずとも、何れ自分のこゝろから、自分で求めた道すぢであつた。それは然し今までのこと。今から後は、飛脚がへりの親のなさけを待つばかり、それまでは、お宿に斯うして其の日〳〵を、わびしく暮さねばならぬ、若い女の身空といふより他に、何と言ひやうもない。けれども、わたしが思ふのに、わたしが願つた早飛脚、それは九州路の彼方はおろかや、山陽路の空は未だしも、まだ畿內路に廻つてゐるのか、それとも京の此のお膝もとにでも、今もうつ〳〵と睡つてゐようか。あなたは飛脚を仕立てさす、その言ひつけを必ず果しはしたらうなれど、當の飛脚の男は肝心の足の裏をば粘ばらして、いつかな發たうともしてをらぬ、世にもふしぎなこと〳〵を、わたしは疾くに覺つてゐる。

若しもこの、わたしの心が鈍つてゐて、あなたの知らぬ濡衣を、無實のまゝに冠せたものと言はれるあなたの心ならば、京の此處から長崎の丸山廓まで、往つて復りの飛脚の日數をば、たとひ餘計に算へても、その日を、互ひに待つてもみよう。その日の後に何一つ、親の音信が若し無いときに、そこにあなたは何とした道に、わたしの始末をつけよう胸算でゐるのであらう。まづそれはそれもよし。丸山廓は邊鄙な西の、粗末な遊所に違ひなけれど、廓そだちのわたしの胸に、あなたの胸の企らみぐらゐが、見透かされいで何うならう。しかしそれもよし。若しも飛脚がそのうちに、成るほど還つてきたならば、たとひ奔つた娘ではあれ、親のなさけに必ず送りこす金子は封のそのまゝ悉く、お家の勝手に進じるほかに、實はあなたが望みのわたしの

體、これもあなたの自由に必ずまかせて、聞けばあなたは鰥夫つゞけの堅人さうな、わたしを帳場の奥に直してもらひ、山城屋の内所の采配を、必ず立派に振つてゆく、わたしの内儀のかけひきを、あなたからさすがと讃めて貰ひもしよう。

　されぱとて、仕立てぬ飛脚は還つてこないが、もと〳〵物の道理といふもの。その道理に難つけて、今さら否應を爭ふほど、愚かなわたしではないゆゑに、まづそれはそれもよし。こゝに一つの新しい願ひがあり、これこそは、盟つても必ず承引いて貰はねばならぬ、お糸が切ない心のたつての願ひ、諾いて貰へるかまた貰へぬか。何れなりとも今宵は此處で、あなたをこそ説きおとさうと思ひさだめてゐたところに、ちようど折よく見えたゆゑ、幸ひよしと悦んで、嬉しいあまりに何の彼と、いらぬことまで言ふてしまうた。

　といふて他のことでもないことの、このお糸を、京の廓の大きな屋形へ連れて、他ならぬあなたが親もとになり、起請の判を捺したうへ、どうせあなたは此の土地の人、廓のうらも御存じであらう。ひとつたんまりと大きくお儲けの氣はなからうか。これがわたしの願ひであり、願ひといへば頭をさげて、頼むものと知らないわたしではないけれど、賣られるわたしが、賣るあなたに、頼む願ひである以上、頭はさげずに斯うして頼む、膝と膝との談合づく、諾いてもらへばうれしい報いに、あなたが聽しわたしを揚げにきた夜こそは、昔なじみの客人として、面白く語りあかしもしようといふものよ。それでこそ、わたしの願ひも叶ふと共に、あなたの望みも叶はふといふ、わるいことでもなかりさうな、あなたの心を聞かして欲しい。

　いつそ廓に賣るまへに、何うの彼うのと詮ないことを、若しも言ひだすあなたであるならば、財布は男に奪られてゐても、この帶の縫ひめや、帶揚の守りの中に挿むで置いた、十や二十の小判の數に、不足をするやうなわたしではない。今日までの旅籠料、京は物の値の、高いが土地の自慢といふけれど、〆めて何ぼか算盤の桁に粗匆のないやうに、今直ぐにでも帳場から、

大福帳を取りよせて、わたしの前で珠を彈いて〆高の、額を聞かせて欲しいもの。お茶代といっしょにさつぱり拂ひをつけて、わたし一人で島原に、女衒を探すかまたそれとも、ふら／＼と流れあるいてゐるうちには、此の軀に眼をつけて、慾にのぼせて此方の願ひそのまゝに、默つてゐても賣りこがしに連れて廓に牽いてゆく物好きな男も、必ずゐることであらう。

髮と容は人並でも、さて藝ごとはと、訊かれるならば、絃のさばきは撥胼の堅さに觸わつてみれば、大かた知れよう。薄茶加減の手まへとあらば、松風の音を聽きわける、耳を試せば其れでも知れよう。三十一文字はと、やさしうくるならば、筆短册を手渡して、それを受けとる手つきで知れよう。花の鋏の剪れ味はと、たしなみぶから問ふならば、心ない花の心に從ふばかりと、口で答へても其れで濟まう。大蠟燭の心の剪りやう。掛衣の捌きかた。鼈甲櫛の差しぐあい。一通りは心得てをいたつもりの小川の娘、起請のおもての親もとにと頼みこむ、あなたに恥はかゝせまい筈。さら／＼丸山には歸るまいと、心をきめて、それも我から廓ぐらしを望むわたしが、まさかに復たも拔けだして、あなたの顏に砂をかけやうの、弱い心をもつたりはせぬ。願ひといふは、今いふた、わたしの身賣りの一條だけを、必ず諾いて欲しいといふ易い願の他にはない。今すぐに其の膝を、一つ叩いて承引いて欲しいもの。」

聽くほどごとに重兵衞は、お糸の動く唇をいよ／＼強く視まもりながら、聽いてしまへば、我ながらお糸の底しれぬ、それは妖魔の落し子のやうな、傑れた凄さに、果はうつとりとなつて坐つてゐた。

言はしてをけば言ひさかる、お糸の動く唇が、そのとほりに飛脚を仕立てゝはゐなかつた重兵衞自身を、まさしく責めてきたときには、居丈高に向き直つて、即坐に言ひ伏せて、欺きくるめてしまはうと思ひついてゐた重兵衞も、お糸の本心は其處にはなくて、聽いてゐるうちに舞臺が廻つて、その身を廓に賣れよと願ふ、それもあくまで此方の利を見てうへの悧發な說きぶりを、聽かされるやうになつてから、遂に重兵衞は

お糸の膽略に感じいつた。さうして、虚か實かはさてをいても、遊藝の自分の技まで臆面もなく、言巧みに日ひまわす始終など、その一切が、心の用意の隅なく亘つて落ちはないと、聽いてしまつた最後の重兵衞は、その前後の憤怒、愕き、感嘆などを一つにして、うつとりとお糸を眺めてゐた。それに加へて、何とはなしに怖れがあり、さうして、元來の慾もまた底ふかく飽くまで搦みついてゐた。

　膝をたゝいて承引いてくれと、負けぬ氣配で言ひきられたとき、さらぬだに重兵衞の慾は忽ち漲つた。さうして、四十男の自分の心底を、到らぬ限なく見とつてゐた、お糸の凄い天性を、再び思ひかへしたときに、お糸の軀にかけてゐた重兵衞の怪しいなさけは、見果てぬ夢が一時に消えてしまつたやうに、一時にすつきりと胸を離れて、それに換はる、お糸を寧ろ渇仰するやうなこゝろが、新しく萌し始めた。それは恰も三代の譜臣が、英邁の氣の若君の爭ひがたき御諚に服して、我知らず御前に低く額づいてゐるやうな、敬畏の心であつた。またそれほどに、お糸の氣配は、重兵衞の全體を悉く呑むでかゝつてゐた。

　少時く經つた後に、お糸と重兵衞とが、床柱の前に位置を換えて忍びやかに、互に語りつゞけてゐた。

　山城屋重兵衞が、登りなじみの島原の青樓に『桔梗屋』といふ娼家があつた。そこに重兵衞は、お糸を伴ふてゆくことを、お糸に諮り、お糸は直ぐに承引した。

　いよ〳〵お糸は、遊女に身を墮す自分の成行きを思ひながら、抱へ遊女として暮してゐる自分の姿を、復た更めて想ひ描いてみた。さうした暮しかたこそは、さながら自分の生來の心にも身にも、元から悉くふさわしいものであつたやうに思はれた。それは決して新しい始めてのことではないやうな、たとへば前の世にも、或は遊女で暮してゐた我が身ではなかつたのかと、自分ながら疑はれるばかりであつた。さうして重兵衞から聞かされた『桔梗屋』といふ家號さへ、懷しいものに思はれた。

　お糸は斯うして遊女の群に快く入つていつた。

▼小太夫、長門▲

……島原廓の桔梗屋に、新しい葩の、稀代の名花が、今度このたび、一輪咲いて出たさうな、未だうら若い、翠の莖のいたいきに、妝ひたてたその葩は、春ひと時のたはむれの、風にまかせて香芬がふかい、その君傾城の源氏名は、「小太夫」とばかり、たゞ小優しい名をつけられ、こまかな情をしのばせて、後朝の、わかれの味にも實をふくむ、その味はひを知る者は誰。猶ほわけて薫らんばかりの肌ざわり、あれこそ眞ぞ歌舞伎菩薩に紛ひはない、それそんぢよそこらに、嫖れ〳〵てゐるものどもは、桔梗屋に、あの小太夫花魁のあはれこまかな下露にまみれてこずば、廓のをかしな噂は、いつそ爲まいぞ〳〵させまいぞ……

その小太夫の廓噂さは、京の柔かな嫖客の浮いた唇から唇へ、謳はれるやうに擴がつてゆき、それは幕末時世の、勤王佐幕の鬩ぎも外に、一時に廓の内外をうごかして、他の遊女のこゝろにも、人の互ひに「小太夫」といふ聲が、妬み猜みを銜むで耳にあたるまでになつてきた。

それほどの全盛を、思ふがまゝに身にしめて、千人の男の、一つ〳〵に異なるなさけを、一つ〳〵に操なしてゆき、かはる〳〵に歡ばす、自分の心の達引懸引が、我と限りない興を我から喚んで、そこに小太夫のお糸は、桔梗屋の欄干たかく樓のうへに、智慧と色とをしぼりぬいた。十六、十七、十八、十九。男といふ男を知りぬいて、まだ飽きたらぬ十九の春、お糸の客のうちに、未だ三十には滿たぬ一人の若い士が、夕な〳〵に、よく通つてきた。おとし差しの、劍鐺の尖を斜めに下げて、濶い編笠を眞深に傾け、ゆつたりと階段を蹈みのぼる、寛濶ぶつたその立姿を、お糸は始め嗤つて眺めた。

廓にくれば、お武士でも商人でも、皆おしなべて、昔から、光る寶には光が添ふためし、傳へきく紀文奈良茂の豪奢はつくさずとも、内所に堅い主人を始めとし、幇間末社の輩までを、總て自分の有に屬けて、その一時の揚げ座敷には、天が下しる君威無上の趣を、

身につけて味ふ一夜大盡の豪懐をば、誰はゞからず盡すのに、京の廓では、また然までの大きな寶の額が、そこに必ず要るといふのでもなかつた。それでなくとも、「小太夫花魁のため」にと前觸れて、幾夜豪華な大座敷が、夜に朝をつぎ晝につぎ、さまぐ\の燭臺が、紅い前垂の女たちの手に運ばれて、同じ座敷に幾度か換り出つ入れつするまでの、爛れるやうな遊讌にも、お糸は嘗て胸の扉を、我からすつきりと割つてみせたいほどのいとしい客には未だ會はないでゐた。さうして、三年越しを、桔梗屋に「小太夫」の名を鳴らし、京の廓の品かはる習ひぐ\も身に卽いて、女の弱さをそのまゝ響かすやうな、島原ぶりの廓ことばも、何時か唇に溶けてしまへば、朋輩よりも美しい言のふしさへ湧いて出る、さうしたお糸が爭はれぬ三年つゞきの全盛に、桔梗屋の主人は、小太夫を、賣り始めてから三年めに、松の位に擢でゝ、またさらに廓のなかを、嫖客の唇ごとにぞめかせた。

その松の位の小太夫に、浪人ものらしい編笠の客がたゞ濡めやかに登樓し、猶ほ小太夫も、その編笠の人に二度三度、睦みかはしたある晨の後朝から、それとはなくて胸に萌えのこる、我にもない、まことのなさけが、今になつて始めて自分のまごゝろに、去りがたく縺れて揺曳きそめた不思議さを、それも深い心に祕めて獨りで忍びやかに抱いてゐた。

ほのぐ\と萌す情のこゝろのうらに、長門をおもふお糸の戀ひごゝちは、嘗て自分を他にして奔つて去つた友三郎の面影を、始めてゆかしく懷ひはじめた。いかにしがない男であつたとはいへ、まごゝろかけて思を寄せてゐた友三郎が、お糸自身を後にして行方知れずになつたとき、それは木の葉の散つて行つたやうに、たゞ輕く他々しく思ひすごしてゐた自身の心が、長門をおもふ人のこゝろにくらべて、現在のお糸には我ながら深い不思議であつた。

現在のお糸のこゝろに、ゆくりなくも宿されたその浪人は、薩摩隼人の一人であつた。王室の衰頽を夙に慨き、勤王攘夷の大義をば、遊説の路に吐くべき志を

立て、京に上つ。往來し、志士の間に交つて、月夜一管の尺八に鬱憤をやる平野國臣、草屋に妻子窮厄の飢と訣れて東奔西馳する梅田雲濱、其等の志士と志士とが相磨する信の間に身を措くうちに、一夜名にし負ふ島原をたづねて、嘗て聞く桔梗屋の松の位の小太夫に、盃をとらせる、浩然の氣を吐かうとばかり、跳るこゝろに桔梗屋の、桔梗の紋を染めぬいた、厚い暖簾の裾を手に振りのけて、編笠のまゝ登つてみた武邊ものゝ名は『藤木長門』と、悍々しく呼ぶのであつた。

その藤木長門といふ編笠の主は、口數の寡なくて、廓に慣れぬ初心さうなものごしに、いつも盃は手から離さずにゐた。それでゐ悍からず鷹揚に禿の手に酌をさせ、勁い力の眸を、いつも瞻つたまゝに、初めて覗る小太夫の顏を眺めてゐたのが、忽ち哈々と、人もなげに吐きだす笑ひを高い天井に響かした末に、右手を伸ばして、皆朱の杯を、小太夫の鼻さきを掠めるばかりに、近く差しだした。さうして『おいどんは無骨者ぢやけん』と、それを初會の挨拶にしてゐるやうに、吶々と硬い唇で言つた。

その九州の舌訛りを、お糸は絶えて久しく聞いて興を覺えた。さうして、嫣然と溢れるやうに笑ひに浮いて、『何處の御藩でゐさんすか』と、盃を受けながら、訊ねてみたときに、長門はゆらりと膝頭を搖かして、『鳥津藩』と、只だ一言で答へかへした。

秀麗な櫻島、丈夫な絣や、薩摩燒、香のたかい煙草の畑。さうした國自慢の何やかを、長門は頰にふくむやうな聲をして、盃のかさなる數と共に、得意さうに話したりした。お糸と長門との其の初會の感興は、お糸にとつては、まことに淺はかなものであつた。

そのうちに、長門の編笠は、いくたびか、桔梗屋の重さうな暖簾を潜つてゐた。どうしても廓振には慣れきれぬ、悍々しい勁さばかりを持つて來ながら、その委趣ばかりは、自から士らしくゆつたりとして、さうして酒をよび、いつも薩摩の果の話をして、後には琵琶歌や詩吟の咽ぶやうな聲を上げたりして、歸つてゆくうちに、お糸の烈しいなさけは、さうした長門に、

我からかたむいて行つた。

ともゝに炎のやうな勁い氣象の奥そこを、互ひが互ひのこゝろの裏に、識りあひ悟りあふてみれば、長門も小太夫の心を、薩摩隼人の意地にかけて、あくまで自分のものにしつゞけて行きたかつた。それをお糸にしてみれば、たとひ萬人の男のこゝろをば、遍く操なさう自分にしても、外の智慧と、内の情の眞心とは、素とより裏と表のちがひがあつて、智慧は自由に翻へしても、なさけ眞心ばかりは、何としやうもない自然の珠露、露が勝手にむすぶ濡れごゝちは、お糸自身もしかたのない、それも十九の春になり、初めて覺えた戀ひであつた。

　松の位の小太夫が、いかに切なく戀ひもだえても、家の律に差別はなく、長門と逢瀬をかさぬるためには、そこにまた言ふことをきかせる寶が、互ひのためにあるのでなければ、相戀ふ二人の悶えを心しみ〳〵慰める手だては、どこにも元より有りやうがなかつた。そこに、お糸の三年あまり全盛づとめの後の戀を、大概のことならば、それとは知つてはゐても、見容して置ぐべき心加減をするやうな、寬い猶豫のこゝろもちを、京の廓の桔梗屋の内所が、知つてゐるのでもなければ、また長門も浪々の身の、大判といへばその十兩は、一兩小判の十倍といふやうに思つてゐて、寶の値を備さに知らされてゐる、決して豊かな生れでも身分でもなかつた。

　初めのうちは、おもふ男に達引くために、自分の部屋の桐箪笥の、眞白な抽斗の底に、蓄へて置いた大判小判の數々を、禿の袂に忍ばせて、長門の手に、そつと握らせ、お糸の自身は、長門の前に、默つてゐたりなどしてゐたけれども、いかに全盛つゞきの身とはいへ、何も彼も一途に激しく繁々と、病ひのやうに只だ逢ひたさ見たさの心を充たして、その逢瀬のたびごとに、男に貢がう餘裕は、お糸の蓄へにも流石になかつた。そこにお糸は遊女になつて始めての、憂苦を覺えて、窶れに痩せた。

　行くには無い袖は振られぬ金子、行かねば有るに有

られぬ、宵ごとの惱みごゝちに、今は悉く蝕はれてゐる長門にも、未だ一點の男の意地が、薄く殘されてゐて、若し行けば小太夫が、其の夜の工面は、如何やうにとも廻らしつくして、長門の顔を、桔梗屋の内所に必ず立てさすことは、充分に分つてゐても、たとひ浪人の身ながらも、廓づとめの女の手から、苦心のあまりの金子を與へられて、その金子でその遊女に、逢はねばならぬ、自身の効なさを、長門は深く口惜しがつてゐた。たそがれてゆく、宵の夕暗が、長門の兩足に纏はるときに、その足は、幾度か街のうへを、思ふあてもなく彷徨し、その宵ごとの懊惱に、長門は刻まれるやうに苦しめられた。

▼闇▲

鬼棲むと、京童に語り繼がれた、山影遙かな丹波の國に、京の街からつゞく往還を、街をはづれて少し離れて行けば、田圃のうへに、いぶせい藁屋の村々が、俄かに侘しく散つてゐる、そのあたりを、「丹波口」と京の人は、いつの代からか呼んでゐた。

天が廣くなつたやうな、星の夜にも、丹波口は、寂しいものを、降るとも見えぬ微かな雨が、蕭々として闇を織る、雨の夜更けは、たゞ凄然と折々に夜の雞の啼聲が、雨に交つて闇のなかから聞こえるばかりであつた。

ゆら／＼の提燈が一つ、遠い闇に低く搖れながら、路を急いで丹波口を、京のはづれに近づいてきた。村からつゞく、大きな杉の並樹の幹が、雨に濡れて黑じんでゐる根もとを、提燈の火影が、朧ろげに映しだしながら、泥にまみれた白の脚袢に白足袋の、草鞋をぐつしよりと蹈むで急ぐ歩調まで、やがて提燈のそばに見えてきた。

一つの村を後にして、兩側とも並樹ばかりの稍を傳ふ雨の雫が、傘を撲つ、大きな音を聞きながら、提燈の主は、またさらに急ぎあしに、傘の柄と提燈とを、右左に持ち換えやうする、恰も刹那に、一際大きな杉の幹の、陰の闇から迸るやうに現はれた黑影の、音もなく空に激しく跳るよと見るまに、泥の上に落ちた提燈

を脛の長い跣足が、直ぐに蹴り消し、傘もろともに横に斃れた人のうへに、黒影は闇の底に低く俯向いて、そのまゝ少時く雨に濡れながら動いてゐた。

夜來の雨が、隈なく晴れて、淨い野もせに烟の騰る、丹波口の往還に、一つの死骸が、横を向いて斃れてゐた。あざやかな斬傷が、袈裟がけに大きく一つ、たゞそれだけで敢なく斃されたと、見る人の誰の眼にも、たやすく會得された。

▼瞳のこゝろ▲

晝の廓は、森閑として、白い日に照らされる宏きな甍の下に、幾層の長い欄干が、どれも灰のやうな渇いた色をして、その下の路ゆくものも、袢纏着の出前持ちか、使ひあるきの小厮女か、駕籠かきが空のまゝで歸つてくるばかり、それでも何處かの大座敷から、太鼓鼓に鉦などの賑はしい、笛の音さへも傳はつてくる、眞晝の遊びに囃す響きが、廓の晝の靜かなうちに夢のように聞こえてくる。

お糸は、自分の部屋に、薄茶をたてながら、客から贈られた金屏風を廻した外側に、こゝろしづかに坐つてゐた。その薄茶の色にお糸が心づくしを飲みほすものは、屏風の奥に未だ睡むつてゐる長門であつた。

國の鹿兒島城下から、今度上つてきた莫逆の友が、嘗て契つた兄弟の誼によつて、浪々の身の長門に贈つてくれた厚い心の金子なれど、預つてもらひたいと、長門が疊の上に置いた小判の二十何兩を、お糸は一眼みると、櫛を横に顔を反むけた。

長門の大きな瞳に、凄みを帶びてきら〳〵と、現はれてゐる殺氣のいろを、お糸は見るより直ぐに、「人を害めてきたぞ」と語つてゐる、男の瞳のこゝろを、讀むでしまつてゐた。さうして、膽はありさうでも未だ流石に沈着かぬ、男の亂れる寢息を耳につけながら、他ならぬ自分ゆへに、殺害の罪を犯して、それも首尾よく戻つてきたらしい、契つた男を屏風で圍ひ、自分はこゝろしづかに薄茶をたてゝ、これから男の夢を搖り起し、その殺害の場の顛末を、男の口から屏風の影で祕めやかに聞きださうとすることの愉しさを、お糸

は先づ身にしめて味つてゐた。

　さうして、お糸は、そのとほりに、やがて長門を揺り起して薄茶を飲ませ、岡星を差されて愕く男を制へながら、丹波口の闇の始終を、心愉しく聽耽つてゐた。

▼炎▲

　夢に夢を載せて揚羽の蝶々が、春に疲れて夢がさめれば、粧涙そゞろに紅い廓の辛さを、屏風のそとに人知れず冷く拭ふ遊女の朝の鏡、ごと〳〵と揺れる障子紙の音に、多くの遊女が「今日も天氣か、風がつよさうな」と、寢みだれ髮を梳きあげてゐる、島原廓の未明の天に、一團の炎が、桔梗屋の裏庭から、渦まく煙と共に噴きあがつた。

「桔梗屋やあ――、桔梗屋の火事やあ――」

「火事やあ――」

　一時に湧きたつ叫喚の聲々と同時に、廓中の萬象が各自に渦をまいて波をうち、瞬くひまに擾れつくした。

　限りなき紛擾の中心に、桔梗屋の自分の部屋で、お糸は煙に咽びながら、「遁げよ」と、長門をせきたてつつ、その腕ヶ緊しく摑むで、身を悶えてゐた。そのお糸の妍かな眉が一つに攅まつて、激しく痙攣してゐる白い額を、長門は强く瞰おろしながら、濃くなつてくる煙のなかに、刀を提げて小搖ぎもせず凝然と立ちすくむでゐた。

　炎の近く燃えうつる凄じい響きと、外に囂ぐ狂はしい聲々を聞きながら、長門は黯い涙を制へかねた。草莽の間に、衰業を扶けまゐらすべき長門自身が、一朝の痴情に心を墮して、我が血をこそ流すべかりし輦轂の下に、賤しき賣女の色に耽溺し、そこに犯してきた一切の罪累が、長門の心に、まざ〳〵と浮いた。

　賣女のために企てし殺戮の罪、賣女の唇に動かされて敢てせし放火の累、その炎と煙とにかくれて、今や賣女と共に逐電せんとするまでになつた長門の五濁の煩惱が、お糸に激しく急きたてられながら、忽ち悔悟の涙に悉く覺めた。

　まさしく心機の轉じた長門は、お糸の悶える瞳に映つてゐる自身の淺ましい姿を少時く視つめてゐた。さ

うして、忽ち身を引く刹那に、鋭い氣合を帶びて、お糸を覗据えた。

一刻の安危のかゝる炎の上に二人が立ちながら、何としても身を動かさうとはせぬ長門の顔を、男の腕を摑むで身悶えしながら、仰ぎあげてゐたお糸は、長門の身を引いた鋭い氣合を感ずると、愕然として息をつめた。しかも血に燃えるやうな男の瞳の殺氣を見るや、否や、お糸は颯と身を躱はし、襖を蹴る間も遲し、蒼白い煙の一面に匐つてくる長廊下に、燕のごとく袖を飜して奔りでた。

煙を裾に煽らしながら、誰も疾く悉く遁げ了つた桔梗屋の廣い廊下から廊下を、お糸は唯だ一人、煙の薄い方向へと、一氣に飛ぶやうに廻り廻つて、表て二階にまで辿り下りては來たものゝ、向ひの樓の軒を掠めて、路一面に降りしきる火の粉をみとめた刹那には、最後の覺悟を、そこにきめた。

それでもお糸は膽を据え、裏庭に離房座敷の崩れて墜ちる、凄じい響を耳にとめながら、轉ぶがごとく階段を飛び下りて、戸外に遁れ、煙と火の粉の只中を、右左の袂に髮を掩ふて、こゝろ一散にひた走つた。

やがて、桔梗屋の甍は、炎と共に、炎のなかに墜ちてしまつた。

廓火事の燒跡の、灰と石ばかりをかきわけてみたときに、右手の骨に刄を握み、焔のなかに自ら最期を遂げた藤木長門の、黒く爛れた屍が、お糸の使つてゐた臙脂皿といつしよに現はれた。

炎のうちの桔梗屋を、煙と共に遁れでたお糸は、三條小橋の山城屋まで、走りつゞけて、長い息を危くついた。

丹波口の人斬りの下手人は、所司代の目附の探索にも、島津藩の浪士、藤木長門の仕業と判つてゐた。桔梗屋の遊女小太夫の部屋に、捕りに行かうとしたときに、その長門は、火を放ち自刄に伏して最期を遂げたのであつた。その放火犯に、お糸が共謀してゐたことは、永く分らずに済まされた。

▼人穴お糸▲

文身に名のある匠が、浪華の天神橋の、流れのほとりに、長く住むでゐた。

肉血を彫る純銀の管針に、丹青の彩りをふくませて、心をこめて肌を刻む、その技は、まづ肌の澤、肌の下なる脂の柔かみ、さては肉づきの圓みぐあいなどの、其れ〳〵に、何れは生きて動いてゐる肉を劈いて、文身の痕をも生きてそのまゝ動かすべき生命の息を植ゑてゆく、それは生命に生命を遷す、心のうへの技能であつた。

浪華に文身の名匠は、『ほり市』と呼ばれてゐて、五十あまりの童貞の獨身ものであつた。

そのほり市の、純銀の針の味にあこがれて、天神橋のほとりを訪ね、麗はしい女の肌を、悉く差しだして、全身あまさず、白いところを殘してくれまい望み、とお糸は、自分の肌に生涯描かれる、勁い心の男の面影を、自分からは誰とも擇ばず、ほり市の思ふがまゝに任して、たゞ「世に稀な勁いこゝろの男の文身」をとばかり、兩手をついて、ほり市の前に恭しく頭をさげて囑むだ。

ほり市は、それを快く諾いてくれた。

顔と、手の甲、足の甲などは、文身のうへには、有るも無いも同じことゝ、それだけ除いたお糸の五體全部に、ほり市は、仁田の四郎が富士の巻狩りに、靈山の人穴探りの豪勢な歴史物語を思ひ擇んで、その文身に、半歳かゝり、お糸の血に自分の血を注ぎながら、心ゆくまで彫りに彫つた。

匂はしいお糸の肌に、仁田の四郎が人穴探りの、凄い丹青をあざやかに彫りをはると、ほり市は、銀針の尖を折つて、

『わしも是で文身師を止めたろかい』と獨りで言つて滿足した。

それはお糸が二十三の秋であつた。

再興した桔梗屋に、前後四年の勤め年期を勤めあげて、二十の春から京と浪華の街道に、幾多の旅人を啄み、或は名ある豪家を蝕ひなど、あらゆる罪の興に耽り、猶ほ充たされぬ心の渴きを覺えて、お糸は、肌に死

ぬでも殘る刺戟を求めて、浪華のほり市を訪ねてきたのであつた。

▼剝皮▲

斯うして毒婦人穴お糸の名が、畿内一帶に流れ始めた。

お糸は仁田の四郎の面影を、背に負ふて、浪華の巷に入つてきた。年すぎて二十八の妖艶さに、その心も我から爛れきつてゐた。

淀屋橋の南詰に、お糸は、飾り屋松兵衛の老舖に序でに寄つて、金無垢の煙管を袂に忍ばせた、その瞬間を、おぞましくも、通りすがりの天滿の與力に捕へられた。

女でこそあれ稀代の毒婦、牢死するまで養ひつかはせとの、奉行の聲を聞いたとき、白洲の荒い砂利の上で、お糸は頷いて微笑した。我ながら自分の心の扱ひきれぬ、謂ひやうのない自分であることを、お糸は漸く知つてた。身を果つべき牢の奧に、さうした自分がどうした企みに出るのであらう。牢の强さと自分のこゝろと、何れが勝つかを知ることは、お糸自身にとつて、未だ知らなかつた新しい愉しさであつた。

お糸は、三度破獄を企てゝ、そのたびごとに牢に敗けた。さうして、鐵の手錠をおろされたまゝ、一人の獄吏が專ら屬いて、獨りゐる牢室に入れられた。

その翌年、お糸は二十九の夏に牢に死むだ。

奄々、息を吐きつゝ、臨終のお糸は、自分の肌を尙ほ惜しがつて、死んだ自身の五體から、肌を剝いで殘して欲しい、と、これだけを遺言にして、冷くなつた。

お糸の肌は、生前の望みどほりに、剝ぎとられ、額面に貼りつけられて、今は凄慘ないろに褪りながら、然し「肉の美」をよろこび、「毒の甘味」をおもふ、人のこゝろ――それはお糸も有つてゐた――に牽はれず共鳴して、今も尙ほ多くの人に囃されてゐる。（完）

人物評論（七十八）

内相及鐵道院總裁としての後藤新平男



▽新内相後藤新平君

早川鐵冶

八月の中旬大隈侯の辭表問題が餘り煮え切らないから、大隈さんに御目に掛つて、人間は好い機會に見切を付けるのが肝腎であると御忠告を申しに行つたが、其時大隈侯は近頃陰謀團などがあつて頗る不快であると云はれた。そこで我輩は、成程世間では後藤新平などが陰謀團を組織して、此早川も其團員であるなど云ふ流言も行はれてゐるやうである。然し我輩は生來陽の性質である上に、侯とは二十年來

の親交がある。惡い所が有れば侯の面前で露骨に惡口を云ふ。又後藤君も陽の方で、陰に御殿女中風な陰險な行動は取る男ではないと云つて置いた。其後また我輩は、貴族院の一部にも我輩と同意見のものもあつたので、更に大隈侯へ早く處決しろと云つてやつた。間もなく我輩は生れて五十二年の間に初めて病氣となり、以來今日まで彼れ此れ六十日餘り寢て居る。浮世を離れて六十日にもなるので、下界の事や政界の事は如何なつたやら一向判らなくなつて了つた。然し大隈侯が辭表を呈して骸骨を乞ふた事は、混濁した政界の氣分を一新する上にも、又同侯及び大隈家に取つても寔に結構な事で、我輩も大に喜ばしく思つてゐる。

所で今度政變の局に立つて、副總理の任に當つたものは、誰が見ても後藤新平君である。我輩は後藤君とは獨逸以來の友人で、又多少氣合も同じ處がある。其後藤君が今日までの政治家としての事績には立派なものがある。前年臺灣民政長官として臺灣を統治した偉勳は、彼の前になく、彼の後にも二三人代つたが、彼程の仕事を爲てゐるものはない。臺灣の今日あるを致し、日本の資源を現實せしめたのは皆後藤君の手柄で日本の殖民史上不滅の功績である。又鐵道院でもさうである。君が總裁となつてからの鐵道行政の發展は古今未曾有である。從業員の獎勵養成保護の如きから、列車内の裝置、甚だしきは停車場の雪隱の隅まで改善の手の及ばぬ所がない位である。鐵道寮が鐵道局となり管理局となり更に鐵道院となるまで、上、井上勝が就任以來今日まで數多の人が寮、局、院の長となり總裁となつた。後藤君の後には、原敬君も二回程總裁となり、床次君の如き若手や、鐵道專門の仙石貢君や、經濟家を以て自ら任ずる添田君なども其職に就いた。然かも後藤君が僅かに總裁になつてゐた内にした程の仕事をした者は一人もない。一體歷代の總裁は何をしてゐたのかと思ふ程、諸子の名は赫灼たる後藤君の聲名に腐蝕（エクリップ）されて了つたのである。南滿鐵道の事業でも矢張り同じである。若し柱が凡庸の鐵道技師だけある人とか、單に役人上りの人間とかを以て南滿鐵道を統轄させたなら、唯單に鐵道の經營だけに止まつて、今日見るが如き南滿洲に於ける事業の發展、殖民的經營は到底見る事が出來なかつたであらう。惜むらくは後藤君を故ら四五年南滿鐵道に置かせなかつた事である。此點で我輩は後藤君の如きは殖民地、若くは新たに爲すべく經營の任に當つて貰ひたいと思ふ。

一體北海道の如きは、以前は旨く行つたが今日は内地同樣の取扱ひですつかり駄目になつてゐる。樺太も平岡長官が焦つて見たが、徒らに世間から疑惑を招いて、爲めに迷惑をしたに止まつてゐる。後藤君が内務大臣になつた上は、曾ては同志會の總理として北海道を巡遊した事もあるのだから、大に其殖民的經綸の才を揮つて貰ひたい。又後藤君の郷里である東北地方は、如何してあゝ世間から見捨てられたのであらう。北海道や臺灣や近頃では南洋風さへ吹いてゐるのに、政府などでさへ此地方には目も掛けないやうだ。が施設其宜しきを得たならまだ〳〵大に發展して立派な財源となる餘地は充分あると思ふ。こんな方面にも後藤君に待つ處がある。其他土路の修築だとか、又一體の日本の開港場で、

汽船が汽車と連絡の着いてゐる所は少ないが、こんな點なども、内務大臣と鐵道院總裁を兩路に掛けてゐるだけ、後藤君の改善の手を待つ事が極めて多いのである。

一體近來の風潮には甚だ面白くないものがある。行政官などは成可く仕事をせぬやうに、無難に無事に世を暮らしたいと云ふ考しか持つて居ない。昔は地方長官などは、牧民官と云つて、自ら任ずる意氣も違つてゐた。今の地方長官などは法律執行委員に外ならない。其地方の繁榮其行政の發展などを圖るやうなものはない。假令あつても反對が出る。反對が出れば其地位が危くなる。他人や社會の爲めに自分の地位を危くするのは莫迦げてゐると悟つた奴許りである。尤も彼等は内閣の更迭する毎に任免されるので、席の暖する暇もないから、其地方の事情に通曉し、殖産工業の利便を圖るやうな考を持つ奴の出ぬのは當然かも知れない。それにしても餘り國家的觀念のなさすぎるのは慨歎すべきである。殊に大學出の官吏と來たら更に此惡風潮が甚だしい。一體大學は德育に重きを置かない。從て大學出身者には武士的意氣、武士的氣慨が絶無で平生點數に許り心を奪はれ、高等文官試驗に通過するのを惟れ事としてゐる。斯樣な輩は器用だから使ふには使いよいが、其局に當つて責任を以て事務を總べるとなるとから駄目で、將來の國家が如何なるか、將來の國民は如何なるかなど云ふ觀念はまるでない。稍か法律を知つてゐるが爲め、からすれば法律に抵觸するとか、そんな事は法律にないとか云つて、迚も大事業などは望まれない。昔の知事などには隨分エライのがあつた。三島通庸の如きは、當時こそ無教育のものが壓制知事などと惡口を叩いたが、今日では福島縣でも山口縣でも彼を德としないものはない。三島は愚人の不平には耳も傾けないで、自分のやる事はどん／＼やり通すと云ふ風で、中央政府も又之を助けたものである。今日では議會があるから、人民に不平があれば議會へ持出し、内務大臣もさう云ふ知事は捨てゝ了ふ。又島惟精は岩手縣で土木知事と唄はれて、今日まで其事業を傳へられてゐる。舟越衛は千葉縣知事として牧畜を奬勵し、豚肉を安く東京市民に提供したり、又東京の塵埃を用ひて千葉の不毛の地を肥やして芋などを産するやうにした。其他例を上げればいくらもある。所が今日の地方官には一人として傳ふべき事績を上げてゐる者がない。大學を出て腰掛け半分に地方官となつて、次官などの穴を探してゐる。云はば一種の大學趣味とも云ふべき惡風潮である。此風潮は單り地方官許りでなく、堂々たる國務大臣までが其通りなのだから情ない次第である。

後藤君は其處へ行くと異ふ。こんな輕薄な、國家觀念のない、大學趣味には全くかけ離れた舊式の人である。天下を治めるには舊型でなければ可けない、大きい仕事は出來ない。今の日本には此種の人が乏しいが歐羅巴にはある。獨逸でもスティフアンスと云ふ男は下級官吏から出世して遞信大臣となり、プロイスの遞信事務を發展させた。又ローンと云ふ男も低い地位から昇進して大に陸軍を改革した。此型の人は西洋には澤山あるが、然し憲法政治の今の日本にはない。後藤君は立憲政治以前の國家觀念があり、國家の事業に竭す意氣のある舊式の政治家である。

此點はプロイス邊の大臣に比して遜色がない。今度機に乘じて内相の地位に立つたのであるから、國政の上に一新面目を施して貰ひたい。少くとも上に後藤君の如き人を戴く以上、單に法律執行委員に過ぎないやうな地方行政官は撲滅して、國家國民の利福の爲めに全力を竭くす底の眞の牧民官を上げて地方行政の上に大なる改善を加へて貰ひたい。

後藤君は教育と云つては失禮ながら正式な教育は受けて居られない。我輩共が學問する時代には、業に薄給ながら官吏であつた。學問と云つては不完全なる衞生學位しかなかつた。後には極く内々で獨逸のドクトルを取つてゐるが、規則的なギムナジアムを經た正式の教育は受けてない。それで如何して種々の好い考を持つて、種々の事業をなしてゐるのかと云ふに、後藤君には人を容れる雅量がある。殊に學者を尊ぶ好い所がある。臺灣民政長官時分には、多少の批難はあつた人だが新渡戸稻造を伴れて行つた。南滿時代には高給で獨逸人を雇つた。鐵道院時代にも獨逸人を聘して、學問の出來る奴は可愛がつて用ひ、又後藤君自らも研究心が強くよく勉強した。桂内閣が倒れて浪人となつた時代、或日我輩が訪ねると、客を謝して會はない。我輩は別懇だから遠慮なく通つて、急な用でもあるのかと訊ねたら、さうではないが、今獨逸學者を招んで新刊の書を勉強してゐるので、學校へ行つた積りで客を斷つたのだと笑つた事がある。此の通り後藤君は、自分では餘り讀む力は無かつたが、人に讀まして研究した。それが今日の政治家と違ふ所である。今日の政治家などは、隨分頭のない人間が多く、勉強もしないから、碌な仕事も出來ないのである。立憲政體などと云ふものが出來てから、下級官吏は試驗制度で大學を出、高等文官試驗を受けた國家觀念のない奴で、大臣と云へば三百代言や新聞記者の古手や壯士の上りである。こんな手合が政黨の力で國務大臣になれる世の中だから、碌な仕事も出來ないのである。國運は益々進む、對外の關係は益々緊張する、爲すべき仕事は實に澤山あるではないか。然も彼等は無能だから手を拱ねて爲す所がないのである。遂には國を誤まつて了ふ。これが立憲政體の弊である、病である。元來立憲政治なるものは、其發生した本國に於て個人主義と自由主義とが合して出來たものである。外國から來た君主を戴いてゐる國柄だから、君臣の間が密でない。で自由を遮げられたとか、又自分の權利を主張するのだとか騷いだ結果が立憲政體となつた。それを日本でも王政維新後ミルの自由論とか、代議政體論などを薄つぺらに了解した手合が、作り上げたのが今日の立憲政體である。然し萬世一系の天子を戴てゐる家族主義國家主義の我國に、英國流の憲法政治は其儘當て嵌めやうと云つたつて當て嵌るものではない、其結果が今日の狀態である。今更ら憲政の逆轉などゝ云つたつて、かうなるのが寧ろ當然である。選擧などゝ騷いだつて、多寡が金で代議士になる事ではないか。今日の代議士で、一人だつて金で買はないものはない、唯ではいくら國家的經綸があつても駄目である。地方などには有志なんと云ふ一種の臍入りか仲買のやうな奴がゐて代議士から金を貰つて選擧民買收の運動をする。此輩は若い時には青い英國の雜誌や、福澤さんの書を讀んで產を破り、遂に有

志などと稱へてごろついて、四年に一度か三年に一遍來る選擧を待つてゐる。選擧民も亦金を餘計出すものを選擧し、貰つた金で酒を飲むと云つた有様である。國民の選良も何もあつたものではない。而かもそんな奴の鼻息を伺はなくては政治が出來ないのが今日の狀態である。何の事はない三百八十餘人の罪人の云ふ事を聞かなければ政治が出來ないのである。斯くの如く政界が腐敗し、糜爛してゐる際、後藤君の如きが內相となつたのは喜ぶべき事で、今度の選擧にはかゝる醜族に大鐵鎚を下して大に政界の弊風を一掃して貰ひたい。後藤君にはそれ丈けの力量はある筈である。我輩も六十日餘り病蓐に横はつてゐる間にいろ／＼考へたが、我輩共が國家の爲めに竭す處はもうあと十年位なものである。後藤君も恐らくはこれが最後の舞臺であらうと思ふから、今度は大に奮發して、殖民史上に不滅の功勳をなした如く、充分に誤れる憲政の病弊を矯正して、衰へんとする我國の道義心を回復するの大任を盡くして貰ひたい。これは內相として將に首途せんとする後藤君に對して、病蓐にある早川鐵冶の衷心から翼望する所である。

▽內務大臣の椅子と後藤男

火牛樓人

一

若し內務大臣の椅子に靈を吹き込みて、人間の如く言はしめば、必らずや人物論者が未だ想像すること能はざりしほどの興味ある物語をするであらう。而して新內相後藤男の如きは、此の椅子の爲に、確に、幾多の挿話を提供す可き新人物である。

抑、新內閣の成立に當り、此の椅子の持主たる可き運命は既に定まつて居た。或は淸浦子、平田子、或は小松原氏などいろ／＼の評判やら曲折やらは有つたに相違無いが、其は、眞に、評判と曲折とに過ぎなかつた磁石を動搖させると、針は數回、左右に震搖して、果して孰れを指すべきものであるか分らぬようであるが、暫時の後、豫定の如く北を指す。其と同じく、此の新政變に動搖したる針は、暫時、激搖の後、後藤男に向ふと共に靜止したのである。

二

曾て此の椅子を占領した人物の中で、尤も貫目の有つたのは、大久保卿(利通)と井上卿(馨)とであつた。其は、椅子が語らずとも、內務大臣室の扉（ドーア）が證人である。およそ地方官が內務大臣に面會に來る時、大臣室の扉（ドーア）を開けて入つて來て、幾歩、歩んでお辭儀（ジギ）をするかゞ、內務大臣の

貫目の定まるところである。即ち内務大臣の貫目を測る可きカンカンは大臣室の椅子と扉とである。内務大臣が椅子に腰掛けると、其の貫目の幾干かは扉に現はれるのである。而して此の椅子と地方官がお辭儀をする地點との距離が遠いければ遠いほど大臣の貫目が重いのである。其處で或大臣の時は、地方官が數步入つて敬禮する。或は大臣の卓の前まで來てから敬禮する。或者は扉を開けて笑つて立つて居る。或者は、敬禮は規則であるといふような顏をして、又た或者は、大臣が丁寧な敬禮を希望する故にといふような表情を、目でして見せて、孰れも謹んで敬禮する。兎に角、内務大臣は幅の利いた者である。就中、大久保卿と井上卿との時は、地方官が扉を開けると、直ぐに、お辭儀をする。内務大臣に遙拜をするといふ型であつた。

新内相の後藤男は如何であらう。尋常一樣の地方官は、案外、遠方からお辭儀をする者が多からう。大臣室のカン〱の上では、前内務大臣よりも、確に貫目が重からう。然れども大臣室の賑やかな事は、又た到底、前大臣の比ではあるまい。大臣室は陽氣になつた。椅子から見ても久しぶりに、愉快に、時には笑聲、室内の空氣を動搖し、或は椅子を搖すぶる事もあらう。而して制服を著けて此の椅子に坐した者は、開闢以來、始めてゞある。内務大臣の椅子は、彼に出つて、大分、新氣分を味ひつゝある事を想像する。

三

大久保卿、伊藤卿の内相たるは、其の實、首相であるから、別物とする。内務大臣は内閣の主婦役であるに相違無い。暫らく近來の顯著なる内務大臣を主婦として見る。良妻賢母の典型は平田子であつた。マッチ一本でも粗末にはせぬといふ風であつた。極地味で、堅實で、世帶の爲なる人であつた。報徳宗を鼓吹したり、産業組合に沒頭したりするのは即ち彼の主義を發揮するのである。併しながら如何にも確かな、推しも推されもせぬ女房振りであつた。此ならば隨分、大世帶を任かせても立派に擔當する事が出來るといふ囑望が、即ち平田子をして首相級に推し上げた所以である。一木氏に至つては、同じく報徳宗を鼓吹する人ではあるが、如何も良妻賢母とは見へぬ。地味でもある、確實でもある、是ぞといふ非難も無いが、威重が足らぬ。風采、態度は眞面目であるけれども、德が足らぬ。愛嬌が少い。一木氏の女房振は女教師上りで、未だ教師氣分が脱けない奧様といふ風で、容貌は惡るくは無いが、丸髷が似合はぬ。さればとて夜會に出ても引立たぬといふ具合であつた。其の代り本は善く讀む。手紙も達者だが、文章は世馴れて居ない。大浦子の主婦振りは凄いところがある。彼を大隈首相の下に置くと、半分以上、亭主の領分に切り込んで行く。桂内閣の主婦としたら、恐らく怪我をせずに大任を果し得たであらう。畢竟、彼は、内助も外助もする。譬へば世間の事業家の細君たる者に、往々、學校教育は受け無かつたが、世間の事は分り、實際に、主人を助けて辣腕を揮ふ人がある。時々、亭主が茫然して居ると、内々、相場にも手を出し兼ねないといふ性質である。此の如き主婦は、之を統御するは、主人の貫目如何に存するのである。渾沌

石が重くなければ、澤庵が酸らくなる。大浦子の失敗は、畢竟、澤庵石が重からざるのに起因するものにして、罪は大隈首相に存する。本來、あれ位の働ける主婦を物色するは困難である。善く働く以上、多少の非難は免れ無い。多少の非難は、寛大に見て、宜しく其の才幹を取る可きである。

近來出色の内務大臣は原敬氏であつた。是程の内相は、容易に得られまい。其の力量、其の才識、群を抜いて居る。頭腦明晰にして、應對明敏なる事、非常であつた。併し、彼の頭腦は餘りに明晰にして、其の應對振りは、太刀山の突張りの如く、敵手を一突きに突飛ばすから、敵手に恨まれる。愛嬌が無い、餘裕が無い。彼が、今、一度、内閣の主婦役を勸める事があるとしたら、彼は、此の點に就いて一考す可きである。然れども彼としては、何時迄も、主婦役を勸めるよりも、早晩、首相として働く事を考へねばなるまい。

原氏が内務大臣たる時、地方官會議は半公開であつた。兎に角、内務省の中では公開であつた。何人でも隨意に傍聽が出來る。書記官も行けば、囑託も、屬官も、給仕も自由に出入して傍聽する。地方官會議は、内務省の中の國會であつた。而して原氏は鮮やかな議長振を發揮して居る。議長振の鮮やかな、而して强かつたのは、井上卿以後、原氏を推す。此の二人は、邪外を要せざる議長であつた。地方官會議の公開といふは善い事である。然るに、一木氏は、全然、秘密にした。會議室の扉は堅く閉ぢられたのである。

利かぬ氣の後藤男は、一木氏に倣ふ可き乎。原氏の態度に擬す可き乎。恐らくは彼は、原氏の如く、地方官會議を半公開して、鼻眼鏡をいぢりつゝ、議長振を、屬僚に示す事に、躊躇せざるであらう。

四

巡査が刀の鞘の儘で外套の上から人を斬り付けたといつて强辯した事件は、原氏の生涯に一點の暗影を留めた。强辯も時に依る。吾輩は、此の事件を好まぬ。然れども原氏の主婦振りは見事である事は否定せざる者である。後藤男が内務大臣としての目標は、原氏であらねばならぬ。

原氏の女房振は、言はゞ、一世の女形である。彼は女形を以て、主婦振りを示した。女優には非ず。政岡だの、岩藤だの、淀君だのといふ確然たる女振は、將來は卒知らず、今の女優では企及す可らざる事である。先年、帝劇で見た女優の政岡の如き、政岡の雛型であつた。如何も、是等の確然たる女振を、大舞臺に見せるのは、一世の女形であらねばならぬ。原氏の主婦振りは女形であつた。歌右衛門か梅幸かが、女優の中に伍して登場して居るようであつた。脊も高く、技藝が頭抜けて居る。女優よりも却つて眞の女らしく見える。而して男性的の氣骨を以て行つて居る。

新内務大臣の主婦振りは、吾輩の所見を以てすれば、新らしい女といふ氣分を帶びて居る。併し、新らしい女といふ丈けて、外に何も無い女とは違ふ。文學を專門にする新らしい女では無い。兎に角、新らしい女の氣分を帶びた、愛嬌もある、學問も多少有る、思想もある。手八丁、

口八丁、經驗も手腕も備へて居る有爲な主婦である。而して新たらしい女には得難い美人である。

新内閣の新主婦は、此の如き女房振を示して居る。これからも此の態度を發揮するであらう、新首相の女房役としての、此の如き女房振りは頗る異彩を放つて居る。寧ろ新内閣の精彩である。新首相と對照して甚だ面白い。相似ざる者夫婦になつて居るように見へるが、却つて此の配合が新内閣の色彩を爲すものであると吾輩は考へて居る。桂首相の女房として、平田子の良妻賢母が善かつた。三十二方美人の御亭主に、良妻賢母の細君で、配合が甚だ佳かつた。此の度は寺内首相の亭主役が、堅實な良妻賢母ともいふ可き性向を帶びて居るから、其の女房役は、華やかな、而して新らしい。愛嬌の多い、新流行も解して居るような人物が、相補ひ相助けて、新家庭の精采を爲すであらう若し後藤男が其の天分を發揮しつゝ、兼ねて緊縮、謹愼の二語を忘れずに居たら、立派な女房振を示す事を得て、彼が一生の理想たる首相級に進む事が出來るかも知れぬ。

五

後藤男の新任を祝して、昔話を一つ進呈し度い。

内務の空氣を緊張させた者は當年の井上卿であつた。廢藩置縣の時も井上大藏大輔の部下に俊才を網羅するの觀が有つたが、後に内務大臣の時も一省の空氣を緊張せしめた。彼の態度は、新大臣の三省に値する。此の事は内務大臣の「椅子」が、何人よりも能く記憶して居るに相違無い

井上卿は、省内の新人物をして遠慮無く、遺憾無く、議論を鬪はせ、切磋琢磨させた。内務省は大學秀才の討論場のようになつた。都築馨六、江木千之、江木衷、齋藤修一郎及び一木喜德郎等の諸人が、漸次に、頭角を拔いて來た。高等官の食堂で、大臣以下、午餐の時も、議論湧くが如くであつた。大臣は、若手を統御したが、次官には若手の稽古臺になり得る者が無かつた。渡邊千秋、芳川顯正、松岡康毅等の次官が取替へられたが、松岡に至つて漸く始末が付いた。流石の芳川も若手の氣焔を持て餘した。渡邊は、江木と都築との起案に、代る／＼賛成して居た。松岡は、一番、頭腦明晰であつた。

井上卿も中々、人は惡かつた。渡邊は、利巧な人である。丁寧である或日、食堂で井上卿が次官を相手にして、何か議論を話し出した。渡邊次官は、ホークを措いて、話の段落毎に一々、御有理（ゴモットモ）と、相の手を入れる。或は、私も賛成、私も同感などゝ、調子を付ける。井上卿は頓着無く段々、話して進んだ。最後に至つて、一轉して、全體を一括して、「トいふ議論もあるが、俺は反對だ」と遣付けた。して見ると是迄話して居たのは他人の議論で、井上卿の自説では無かつたのだ。事、玆に至つて次官は進退谷まつたといふ奇談もある。

此の如くして、井上卿の時に、内務は緊張せざるを得無かつた、强將の下に、弱卒無しといふ風であつた。然るに、井上卿以後、年を歴て、内務の元氣消沈した趣が見へる。若手の氣燄が局長を凌ぎ、次官を屏息させるような活氣は沒くなつた。井上卿の時が、恐らく内務の全盛であ

つた。後藤男は井上卿の如くに、功臣で無く大勢力では無い。併し、彼の抱負から見ても、彼は、内務の空氣を緊張して、内務を若返らせて、井上卿の行つた事を行つて見せる位の勇氣は有らう。彼は元氣と稚氣とを帶びて居るから、彼の内務は、思の外、新らしくなるかも知れぬ。

六

後藤男は平生、一個の常識論を有して居る。彼の說に據れば、高尙なる常識は、則ち時代文明を表現する者である。學識は常識の一要素たるに過ぎぬのである。彼は、此の說を金科玉條として居る。而して彼自から現代文明を表現する高尙なる常識の象徵であると信じて居るらしい。

此の如く、彼が「高尙なる常識」を以て自から任ずるは、彼の抱負でもあり、自惚（ウヌボレ）でもある。彼の弱い所も此に存し、而して彼が人氣を有する所も玆に存するのである。又た換言すれば、彼の智識論は、常識は專門智識の上に立つ事を標榜するものである。專門智識を消化し、陶冶して時代の常識を爲すものであるといひ、心中、竊かに、俺は醫者を行り、醫學專門で、其れから種々の本を讀んで居るが、專門の人では無いぞ、專門から築き上げた高尙なる常識を表現する新人物であるぞといふ氣焰が含まれて居るのである。彼が、此の氣焰を吐くのに、常識論の表題を以てするのは、則ち彼の彼たる所以である。

彼は自から言ふ如く、學者では無い。專門の學問をした人であるが、畢竟、常識の人である。常識の中に、新思想の閃めきを見せる人である彼は議論に富んで、思想家たるを失はぬのであるが、彼の政治家として思想家たるは、伊藤卿とも異なり、必ずしも經世一點張りでは無い。平田子や一木氏の如く、學究的の臭味を帶びない。大隈卿の法螺とも違ひ原氏の事務的なるとは選を異にし、後藤式常識の地盤の上に築き上げた思想議論である。必ずしも深遠に非ず、奇拔に非ず、然れども、つねに、何か後藤式の新らしい事を言ふ。

内務大臣の「椅子」は、初めて此の如き「高尙なる常識」を標榜する理想家を迎へた。後藤男の所謂「高尙なる常識」が内務大臣として、果して何程の價値を示す可きやは、世間よりも、却つて、無言なる「内務大臣の椅子」が尤も能く知るであらう。

大正五年十月廿二、秋晴の朝記す。

▽内相及鐵道院總裁としての後藤男

鐵拳禪

一

吾輩は多年、興味の眼で男後藤新平を觀て居た。で、時人としての彼れを、其の時毎に評論して來た。別に贔屓角力を觀るやうな偏愛的興味で無く、冷靜に舞臺上の俳優を觀るやうな批評的興味を以て面接した。夫れにしても、彼れの人物論は、餘りに書き過ぎる程書いて居る。今更

彼れが內相になつたからとて、而して鐵道院總裁を兼ねたからとて、其の人物に大した變化の有らう筈なく、特に書く程の事も無いやうであるが、再覽の興味眼に映じた人物ではあり、現內閣の花形と云ふ事であるから、吉例に依つて爼上に刀を加ふる事とする。

二

再覽の興味の眼で彼れを觀て居たのは、單に東北出身とか、同藩の關係とか云ふ、そんな地方的感情を以てでは無い。又彼れと何かの恩怨あるとか、利害を持つて居るとか云ふ私的關係では勿論無い。彼れが何程か大器晩成の格で、多望な將來を持つてるやうに見えるからである。唯大器晩成とだけでは、其の意味が茫漠としてるが、多少の說明を加へて見るならば、彼れが一種の未成品である事と、彼れが何事をか成さゞれば往生しないやうな氣象とが、ともすれば政界の波紋を織り出すからである。

一言を以て評すれば、彼れは活動的人物である。又別語を以て云へば彼れは活動的政治家である。彼れが突飛な行動を馬車馬的だと貶す者もあるが、彼れが才氣縱橫な、併しながら傲岸を加味した活動振は、行路の人に羨望或は憎惡の眼で見られる自動車により能く似て居る。彼れが初めて遞相になつた時分は、盛んに馬車を乘り廻して居たが、二たび遞相になつた時は、自動車を無遠慮に疾驅して居た。彼れは其の乘物も流行に遲れまいとする進取と、自己の性格に合つた物を採用するの決斷とを持つて居る。世間では能く車輪の働きと云ふが、彼れは自動車のやうな慌しい、氣紛れな、他面より見れば、餘り努力もせずに、敏活な働きをやつて居る。其の活動が時に脫線する事があつても、活動が彼れの廣告であり、資本であるのだから、彼れは飽くまで活動せざるを得ないのである。疾走力の旺盛な自動車は、不意のパンクを怖れて、常に豫備のタイヤを用意して居る。彼れの活動力が猛烈であり乍ら、彼れは豫備のタイヤを身に付けて居ない。だから、一たびパンクすると、修繕の出來て活動する迄には可なりの年數を要するのである。

彼れは桂末期の內閣と運命を共にし、次で同志會を氣紛れに飛び出して了つたが、丁度パンクした自動車も同然で、暫く使ひ物にはならなかつた。或は遂に滿足に、使用が出來ないでは無いかとさへ思はれた。其の修繕の爲めに、心は焦躁つて居ながらも、表面は悠々と構へて、使用を急がないかの態度を示して居た。而して口癖のやうに讀書修養とか、靜座默思とか云つて閑雲野鶴的の半面を見せようとして居た。けれども彼れの胸は每に烈々たる野心に燃えて居たのである。其の野心は、彼れが言明を裏切つて、平凡と無爲との境に從かなかつた。彼れの心の表裏は、互に相戰つて居た。彼れが如何に焦躁るまいとしても、焦躁らざるを得なかつたのは、其の心の戰に起因する。子伊東のやうに盆栽の裡に隱れるには、餘りに野心が燃え過ぎるのである。何等かの活動をせねば、若くは廣告をせねば世に忘られると云ふ懸念があるから、野心を持つてる限り、無爲の日を送る事は出來なかつたのである。其の爲めに、彼れは輕卒にも政友會の裏門を敲いたり、新政黨を起さうと試みたり、

大隈内閣の倒壊を企てたり、直接間接に政府を擾らうとする運動に携はつて居た。彼れの野心、彼れの焦躁、彼れの活動は、一に權勢の地位を占むるにあるのだから、彼れは將來の首相たるべき人物に向つて秋波を送つた。彼れが同志會を飛び出して伯寺内の許に走つたのは、子加藤と打合はなかつたせゐもあるが、公桂の逝つた爲めに近き將來に政權を握るの望が無いと、早くも同志會に見切りを付けたのであつた。換言すれば、公桂と云ふ親分を喪つたので、更に伯寺内と云ふ新なる親分を得たのであつた。而して盛んに寺内内閣説を煽り立て、人氣を此處に轉じようと努めた。當時政友會の裏門を敲いたのも、政友會の多數の結束力を利用せんとしたのであつた。斯う云へば、彼れは深き用意の下に、着々政權を握るの準備をやつて居たやうだが、其の實彼れの心は、政界の暗流が急を告ぐる毎に動搖した。其處が同じ脫黨組でも、仲小路の一意專心、伯寺内を擔がうと待ち構へて居たとは趣を異にするやうである。彼が、れの活動は、縱令稚氣衒氣の伴ふにせよ、輕卒の嫌あるにせよ、廣告の意味を有すせよ、るに仲小路の默々の比で無かつたと思ふ。

三

男後藤の内相は、世人の期待しなかつた所であるが、期待しなかつた所であるだけ、夫れだけ面白いのである。此の六十歲の未成品が、生來の稚氣衒氣を發揮し、陽氣に、華やかに、自車動的活動を試みて、何をやり出すか分らぬと云ふ所に、新しい興味が湧くのである。

現内閣の人物を見るに、何れも陰氣た、恭實た、滋味のある事務家のみだが、獨り彼れは斷然とまでは行かずとも、確かに異彩を放つて居る。軍閥方面の氣受は餘り宜しくないが、一般の人氣と云つては大袈裟だが、少くとも沈滯した人氣を引立てたやうである。超然内閣の出現は、吾輩の感服しない所であるが、侯大隈が再び居据りをやつて、人氣を腐らしたゞめに、斯かる内閣も世人の浮氣な好奇心を挑發するに足るのである。伯寺内の彼れを内相に拔擢したのは、此の浮氣な人氣に投じようとした畫策であつたか何うかは知らぬが、多少考慮を致した結果であらう。と云ふのは、政黨を基礎としない内閣であるだけ、議會を無難に切り拔けようとするには、政黨を巧みに操縱する必要がある。若し又不幸にして議會と衝突し、之を解散する場合を豫想するならば、總選擧の際に活動し得る手腕家を必要とするのである。此の二つの必要上から内相的人物を現内閣の顏觸から求むるならば、或は其他官僚系より拔擢するにしても、彼れの如く政黨と關係あり、黨人中に子分を有する者は無い。子平田は地方官中に自己系統の者が無いでもないが、黨人とは何等の關係も持つて居ない。上院の操縱は出來ようが、下院に對しては覺束ない。處が現内閣は上院の勢力の上に基礎を据ゑてるのだから、其の方面の心配は無いが、下院の操縱は最も苦慮を要するのである。然るに彼れは臺灣の關係や、同志會にあつた緣故で、黨人間に後藤系と稱する者がある。其の系統と目さるべき人物は、政友會にも居れば、新政黨にも居る。所謂陰謀團は全部彼れと密接な關係の有る者である。政友會と妥協するにも、新政黨を切り崩すにも、彼れは比較的便宜な地位にある。特に總選擧に

踏んで新政黨の多數を打破するには、誂向の人物である。夫れに彼れが内相たる背後には、子平田が控へてるのだから、兩人協力して事に當れば、大浦が政友會の多數を打破した位な事は行り得るのである。彼れが内務の椅子に凭つたのは、大浦の之を占めたと同じやうな暗示や、反對黨に對する威嚇なども有るやうである。

四

彼れは大浦のやうに無學で、陰辣な人物で無い。其の比を前内閣の閣僚に求むれば、陽氣で、華やかで、法螺を吹く所は、侯大隈に似て居る。けれども、侯の老猾は無い。人物は素より小さからうが、侯ほどに無責任ではない。侯ほ容易に慍らず、何時も微笑して、愛嬌を振蒔いて居るが、彼れは如才なく振舞ふ事もあるが、癪に障ると嚇となり易い質である。其處に彼れが人心收攬上の破綻を生ずるが、金力と魔力とを以て、夫れを補足する所に彼れの長所があるかも知れぬ。臺灣關係の彼れが子分は、大抵彼れに利益を與へられて、富力を作つて人々である。小さい者を大きく育て上げてから之を利用するのは、彼れが得意の筆法である。

彼れは自己廣告を以て、少くとも政治家の生命の一部だと心得て居るから、何等かの機會を捉へて活動する事を忘れなかつた。今次二つの榮冠を得て、年來の志望を達したので、人心を收攬する事に努めるやうになつた。就任匆々伊勢參宮に赴いたのは、皇道の作振とか、敬神とか云ふ好印象を國民の心に彫り、併せて桐花會の人々の好感を得んとする底意も何程か有らう。特に參宮途中、曾て自分の制定した鐵道總裁の制服を着て汽車の中に納まつて居たのは、稚氣と云ふよりは寧ろ鐵道院の下僚の心を收攬せんが爲めである。彼れが去つて後、原、床次、仙石、添田等の總裁を迎へたが、彼れほどに下僚の心を收攬し、勢力を築き得た者は無い。彼れが三たび總裁となつたので、彼れの潜勢力が追々頭を擡げて來る。之も總選擧の時などは、勝利を贏ち得るの一勢力となるに相違ない。顧つて上院との關係を見れば、彼れは廣軌の提唱者であるから、素より受の好いに極まつて居る。一たび躓いた廣軌は、財政の都合上急速に實行し得るやは疑問だが、縱令實行の遅れるにしても、上院の反感を買ふには至らないと思ふ。政友會の原は廣軌には反對であつた筈だが、此程の決議を見ると、贊成に傾いて居る。現内閣に迎合する爲めの餘地を存してあるのだから、縱令廣軌案が議會に現はれても、以前のやうな奇筋を立てゝ反對しないであらう。或は伯寺内は、彼れに花を持たすべく、彼れに之を兼ねさせたのであらう。兎に角彼れは、伯の片腕として超然内閣に割り込んだのである。何か一仕事をやつて、政界の耳目を新にしようと期しつゝあるは明かである。

然らば彼等の期する所は何であるかと云ふに、恐らく外交の刷新乃至緊張を圖るにあらう。伯は陸軍を提げて起ち、彼れが鐵道を擁して進み、露國の好感を持つてる間に、前内閣の失敗を取り返す積りで居るのであらう。其の藍當が首尾よく出來れば、大向の喝采は誂合であるが、果して之を成しおほせるか何うか。

彼れの現内閣で實りを取ると否とは、將來の政治的運命に關すること

が極めて大である。彼れが内政の切り盛り、改黨の操縱から、外交の手傳までの大役を行り得れば、首相のお鉢が廻つて來ないとも限らぬ。彼れの手腕を揮ふの好機會は、今日を措いて他に無いのである。（大正五、一〇、一八）

▽曾我廼家五郎式の役者

川尻東馬

（一）

△歐洲大戰後の國策樹立といふ背景を用ひ、元老、官僚、軍閥、總出で後見役を勸むるといふ寺内大一座の歌舞伎劇、擧國一致内閣の大看板を掲げて、愈々開場と事極まり、座頭の寺内伯自身で、早稻田、下二番町、芝公園、馬場下と、御丁寧にもビラ播きの役目を勸め、扨之れから開幕といふ時に入つた鳴物は、日支外交改善といふ、觀客一同に大受けの大陽氣な管絃樂、緞帳はスウと上つた。

△定めし立派な顏揃だらうと待ち構へた觀客、之れは又期待に反した寄せ集め役者なのに喫驚、中には看板に偽りあるも餘りに極端だと怒る者、開いた口が塞がらずに呆れる者。兎に角觀客の失望落膽は、棧敷土間大向、果ては一幕觀のお客に至る迄、皆一様。能く〳〵其顏觸を注視すると、座頭の寺内伯は軍服姿で怖い眥を吊り上げ、夫れに是も不似合な算盤を持つて、中央床几に腰をかける。番附面第一の立役たる後藤男は、萬事金ピカ式のお好みとあつて、腰に短かい劍迄吊つて居る、之れは鐵道院總裁兼任の印らしい。其他左右に秩序正しく居並んだ面々、何れを見ても歌舞伎座の舞臺に登る有資格者は一人も見當らぬ。

△後藤男の藝は相當に達者だが、如何にも萬事仁和賀役者其儘の藝風、臭味は何時迄過ぎても拔けることなく、先づ曾我廼家五郎の處だ、勿論歌舞伎座に出演すべき代物でない。田男は丁度新派俳優の柴田善太郎といつた格、仲小路氏は、近頃流行の何々劇團主任といふが先づ相當の處、松室氏は一旦役者を廢業して、近頃舞臺に現れたことのない落伍老優、岡田氏は何年勸めても大部屋格以上に出世出來ず、自分でも諦めて居たのを、今度急拵えした名題昇進の大根役者。最後に控へた有松氏、准幹部として之れは一人で幾役も勸める訥子流の男、腕は達者だが如何せん小劇場許り打ち廻つた爲め、今は全く邪道に入つた、俗に云ふ惡る達者で評判高い男。

△先づ歌舞伎役者で相場の通るのは、座頭の寺内伯一人、其他は帝劇役者、新俳優、果ては宮戸座、演伎座格の役者許り、之れで大歌舞伎の興行も聞いて呆れるのは、單に通の劇評家許りでない。全くの寄せ集め者で組織された此一座に、大背景大道具、立派な囃方は勿體ないにも程があると、觀客一同呆れて苦笑を禁じ得ないのは尤もである。實は今迄寺内伯を買ひ被つて居た、東京の中央でこんな鵜芝居の蓋開けする程、馬鹿なビリケンとは思はなかつた、矢張り殖民地邊を興行し廻る旅役者、

之れ以上の藝も腕も膽もないのには、今更らながら我と我身の不覺を情なく思ふよ——是れは國民黨某領袖の寺内内閣評である。大石正己氏は確か一言の下に掃溜内閣だと罵倒した。

（二）

△扨寺内内閣の大立物、自ら稱して副總理といふ後藤男の内相振りや如何に。二役鐵道院總裁の方は、幾度も經驗あり、夫れに乾兒共が夫々重要な地位に據つて居るので、宛も手足を使ふ如く自由に働かせると出來やうが、内務大臣としては事實全くの素人、イクラ自身で威張つて見ても、地方官共は内心一夜泊りの御客位にしか思はぬは當然。平田子、大浦氏、原氏の其椅子に據つたのとは違つて、眞心から忠勤を擢んでるものは恐らく一人もあるまい謂はゞ面從腹背の徒のみであらう。最も此の内閣に相當の生命あり、殊に後藤男に再び盛り返す潜勢力ありと見れば、中には之れに依て根據を作り、他日雄飛の素地を得る爲め、一肌ぬぐ若手地方官もあらうが、如何に贔屓眼に見ても、内閣の生命は短かく、男に再起の潜勢力なきは明白の事實。夫れにイクラ見當違ひの知事連でも、直ちに夫れと忠義立てするものは先づ皆無であらう。

△内相としての男は、今の處久保田次官といふ女房役、夫れに顧問役の有松法制局長官、相談役格で水野錬太郎氏といふ顏もあるが、兎に角全く黑頭巾附で、辛らく御茶を勸めて居るといふ有樣。追々事務に熟達し事情に精通すれば、男一流の放れ業もやることであらうが、如何せん踊り方も舞ひ方も全く勝手判らず、當分の間木偶で納つて居るより外に途がない。現に曩樣行つた地方官の補充更迭、之れで見ても其内情が夫れと察せられる。有松長官と久保田次官の膳立、夫れに平田子の助言が實現された丈けのことで、男として只盲判を押したといふに過ぎぬ。

△如何に派手好きの男でも、一木前内相の地味一點張りな遣方で、一年以上通した後を承け、更らに平田子といふ舊德宗總本山を、大なる助言者と仰がねばならぬ現地位にありて、勝手の判らぬ場所柄の踊りであるから、玆當分何事も出來ずに過ごさねばならぬは當然の次第。況して總理大臣は凡帳面、嚴格一本鎗の寺内伯、到底華美を極めた踊りの出來ぬは、何人も推斷に苦しまぬ處である。

△何時頃になれば、内相としての男一流の手腕が揮ひ得るだらうか、夫れは無論時間の問題であるが、寺内内閣の壽命、夫れ程に永からずと見て居るは世間の通り相場、從つて恐らく黑頭巾の附いてる間に沒落の悲しき運命。結局其手腕を揮ふに至らずして退却するだらうとは、政治社會一般の豫斷である。即ち内相としての男は、終ひに無爲無能で過ごすだらうとの觀測者が多數である。

（三）

△男はお祭り騷ぎの名人である。大道具大仕掛け、如何にも世間をアツと云はせる人氣男だが、如何せん衣裳と鬘、夫れに顏を彩色してかゝらねばならぬ、手數も費用も甚だかゝる役者。爲て加へて末社雜輩を大勢引き連れて出ねばならぬ人物、却々世間で見る樣に簡單には濟ずることの出來ぬ藝當。一寸大隈侯と同一型の人物らしく世間で見て居るが、夫

れは全くの見當違ひ。大隈侯は末祉も雑誌も引き具せず、又衣裳も鬘も無用で、謂はゞ一人で長講何席の大看板。夫れで立派に觀客を集め人氣を博する獨特の技藝を持つて居る、譬ふれば宛も雲右衞門の樣な人氣男である。然るに男は左樣簡單には行かぬ、人氣役者は人氣役者でも、道具方雑方と大掛りで興行せねばならぬ代物、之れを同一型と見るのは、餘程世間は盲目である。若し強て其一致する點を求むれば、只夫れ出鱈目の一點でゞもあらう。

△以前桂公の下に、大浦氏と一緒に同志會を創立した當時は、如何にも大仕事師、大敏腕家の樣に囃されたが、世評と實地は非常の懸隔で、大浦氏の着々遂行し得るに反し、男は其聲のみ徒らに大きく、仕事は少しも運ばなかつた。其癖費用を濫費することは多大なもので、桂公は成程廣告用樂隊の樣な男だと笑つたことがある。最初政友會から何十人、何派から何十人と、預けてある金でも引出す樣に易く引き受けたが、愈々と云ふ場合になると悉く不渡手形で、只の一人も來り加はるものがなかつた。

△夫れ以來同志會内部に輕侮を受くること甚しく、殊に大浦派の壓迫甚しきに苦しみ惱み、終ひに黨中黨を樹てゝ大浦氏反對の氣勢を煽り、雑輩亡者共を集めて、未だ成立せざる同志會内に攪亂を行つたことがある。漸く自己本位、利己一點張りで行動する爲めに、自然に黨内の氣受け惡しく、殊に其門に出入する者、悉く之れ世間の札附許りであるから、多少男の價値を認め、其技能を發揮せしめんと計る眞面目な人々は、自ら雑輩亡者と同一視さるゝを厭ひ、終に其門を訪れぬことになつて了つた。是れ他日同志會を自ら飛び出ねばならぬ原因を作したものである。

△政界の破産者を以て目された男が、今度内相の位置に据つたので、今は政界の復權成金と云はれて居るが、國民黨の某領袖は斯樣に云つて居る。大正五年の今日になつて、後藤中心の出鱈目内閣が出來樣とは思はなかつた、世間で後藤男に何か目新らしい仕事が出來る樣に期待するが、夫れは大きな木鮨を見て、早速箸をつけやうと思ふ盲目共の事、愈々箸をつけて見たら只喫驚する許りの事さ、併し相場屋は喜ぶだらうよ、今一層の事に長島隆二君を大藏大臣にしたら、更らに大歡迎だらうがね、寺内内閣の嚴格主義には、隨分と思ひ切つた副總理兼參謀長を使つたもんだ云々。

(四)

△爆爵と云はれた程の人物、定めし勇氣があり膽力があらうとは、世間一般の期待だが、是れも亦大きな見當違ひ。成る程辨慶の樣に平素七ツ道具は背負つて居る、從來表面上に現れた仕事は、相當皆派手な結實を見せて居るが、内實に立ち至ると、夫れは又全くの正反對で、迚も安宅關で勸進帳を讀む沈着なく、又衣川館で立往生する自覺心、犧牲心もない。只七ツ道具で威嚇する丈けの辨慶、五條橋で千人斬りの豁當も、金で買ひ集める雑輩亡者共と範圍を極めてから、初めて遣る極めて安心危險のない保險附の仕事、迚も牛若丸の樣な豪い人物に出合ふ機會がない。

△如何に内心臆病であるかを立證する二三の實例を擧げやう。第三次桂内閣の憲政擁護運動に、四面楚歌の包圍攻擊を受けた當時の事。内閣の若手連中は、衆議院解散の外なきことを進言した。首相の桂公は却々承知しない、大浦氏、後藤男又元より不賛成である。斯て第一回停會の期間は過ぎた、以て第二回の停會となつたが、世間は益々攻擊の火手を增す許り、到底前途に鎭靜の機運が浮んで來ない。若手連中の解散說益々强硬にして、流石の桂首相も耳を聽け始めた。大浦氏も亦意大に決する處があつた。斯くして停會明きの議會は開かれることゝなり、愈々解散を斷行せんとした其早朝、後藤男は又々解散反對說を唱へ出した。而して曰く、此人氣を前にしては、迚も解散後の勝利を豫期することは覺束ない、更らに第三回停會を試みて、其間に何等かの策を施すに如かずと。終ひに桂首相、大浦氏を說服し、果ては自ら瓦解を招ぐの素因を作つて了つた。

△桂公逝いて同志會の存廢問題が世間に論議せらるゝの際、最高幹部會は加藤子邸で開かれた。當時男は五十萬圓の黨費を用意すべく揚言し、其必要論を標示して、黨内の人氣大に一身に集つたのである。黨員の意向我に集まる、此上は總理の加藤子を脅迫する朝飯前の事と、喜び勇んで幹部會に出席したのであつた。而して滔々五十萬圓用意の必要を論じ、最後に若し能はずんば、よろしく解黨すべしと結んだ。最初から小面憎しと見て居たる大石正己氏、其無謀なるを反駁して、更らに今少しく眞面目なる獻策あれと大喝したが、男は尙以て聽かず、飽迄前說を布衍して滔々メートルを上げること、將に以前に倍加するの勢ひ。是に於てか勘定袋の緖を切つたる大石氏、奮然として座を起ちあがり、何處迄も不眞面目なる意見に會議を攪亂する不屆者、此上は制裁を加ふる外なしと、方さに腕力沙汰に及ばんとしたのである。一座呆然殆んど口を添え手を出すものもなかつたが、其處は河野廣中氏、悠然起つて大石氏を抑え、徐ろに男に諭して靜かに其場を去らしめた。最初の元氣に似合はず、顏色蒼白身戰き居たる男は、玆ぞ虎口を免れる好機會と、匆々歸邸して了つたが、其意氣地なさ加減は、今以て政界の一笑話柄となつて居る。其後間もなく男は同志會を脫退したのである。

△斯様に萬事萬論、内心は極めて臆病、只鼻息のみ荒い、少しも腹力骨力のない人物であるから、男を熟知するものは、少しも之を畏怖して居ない。夫れに神經過敏症の人で、何か弱點を突き込まれると、直ぐ撥反應があるから、口や筆で怒らせることは案外容易である。何れかと云へば與し易い方の人で、人柄も意外に結構な方である。動もすれば上氣する性格の人物であるから、沈着に其脚下を注視すると、躓かせる機會はイクラでも捉へることが出來る。

（五）

△如上の臆病者であるから、議會解散は却々同意しまいが、併し前に嘗つた苦い經驗もあり、憲政會にして最後の決心を固めて突擊して來る以上、今度は止むなく最後の手段に出づるであらうが。地方官は前にも云ふ通り、一夜泊りのお客位にしか見て居らぬ間柄、迚も眞底から忠勤を

握てるものは一人もない。只鐵道院總裁たる利益を以て、地方地盤の攪亂を多少行ひ得樣が、之れは僅か一部分に限られたる地方の事。無論憲政會が正面の敵となれば云はずと知れた備兵は政友會、玆を先途と政友會有松長官等は、例の慇懃手段を用ひ、夫れに原系の地方官は、内々目立たぬ樣に忠勤を勵むであらうから、其方から相當の成績を收め得樣が、扨内相としての男の力では、殆んど何者をも得ることが六ケしい。

△解散前に政黨界の攪亂を行ふことも、今では世間の一部から期待されて居るが、近く大浦問題の餘燼未だ熄まず、政黨員各目の警戒心も抑々弛まざる折柄、憲政會の二十名を拉し去ること、非常の困難事と見るが相當であらう。況して男の恩顧により成功したる官吏、政治家、政商等に至る迄、何時迄も其系統に屬すれば、折角築き上げたる土臺、再び潰滅を免れぬことに不安の念を抱き、何時の間にか系統外に脫出するが實狀であることを知るものは、ウカ〳〵と其甘言に乘せられ、前途を棒に振る者、先づ滅多にないと見て然るべしであらう。

△男の恩顧を受けた誰彼、皆一樣に曰く。能く世話して吳れるのは有り難いが、男自身の行動は決して軌道を走らない、常識で判斷して今度は斯くあるべしと豫期して居る内に、何時の間にか脫線して別の軌道に乘つて居る。取り殘されて大變と漸く走せついた頃には、更らに又別の軌道の上を走つて居るといふ有樣。初めの二三度は我慢も出來るが、末には奔命に疲れて追附いて行く事は出來ぬ。結局自分の生命が大事だから餘儀なく離れて了ふのであると。是れ其乾兒多きが如く見えて、實は鷄鳴狗盜以外、眞に有力なる郎黨の一人もない所以である。

△政黨を攪亂するにしても、亦解散後の總選擧にしても、費用の多額を要するは明白な事實。殊に後藤男流でやれば、他人の三倍は確かに多くかゝる。大浦氏の樣な地味な遣方でも、大隈內閣の下に行はれた總選擧には、非常に多額を要したとの噂さある今日。首相の寺內伯は所謂人氣男の大隈侯と正反對の不人氣男、夫れに內相としての男は大浦子と正反對に金のかゝる遣方。如何に長閥擁護の金穴として藤田家あり、久原家ありとはいへ、左樣無制限に金の出るものではない。世間後藤男には幾多の金穴ある如く想像して居るが、吾人の傳聞する處によれば、夫程有力な後援者は澤山ないとの事。現に同志會創立當時でも、男一人の力で集まつた分は、極めて少額であつたと云はれて居る。

△斯く論じ來ると、當世第一流の人氣男、後藤新平男は洵に詰らぬ人物の樣であるが、併し一種の天才としては、確かに現代稀に見るの政治家である。桂公も考案の妙有、創意の達人と感服した程で、之を甘く使ふ人があれば、確かに國家有用の異材たるに相違ない。百の愚策、一の名譽、之れ後藤男が献策するものゝ分類である。之を取捨按排してして愚案を斥け、名策を用ふれば、實に我配下に有用缺くべからざる人材であるとは、桂公の常に云ふ處であつたさうだが、成る程男を知るものとしては明言である。恐らく故兒玉伯も此流儀で男を巧く用ひたのであらう。如何せん現在の寺內伯には、桂公の聰智明敏なく、兒玉伯の器宇技倆がない。男は名馬に相違ないが、平凡の騎手が之を御するには、餘り

に弊が多過ぎる。無論騎手なしに馬丈け駈けさせれば、何處に行くか見當がつかない、或ひは見物席に走せ込んで、大勢の怪我人を出ぬさとも限らぬ。何れにしても險呑至極な名馬である。

▽新内相後藤男

古川學人

新内相兼鐵道院總裁後藤男爵に向つて我々は何を期待すべきかを知らない。然し何かを期待し得るやうな氣がする。何故ならば彼は常に之と極まつた事を考へては居ないが、必ず常に何かを考へて居る、少くとも考へて居るらしく見える人であるからである。

後藤男に對しては、徒らに大言壯語するのみで政治家として何等確定の經綸がないといふ人もあるさうだ。此批評は一面に於て確かに男爵の眞相を穿つて居るものであるかも知れない。彼は趣味が廣い、何事にも興味を有つて居る、又實際いろ〳〵の事を知つて居る。時には明敏なる直覺力の閃めきも見える。けれども彼には惜むらくは統一がない。男爵の議論を聞いても、又其書いた本を見てゝ、嘘と本當と、眞理と冗談と、史實と傳說と、一言にして云へば玉石混淆して居る。本人に逢つて見ても矛盾せる思想を同時に頭の中に入れて平氣で居るやうに見える。桂公は曾て後藤の云ふ事には碌な事は無いが、百に一つ位名句を吐くので捨て難いと評したと聞いて居るが、百度物云ふ中に幾度眞理を說くかは知らぬが、兎に角彼の頭には細かに探撿すれば、必ず無類の堀出し物にぶつかり得るやうな氣がする。唯烏渡見た所、雜草茫々として何處に手を附けたら可いか分らぬといふやうな趣は慥かにある。

然し乍ら彼は國務大臣として決して相應はしからぬ人ではない。少くとも之までの諸々の大臣に比較して、或は今日大臣級の政治家と見られて居る總ての人と比較して、啻に遜色なきのみならず一頭地を抽んでて居るといつて可いと思ふ。然し之も無論比較的の話で、彼に國務大臣としての絕對的資格を認めやうとするのではない。唯從來の大臣はて宮の通りが好いとか、樞密院の受けが好いとか、或は元老の氣に合ふとか、又は之を大臣とする事によつて貴族院の幾人を操縱し得るとか、誠に下らない關係から選任を見た事が多い。實際の仕事は全然屬僚に任かして盲判を捺す丈けで、一國を料理する何等の抱負も何等の經綸も有つて居ない。況んや政治の理想に至つては全然皆無であつた。之れ迄の何の大臣を見た所が、一人として此標準に及第するものはあるまい。偶々能吏の評あるものは唯屬僚上りの、之までの先例を能く知つて居ると云ふ類ひのものに過ぎない。之に比較すれば後藤男は確かに一つの大なる異彩ある大臣である。無論彼に一定の經綸、一定の抱負ありとは思はない。けれども彼は何かをやる人である。豫め計畫する所なくつても、事に當れば何かをやれるだけの特別の技能を持つて居る人である。之れ彼の直覺力に富み、又常に研究的態度を捨てざるに由るのであらう。唯彼に

元來纏まりがないので、從て專門もない。彼の第一の專門たる醫者を捨てた事は已に數十年の昔である。初めて名を成した臺灣の植民政治も、次に名を成した滿洲の鐵道經營も、元來彼が此等の事業を專門として居つたが爲めに其事に當つたのではない。何でもやらせればやれるといふ所から、偶々兒玉、桂の如き聰明なる伯樂の發見する所となつて其地位に置かれたまでゝある。要するに彼には專門が無い。從つて何でもやれる、何れの省でも行く所として可ならざるはなからう。唯豫め夫れ〴〵の專門部門について一定の經綸あるに非ざるが故に、臨機應變の政治家に通有なる「淺薄」は又彼に免かれない。此點は彼の爲めに惜む所であるけれども、然しそれでも從來の如何なる大臣に比しても、兎に角國家の爲めに何かをするといふ政治家であること丈けは彼に多とせねばならない。

彼には多少功名を急ぐの嫌がないではないが、何かやらうとする覇氣がある。無爲にして終るは彼の欲せざる所である。然し他の一方から考へれば、此の無爲にして居れぬ所に又彼の缺點があるのではあるまいか。何故なれば彼は其爲せる事業によつて其人を判じ、事業以外に政治家の尊ぶべきものあるを深く意とせざるの傾かあるやうに見えるからである。此點は彼の人を使ふ上にも露はれるやうだ。彼と彼の周圍が如何にも忙しく、如何にも成金的で、如何にも獨逸的であるのは、恐らく此點から來るのであらう。あれ丈けの覇氣とあれ丈けの才識あつて、一點敦厚の趣を缺くのは、彼の人格を作る上に於て、龍を描いて睛を點ぜざるの趣がある。然し差當りの政治家としては、彼は確かに出色の人物である。總ての大臣が皆あゝいふ風に、國家の爲めに何かを遣らうといふことになれば如何に我國に之によつて幸福を受くるだらうか。

内務大臣として相當の仕事はするだらうが、之までの内務大臣の副業の一つ――當人も世人も多くは之を主たる仕事と誤解して居つたやうだけれども――たる政黨操縱に成功するだらうかといふ事も、多くの評家の間に疑問となつて居るさうだ。予も之を疑ふ。彼には幾多の乾兒がある。又從來乾兒の養成には隨分努めたと思ふ。之れが爲めに金も相當に使つたと聞いて居る。然し彼には此等の乾兒を十分に利用する丈けの勇氣がない。勇氣がないと言つて語弊があるならば、餘りに遠慮深いと言つてもよい。或人は後藤男は人を助けるけれども、決して進んで之を利用しようとする人ではないと言ふ。果して然らば之れ確かに彼の美點である。けれども初めから利用せぬ積りならば、助けるに際して彼と此と人の色別をする筈はない。彼は隨分學才を愛して多くの學者に研究の資金を投じたといふ美談を數多く聞いて居るが、然し他の一面に於ては助けるについても妙な標準で色別をするといふ說も聞いて居る。全然利用する積りといふのも誤りであらうが、全然利用しないといふのも眞相ではあるまい。けれども彼は進んで利用しようといふ程に、無遠慮な態度は決して取らない。故に男爵後藤の恩顧を蒙つたものは、天下の士其人少からざるべしと雖も、眞に彼の傘下に集つて忠勤を抽んでんとするものは、強いて自ら售らんとして彼の下に奔つたものに多い。尤も彼の乾兒と稱するものゝ中には、臺灣時代、滿洲時代に得たものもある。然し之

は或は民政長官として或は滿鐵總裁として集め得たるものにして、男爵後藤として集め得たものではあるまい。一男爵後藤としての彼の乾兒には、餘り芳ばしいものはないやうだ。此點に於て彼は大浦氏に比して丸で面目が違ふ。如何に金で人を縛つても、自分から惚れ、自分から縋つて行かなくては乾兒は出來ないものと見える。之を要するに彼の勢に隨いて來るものはあらう。形勢の良否如何に拘らず、彼の爲めに一臂の勞を捧ぐるものゝどれ丈けあるかは疑問である。

されば親分として見れば、何となく物足らない。さればと言つて彼は何處へ置いて決しても陣笠ではない。必ず頴脱する人である。然しどこかに何か足らぬ所あるを思はしむる人である。何を缺くかは我々に解らない。宗教又は哲學の深き修養によつて、俗ばなれをした所に人格の統一を求めたらばと、他所事ながら思つた事もある。男爵の年配、其地位、其經歷には何の不足もない。其上に兎も角も非常な人氣男である。其れにも拘らず一般の世人が何となく安つぽく見るのは何故であらうか。同なじ人氣でも大隈と言へば、人は多少の愛嬌を感ずる。後藤と言へば、人は殆んど鼻であしらふ。若し後藤男にして政治家として又は一個の人間として、更に大いに養ふ所あらんとせば、玆に反省する一つの方面があると思ふ。之なくしては彼は骨折つた割合に餘り世間から其功績を認められない。否な世間から功績を認められない許りではない。いくら金を遣つても乾兒も出來ず。いくら讀書講究に閑日月を使つても、纏つた頭も出來ない。閑地にあつては讀書講究に浮身を窶し、一旦風雲に際會すれば、朝奔又暮馳、而かも其爲めに眞に男の血となり肉となるものは案外に少からうと思ふ。男の精力には偉いものがある。其活動は敬服に堪えない。而して其勢力其活動をして眞に男自身の爲め、又國家の爲めに有要ならしむる所以の或物に些か足らぬ所があるやうに思ふ。

要するに彼は兎に角必ず到る所に足跡を殘す人である。よかれあしかれ、觸るゝものは必ず切つて行く。彼の思想、彼の政治家としての態度其出處進退等には予輩大いに異議があるけれども、之は意見の相違として暫らく玆に問題としない。只これからの國務大臣は男の如き常に攻究して實功を擧ぐるを勉むる底の人物たらねばならぬといふ意味に於て彼を政界の一明星として褒めて置く。

▽後藤男を評す

松井柏軒

（一）

政局轉換して、寺内内閣成立し、後藤男其の副總理として内務大臣の要職に當り、併せて其の得意の鐵道院總裁を兼ぬ、京童の口さがなきもの動もすれば彼れ意氣揚々として止まる所を知らず、恰かも糸の切れた奴凧と一般ならんといふ、然れども是れ恐くば一を知て未だ二を知らざる評言ならん。

寺内伯は始め平田子を迎えて新内閣の柱石と倣さんとし、山縣公をも煩はして、百方懇欵を盡せしも、僅かに其の子分の一人たる有松英義氏を親任官待遇の法制局長官と爲し得しに過ぎず、牧野男、三島子等を入れんとして亦果さす、竟に後藤男を以て參謀長とし、之を副總理の地位に據へざるを得ざるに至りしとは、伯に於て素より心外なるべく、此の徑路を熟知せる彼れ後藤男が、轉た責任の大なるを自覺せるや疑ふ可らず、寺内内閣をして成功せしむるものも彼れ也、敗れしむるものも彼れ也。彼れ豈徒らに有頂天なる可けんや。

（二）

寺内内閣は各元老一致の推薦を受け、且つ多く其の庇護を有すべしといふも、有體にいへは、宮中に於ては知らず、國民の間に在て元老なるものゝ勢力は全く零也、否、寧ろ國民の多數より嫌惡せらる、其の庇護を受くる寺内内閣如何ぞ之に安心す可けんや。

貴族院は、寺内内閣に取て、大隈内閣の衆議院に於けると齊しといふものあるも、彼れと田、仲小路の諸氏、寧ろ貴族院に於て多くの遠心力を發揮する地位に在り、此の三人が幸倶樂部にて挨拶したりし時、石黒男より極め付けられ、徳富猪一郎氏にすら皮肉られしに視るも、形勢略々推すべきのみ。

國民黨の犬養氏は、根本的に内閣反對なりと聲明し、憲政黨は未だ沈靜を装ふも尚ほ排閥運動を默認せり、政友會豈か洞ヶ峠に彳むが如きも、苦き經驗は彼等の懲りし所、容易に御味方黨たらざるべし、即ち寺内内閣は衆議院に於て全く孤立無援なりと視るを當然とす。

多くの場合民論の鼓吹者たる新聞紙に至ては、大阪の兩大新聞先づ攻撃を開始して殆んど關西の言論界を風靡する形あり、帝都新聞紙の多數も齊しく反對にして、内閣擁護の側に立つもの未だ殆んど之あらざるが如し。

此等の形勢は決して寺内内閣に便なるものに非ず、寺内内閣は順潮に棹さずして、風浪險惡の時に帆を張りしもの也、如何に樂天的なる彼れと雖も、何ぞ之を識らざらんや、彼れ、副總理たる丈けまた多く苦心慘憺たるを知るべきのみ、彼れが今恃む所のものは、天下弱者を憐れむ人情の俠のみ、彼れ意氣揚々たらんと欲するも得可らざる也。

（三）

彼れは多くの矛盾性を有す、曾て相馬事件に錦織某を助けて牢獄にまで囚へられしも避けざりき、誰か過を視て仁を知るといふ、彼れは實に一片稜々たる俠骨より玆に至りしのみ、彼れ又曾て一記者を扶けて毎月若干金を與ふ、然れども其の爲すなきを認め、一夜某に數百金を與へて、爾後の扶助料を廢せんことを告ぐ、某感涙滂沱、深く恩を謝し、併せて自から其の窮苦を哀む、彼れ惻々として俄かに前言を取消し、尚ほ舊の如く繼續すべきを約して、徒らに一時與へし數百金を損せしに過ぎざりきといふ、彼れの涙脆き美質は斯の如し、然れども時に法を挾みて辛烈を極め、また些の人情なきが如きとなきにしも非ず、偉人多く矛盾性を有すといふの一例なるべし。

　彼れまた好んで材幹を識拔し、常に人意の表に出づ、滿鐵總裁たりし時、一時人材雲の如くなりし、其の例也、然れども彼れの識拔する所は大抵其の子分たるべき範圍に止まりて、其れ以上の大材を容るゝ事稀也是れ故伊藤公等と同一型にして、彼れらが加藤、大石、大浦等と相容れざりしも、蓋し此の資質の然らしむる所ならざらんや、而して是れ亦矛盾性の一ならずんばあらず。

　彼れ自から處するや、無頓着にして、好みて野人の態を成し、書生流を悦ぶも、人の之を以て己れを待つを欲せざること、また亦故伊藤公に酷肖す、蓋し此の一事も矛盾性の一發露と看て可なるべし。

　彼れはまた士を俟つの禮に於て十二分の注意を怠らず、素より面諛は彼れの善くせざる所にして、總て是れ天眞爛漫の致す所ならんも、彼れが世間の多くに誤解さるゝ一因は、蓋し玆に在らざらんや、彼れは此の點に於て、故桂公及び伊東巳代治子に學ぶべし、加藤高明子、大浦兼武氏等にも學ぶを可とす。

（四）

　故桂公曾て彼れを評して曰く『後藤の長所は常に好んで讀書するに在り、之を以て彼れの智識は普通世間より能く十年を先んず』と

　彼れ好みて學術の士を用ひ、其の能を發揮せしむるに鋭意す、臺灣に於て新渡戸博士を用ひ、滿洲に於て勝田博士を用ゐ、尙ほ小林、淸水兩博士を重んずるが如き、尋常政治家の埒を距ること遠し、殊に大連に於ける工業試驗場が有效なる多くの結果を擧げしとは、主として彼れが學術を重んずる功に歸せざる可らず、唯だ學者博士に對しても、稍もすれば親分子分の關係と做し、子分非子分を以て敵味方を差別し、假令非子分を敵視せざるも、尙ほ十分に之を尊重せざるが如き傾向あるとは、彼れの器局のため嘆惜すべしと雖も、兎に角自から讀書を廢せず、常に學術を重んじて其の利用に鋭意するは、彼れの時流に超越せる卓見と稱せざる可らざる也。

　彼れは理路の透徹に於て缺點あり、素より大隈侯故後藤伯の如き風呂敷弘げ放しに非ずと雖も、尙ほ何の邊にか十二分の締括りなき處あり、然れども常に獨創の見を立てゝ、之を組織的に實行せんとする用意と手腕とは、また紛々たる今の群政事家と撰を異にす、其の施設の多く奇拔且つ果斷なるがために、其の新奇と華麗とに眩目して、彼れを徒らに華美好きなる政事家とするは、未だ能く彼れを識らざる者也。

（五）

　彼れ内務大臣として地方の政況に明らかに、常人の情僞に精通するとは、恐らくは大浦前内相に及ばざるべく、政治の大局を視、諸黨派の情勢を察して、善く謀り善く圖るとは恐らくば平田氏に及ばざるべし、且つ摺ッ枯らしの地方官等が、新内閣の將來を見縊つて、心より彼れの制命を奉ぜざるとも、彼れ自から最も能く之を察知すべし、然れども其の眞の地方自治制を運用し、其の成績を擧ぐるに於て、彼れは必らず一隻眼を有す、思ふに彼れは玆に彼れ特自一個の面目を飛躍せしむべき乎。

　來るべき議會が果して無事か、解散乎、未だ俄かに判知す可らずと雖

も、總選擧の際、彼れが思ひ切たる辣腕を揮ひ、殆んど一切の毀譽褒貶を度外に措て、爲さゞるなく施さゞるなきは、何人も之を推測し得べき所ならん、故に彼れの內務大臣の地位に蹯踞するは、寺內內閣の反對黨に對する大なる威嚇也、彼れが寺內內閣に重きを爲すは、內務大臣たるが故也、是れ彼れが今や一世に惡罵せられ、殊に黨人の憎嫉を受くる所以にして、而して實は大に畏憚せらるゝ所以ならずや。

彼れや此の點に於て、徒らに得意揚々たる可らず、善く謀り善く斷して、寺內內閣のために最良の効果を奏せんことを期待せざる可らず、是れ彼れの最大責任也。

彼れの成功すると失敗するとは、單に彼れ一個の成敗に非ずして、實に寺內內閣の成敗也、平田子、牧野男出でざる時、彼れは彼れの地位に鑑みて、最も注意せざる可らず、故桂公の如きは內閣を組織するや、時人多くは第三流內閣と目し、頗ぶる輕侮の色ありき、然れども其の善く斷じ善く行ふや、公は居然として一大政事家となれり、今の寺內內閣は其の閣僚の顏觸に於て、時人に視らるゝと第一次の桂內閣以下なるのみならず、閥族官僚の再現として、强烈なる世間の反感を浴び、形勢極めて險惡の裏に在り、彼れにして爲すなくんば則ち已む、苟くも大に志あらば、玆に尋常軌範を超越して、前人の未だ爲さゞる所を爲し、君國のために最善を盡すべし、若し然らば形勢一變して、時論の更まること、猶ほ桂內閣の時の如くなるべし、彼れの聰明なる必ずやまた玆に深く省る處あるべきを信ず。

▽內務大臣の最適任者

法學博士　水野錬太郎

◎後藤と云ふ人とは我輩廿年來の交際があるから、自分の信じて居る實際の所を率直にお話して見ませう。

◎後藤と云ふ人は何と云つても遣り手は遣り手ですよ。よく世間では先生を評して、法螺を吹くとか、大風呂敷を擴げるとか批難をするものがあるが、實際の仕事はなかなか適切にやる。あの位仕事の出來る人は外には一寸見當らない。今日の衞生局の仕事なども多くは先生の局長時代に出來たものである。又臺灣の民政長官時代には、私は洋行して留守であつたが、其治績は非常に見事なものであつた。之は無論兒玉伯の力にもよることであらうが、民政の方は主として後藤の力に待つことが多かつたらうと思ふ。例へば彼の阿片政策、樟腦政策の如きは全く先生のやつた仕事で、其後着々實效を奏し、當時三百萬圓ばかりの收入が今日では七千萬圓の巨額に上つて居る。之は確かに沒すべからざる先生の功である。

◎私の先生に感心するのは、先生が仕事をするに學問を基礎として組織的にやる事である。政治や、行政を學理的に組織的にやられならぬと云ふ考の人は今の政治家中には先生を除いて殆んどないやうに思ふ。先生はその爲めによく學者を集めて、學者の意見を聽き、又よく外國の新らし

い本を讀んだり若くは讀ませたりする。又先生の書いたものも單純な空論ではなく、實際の上に成績を見ることが多い。今の政治家の中に、本を讀んだり書いたりする人も後藤の外にないやうに思ふ。さう云ふ點で私は先生に敬服して居る。先生はよく學俗接近論を唱へて居る。つまり實際家は學者を尊敬して其説を聽かねばならぬ、又學者も實際家に近いて世の中の實情も知らねばならぬと云ふ意見である。それで先生は私共や大學の若い教授、殊に政治、經濟、法律等の若い學者達と月に一回會ふことにして居る。それだから學者に知己多く又學者の意見を重んずることも今の政治家中後藤に及ぶものはない。

◎兎に角私は學問を基礎として組織的に政治上の實蹟を擧ぐることに於ては後藤に及ぶものがないと思ふ。尤も後藤はよく自分は政治家ぢやない、必要の時に國家の爲めに仕事をする丈けだといつて居るが、政黨首領などには先生よりも、もつと適當な人が多からう。然し行政上の手腕に於ては先生は今の政治家中一頭地を抽いて居るものと信ずる。

◎只誤解され易いのは、先生は思ひ切つた事を云ふ、隨分人の惡口も云ふ、又大々的氣焔を吐く。之れが動もすると人の誤解を招ぐ基になる。けれども歐洲の新らしい本も讀み、又自信も强いのであるからそれはどうしても自然にさうなるのであらう。此點はよくいへば寧ろ天眞爛漫で先生の罪のない所かも知れない。然しいくら氣焔を吐いても、その爲めに實際の仕事の上に無責任など云ふ事は決してない。先生が此前に鐵道院總裁をして居つた時に、一日先生の官邸の一室を一つのビューローの如くにして、そこにいろ〳〵の調査事項をカードに分類し、技術部、財政部、經濟部と云ふ風に、部門〳〵に分けて、之を各專門の人に調査せしめると云ふやうな事をして居つた。こんなやうな事をする人は後藤を外にして今の政治家中に比類が少からうと思ふ。只眼前の仕事を切り捌くとか、政黨員を操縱するとか云ふ方面には後藤より上の人があるかも知れぬが、眞の行政家らしき行政家は私は餘り多くを知らない。此點は兒玉さんなども感心して居つたやうである。後藤と云ふ人は人の惡口も云ふので、敵も多いが、仕事はあれ丈け出來る人がないと云つて居つた。

◎それから後藤と云ふ人の考は、今の政治家よりも餘程進んで居ると思ふ、今でこそ社會政策とか勞働問題とか云ふ事を誰も彼も云ふけれども此等の事を一番先きに言ひ出した政治家は恐らく先生であらう。之は先生が早くから獨逸あたりの本を讀んだ爲めに得た思想であらうが、何人もさう云ふ事に氣の附かぬ時分に、社會政策、勞働問題、貧民救助、都市政策など云ふ事を始終云つて居つたのは、兎に角先生の着眼の違い所にあることを見るのである。斯う云ふ人であるから私は先生の内務大臣になつた事を大いに喜ぶものである。内務省の仕事は社會問題、農村問題、地方自治の問題等を根本的に講究解決するにあらねばならぬ。從來は内務大臣の仕事を以て政黨關係や、地方政爭の方面などにのみ重きを置くの風があつたのは、之れ當人及び世人の非常に大いなる誤りであつて、私は内務大臣の主たる職責を以て何處までも内政の基礎を固め種々

の内政問題の根本的解決をするにあると信ずる。私の此見解からして後藤の如き性格、閲歴、識見、理想の人が内相となつた事を深く喜び、先生によつて眞の内務大臣の仕事の行はれんことを祈るものである。何處までそれが旨く行はれるかは今後の成績に徴さねばならぬが、先生の日頃の理想に從つて、眞面目に其職責に盡瘁するならば、假令(よし)此内閣が不幸短命に終ることありとも、先生の功績は少からざることゝ思ふ。

◎又先生は外交方面の事もなかなか研究して居る。今の政治家の多は わるくいへば内地の政爭に沒頭して、外國方面の事に頭を持つて行く人が少いが、先生は始終外國方面の事をも考へて居るのである。之れ一つは先生が臺灣とか滿洲とかの殖民地經營の實際に當つて、外國と折衝することが多かつたにも因るのであらうが、兎に角先生程外國の事をも常に考へて居る人は今の政治家に少い。殊に支那問題などについても先生は一種の考を有つて居る。例へば經濟同盟を結ぶとか、又阿片政策を基礎とせねばならぬとか云ふ意見の如き其一つである。だから私は、先生は外務大臣としても相當の成績を收め得る人と思ふ。

◎之を要するに政治家として辣腕を振ふとか政黨を巧みに操縦するとか云ふ方面に於ては先生よりも優つた人もあらうが、實際の仕事をする行政長官としては後藤程の人はなからうと思ふ。私は呉々も先生が政黨操縦など云ふ方面に頭を使はずに、眞の内務大臣としての仕事の方に眞面目に腕を揮つて貰ひたいと思ふ。餘り大まかな話であるが、私の觀る後藤新内相のお話は大體以上の如きものである。

新刊書を寄贈せられたる著者及び書肆に申す

今夏以來寄贈を受けたる新刊書の數、貳百冊に上るも毎號本文の頁數豫定超過の爲め、之が批評紹介をなすを得ざるは編者の甚しく心苦しく存ずる所也。次號には豫め何とか繰合せを附けて必ず一應の紹介を試むべし。此旨新刊書を寄贈せられたる著者及び書肆に謹んで謝す。

（中付三の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

模範家庭文庫

善美空前
華麗無

家庭文學の女王が新裝を見よ

■挿畫二三百

三色版
石版十二面

坪内逍遙序・楠山正雄譯
名取春仙・岡本歸一挿畫

■諧謔と教訓の無盡藏■

新譯繪入

イソップ物語

■大人には大人の面白味
子供には子供の面白味■

定價金貳圓廿錢郵税十二錢

坪内博士序文に曰く「ちと評判がいゝと思ふと品の惡くなる普通の病弊を脱して追々向上の實のあるのは冨山房のお伽叢書である。此最新刊の「イソップ物語」の如きは慥に類書中の白眉である。深切な解説精到な考證面白い挿畫の工夫、就中殆ど劇的と稱してよい程に一々の會話に特色を持たせて譯し作ら尙常に家庭用幼年用といふ目的を忘れず、品よくなだらかにと注意した譯者の周細な經營に私は感服した。斯ういふ類のお伽物が廣く全國の家庭に行き渡るやうになれば、自ら趣味性の涵養上にも好結果を及ぼすに違ひない。」

本文　教訓話三百三十三集大成的の新譯也
挿畫　三百・赤と青の色刷美しき動物畫帖
裝幀　高雅絢爛無比の金模樣美麗なる箱入
附錄　イソップ傳物語考證索引附體裁完備

東京神田　冨山房　振替一〇五

既刊

(1.2) アラビヤンナイト　杉谷代水譯　上下各巻金貳圓　郵税十二錢　五版

■

(3) グリム御伽噺　中島孤島譯　全一冊　金貳圓廿錢　郵税十二錢　再版

(中付三の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

鈴木半三郎氏新著

（最新刊）

米國國民性の新研究

四六判四百頁布製函入美本
寫眞拾數葉挿入
價壹圓參拾錢送料八錢

日米問題は日本帝國が東洋の盟主否太平洋の主人公たらんとする間は存在すべし。延ひては、日米問題は、獨り移民問題、加州日本人問題等の如き一小局部に限られず。**我帝國の興亡**に關する**支那問題**の**背景**となることを忘るべからず**日米問題解決**の**第一歩**は對手國及國民を了解するにあり、一知半解の徒が屢々此の問題に啄けるを吾人は甚だ遺憾とす。今や太平洋問題漸く盛ならんとする時我國の識者、愛國者は東隣の對手國、米國の新研究を怠るべからず。著者は多年米國に在り彼地の多方面の人士に接し、多大の勞力を米國研究に費せし特志家也

四六版四百頁美装箱入
價壹圓參拾錢送料八錢

夏目漱石氏序　赤木桁平氏著

（最新刊）

藝術上の理想主義

■**遊蕩文學撲滅論**■「自己をより善くし、より完きものにしやうとするところにのみ、眞の意味の藝術が生れて來る」—こういふ立場から藝術を論ぜる此論文集は著者の獨壇にして眞に之れ現代の文壇に對する唯一の清涼濟たるを信ず。

（中付三の三）

發行所　東京市麹町區平河町五丁目　振替口座東京二〇一九一四番　洛陽堂

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

十一月號を見よ

早稲田文學

文部省・二科會 兩美術展覽會を評す

（西洋畫の部）……森口多里

（日本畫の部）……古川修

- 衝動と藝術……田中王堂
- 棚草紙と壯年の鷗外氏……堀江朔
- 階級鬪爭の新解釋……杉井豐
- トルストイの人生觀に於ける一大缺點……石田三治
- 露西亞音樂の精神と發達　アレキシス・リエンジイ
- 僕のページ（感想）……島村抱月
- 男化粧（小說）……中谷德太郎
- つぶて（小說）……塚越亨生
- 貞代の死（脚本）……佐々木積
- 瀬戸の狐（小說）……中村星湖

（中付二〇四）

最近思潮

▼露國に於ける米國詩人▲詩人リレイ逝く▼改革者としてのショウ▼逝けるエチエガレー▼ロシヤの戰爭小說▼文壇時事▼一個の都會問題▼山東京傳の百年忌に▼藝術座評▼十月の文壇……等

附錄

（長篇）トルストイ傳　パウル・ビルコフ著　相馬御風譯

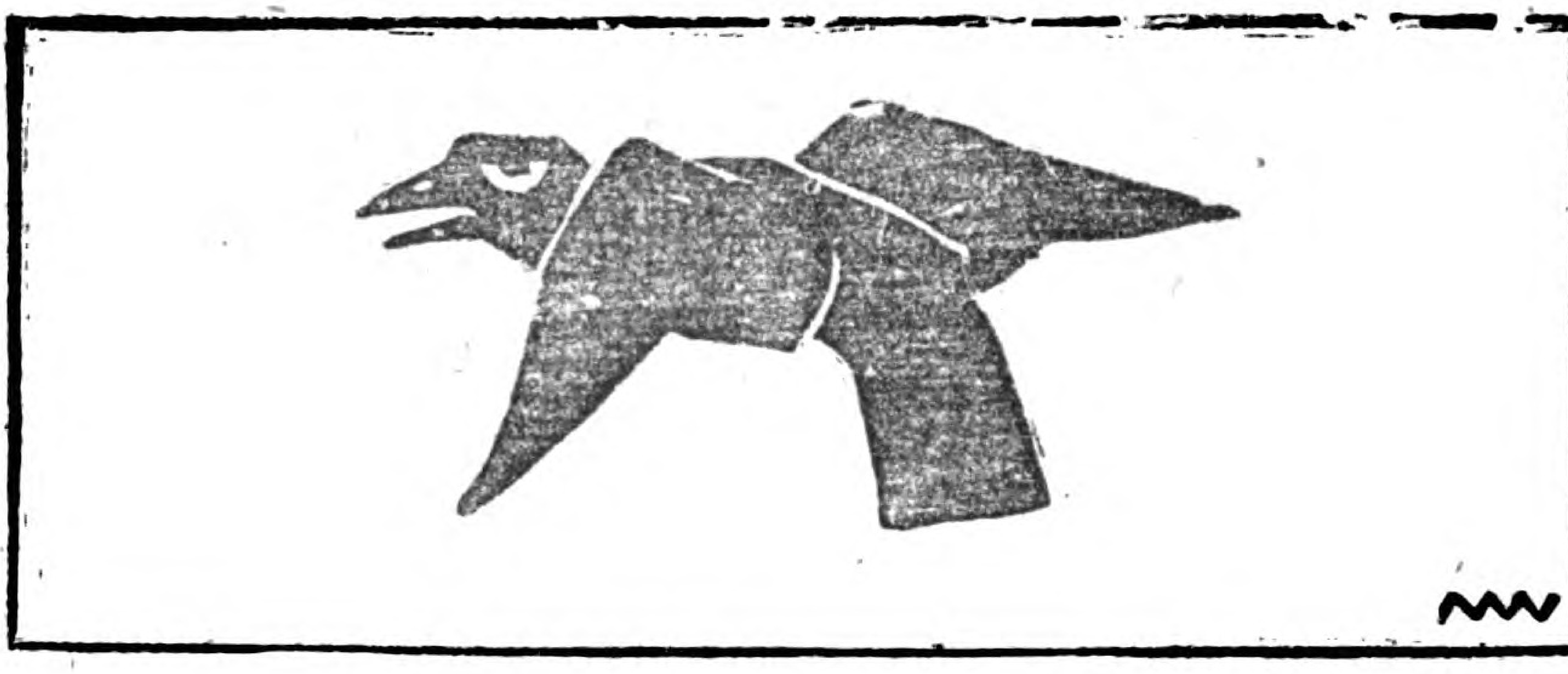
―詩歌―

▼秋雨の町……富田碎花
▼街頭小景……兒玉花外
▼貴婦人と犬……加藤介春

定價二十八錢　郵税一錢五厘

發行所　東京神田表神保町　合名會社 東京堂　振替東京二七〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



病蓐の幻想

谷崎潤一郎

彼は病氣で、床に就いて呻つて寢て居た。――たゞさへ彼は意氣地なしの、堪へ性のない涙脆い人間なのだ。十年前に取り憑かれた神經衰弱が、未だに少しも治癒しないで、年が年中、蜘蛛の巢のやうな些細な事に怯え憂へ顫へて居る人間なのだ。それが運惡く此の四日ばかり、齒を煩つてすつかり元氣を銷亡させて、事に依つたら死にはしないかと案ぜられた。

直接齒の爲めに死なない迄も、齒齦の焮燒から來る殘虐な惡辣な、抉られるやうな苦痛の爲めに、精神と云ふ物が滅茶滅茶に搔き壞されて、氣が狂つて死ぬかも知れなかつた。彼は自分の肉體が人並外れて肥滿して居て、心臟の力の弱つて居る事を、不斷から非常に氣に懸けて居た。それで僅かな熱でも出ると、神經を病み始めて、先づ自分から大病人になつてしまつた。

「齒齦膜炎でそんなに熱の出る筈はないと思ひます。何度ぐらゐおありになる

か測つて御覽になりましたか。」
と、齒醫者は不審さうに云つた。
「いや、測つては見ませんけれどたしかに少しあるんです。御存知の通り僕は太つて居るもんですから、熱には馬鹿に弱くつて、……」
「あつたところが多分六分か七分です。測つて御覽になる方が却つて御安心ですよ。」
かう云はれても彼は決して、測つて見ようとはしなかつた。測つて見て、若しも八度か八度以上もあつたら大變だと思つた。さうして實際、そのくらゐ熱があるかも知れなかつた。
何でも下顎(したあご)の、右の一番奧の齲齒(むしば)がぼろぼろに腐蝕して、齒齦(はぐき)の周圍に絶え間なくだくだくと毒血を湛へて、膿み疼き(うづき)燃え爛れて、その爲めに顏の半面が、始終かつかつと火照(ほて)り付いて居るのであつた。最初はたしかに其の齲齒が痛むのだと分つて居たが、遂には片側殘らずの齒が、上顎のも下顎のも、一本一本細かく嚴しくきりきりと軋(きし)んで、どれが痛みの親玉なのか一向に分らなくなつてしまつた。その痛さに朝から晩迄さいなまれつゝ、ぢつと辛抱して居る事が、人間として堪へ得る苦しみの最上の物であるらしかつた。此處まで來れば、どんなに精神のしつかりした腦髓の透明な人間でも、多少は頭の機能が亂れて、馬鹿か氣違ひに近いやうな、朦朧とした滅茶滅茶な狀態になりかゝるだらうと彼は思つた。現に彼は、餘りの痛さに神經が妙になつて、痛いのだか痛くないのだか分らない感じがして來た。彼は熱に浮かされて、もやもやと霧の中に圍(かこ)まれたやうな夢心地に犯されながら、いろいろの事を考へ始めた。

「人間が痛みと云ふものをハッキリと感じ得る場合は、それ程痛みが深刻でない時なのだ。痛みが一層昂進して來ると、もう一と通りの痛みと云ふ物とは全く違つた、一種異樣な感覺を生ずる。」——彼はさう考へながら、今の自分の苦痛を味はつて居た。四五日前迄は、例の齲齒の心の方が、明かに錐のやうな物で無慈悲にぐいぐいと突かれるのに似た痛さであつたが、だんだん口の中で「痛み」の領土が擴大し出して、今迄安穩に平和を樂んで居た隣の臼齒に響き始め、それから上顎の犬齒がいつの間にやら共鳴を試み、最後に片側の全部の齒の列が一面にヴイブレエションを起して、ちやうどピアノの鍵盤の上を亂暴な手が掻き廻した如く、孰れも此れも悉くぴん／＼ぼん／＼と騷々しく相應じた。さうして、非常に雜多な澤山の音響が一度に室內に充滿すると、一つ一つの聲と云ふ物はまるきり聞えなくなつて、極度の騷々しさが極度の靜かさと一致してしまふやうに、極度の苦痛も亦極度の安樂と一致するかの如くであつた。

たとへて見れば、上下の顎骨の齒の根から無數の擾音が喧々囂々と群り生じ、一つの大きな、綜合された呻りを發して、Quă-ăn! Quă-ă-ăăn! と云ふやうに、口腔內の穹隆へ反響し續けて居るのであつた。それはちやうど、恐ろしく野蠻な力でグワンと頰桁を擲られた跡などに、長く長く殘つて居る痺れた感覺に似通つて居た。さうして一々の齒の痛み工合を、よく注意して感じて見ると、痛むと云ふよりは、Biri biri-ri-ri! と震動して居るやうに想はれた。

「さうだ、痛みが極度に達すると、寧ろ音響に近くなるのだ。恰も空中で音波の生ずるやうに、齒齦の知覺神經が一種のヴイブレエションを起すのだ。」と、彼は腹の中で呟いた。

その凄じいヴイブレエシヨンの爲めに、口の中の空洞が全く馬鹿になつて、神經も何も聾にさせられて、今では共れ程に痛くもなくなつて居る。「なんだ、己は先まで大變苦しがつて居たが、落ち着いて考へると、苦しくも何ともないぢやないか。」と、云ひたいやうな心地もする。平生非常に死を怖れて居る人間が、いよ〳〵病氣で死ぬ時に臨むと、案外安心してしまふやうに、神經と云ふものも餘り强烈な刺戟を受けると、相當な「あきらめ」を生じて都合よく外界に順應し、苦痛を苦痛と感じさせない調節作用を行ふのであらう。――少くとも彼は、今や自分の神經が自分の意志の欲するまゝに、鈍くも鋭くも自由に變化する事を發見した。「痛くないぞ！ 痛くも何ともないぞ！」斯う命令すると即座に神經はピタリと働きを止めて、あれ程の痛みがまるきり感じなくなつてしまふ。反對に又、口の中の任意の點へ神經を凝集すると、直ぐに其の部分が痛み出す。彼は己れの注文通りに、どれでも好きな齒を撰んで、一本一本隨意に隨時に痛み出させる事が出來た。

彼は圖に乘つて、子供がピアノを徒するやうに、神經の手を彼方此方の齒列の上へ驅使しながら、いろ〳〵の方面を痛ませて見た。或る特別の一本だけを痛ませる事も出來るし、二本でも三本でも一緒に一度に Biri! biri-ri! と痛ませる事も出來た。

「かうなると實際ピアノと同じ事だ。一々の齒が、恰もピアノの鍵のやうに思はれるから不思議ぢやないか。」――何だか彼は、各々の齒の痛み方の程度に應じて、音階を想像する事さへ出來さうであつた。一番前の方の、一番痛みの少い奴を假りに Do とすれば、其の次ぎに稍痛い奴を Re とする、其れよりも亦稍痛いのを Mi とする、斯くて立派に七つの音階が出來上ると、今度は「汽笛一聲」でも「春爛熳」

でも「さのさ」節でも喇叭節でも、好きな歌を奏する事が出來さうな氣持ちになつた。
「うんさうだ、たしかに音階を想像し得る。――其れにつけても己は餘つぽど熱があるに違ひない。――熱に浮かされてぼんやりして居るから、こんな奇妙な考が起るのだ。」――同時に彼は、又一としきり耳ががゝ、がんがんと鳴つて、體中の血が頭の方へ鬱陶しく上騰して來るのを覺えた。彼は眼を潰つて、局部に氷嚢をあてたまゝ、深い暗い所へ昏々と墜ちて行くやうな心地がした。折々大波に搖り上げられ、搖り下されて居るやうでもあつた。しかし未に失心しては居ないと見えて、間もなく再びさまざまの妄念が、腦髓の中で蛆の沸くが如くうようよと蠢き出した。

　彼の横臥して居る病室の外には、割合に廣い庭園があつて、九月の上旬の、初秋とは云ひながら眞夏と少しも變りのない、赫灼とした日光が毎日毎日蒸し蒸しといきれて居た。南に面した花壇には紫苑や芙蓉や、紅白の萩がそろそろ花を持ちかけて、繁茂した枝葉を茫茫と蔓らせ、穂の出かゝつた糸すゝきや萎みかゝつた桔梗や女郎花が、おどろに亂れた髮の毛のやうに打ち煙つて居た。百日草、おいらん草、カンナ、蝦夷菊などの燦然と咲き誇つて居る今一つの花壇の縁には、小いさい愛らしい松葉牡丹の花びらが、びろうど色の千日坊主と頭を揃へて、千代紙を刻んだやうに綺麗に居並び、二三尺の高さに伸びた葉鷄頭とダリヤとの間から、眞赤な、心臟のやうな紅蜀葵の大輪が、烈日の中にくるくると燃えて居た。

「あなた、……又紅蜀葵が一つ散つたわ。あの花はほんとに壽命が短いのね。一日咲くと、色もなんにも褪めないのに、ぽたりと地面へ落ちてしまふのね。」

彼の妻が、氷嚢の氷を取り換へてやりながら、彼に云つた。

「うん、……」

と、さも大儀らしく答へたきり、彼は庭の方を見向きもしないで、相變らず齒を押へたまゝ靜かに悲しげに横臥して居た。けれども彼の生々しい、眞赤な花が、綺麗に咲き綻びたまゝ、風もないのに突然地面へ轉げ落ちる樣子を想ふと、何だか其れが忌まはしい事の知らせのやうに感ぜられた。今の今まで、盛んに血を吸つて膨れて居る自分の心臟が、若しかするとあんな風に、いきなりぼたりと崩壞する前兆ではあるまいか。……

「でもまあ向日葵がよく咲いたこと。ちよいとあなた、ちよいと此方を向いて庭を御覧なさいよ。」

妻は再びかう云つて慰めようとしたけれど、今度は彼は見向きもしないで、たゞ苦しさうな溜息を吐いた。自分がこんなに呻つて居るのに、呑氣な事をしやべつて居る妻の態度が甚しく癪に觸つたが、わざ〳〵其れを叱り付けるだけの元氣も出なかつた。

痛くない方の片側を枕につけて、唇を半分ばかりあーんと開いて、床の間の掛軸を視詰めた儘倒れて居る彼は、此の時舌の先を徐ろに、鱏魚のやうに動かしながら、例の一番奥の齲齒を極めておづおづと撫で擦つて見た。氣のせゐか知らぬが、うろが平生よりも素的に大きく深くなつて、噴火山の火口の如く傲然と蟠踞して居る。その洞穴の底津磐根から不斷の惡氣が濛々と舞ひ上つて、口腔の天地を焦熱地獄と化して居るのである。

彼には其の齲齒の、暴君的な堂々たる痛み工合が、恰も毒々しい向日葵の花のやうに想像された。周圍に橙色の絢爛な花瓣を付けて、まん中に眞黒な、蜻蛉の複眼の如き蕊

を持つて居る向日葵の、嵬麗な姿は、どうも此の驕慢な齲齒の痛みに酷似して居た。

「さうだ。齒の痛みは音響に近いばかりでなく、それ〴〵雜多な色彩を持つて居る。」――彼はそんな事を思つた。ふと、いつぞや讀んだ事のあるボオドレエルの"Les Paradis Artificiels" の一節が彼の念頭に浮かんだ。… "Les équivoques les plus singulières, les transpositions d'idée les plus inexplicables ont lieu. *Les sons ont une couleur, les couleurs ont une musique.*" (音響は色彩を發し、色彩は音樂となる。)…此れは此の詩人がハシイシユを飮んだ時の、ハリユシネエシヨンの描寫であるが、しかし阿片やハシイシユの力を借りずとも、彼は幾分かさう云ふ風なハリユシネエシヨンを感ずる事が出來た。少くとも一々の齒が、痛み方に相當する音階を持つて居るとしたなら、其の音階が一變して、千紫萬紅、大小さま〴〵な花の形に見える事はたしかである。一番根强く執念深く、まるで熟した腫物のやうに疼いて居る奥齒が、向日葵の花であるとしたなら、それと反對に狹く鋭く、ぴくりぴくりと軋んで居る上顎の犬齒は、ちやうど血の塊か火の塊が、眼の暈むやうな速力で虛空に旋轉と舞ひ狂めいて居るやうな、眞赤な、辛辣な痛さである。「成る程此れは眞赤な痛さだ。何か非常に赤い物が、焰々と燃えて渦卷いて居る痛さだ。」――彼は直ちに紅蜀葵を連想せずには居られなかつた。さうして考へれば考へる程、ます〳〵其の齒と紅蜀葵との關係が密接になつて、遂には全く口の中に、あの鮮明な赤い花が、くつきりと咲き誇つて居るやうな氣持ちがした。それから又、顎の隅の方で微かに痛んで居る一團の臼齒は、一本の莖の先に澤山の花を持つたおいらん草のクリムソンに似通つて居た。チクチクと蟲の螫すやうな、愛らしい、いぢらしい痛み方をする前齒の群は、恰も花壇の縁を彩る松葉牡丹に適合して居た。不思議な事には、其れ

等の齒が、各自固有の特色に依つて、激しく痛めば痛む程、彼の妄想は一層明瞭な形を取つて眼前に髣髴した。斯くして彼は忽ちのうちに、口の中を庭の花壇と同じやうな美しい光景に化してしまつた。其處には初秋の午後の光がかんかんと照つて、蜂や蝶々が花から花へひらひらと飛び戯れて居る。……

氣が付いて見ると、熱は前よりも更に一段と高まつて居た。眼の先の物が何だか頻りにちらちらと働いて、カレイドスコオプを覗いて居るやうだ。床の間に懸つて居る浮世繪の美人畫がぐらぐらと搖めいて、立體派の線の如き bizarre な線を現はして居る。座敷の天井が、いつの間にやら馬鹿に低くなつて、立てば頭がつかへる程下つて來たらしく、嫌に室内が狹苦しく、蒸し暑く、窮屈である。こんな牢獄のやうな處に、いつ迄自分は鬱々として、熱に浮かされて居る事だらう。どうせ十日も半月も寢て居るのなら、いつそひろ〴〵とした野原のまん中で、青空を仰ぎながら、涼しい木蔭の草の上にでも倒れて居たい。

「あゝ切ない、……息苦しい、……嫌になつちまふなあ。」

彼は夢中で、こんな譫語を云ひさうになつた。さうして、名狀し難い遣る瀬なさとあぢきなさに襲はれて、頬つぺたの垢に汚れた涙を、紙屑のやうにぼろぼろとこぼした。

よんどころなく片手でそつと睫毛を拭いて、又齒の事を考へる。口の中の呪はしい地獄、美しい花壇の事を考へる。――

"A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu, voyelles, ………"

どう云ふ譯か、Rimbaud のソンネットの一句が、天際に漂ふ虹の如く彼の心に浮かんだ。恐らく其

れは、繚亂たる花園の光景から連想されて、記憶の世界に蘇生つて來たのであらう。若し、あの佛蘭西のシムボリストが想像するやうに、A、E、I、U、Oの母音に、黒だの白だの赤だのゝ色があるとすれば、口の中で刻一刻に、づきん、づきん、と合奏して居る齒列の音樂、——色彩の音樂は、悉くアルファベットに變じ得るかも知れない。……A,B,C,D,E,F,G,……

體の工合も心の調子も、もう本式の病人と違ひはなかつた。ちよいと枕から頭を擡げると、忽ち眩暈を覺えて、うすら寒い戰慄が止めどもなくぶるぶると手足を走る。飯を食ふにも、小用を足すにも、凡べて蓐中に横はつた儘である。

「九月になつたのに何て云ふ暑さだらう。此れぢや土用の内よりも餘つぽど非道いわ。事に依ると地震でも揺るのぢやないかしら。」

隣の部屋で、妻が女中にこんな話をして居る。

ほんたうだ、地震が揺るかも知れない。——彼は地震が大嫌ひであつた。地震に就いては隨分いろいろの書物を讀んで、可なり豐富な知識を持つて居た。六十年目に大地震があると云ふ說の虛妄な事や、日本の家屋はヤワな西洋館に較へて、案外耐震力の强靱な事や、大地震の際には必ず前に異常な地鳴りを伴ふ事や、少くとも彼のやうに、年中氣に病んでびくついて居る理由のない事を、充分心得て居る癖に、彼はやつぱり明け暮れ其れが心配になつた。住宅を移轉する時、田舍の旅館に宿を取る時、女郎屋待合で夜を過ごす時、彼が眞つ先に思ひ出すのは地震に對する用意であつた。怪しげな西洋造りの三階四階の建物などへは、成る可く這入らないやうに努めて、這入つてもそこ〳〵に飛び出してしまつた。

淺草邊の活動寫眞を見物するのに、彼は大概出口に近い隅の方に立ち竦んで、いざと云つたら逃げ出す用意を怠らなかつた。さうして無事に見物が濟んで、小屋を出て來ると、「まあよかつた。」と胸を撫でゝ、命拾ひをしたやうな氣持ちになつた。

自分が生きて居るうちに、どうしても一回、大地震があると彼は思つた。日本に居て、殊に地震の多い東京に住んで居て、相當に長生きをする積りなら、否でも應でも、一度は大地震に際會して、九死に一生を得なければならない。其れが彼には病氣よりも何よりも、一番危つかしい、劍難至極な綱渡りであつた。なぜと云ふのに、人間が不治の難病に罹る事は頗る稀であるけれど、大地震はたしかに一遍はあるのである。さうして其の一遍の大災厄を、首尾よく免れ得るかどうかゞ、彼に取つては非常な疑問である。――尤も彼は、今から二十三四年前、多分明治二十六年の七月に、大地震と云つてもいゝくらゐの素晴らしい奴に出會した覺えがあつた。ちやうど彼が小學校の二年の折であつたらう。午後の二時時分、學校から歸つて、臺所で氷水を飲んで居ると、いきなり大地が凄じく搖れ始めた。「大地震だ！」と、彼は咄嗟に心付いたが、何處をどう潜り拔けたのか、一目散に戸外へ驅け出して、大道の四つ角のまん中につくばつて居た。その頃彼の家では日本橋の蠣殼町に仲買店を出して居て、恰も後場の立つて居る最中であつた。米屋町の兩側に軒を列べた商店の、土間に溢れるほど雜沓して居た相場師の群衆は、誰も彼も金の取引に氣を奪はれて、日盛りの苦熱を忘れて居たが、突然、ぐわら〳〵と家鳴震動し出すや否や、右往左往にあはてふためき、殆んど路次のやうに窮屈な、せゝこましい往來の、ぎつしり詰まつた家並の下を揉みに揉んで逃げ惑うた。…

「あゝ、己はあの時でさへ、あんなに恐ろしかつたのだから、若しあれよりも更に大きい地震に逢つたらどうするのだらう。己は今では肉がぶくぶく肥滿して、心臓が弱くなつて、とても子供の時分のやうに身輕に逃げる事は出來ない。おまけに現在病蓐に倒れて、體が利かなくなつて居る際、そんな災難が突發したら、己の運命はどうなるだらう。」

彼の頭はいつか全く、地震に對する危惧と不安とに充たされて居た。今と云ふ今、大地震が搖り出したら、自分は必ず逃げ損つて、梁の下に壓し潰されるに違ひない。それでなくても立てば足元がよろよろして、眼が眩みさうになるのだから、地震と聞いたら即坐に逆上して卒倒してしまふだらう。考へて見ると、いつ何時地震が搖るかも知れないのに、不自由な手足を持つて寢て居ると云ふのは實に危險だ。まるで噴火山上に身を托して居るやうなものだ。あゝ、ほんたうにどうしたらいゝだらう。――彼の記憶は、再び明治二十六年の、七月の或る日の地震の光景に戻つて行つた。あの時彼は、前に云つた大道の四つ角に蹲踞つて、生きた空もなくわなゝきながら、世にも珍らしい天變地異をたゞ夢の如く眺めて居た。夢だ！　ほんたうに夢のやうな恐ろしさだ！　其の後二十幾年も彼は此の世に生きて居るが、あの時のやうに薄氣味の惡い、あの時のやうに物凄い、あらゆる形容詞を超絶した Overwhelming な光景を、爾來一遍も見た事がない。彼が避難した地點と云ふのは、今の蠣殼町の東華小學校の門前に近い、一丁目と二丁目との境界にある大通りで、今でもあの四つ角には交番が建つて居る筈だ。何でも彼の經驗に依ると、大地震と云ふ物は地が震へるのではなく、大洋の波のやうに緩漫に大規模に、搖り上げ搖り下ろすのであつた。自分の足を着けて居る地の表面が、汽船の底と全く同一な上下運動をやり

出した時を想像すれば、恐らく讀者は其の氣味惡さの幾分かを、了解する事が出來るであらう。……いや、汽船の底と云つたのでは、まだ形容が足りないかも知れない。寧ろ輕氣球のやうに、——踏んでも掘つてもびくともしない、世の中の凡べての物よりも頑丈な分厚な地面が、寧ろ輕氣球のやうに、さも輕さうにふらふらと浮動するのである。さうして、其の上に載つかつて居る繁華な街路、碁盤の目の如く人家の櫛比した、四通八達の大通りや新路や路次や横丁が、中に住んで居る無數の人間諸共に、忽ち高々と上空へ吊り上げられ、やがて悠々と低く降り始める。彼は比較的見通しの利く四つ辻に居た爲めに、此の奇妙なる現象を眞にまざ／＼と目撃した。彼の前方へ一直線に走つて居る、坦々たる街路の突きあたりには、遠く人形町通りが見えて居たが、其の路の長さは大凡そ二三町もあつたであらう。然るに訝しむべし、此の二三町の平な路が、彼の蹲踞つて居る位置を基點として、恰も起重機の腕の如く棒立ちになり、向うの端の人形町通りを、天へ向つて持ち上げるかと思ふ間もなく、今度は反對に深く深く沈下し出して、彼は全く急峻な阪の頂邊から、遙か下方の谷底に人形町通りを俯瞰する。あゝ其の時の强さ恐ろしさ！　人間が、測り知られぬ過去の時代から生存の土臺と頼み、光榮ある歴史を其の上に築き、多望なる未來を其の上に繫いで、安心して活動して居た大地と云ふ物が、斯く迄も不安定に、斯く迄も脆弱であらうとは……彼は漸く七つか八つの少年であつたから、恐怖の餘りに或はこんな幻覺を起したのかも知れないが、しかし決して、自分の眼で見た光景を、誇張して述べて居るのではない。思ふに彼は其の刹那から、今のやうな臆病な人間になつたのであらう。其の瞬間に、人間の生命のいつ何時威嚇されるかも知れない事を、つく／＼と膓に銘じたのであらう。

「あゝあッ」

と云つて、彼は頰にあてゝ居た氷嚢を外しながら、俯向きになつて顏を枕の上に伏せた。急に、當時の四つ辻の光景が眼前に浮かび上ると、胸の動悸が激しくなり、體中が總毛立つて、とてもヂッとしては居られなくなつたのである。

「あなた、氷を取り換へるんですか。」

妻の聲が聞えたので、「はつ」と氣が付いて、彼は漸く我に復つた。――今見たのは夢であつたか知らん。今まで地震の事を想像したり、懸念したりして居たのは、夢であつたのか知らん。それとも覺めて居ながら、あんな考へが頭の中に往來して居たのか知らん。彼には其れが孰れであるか分らなかつた。たゞ、惡夢を見た後と同じやうに、びつしよりと額に汗を搔いて居た。

「ほんとに蒸し暑い、嫌な陽氣だねえ。こんな日にはきつと地震が搖るかも知れない。――今年あたりはそろ〳〵大地震がありやしないかね。安政の地震があつてから、もう隨分になるのだから。」

又臺所で、老婆がこんな獨語を云つて居る。

彼の女は今年七十幾歲になる老人で、安政の地震をよく知つて居た。其の折彼の女は、十六七の若い娘で、江戶の內でも一番被害のひどかつたと謂はれる、深川の冬木に住んで居たのだが、而も幸ひに難を免れて、今日まで長い世の中を生きて來た。彼の地震に關する知識は、此の老婆の經驗談と、大森博士の著述とに負ふ所が頗る多い。大森博士は云ふ、大震の起る時刻は日中に少く、大概夜間か拂曉であると。果して老婆の話に依れば、安政の大震は夜の十時刻に江戶を襲つた。博士は曰く、東京は山國と

違つて、普通の地震に地鳴りを聞く事は稀であるが、然し大震の起る前には必ず此れを伴ふと。さうして老婆は、あの晩地震の直ぐ前に、何事が生じたかと思ふやうな、轟然たる地響きを聞いたと云ふ。博士は曰く、東京の下町で、最も地盤の強固な所は銀座から築地へかけての一廓である。反對に最も脆いのは本所深川淺草の全部、及び神田の小川町であると。老婆の話は、又此の説をも裏書きして居る。其の他大風の吹く日には、大震の起つた例のない事、日本造りの二階建て、三階建ての家屋では、上に居る程安全な事、厠、湯殿、物置等、簡單な平屋は容易に倒壞しない事、煉瓦塀の危險な事、西洋館では、窓やドーアの枠の中に、鴨居に乘つて立つて居るのが、一番大丈夫である事、彼は博士と老婆から、交々此れ等の教訓を與へられた。

「それ故若しも、今日の內に大地震があるとすれば、恐らく夜になつてからだ。今夜からあすの明け方へかけての間、それが一番心配な刻限だ。」――

彼は飽く迄、老婆の豫言の中らない事を熱望しながら、內々やつぱり彼女の直覺を畏れて居た。其の上、いやな事には午後になつてから、風が全くなくなつて居る。緣側の障子の、ガラスに映つて居る草葉の影を、いかに長い間視詰めても、微塵も動かない。額越しに望まれる庭の向うの、遙かな丘の上にある銀杏の大木の梢を仰ぐと、それがくつきりと青空に聳えたまゝ、まるで油繪の遠景の如く靜まり返つて、先の先の小いさな葉までそよとも搖ぐ樣子がない。

「それ御覽なさい、ね、風がちつとも吹かないでせう? いくら風がないと云つたつて、大概の日には、表へ出ると少しは吹いて居るもんです。今日のやうに、薄の葉や蜘蛛の巢までがまるきり動かないやう

な、こんな日はめつたにありやしません。どうしても今夜あたりは大地震がありますよ。ちやうど安政の地震の日にも、晝間はこんな天氣でしたつけ。」

いつしか老婆が彼の枕元へ來て、一國らしい、妙にぎらぎら底光りのする瞳を据えて、脅やかすやうに彼に云つた。

「そんな馬鹿な事があるもんか。今日のやうな風のない日はいくらもあるさ。」

かう云つて、笑はうとした彼の唇は、意地惡くもピリピリと痙攣を起して、微かに顫へた。

「いゝえ、あなた、こんなに風のない日と云ふものは、容易にありは致しません。どんなにないやうに思はれても、よく氣を付けて見ると、あの高い所にある銀杏の葉なんぞが、きつと少しは動いて居るんです。旦那は今までに、其れを試して御覧になつた事がないんでせう。嘘だと思し召したら、此の後氣を付けて御覧なさい。――尤も今夜の大地震に、運よく助かつたらの話ですが、……」

日が暮れたら風が出るだらう。夜が近づくに從つて、少しは涼しくなるだらう。さういつ迄も、朝から晩まで無風狀態が繼續する筈はない。……しかしだんだん日が翳り出して、薄暗くなつた天井に、電燈のカアボンが、紅い、ルビーのやうな光を滲ませて來たが、依然として風は全く死んで居る。息のつかへるやうな、頭を壓しつけるやうな暑熱が、天地の間に磅礴して、寢て居る彼は動ともすると、重苦しさに氣が遠くなりさうである。其の癖神經は刻々に昂奮して居るらしく、時々、何の理由もないのに動悸がドキドキと早鐘を打つて、襟頸から蟀谷の邊へ、血が恐ろしく上つて來る。

「さあ、いよ〳〵夜になりましたよ。ね、旦那、やつぱり風がないでございませう？……此の鹽梅お

やあどうしても揺りますよ。……ようございますか。いつかもお話ししました通り、大地震には必ず其の前に地鳴りが致しますからね。始終枕に耳をつけて、地鳴りに氣を付けて居らつしやいましよ。若し、遠くの方からゴウゴウと云ふ音が聞えたら、其の時こそいち早くお逃げなさいまし。さうすればあなた、大概無事に助かりますよ。」

老婆は子供を諭すやうに、噛んで含めるやうに云つた。

「だがお婆さん、私はこんなに熱があつて、體がふらふらして居るんだからなあ。……逃げるつて、全體何處へ逃げたらいゝだらう。」

「……………」

其の時老婆は、默然として首を傾けつゝ、何か外の事に注意を奪はれて居るやうであつた。あたりはもう眞暗な夜になつて居た。庭に立つて居る黒い木の影が、やはり人間と同じ恐怖に襲はれて、將に起らんとする天變地異を、息を凝らしつゝ待ち構へて居る。……

「ちよいと、旦那、……あれをお聞きなさい。」

ふと、老婆は低い聲で、かう云ひながらにやにやと笑つて、猶も熱心に耳を澄ませて居る。

「ね、旦那、あれがあなたに聞えませんか。……」

笑つて居た老婆の顏は、やがて生眞面目に引き締まつて、例の怪しい瞳の底には、極度に緊張した神經が、次第に強く光り始める。

「何が聞えるのさ、お婆さん。何がさ……」

半分物を云ひかけた彼は、俄かに何事にか怯えたやうに、默つてしまつた。彼の耳は、此時突然或る音響を聞いたのである。——聞える、……たしかに聞える。其れはいつから鳴り出したのか分らないが、遠くの方で、鐵瓶の湯の沸るやうな音が、微かにゴウゴウと呻つて居る。思ふに餘程以前から鳴つて居たのであらう。さうして彼が氣が付いた頃には、大分ハッキリ聞き取れるやうになつて、見る見るうちに、汽車が走つて來る程の速力で、ます〳〵近く、ます〳〵騷然と響いて居る。もはや一點の疑ふ餘地もない。……

「あれが地鳴りかい？」

「さうです。」と云ふ代りに、老婆は堅く口を噤んで、頤で頷いた。其の間に、もう音響は遠雷ぐらゐの强さになつて居た。彼はあはてゝ夜着を撥ね除けて、立ち上らうとしたが、老婆は至極落ち着き拂つて、まだ枕元に据わつて居る。

「お婆さん、まだ逃げないでも大丈夫かい。」

彼は、恐怖が下腹の邊から胸の方へ、薄荷のやうにすウッと滲み上つて來るのを感じた。

「いゝえ、もう逃げなければいけませんよ。……けれど私は逃げない積りなんです。私なんざあ、安政の大地震にも寢て居て助つた人間ですもの。斯うして居ても、大概うまく助かりますよ。だが、あなたは早くお逃げなさい。逃げるなら今のうちです。一刻もぐずぐずしては居られません。もう直ぐ地震がやつて來ますから。……」

此の時地鳴りは、さながら耳を聾するやうな大音響となつて、老婆の話し聲を壓してしまつた。彼は

咄嗟に再び夜着を撥ね除けたが、うつかり立り上つたら逆上して眼が眩みさうなので、其れが又非常に心配になつた。

「おい、みんなどうしたんだ、お光は居ないかお光は?」

彼は一生懸命に咽喉を搾つて、妻の名を呼んだ。しかし其の聲もやつぱり地鳴りに掻き消されて、自分の耳にすら聞き取れない。急に動機が激しく搏ち出したので、彼は面喰つて、兩手でしつかりと心臟の上を抑へた。此の工合では逃げ出したり逆上したりする前に、先づ心臟が破裂して死ぬかも知れない。……

もう助からうと云ふ望みはなかつた。ただ、列上い魚が跳ね廻るやうに、最後の斷末魔まで、死に物狂ひに暴れるだけの話であつた。彼は相變らず、後生大事に心臟を抑へたまゝ、勃然と身を挺して立ち上つたが、案の定、頭の中がグラグラして精神が渾沌となり、バツタリ倒れかゝつたので、再び四つん這ひになつてしまつた。……忽ち天地を震撼するやうな、海嘯の押し寄せるやうな、一段と豪莊な、雄大な地鳴りが始まつて、百獸の咆えるが如く轟いて居る。……

其の瞬間に彼は喜ばしい事を發見した。「なんだ、此れはほんたうの地震ではない。己は大丈夫死ぬ筈がない。」と、彼は思つた。彼は幸ひにも、自分が現在夢を見て居るのだと云ふ事を、夢の中で意識したのである。けれども夢の中にもせよ、地鳴りはいよいよ物凄く、慟悸はますます昂進して、少しも恐ろしさに變りはない。おまけにいくら眼を覺まさうと焦つても、どうした譯か容易に夢を振り解く事が出來ない。彼はまた、もう一つ不思議な現象に心付いた。――よくよく考へると、地鳴りだけは確に夢に違ひないが、慟悸の方は夢ばかりではないらしく、實際に心臟が氣味惡く鳴つて居るのである。それ故地

震は夢であつても、心臓が破裂すればやつぱり死ぬに違ひない。夢の中で死ぬと同時に、ほんたうに死んでしまふかも知れない。

さう思つて居るうちに、彼はハッと眼を覺ましたが、果して動悸がドキドキと響いて居る。もう少し夢を續けて居たら、正しく心臓が破裂するところであつた。あたりを見廻すと、枕元には老婆も居ず、隣の部屋では妻が機嫌よく笑ひながら、子供をあやして居る。

「さうだ、案に違はず夢だつたのだ。地震ではなかつたのだ。地鳴りも何も聞えはしない。」――

けれども彼は地鳴りの代りに、耳がガンガン鳴つて居る事を發見した。恐らく其の耳鳴りが夢の中へ現れて、あの凄じい地響に聞えたのであらう。畢竟、眼が覺めて見ても、夢と實際上の間には殆んど此れと云ふ差別がなく、彼は未だに幻想の世界に居るやうな心地がする。さうして、いつの間にやら實際の世界も、夢で見たのと同じやうな蒸し暑い夜になつて居る。依然として、風がちつとも吹かない。纔かに老婆の居ない事と、地鳴りが耳鳴りに變つたゞけで、やつぱり不安な不愉快な、大地震の揺りさうな宵である。

全體彼は、何處までが實際で、何處から夢に這入つたのか分らなかつた。たしかに夢だと思はれる箇所もあるけれど、どうしても夢でなささうな氣のする點が矢鱈にあつた。何でも彼は大分前から、ぼんやりした半意識の境をうろついて、幾度となくいろいろの夢を見たり覺めたりして居たのであらう。紗のやうに薄い柔かい衣を、何枚も何枚も身に纏ふやうに、夢の上へ夢を襲ね、一つの泡から無數の泡を噴き出して、果てしもなく妄想の影を趁ふかと思ふと、やがて又一枚一枚に其の衣を脱ぎ、一つ一つ其

の泡を失うて、明るい現實の世界へ戻る。――そんな眞似を何遍となく繰り返して居たのであらう。

彼は今、稍ハッキリと意識を恢復したけれど、しかしまだ完全に、現實の世界へ歸つたやうな氣分ではなかつた。どうも何處か知らに、紗の衣が一枚か二枚被さつたまゝ、取り殘されて居るらしかつた。さうして、折角ハッキリしかけた意識が、純白な半紙を墨汁へ浸したやうに、隅の方から次第々々に曇り始めて、捨てゝ置くと白い部分がだんだん小いさくなつて行つた。數限りもない夢の夢を潜つて來たのに、まだまだ後からもくもくと夢の雲が押し寄せて來る。恰も高山を行く旅人のやうに、彼の心は今晴れたかと思ふ間もなく、直ぐ又霧に包まれる。……

「己はもう夢を見ては居ない。今己が聞いて居るのは、地鳴りでなくてたしかに耳鳴りだ。しかし其れにしても、今夜は實際大地震が搖りさうな晩だ。己はほんたうに、地鳴りに注意して居なければならない。」

と、彼は考へ始めた。

體がふらふらするにもせよ、地震が搖つたら逃げられるだけは逃げて見よう。其の代り、此の大地震に首尾よく助かりさへすれば、もう安心だ。人間一生のうちに、大地震は大概一度しかないのだから、今度の奴をうまく逃れたら、もう心配な事はないのだ。後は體を丈夫にして、病氣に罹らぬ用心さへすれば、いくらでも長生きは出來るのだ。さうなつたらどんなに彼はせいせいするだらう。どんなに自己の幸運を天地に謝する事であらう。――どうせ一度は打つかるものなら、いつそ一日も早く、自分の運命を孰れかへ片附けてしまつた方が、却つて思ひ切りがいゝかも知れない。

兎にも角にも、今夜の大地震が彼の一生の運試しなのだ。泣いても笑つても、彼の天命は其の時定まるのだ。彼が短命な横死を遂げるか、幸福な長壽を保つか、仰るか反るかの大事件が、一に其の際の彼の擧措に懸つて居るのだ。斯うなつて見ると、彼は如何にかして巧妙に狡猾に、難關を躍り超えてやりたかつた。彼は有らん限りの思慮を運らし知慧を絞つて、萬全な避難策を工夫しなければならなかつた。其の爲めにあんまり頭を使ひ過ぎて、一生馬鹿になつてもいゝから、是非共緻密な研究を遂げ、念には念を加へた上で、充分に確かな成案を立てた後、身に降りかゝる大難を、冷靜に沈着に、スポりと潜り抜けてやらう。

若し、今夜の大地震が、古來未だ嘗て前例のない、殆んど此の世の終りとも稱すべき空前絶後のものであつて、東京市中が海中へ陷沒する程の大震であつたら、到底免れる術はないのだから、避難策を講じたところで無駄な話である。そこで、假りに今夜の地震の强さを、安政の其れと同じくらゐの程度だとして、先づ第一に、彼の現在住んで居る家は、果して全然崩壞するであらうか。全部でなくて、一部分だけが崩れるだらうか。一部分が崩れるとしたら、抑も如何なる部分であらうか。さうして又、全部或は一部分が崩壞する際、一寸の隙もない程、ぴたんこに潰れてしまふだらうか。――此れ等が一番重大な問題である。

安政の記錄に徴するに、當時の江戸の人家が、一軒も殘らず潰れてしまつた譯ではない。却つて、潰れた家の數の方が、潰れない家の數に比すると遙かに少い。其の他は大概、震災よりも火災の爲めに燒失して居る。直接地震で潰れた家は、殆んど悉く本所深川淺草等の、地盤の脆い下町にあつて、江戸の

大部分を占める山の手方面の建物は、割り合ひに災害を受けなかつた。此の事實から推定すると、家屋の崩壞するとしないとは、建物自身の强弱よりも、寧ろ建物の立つて居る地盤の强弱如何と云ふ事に、餘計關係を持つやうである。さうだとすれば、彼の家は所謂東京の山の手――小石川の高臺に位するのだから、十中の八九迄、崩壞の憂はないとも云へる。若し十中の八九でなく、十が十まで崩壞の憂がなければ、其れこそ絶對に安全であるから、格別心配する必要はないが、玆にどうしても、十中の一二分だけは崩壞のポシビリティーが殘つて居て、其の僅かなる一二分の爲めに、彼は非常な脅威を受けて居るのであつた。

下町よりも山の手の方が地盤が强い。此れは一般に確かに事實である。しかし安政の地震の際に、下町の災害が激甚であつたのは、必ずしも地盤の脆い爲めのみならず、下町の位置が當時の震源地に近かつたと云ふ原因もある。卽ち彼の時の地震の中心地は、今の龜戸驛の附近であつた。それ故、今夜の地震が全く同一の地點に震源を置かない限り、山の手と下町との災害の程度が、安政の時のやうに顯著なる差異を示すかどうか、頗る疑はしい。不幸にして震源が山の手方面、殊に小石川にでも發生したなら、恐らく彼の家は滅茶々々に潰れてしまふだらう。そんな場合は極めて稀であるけれど、少くとも自分の家が多少は崩壞するものと、斷定する方が間違ひがないらしい。

次ぎに平屋よりも二階屋の方が、抵抗力の微弱な事は明瞭である。彼の家は總二階ではないけれど、ちやうど病室と北の廊下との眞上に方つて八疊と四疊半の二階座敷が載つて居る。だから彼の家の中で、一番危險なのは病室である。――さう氣が付くと、彼は覺えず竦然とした。――いざと云ふ時、たとへ

遠くへ逃げる事が出來ない迄も、せめて此の病室からは是非共逃げ出さなければならない。かりに、二階が病室の上へ潰れて來るとして、天井の平面が規則正しく、垂直に沈下する筈はない。必ず幾分か曲つたり撓つたりして、凹凸を作りつゝ降りて來るであらう。つまり、梁が緩んだ場合には、二階の床の、一番重い物を載せて居る部分が、眞先に下へめり込む譯である。さう考へると、最も危いのは八疊と四疊半との境界にあたる箇所である。其處には高さ六尺に餘る、頑丈なオーク材の本箱があつて、中には洋書が一杯に詰まつて居るから、多分五十貫目以上の重量が懸つて居る。不斷から其の邊の立て附けが狂つて居るのを見ても、いかにあの本箱の重いかと云ふ事は想像される。疑ひもなく、其處が第一に潰れて來るに違ひない。すると、其の本箱の眞下になるのは、病室の北の廊下であるから、大體に於いて天井が北に歪みつゝ沈下するだらう。だから、病室を遁れる時には成る可く北へ寄らないやうにして、逃げ出す事を忘れてはならない。

病室の北を避けて逃げ得る道に、二つの方向がある。一つは南の庭である。一つは西隣りの六疊の座敷である。此の座敷は平屋であつて、おまけに簞笥と云ふ、究竟な庇護物が置いてあるから、病室よりは遙かに安全である。萬一潰れても、遲く潰れるに極まつて居る。問題は唯、此の六疊と南の庭と、孰れが餘計安全であるかと云ふ點に歸着する。

天井の面が垂直に、病室の上に潰れて來ない事は前にも云つた。それと同時に、天井板ばかりでなく、二階座敷全體も亦、必ず東西南北の孰れかへ傾きつゝ倒れる事は明瞭である。好い鹽梅に、眞北か眞東へ倒れてくれゝば仕合はせであるが、若し少しでも、南か西へ傾くとすれば、庭と六疊との內、孰れか

一つの上へ落ち懸つて來る危險がある。成る程本箱のある箇所は、其處の天井だけめりめりと凹んで、眞先に下へ落ちるであらう。しかし、例の本箱が北にあるからと云つて、必ず二階全體が、屋根ぐるみ北へ倒れると云ふ理窟はない。思ふに二階全體の倒れる方向は、本箱の位置よりも、寧ろ地震の方向に依つて決定するだらう。即ち地震が北から來れば南へ倒れ、東から來れば西へ倒れる。此れが一般の原則であらう。

彼の家は東西に細長く、南北に短かい建物であるから、地震が東西に搖れる際には、比較的抵抗力が強い。此れに反して、南北に搖す振られたら、忽ち崩壞するかも知れない。さうすると、六疊の方へ二階座敷の倒れる時は、つまり東西の震動であつて、非常に稀な場合である。よし倒れても、倒れる迄には可なりの時間を要するであらう。反對に、庭の方へ倒れる時は南北の震動であるから、此の場合には何等の猶豫なく、即座に崩れかゝるであらう。それ故、南の緣側から直ちに庭へ飛び降りるのは、どうかすると甚だ危險である。地震が東西から來ても、南北から來ても、兎に角一旦西隣りの六疊へ落ち延びて、然る後其處から更に、もつと安全な避難所へ移るのが最善の手段である。

人はよく、地震の際に戶外へ出るのは危いと云ふけれども、此の說を一概に首肯する事は出來ない。土藏の傍とか蔀の前とか、家屋の倒れかゝる範圍內の戶外に居れば、無論危いに違ひないが、迅速に其の範圍を逸脫して、廣濶な地面へ逃げれば、今度は非常に安全である。安政の地震にも、いち早く家を飛び出して、廣い四つ角のまん中などへ遁れた者は多く助かつて居る。尤も、地割れと云ふやうな恐れはあるが、此れは地面が海中へ陷沒するのと同樣に、到底人力では防ぎ難い災で、そんな時には室內に

居てもやつぱり助かる道理はない。彼の家は地盤の丈夫な小石川にあつて、南の方から西南の方へ廣濶な庭園を控へて居るのだから、結局其の庭園の西の隅の地域、——即ち孰れの方面から見ても、家屋の倒れかゝる範圍外に位する地點、其處が彼の家中で最も安全な、絶對の避難所である。臨機の處置として、一旦西の六疊へ遁れた彼は、猶未だ完全に危難を脱して居るのではない。最後に、何とかして今云つた庭の西隅まで到達すれば、玆に始めて、滯りなく脅威を免れた譯である。

六疊の座敷にも、南に緣側があつて、其處から庭へ降りるのに差支へはない。しかしさうすると今度は六疊の座敷自身が、緣側の外へ斜めに倒れて來て、未だ範圍外へ落ち延びない内に、彼を後ろから壓し潰すと云ふ心配がある。況んや彼は病體で、敏捷な行動が取れないのだから、此の心配はますく多い。從つて、六疊の座敷から直ちに庭へ出る事は禁物である。其處からもう一度、より安全な室へ遁れて、さて徐ろに機會を窺ひ、壓し潰される恐れのないのを見定めてから、悠々と庭へ拔け出した方がい。……

どうしたのか、其の時彼はぱつちりと眼を開いた。が、相變らず意識はどんよりと曇つて、心から眼覺めたのではないらしい。彼は今迄眼を潰つて、大地震の避難策を講じて居た事を想ひ出した。再び眼を潰れば、直ぐ其の思想が復活して、遂には何か形のある夢を育みさうであつた。

ぽん、ぽん、ぽん、……と、時計が十時を打つて居る。彼の病蓐の傍には、薄暗い、陰鬱な電燈の明りを浴びながら、妻と子供とがすやすやと眠つて居る。

「あゝ、もう夜半だ。天變地異が刻々に近づいて居るのだ。己は大急ぎで、研究を續行しなければいけ

ない。是非共地震の來る前に、結論に到達してしまはう。」

彼はあはてゝ、再び思索に沒頭した。

……且、夜半とは云へ、斯う嚴重に四方の雨戸が締まつて居ては、庭へ出るにも、おいそれと云ふ譯に行かない。さうかと云つて、わざわざ妻を呼び起して、今から雨戸を明けさせるのも、あまり突飛な、臆病な話である。……

さうだ、雨戸なんかは岐路の問題だ。そんな事に頓着して居る餘裕はないのだ。早く先の論點に戻つて、大急ぎで結末を附けなければ、ぐづぐづして居ると間に合はない。大至急！ほんとうに大至急だ！

家屋が、東西に倒れる憂少く、南北に倒れる憂多しとすれば、彼は六疊の座敷から、何處までも東西の線に沿うて逃ぐるに如かない。ちやうど、母屋の西端に二た坪ばかりの湯殿がある。云ふまでもなく、其れは頗る簡單な平屋造りで、床は頑丈なたゝきであるから、屋根の下では此處が一番最後に倒れる部分である。彼は先づ、六疊の座敷から此の湯殿へ突貫する。さうして、恰もディオゲネスのやうに、風呂桶の中へ身を潛めて、其の上を蓋で塞いで置く。斯うすれば萬一湯殿が倒壞しても、彼は桶に依つて擁護されるに違ひない。……ところで、湯殿には南と西とに出口があつて、共れが二つとも庭へ通じて居るのだから、……

もう少うしで結論に到達しようとする一刹那、彼の耳は、不意に、遠くの方で鐵瓶の沸るやうな音響を聞いた。

「あゝ、己は何と云ふ不運な人間だらう。もう少しと云ふ所で、とうたう地鳴りに追ひ付かれてしまつ

た。……しかし、まだ地震が揺る迄には多少の餘裕があるに相違ない。其の間を利用して、己は一と息に結論を捕へてしまはう。」

さう思つて居る隙に、音響は一層接近したらしく、此の世の破滅の知らせのやうに、殷々として深い地の底から湧いて來る。

「……南と西とに出口があつて、其れが二つ共庭へ通じて居るのだから、……あゝ神よ、願はくば今直ぐ結論に到着する迄、暫く地震を控へさせ給へ！」

彼は口の中で斯う云ひながら手を合はせた。さうして猶も工夫を續けた。――二つとも庭へ通じて居るのだから、飽く迄も東西の線に沿うて行く原則に律り、南の出口を避け、西の出口の雨戸を外して庭へ飛び出し、其處から西の隅の地點へ、眞直ぐに逃げる。既に湯殿へ遁れた彼は、潰されても心配はないのだから、出來るだけ沈着に、充分に機會を待つて、ゆつくりと落ち延びるがいゝ。逃げる時には、たとへ體がふらふらしても、成る可く四つ這ひに這はぬ事である。四つ這ひになれば、どうしても壓し潰される面積が擴大するし、何かの際に身を轉す事が不自由になる。柱や植木に摑まつても、立つて歩くに越した事はない。……

「さあ、此れでもう結論が濟んだ。大分地鳴りが强くなつて居る。己は一刻の猶豫もせず、直ちに實行に取り掛らう。今から支度を始めれば、大丈夫庭まで逃げられる。」

けれども彼が蒲團を撥ね除けて、立ち上らうとする瞬間に、忽ち轟然たる爆音を發して、素晴らしい大震動が襲つて來た。其れは明治廿六年の七月の時のに比べると、十倍も二十倍も激甚であつた。「あつ」

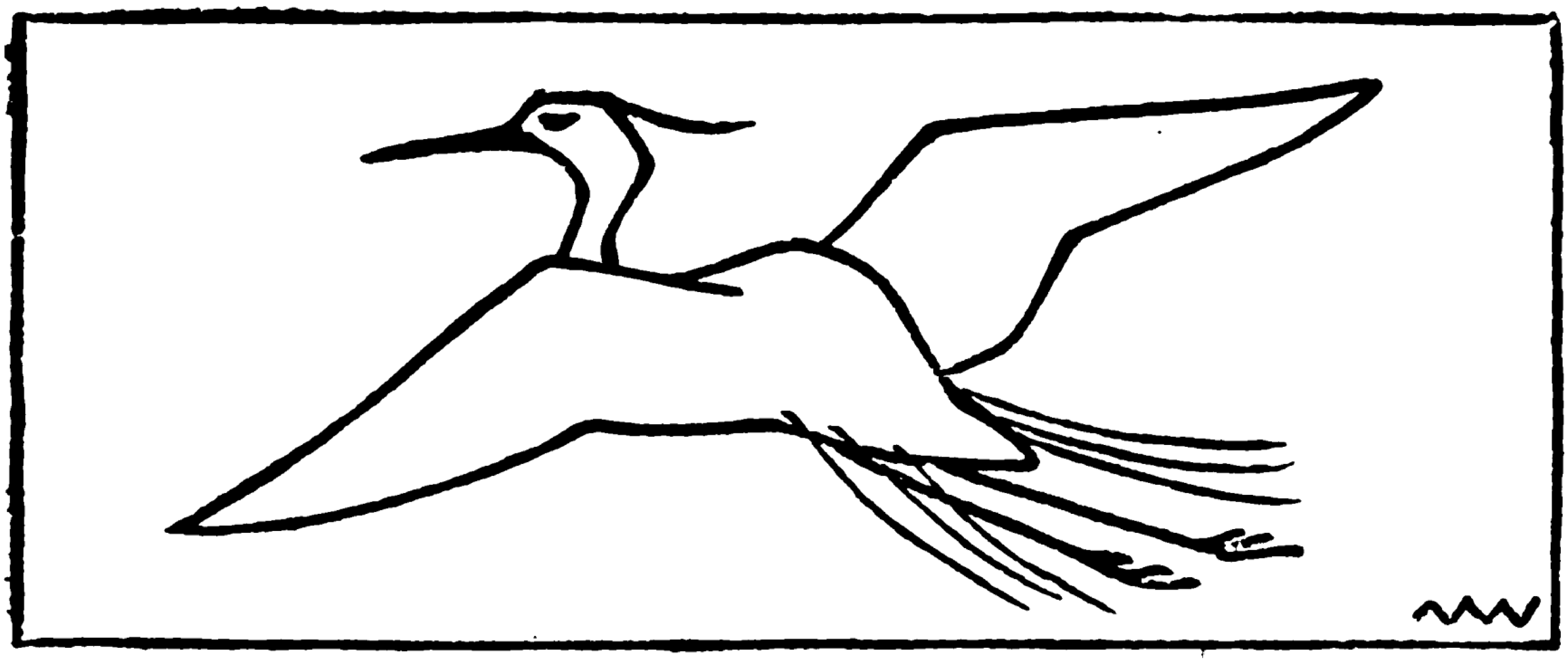
と云ふ間に、座敷の床は自働車の如く一方へ疾驅し出した。……

彼は愕然として眼を覺ました。部屋の中には元のやうに、物靜かな電燈の光が朧朧と漂うて、妻子はやつぱり眠つて居る。

「なぜ己は、こんな無氣味な夢ばかり見るのだらう。今度こそほんとうに、己は夢から覺めたのであらうか。どうぞほんとうに覺めてくれゝばいゝ。群がり寄せる妄想の中から、何とかして早く逃れてしまひたい。」

彼は眼瞼をぱちぱちやらせて、一生懸命に氣分を引き立てようと努めた。好い鹽梅に、段々意識が判然とする樣子であつた。今度こそ間違ひなく、眼が覺めて來るらしかつた。其の證據には、今まで心に感じなかつた齒の痛みが、再び Biri! Biri-ri! と、腦天へ響き始めた。……

大正五、十月作、



暴風雨のあと

谷崎精二

一

其の頃陽吉は毎晩きまつてとき子の家の周りを一度は廻つて來る慣はしとなつて居た。

雜誌社から夕方歸つて來て父母や弟と共に晩飯の食卓に向ふと、彼は無言でせか〱と箸を運ばせるのだつた。父や母が何か尋ねてもえゝとかいゝえとか云ふ返事だけしかしないので、兩親の方でもさう云ふ返事でわかるだけの問ひしか發しなかつた。父母は此の頃陽吉の樣子が變つて來て、少し面變れがしたのをとうから氣付いて居たが、其れを口へ出して尋ねやうとはしなかつた。どんな一身上の大問題でも自分で方づけてしまつて、後から結果だけしか報告しない、いつもの陽吉のやり方を知つて居て其れに不滿を感じ乍らも、今更其れをどうとも仕樣が無い事を知つて諦めて居たのであつた。

彼は晩飯を濟ますと直ぐ二階の居間へ上つて、長い、物憂い一夜を前に控へ

乍らだるい身體を窓際の机の前へ置くのだつた。直ぐ家の前には彼の家と同じ様な構へのしもたやが並んで、靜かな往來は眞直ぐに其の儘大川端へ出られた。早寢の人々が多い此の一廓では宵の中からもう何處も彼處も靜まり返つて、たまに往來を行き交ふ人々の下駄の音さへ、忽ち闇と沈默の中に呑まれてしまつた。唯時々犬が吠える聲や、格子口に附いた電鈴の音などが何處迄も何處迄も町中に響き亘つて、まるで一匹の犬が町中の番をしたり、一軒の電鈴が町中に一人の來訪者のあるのを知らせたりする様に思はれた。

此の町で夜遲く迄、一時迄も、二時迄も、二階の雨戸を開け放してあるのは唯陽吉の家のみであつた。暗い、淋しい往來へ唯彼の家の前のみはどんよりとした光が硝子窓越しに流れ出て居て、誰しも夜更けに其處迄歩いて來た者は屹度光を辿つて二階の陽吉の居間を見上げ、明るい、華かな室内の光景を想像して見るに違ひなかつたが、事實其の室の中には此の町で恐らく一番淋しい、不幸な若者がぼんやり机へ向つて考へ込んで居るのであつた。

彼の室と向き合つた前の家の二階は早くから雨戸が閉されて、トタン張りの廂が晴れた夜は月の光に、雨降る夜は雨の色に、いつも冷たく光つて居るのであつた。而して一日の中で陽吉の一番苦しい、だが又一番樂しい時間が其の廂をぼんやり見つめ乍ら過される事が多かつた。

八時頃になると鳥打帽を冠つてステッキをぶら下げた陽吉の姿が屹度明るい、賑かな人形町通りに見受けられた。彼は毎晩其の頃になるとどうしても家にぢつとして居られなくつてふいと家を飛び出し、電車にも乘らずに本所のとき子の家迄ぶら〳〵歩いて行くのだつた。

烏打が麥藁になり、綿入が袷になり、單衣になり、ステッキが雨の降る日には蝙蝠傘になつて尖つた肩と蒼白い顏が其の中に隱れる事があつても、陽吉の姿は此の六七個月間殆ど毎夜缺かさずに同じ道を同じ時刻にしよんぼり影の樣に過ぎて行くのが見受けられた。

人形町の細い溝際に植つた柳の並木はいつか青い芽を吹いて、日毎に葉末が茂つて來た。雨の降る夜は瓦斯燈の光に照されて翠の色が滴る樣に美しく見えた。而して其の柳の木の下に並んだ露店商人の群にも此の六七個月の間には樣々の變遷があつた。陽吉は此の頃或る小刀賣りの露店の前に暫く足を止めて毎晩同じ品物と同じ商人の顏をぼんやり眺める慣しになつて居た。其の男は『播州美濃郡、肥後守兼光』と十文字に書いた菅笠を冠つて筒袖の着物を着乍ら胡坐を搔いて粗末な鐵の小刀を賣つて居た。『有名な肥後守兼光、一つお買ひになればいつ迄も御家の御重寶――』そんな事を云ひ乍ら小刀で紙や木片を縱横無盡に切り刻んで居るのだつた。而して時々『未だそれのみか、剃刀の代用もする御便利な品。』と云ひ乍ら着物の裾を捲くつて紙屑の山の中へ片足を突き出し、毛脛へ唾液をつけて二三度指先で擦つてから小刀の先で凡そ一寸五分位もじや〳〵生へた脛の毛を剃り取るのであつた。日に燒けて爛れた樣に眞赤になつた細い脛には前夜の剃り殘しの毛が寄木細工の樣に四角い段を成して生へて居た。

『いつになつたらあの脛の毛がすつかり剃り落されてしまふだらう。』

さうした期待を持つて陽吉は毎晩此の男の前へ立ち、『未だそれのみか、剃刀の代用もする御便利な品。』と云ふ文句を聞いて、此の男が愈々毛脛を捲くつて見せる迄ぢつと待つて居るのだけれど、いつ見ても脛の毛は未だいくらかづゝ殘つて居て、其の中には上の方の膝頭の邊りが又薄く生へかゝつて來た。

陽吉はいつか此の男と自分の戀との間に怪しい、神秘的な關係がある樣に想像して、此の男がかうして毎晩店を張つて居る限り自分はいつ迄も惱ましい思ひを抱いて夜な夜な戸外をさまよはねばならぬ樣な氣がするのだつた。

彼は人形町から電車線路に添うて濱町河岸へ出た。而して兩國橋を渡つて綠町のとき子の家の方へとぶら〳〵歩いて行つた。毎晩の事なので彼はもう廣い電車通りの兩側にどんな家が並んで、どんな店番が坐つて居て、路傍の柳の木がどんな恰好の枝ぶりを見せて居るか、ちやんと覺えて居た。而してとき子の家に近づくに從つて自分の歩みが漸々のろくなり、反對に胸の鼓動が漸々烈しくなつて來る事も知つて居た。電車通りから淋しい横町へ曲ると急にあたりは靜かになつて其れと共に彼の視覺と聽覺が緊張して來た。彼は見通す事が出來る限り往來へ眼を配つて行き交ふ人々の姿を素早く視線へ掬ひ込んだ。而して若しとき子に似通つた若い女の姿でも遠くから見かけやうものならあわてゝ『廻れ右』をしてすた〳〵引返してしまふのだつた。自分が彼の女を戀して居る事はとき子に知られて居ても、かうして毎晩彼の女の家の周りをさまよひ歩いて居る姿を見られるのは餘りに恥づかしかつたからである。

質屋の白壁に沿うて其の横町から更に細い新道へ出ると、とき子の家は直き左側にあつた。陽吉は其の一二軒手前で溝板の上へ足を留めてぢつととき子の家の中の物音に耳を澄ますのだつた。而して格子口で下駄を揃へたり、障子を開けたりする音が聞えない限り、「あだち」と平假名で記した球蓋(グローヴ)を通して格子先へ洩れるどんよりとした軒燈の光が家の中から出て來る人影で亂されない限り、陽吉は足を早めて素早くとき子の家の前を通り過ぎるのだつた。而して一二間行くと彼は又引返してもう一度とき子の

家の前を通つた。けれども家の中はいつも森として、とき子は二階に居るのだか、下に居るのだか見當がつかない。とき子はお湯へでも行く外夜は滅多に外出しない事を知つて居るのだが、今宵彼の女が家の中に居ると云ふ確證を得られない間はどうしても不安で歸れないので、彼は一旦其處を引き上げて又出直して來る事に決めて居た。

陽吉は元の横町へ戻ると眞直に高架鐵道の下へ出で、煉瓦で固めた橋臺の傍の狹いじめ／＼した露地をぶら／＼兩國停車場の方へ行くのであつた。汚ない長屋や工場が左右から掻き寄せられた様に不規則に立て込んだ暗い、陰鬱な其の露地が如何にも現在の陽吉の氣持に調和する様に思はれた。二人並んで通れない程狹い路であるに拘らず、兩側の家々にともされた燈火が暗い爲め足許が眞暗で、一足毎に溝へでも落ち込む様な不安に唆られる。水道の共同栓から手桶に水を一杯汲んで片手に下げた長屋の上さんが身體の平均を取る爲めに宙に浮かせた片手で陽吉の肩先をすら／＼撫で乍ら通つて行つた。三方煉瓦で取り圍まれて、頭上をごろ／＼絶間無く汽車の通るに任せてある高架線の下の家々からは蚊遣りの煙が湯氣の様に戸外へ流れ出て咽せ返る様な溝の臭氣とまざつた。其等の家々は大概鍛冶屋や工場などで、薄暗い五燭の電燈の下に一人づゝ並んだ職人が食に餓えた獸の様な險しい眼つきをして稀に通る露地の人影を顧り見た。兩側から屋根で限られた狹い空間に蒼黒い夜の空の一部が細く長く見えて、遠く停車場の方で白い柱の上にともつた信號燈が時々氣紛れの惡戲の様に赤くなつたり青くなつたりする。汽車が通り過ぎる度に工場の窓硝子はびり／＼顫へて電燈の笠が微かに韻き合ふ。而して其れに連れて大きな薄暗い物影が壁の上を這ひ廻つた。

陽吉は其の狹い露地を通り拔けて停車場前の廣場へ出た。而してぐるりと外側を廻つて二等待合室へ這入つた。彼は其處で海老茶色の腰掛に身を投げかけて煙草を燻らし乍ら暫く休息する慣はしになつて居た。此處の汽車は一等車が無いものだから待合室も一等のが無く、二等のも狹くつて薄汚なかつたが、待合せる旅客も寡なくつていつもがらんと空いて居た。時々終列車で佐倉か四つ街道へ歸るらしい陸軍の將校が佩劍の音をかちや〳〵鳴らせ乍ら二三人どや〳〵と這入つて來て一齊に陽吉の顏に視線を注いだ。さうした時彼は眼のやり場に困つてくるりと後ろを向き乍ら待合室の外の空地を眺めるのだつた。砂利が散らばつた構内の庭を隔てゝ宿直室らしい一棟の建物が見える。長い廊下には五燭の電燈がしよんぼりともつて室内には病院の樣な靜けさが滿ちて居る。宿直室と向ひ合つた處は電信室らしく、ことことと、ことといつ迄たつてもことと〳〵を繰返して居る單調な電信機の音にぢつと聞き入つて眼を閉ぢて居ると、廣い世界の誰からも見捨てられてしまつた樣な遣瀬無い悲しみが絲の樣にぞろ〳〵と其の響の中から繰り出されて、十重二十重に彼の心に絡みつく。彼はとき子が唯憎くなつた。毎晩彼をこんなにも苦しめ、悶えさせて置き乍らとき子は平氣でお湯へ這入つたり、本を讀んだりして、やがて安らかに寢床へ就いてしまふのである。而して翌日になると何にも知らない樣な顏をして陽吉の眼を迎へるのである。

時々小倉の服を着た若い驛夫が竹箒とごみ取りを持つて此の待合室を掃除に來た。陽吉は後向きになつて居ても此の驛夫が近寄つて來るのを直ぐ氣付く事が出來た。どやどやした他の旅客の騷がしい足音の中で驛夫の靴の音だけは如何にも規則正しく、陽吉の耳には特種の權威を帶びて居る樣にさへ聞えた。

彼は毎晩かうして此の待合室へ休みに來るのを驛夫に怪しまれて訊問されはしまいかと云ふ事を一方ならず恐れて居たが、其れでも勞れた身體を起し、思ひきつて室を出て行くだけの勇氣が無かつた。汚ない土間の處々には晝間撒いた水が溜つて居て、長い腰掛の臺が泥水を吸つてじめじめ濕つて居る。驛夫は其の水溜をよけ乍ら擦り切れた箒の先でさら／＼と紙屑を掃き寄せて居る。其の箒の先が土間の上を漸々自分の足許へと近づいて來るのを陽吉は無氣味な獸の手か何かの樣に恐々見つめて居ると、やがて箒の先は彼の足の下を潜つて又出口の方へ行つてしまふ。彼はほつと一息ついて長椅子に身を横へるのである。

或る時肥つた、練兵場の埃で眞黑になつた四十近い少佐を中心に二三人の將校が直ぐ陽吉の隣りの長椅子に腰掛けて雜談をして居た。其の中に少佐が服のポケットへ手を突込んでハンケチを取り出さうとすると其れと一緒に五十錢銀貨が飛び出て土間へ轉げ落ちた。部下の少尉中尉の面々があわてゝ塹壕へでも身を伏せる樣に佩劍の柄を握り乍ら土間へ身を屈めて銀貨の行方を探したが仲々見つからなかつた。

「なあに、見當らなけりや構やせんさ。」

そんな事を云ひ乍ら少佐は最後に緩くり身を起してサーベルの鞘を引摺り乍ら四邊を見廻したが、やがて後向きになつて腰掛けて居た陽吉の傍へ近づいて「少々」と云ひ乍ら彼の脛を輕く押した。或る不快な氣持を發作的に感じ乍ら彼が不性無性に足を退けると、銀貨は丁度彼の下駄の後ろに落ちて居たので少佐は『あつた、あつた。』と大聲で叫び乍ら其れを拾ひ上げた。二三人の將校は直ぐ彼の傍へ馳け寄り

た。陽吉は自分が下駄の下へ匿まひ込んだのだと疑ぐられやしまいかと思つて恥ぢと怒りの念で顏を赤くしたが、席を立つと尙訝しがられるに違ひないと思つてぢつと辛抱して後向きに腰掛けて居た。而して眼の前へ大きな鏡を置いた樣に彼は將校達が赤くなつた大きな彼の耳を後ろからぢつと見つめて居る樣子を見る事が出來た。

彼は九時迄は必ず此の待合室に休んで居た。而して將校達が佐倉行の列車に乘り込んでしまふ頃に彼もぶら〳〵待合室を出て又とき子の家の方へと元來た道を引返すのであつた。

二

陽吉は同じ雜誌社に勤めて居るとき子といつから戀に落ちたのだか自分でもわからない。二人の戀の機緣となるべきほんのちよつとしたエピソードさへも起つた事が無いのである。ユイスマンがカトリック敎の信者となつた氣持を告白して、信仰と云ふ物は可成の歲月の間に漸々人の心に染み込んで行くか、さもなければ突然雷鳴の樣に人の心を襲つて不信者を神に近づける。然し此の二つの途の外に今一つ極く無意識に、丁度胃腑が知らず知らず食物を消化して行く樣に信仰が我々に働きかける途があつて自分のは正しく其れであつた。或る麗かな朝ふと自分は眼を覺すと、何故とは知らず神を愛する心が、もう芽ぐんで居たのであると云つて居るのを陽吉は曾て讀んだ事がある。とき子に對する愛情が彼の心に働きかけたのも殆ど其れに近い經路を持つて居た。或る寒い冬の日の午後、翌月の雜誌の校正に疲れた陽吉が朱筆を擲つてぼんやり室の戶口を見つめて居ると、窓から吹き入つた風の爲めに扉がすうつと開いて廊下を隔てた向側の編輯室が見通された。丁度とき子も其の時校正の朱筆を口に啣へてぼんやり戶口

の方を見て居たので二人の眼と眼がぱつたり出會つた。不意に視線を交へた場合に多くの人がする樣な無意味な笑ひを二人はどつちもしなかつた。眼と眼とを繫ぐ直線を中心として二人の身體が急に左右から近寄つて來る樣に思はれた。二人は絡んだ視線をもぎ放さうとして互にうろたへた。とき子の白い前齒の間から朱筆がばつたり落ちた。其の時風の力の反動で扉がすうつと戻つて來て二人の視線を斷ち切つた。やがて筆を執り上げた陽吉の心にはもう不安と希望との入り亂れた影が綿の樣にふわりと蔽ひかゝつて居たのである。

　其の時以來彼は入口の扉が開く每に屹度其の狹い隙間から檻の中でも覗く樣に恐々向側の編輯室を覗き込んだ。不思議にとき子も屹度扉の開く音を聞きつけて其の後ろから現れる陽吉の眼を待ち受けて居るのだつた。違つた室で働いて居る二人は言葉を交す機會が稀であつたが、顏を見合せる機會は、寧ろ其の機會を見つけやうとする努力は、益々繁くなつた。而して其の顏を下品な、野卑な雜誌社の空氣から引放して自分の近くに長へに置き据えたいと云ふ慾望が漸々陽吉の心に强くなつた。

　然し彼は世の多くの青年の樣に必ずしも戀愛を人生の至高の幸福だとは思つて居なかつた。さう思ふには餘りに屢々戀愛によつて不幸に陷つた人々の實例を彼の周圍に見過ぎて來た。彼は寧ろ廣い人生のあらゆる姿を聰明に慈くしまうとする靜觀的な氣持を一人の女性に對する愛着によつて妨げられる事を怖れてた。而して彼がとき子に對する自分の愛を自覺した時、彼の執つた最初の手段は努めてとき子から遠ざからうとする事であつた。丁度凡ての臆病な戀人が彼等の戀愛の初期に於て爲す樣に。而して其れは無論傷ましい失敗に終つて、事實は却つて大きな、力强い誘惑の前に彼の抵抗力が如何に貧弱であ

るかを曝け出すだけの結果となつた。言葉を交したり、顔に見合せたりするのが漸々遠慮がちになればなる程、彼の氣持は益々苛立つて來た。而して夜な夜な彼の女の家の附近をさまよい歩く事によつて、彼の女と別れた後の半日をも悉く彼の女の爲めに捧げる事によつて、彼は儚ない自己の爲めの慰めを見出した。

とき子も漸々處女らしい無邪氣と快活とを失つて行く樣に思はれた。社內で寒暖計と云ふ綽名の附いた、人の氣持を見拔く事を誇りとして居る齋藤と云ふ男がとき子は屹度誰かと戀に落ちて居るに違ひないと云ふ事を云ひ觸らした。彼の觀察によるととき子はいつも其の細い、尖つた腭を掌の上へ載せ乍ら潤んだ、物思ひの影がさした眼をぢつと窓を越した往來の篠懸の梢に注いで居て、誰かに聲を掛けられるとあわてゝ腭を掌から外して視線を室內へ戾すが、彼の女の氣持がすつかり現在の仕事の方へ流れ寄つて來る迄にはいつも可也の時間がかゝると云ふのである。然し顏の表情や、氣分の上に變化は無くつて、別に鬱ぎ込んだりなどする樣子は見えないから、恐らく誰かと婚約が調つて夢の樣なうつとりとした氣持で結婚の日を待つて居るのだらうと云ふ樣な事迄齋藤は推測した。ふだん齋藤の云ふ事を餘り信用しない陽吉にも此の推測だけは非常な權威を持つて居る樣に思はれた。彼は此の噂を聞いて急に狼狽し出した。而して自分をもとき子をも、此の苦しいヂイレンマから救ひ出す爲め、彼が或る二つの手段の一つを執らねばならぬと決心した。其の二つの手段と云ふのは一つは彼が默つて雜誌社を退く事、他の一つは思ひきつて大膽にとき子の愛を求むる事であつた。其れが出來ない限り二人はいつ迄も火の樣な眼ざしで互の身體を燒き盡す迄苦しい凝視を續けて行かねばならないのだつた。

或る日例年の吉例として此の雜誌社の創立紀念日のお祝ひがあつた。四人の婦人記者と二十人近い男の記者が食堂へ集まつて社長の訓示を聞いた後、一同は赤飯の折詰を開いた。折詰の肴は蒲鉾、刻み鯣、うま煮などしか無かつたが、ビールは飲み放題だつたので若い記者達は魚の樣に腭を動かしてがぶ〳〵ビールを飲み續けた。痩せた、五十近い編輯局長のK氏は酒が一滴も飲めないので番茶を啜り乍ら折詰の蓋にこびり附いた飯粒を箸を横にして綺麗に端の方から掃き取つて居た。若い時分自由黨の壯士だつたと云ふ社長は大きな禿げた頭を一同の眞中へ突き出し『どうも刻み鯣と云ふ奴は齒の間へ引掛かつて困るて。』などゝ云つて口をもが〳〵させて居る中に、もう言葉通り齒の間へ引掛けたと見えて腭を突き出し乍ら大きな指先を脣の中へ差し込んだ。一同は社長に極まりを惡くさせない樣な程度でくす〳〵好意的に笑ひ始めた。だが陽吉ととき子だけは笑はなかつた。偶然向ひ合つて坐つた二人は丁度多勢連れ立つて歩いて行く途中でわざと歩みを緩めた人の樣に、自ら意識して一同の共通した動作から取り殘された。而して又も互の燃える眼の中へ落ち込んで顫へて居る自分達を見出した。

『おや、御婦人達の方はビールをお飲みなさらないんでしたつけね。おやあ、そいつを此方へ頂戴しやうか。』

陽吉の隣りに坐つた齋藤が突然かう云ひ乍ら手を伸ばしてとき子の前に置いてあつたビールの壜を取らうとした。

『あら、私がお酌をしてあげますわ。』

とき子は壜を取り上げて片手で靑つぽい糸織の着物の袂を抑へ乍らかひ〳〵しく向ひ合つた二三人の

男にビールをついでやつた。

「齋藤さん、それから殿池さん。」

彼の女は順々に差し出されたコップを充たしてやり乍ら陽吉の番になると頰を薄赤く染めて暫時ためらつた。陽吉は自分で氣がつかぬ中に本能的にコップを握つて居た。だがとき子が何と思つたかビール壜をテーブルの上へ置いてしまつたので、彼は失望してコップから手を放すととき子は急に又壜を取り上げて倒す樣に壜の口を彼のコップの上へ重ねた。細い、白い、とき子の腕が彼の注視の下でぶる〱顫へてコップがかち〱鳴る音が陽吉には驚く程高く耳に響いた。

其の夜彼は家へ歸つてから夜中の三時迄起きてとき子に宛てた始めての長い〱手紙を書いた。

三

陽吉は其の手紙を書いてから一月餘も袂の中へ入れたまゝにして置いた。其れは外から好い機會が與へられなかつた爲めと、內から彼が自らに今一度反省を與へやうとした爲めであつた。手紙は袂の中でハンケチや煙草の袋と一緒に揉まれて角が皺くちやになり、時々彼は桃色の細長い封筒だけを取り換へなければならなかつた。其の度に彼は中の手紙を開けて讀んでみるので、しまひにはレターペーパに裏表十六頁書いた其の文句をすつかり覺えてしまつた。用の無い時ぼんやり編輯室の椅子に凭れて居ると、萬年筆を持つた彼の手はひとりでに動き出して「廿六年の半生に温順な善良な青年として許された陽吉は今凡ての名譽と意氣とを擲つてあなたの前に膝まづきます。」などゝ云ふ手紙の文句を原稿紙の上へ書きつけた。彼は時々氣が付いてびつくりしてはあわてゝ書きかけの紙をずた〱に引裂いてしまふ

のだつた。

夏になると編輯室の扉が開放されて始終とき子の顏が陽吉の方へ見える樣になつた。其れが大變彼を不安にさせた。若しやとき子が自分の方をそつと見つめて居りはしまいかと思つて絕えずそわ〳〵し乍ら彼はペンを持つた手を休めてはとき子の方を振返つた。時々はとき子が正しく此方を向いて居た。彼の女が他を向いて居る時でも陽吉には其れがわざとらしく、つひ今迄彼の方を見て居たのをあわてゝ視線を反らせた樣に思はれた。其の中に七月の中旬から丁度陽吉の前のテーブルの上に煽風機が置かれる事となつて好い鹽梅にとき子の橫顏は其の陰に隱れたが、彼はもう其の時机の下の棧に行儀好く掛けられたとき子の可愛らしい足を見つけて居た。きちんと詰まつた白足袋を履いた細い兩足は身體の中で一番表情の乏しい部分であるにも拘らず、其れがとき子の物であると云ふ事實が彼の眼に特種の鮮かな印象を與へて、暗い慾望を彼の心に喚るに充分だつた。陽吉は其の足袋の先を眺め乍ら時々或る不安に虐げられる度に呪文の樣に袂へ納めてある手紙の文句を心の中で唱へ出した。而して漸々迫つて來る自らの運命の前にもつと大膽に且つ敏捷にならうと努めた。

其の中にとき子が頭が痛いと云つて二三日缺勤した。彼はとき子がもう其れつきり社へ來ないのではないかと疑つて非常に今迄の自分の不決斷を悔ゐた。而して烈しい神經衰弱に陷つて夜は寢られない程煩悶した。四日目にやつと彼の女の姿が再び編輯室へ現れた時彼はどんなに嬉しかつたらう。而して今日こそは極度に緊張された自分の氣持を引緩めて慰めの休息を與へてやらねばならぬと決心した。結果が失望に終つても、或ひは又歡びに終つても。

七月の末の蒸暑い日だつた。兩面に風を吹き送る大きな煽風器はぴり〳〵机を顫はせ乍ら勢好く廻轉を續けて居た。陽吉はぶう〳〵云ふ煽風器の音が直接に心臟に響いて來る樣に感じて時々呼吸を壓迫されては息を喘いだ。ちよいと頭を動かすとふら〳〵と眩暈がして廊下を隔てた向側の編輯室の机の下に見えるとき子の白足袋を履いた足が急に大きくぼやけて近寄つて來たりした。蒼白い額に垂れ下る汗を拭はうとして袂のハンケチを探すと、とき子に宛てゝ書いたあの手紙がハンケチに捲きついて袖口へ出かゝつた。

四時打つて同僚が歸りかけても彼はわざと古い雜誌などを持出してばら〳〵ページを捲くり乍ら用の有る振りをして居た。二三日休んだので用が溜つたと見えてとき子も未だ歸らなかつた。彼の女の白い額の眞近かに廿燭のタングステン球が薄赤くともり始めて如何にも暑苦しさうだつたが、とき子は物憂いと見えて其れを消さうともしなかつた。眞晝の間狹い室内に立ち罩めた蒸す樣な人いきれは一杯に開かれた窓から内庭へと流れ出始めた。而して其の代りに吹き入つて來る夏の黃昏の爽かな微風が熱した陽吉の身體に水の樣な冷やかな感じを與へた。彼は袂から手紙を摑み出してぶる〳〵顫へて居る五體を强ひて抑へつけ乍ら靜かに廊下を跨いでとき子の居る室へ這入つた。

とき子は彼の足音を聞きつけると本能的にペンを投げ捨てゝ彼の姿を見上げた。而して陽吉の顏に或る硬い、苦しげな表情を、或る鋭どい決心を、直覺的に見て取つて蒼白い顏をぶるぶる顫はせた。向ひ合つた二人の男女の表情は瞬間其の儘固定した。而して其れは二人の身の上がそれからどうなつて行くにつけ、恐らく一生涯忘れる事の出來ない顏であつた。二人は其處に今迄どつちも見た事が無い樣な、

恐ろしく硬直した唇と物凄い眼光とを見出した。而して二人は二人を其處迄押しつけた或る强い力を今はつきりと感じて其の力に身を委ねた。

「あだちさん、あなたにお願ひがあつて手紙を書いて來たのですが讀んで下さいますか。」

彼はもう之れつきりしか云ひ得なかつた。急に烈しい渴を覺えて其の儘彼は眼が眩んで其處へ倒れるかと思つたが、然しどんな事があつてもとき子の返事を聞く迄は意識を失ふまいと決心した。とき子は俯むいたまゝ返事をしなかつた。其れは恐らく五秒か十秒の間だつたが、陽吉には彼が悶え通して來た此の半年間の時日よりもつと長く、もつと辛抱が出來ない樣に思はれた。然し彼はもう之れだけで自分の力一杯の事をして居たのだつた。此の上刻下の沈默を自分の方から破らうとする努力は到底彼には不可能だつた。

「とにかく御手紙を頂きまして――」

とき子はやつとかう云つて少し顏を上向けたが、彼の女の中途半端の決心を其のまゝ現す樣に顏の向きは稍や斜めになつた儘靜止した。

「では此處へ置きますから。」

陽吉は素早く手紙を彼の女の机の上へ置いて一散に階下へ馳け降りた。非常な悔ゐと非常な慰めとが唯一つの緊張した感情となつて彼の心を虐げ盡した。彼は家へ歸ると二階の居間へぶつ倒れた儘晩飯も食べずに寢て居た。今迄臆病であり、不決斷であると思つて居た自分の行動が急に甚だしく輕卒な物である樣に思はれて來た。彼の女に愛を告白する事によつて彼が求めやうと豫期した休息は少しも得られ

ないで、彼は唯自分を烈しく責めつける事によつて僅かに道德的の慰籍を見出し得た。一人の婦人に愛を告白する事が、數多の女性の中から永遠に愛する者を見出して其の誓ひを求むる事が、こんなにも苦しい努力を要しやうとは彼に取つて思ひがけない事であつた。

母が心配して二階へ上つて來た時、彼は頭痛がして氣分が惡いからと云つて晚飯の代りに饂飩を取つて貰つた。而して兩親に顏を見られる事を恥ぢて二階の居間へ饂飩を取寄せて食べた。せつない彼の氣持が食事さへも彼に許さなかつた。胸がむか〳〵して一口頰張ると何も彼も吐き出してしまひたくなつた。

其れでも彼は八時頃になるとどうしても家にぢつとして居られなくなつて又ぶら〳〵ととき子の家の方へ步いて行つた。空がどんより曇つた蒸暑い晚で、久しく雨に會はない往來の篠懸や三角楓の並木は薄い毛の樣な埃を葉末に浴びて萎れ返つて居た。靄の樣に往來に流れた生溫かい人いきれの中で緣日のカンテラの火が赤く滲んだ。人の顏も、黑い空も、漠然とした都會の騷音も、凡てが陽吉には無用であつて、唯悲しかつた。彼は自分の輕卒な擧動に對して手紙に書いた文句通り彼の女の前に膝まづいて自分の罪を謝したい氣になつた。

とき子の家の近く迄來たがさすがに彼は今宵だけは彼の女の家の傍迄行く事が出來なかつた。然し其のまゝ歸る氣にもなれなかつたので彼は近所の小さい活動寫眞館へ這入つた。もう八時過ぎで木戶には割引の札が掛つて居た。陽吉は長い腰掛が並んだ後ろの壁に凭れて唯今宵の時を空しく消す爲めにぼんやり正面に映つた映畫を見つめて居た。彼の傍に汚れた筒袖の單衣を着た五十近い職人風の男が立つて居

たが、餘り寫眞には興味を惹かれぬらしく、時々振返つては何人かを尋ねる樣にあたりを見廻した。陽吉は其の男の野卑な容貌に或る不快を感じさせられて其れとなく注意して居ると、白いエプロンを掛けた十四五の女給仕が横あひからばた〳〵と馳けて來て男の側へ擦り寄つた。

「お父さん、今日は之れだけだよ。」

かぼそい聲と共に父親の掌へちやら〳〵と銅貨が落ち込んだ音を聞いた時、陽吉は急に悲しくなつて涙がさも機會を待ち受けて居た樣にぼろ〳〵と彼の頬へ溢れ出た。

四

翌日陽吉は苦しさに堪へかねて出勤の途中で酒を呻つた。而して醉ひに紛らして强ひて社へ出た。八時出勤の規定が十時近くになつたので彼は主筆にちよつと詫びを云ひ乍ら急いで机の抽出を開けて若しやとき子からの返書が入れてありはしないかと探してみたが見當らなかつた。彼は手紙の終りにとき子に氣まづい思ひをさせない爲めどうせ此の雜誌社を去るつもりだから成るべく早く返事をしてくれる樣にと書き添へて置いたのであつた。彼は返書が來て居ないので少し不安になつたが、此の一年間にとき子が自分に對して暗々裡に示してくれた好意と愛情の表白を出來得る限り思ひ出してみて、結局自分の執つた手段がとき子にさう豫想外である筈はないと信じた。而して努めて安易な氣持になつて同僚とのんきな世間話を交へて居た。翌月の雜誌がもう出來上つたので用事が殆ど無い日であつた。

四時頃一人の給仕から『足立さんから。』と云つて陽吉の處へ手紙を持つて來た。『來月號原稿』と朱書してあつたが陽吉はわざと冷淡に机の抽出へ投げ込んだ。而して同僚がどやどや歸つた後で彼も手紙を

懷ろへ入れて歸りかけたが、どうしても家迄我慢して持つて行けないので思ひきつて社の中で開けてみやうとした。彼は直ぐ階下の食堂へ行つてみるとあいにく會計係の老人が中腰になつて蕎麥を食べて居る處で、老人は腭の伸びた顏を陽吉の方へ向け乍ら鐵縁の眼鏡越しにぢろりと詰じる樣な視線を投げた。彼は其處を飛び出して中庭へ降りた。而して小さい古池の端の松の木の陰へ身を潛めてあたりを見廻してからわなゝく手で封を切つた。

陽吉が送つた長い手紙に比べてとき子の返事は極く簡單であつた。『あなた樣の御心の溢れたあのお手紙は有難く拜見しました。ですが私はあなたの思つて居らしやる樣な立派な女ではございません。極くつまらない、何の取柄も無い女でございます。はつきりした御返事はどうぞ二三日お待ちなすつて下さい。あの御手紙は昨夜父に見せて相談致しました。父は一生の大事だから輕卒な事をしてはならぬと申します。』陽吉には最後の一句が何よりも強く胸に響いた。其の一句が彼に手紙の裏に隱れたとき子の氣持を判斷する冷靜を失はせてしまつた。駄目だ、もう駄目だ、自分でさへも輕卒に思はれる行爲を第三者が見たらどんなに無謀に、大膽に見えるだらう！　彼は木陰から立ち上つて炊事場の裏の方へ力無く歩んで行つた。而して靑い苔がこびりついた煉瓦塀の裏を見つめて熱い失望と悔恨の淚をぼろ〳〵手の甲へ振り落した。

かうなつた場合に彼の執るべき手段は唯一つ、とき子に氣まづい思ひをさせない爲めに社を退く事であつた。彼は急いでとき子の歸らない中に最後の意志を通告しやうと思つて又編輯室へ馳け上つた。

『私はあなたが父上に御相談なさる前にあなた一個の御返事を頂きたうございました。然し今となつて

共れをお責め申さうとは思ひません。あなたのお執りなすつた態度は處女として當然な、而して立派なものでした。凡ては私の輕卒な擧動に罪があるのです。唯然し私がかう云ふ輕卒な態度を執らなかつたならば私はあなたの愛を求め得たのだと云ふ事だけは私に信じさせて下さい。私は其れを信ずる事があなたに不快を與へるとは思ひません。」

書き續けて居る手紙の上へ又してもぽろ〳〵と淚が零れ落ちた。何と云ふ無用な、恥知らずの淚であらう。

陽吉は丁度製本屋から出來て來た許りの翌月の雜誌の中へ其の手紙を挿んだ。而して歸りかけたとき子にやつと階段の途中で追ひついて、默禮を交し乍ら無言で其の雜誌を彼の女の手に渡した。

二三日來大分怪しかつた空模樣が到頭持ちきれなくなつたと見えて其の夜半から烈しい暴風雨となつた。翌朝陽吉が雨戶を搖する强風の音に眼を覺すと、枕許に新聞の上へ薄桃色の封筒が置いてあつた。彼は直ぐ飛び起きて共れを攫み取つた。本所の消印が押してあつて正しく上書きはとき子の手跡だつた。裏を返すと氣をきかしてわざと男文字らしく荒つぽい筆で『足立生』と書いてあるのが苦しいをかしさを陽吉の心に暗示した。

彼は床を出て雨戶を繰つた。凄じい烈風が忽ち障子をぴゆう〳〵と唸らせて、窓障子の腰に嵌つた硝子には大きな雨滴が我れ勝ちに飛びついた。彼は爽かな朝の風を一杯室の中へ充し乍ら氣を落ちつけてとき子の手紙を讀み始めた。最初の手紙に比べて全體の調子が大變激して居た。彼の女は自分が執つた手段が現在の日本の家庭に育つた處女として止むを得なかつたと云ふ事を述べて陽吉の宥しを乞ひ、父

親には誤解されない様に充分説いて置いたから安心する様にとの事だつた。「あなたは此のまゝ永久に別れやうとお云ひなさいましたが、そんな譯は決して無い筈です。私だつてあなたを眞實に愛して居ます。あなたが私をお愛しなさるもつと前からあなたを愛して居ます。』そんな文句があつた後に父がお眼に掛つてよくお話したいから今夜いらしつて下さいと記してあつた。何も知らない彼の女は電車を降りてから自分の家へ來る迄の道順迄委しく書き添へてあつた。

陽吉は躍り上つて裸體のまゝ室の中をどし／＼歩き廻つた。つひ昨日の記憶が妙に隔たりが出來て、凡てが遠い過去の事の様に思はれた。而して其れが彼の心に落着きを與へた。大きな失望が拭ひ去られた後の寛やかな意識の面に新しく見通される未來に對するさま／＼の細かい不安や羞恥の念が、しみの様に浮き上つた。

五

朝飯を濟ませてから社へ出勤する途中彼は恐ろしい暴風雨に出會はねばならなかつた。溝際に並んだ柳や、篠懸や、三角楓の並木は強風にばた／＼と青葉を打落されて傷ましげに悲鳴を揚げて居た。夥たゞしい雨水は淺い溝の中へ這入りきれず、沼の様に歩道に溢れて行人の足を舐めた。蝙蝠傘は船の帆の様に脹らんで鐵骨がみし／＼軌む。陽吉の夏外套の裾は水に落ちた様にすつかり雨で濡れてしまつて兩方の足首へ外側からべと／＼捲きついた。電車の窓硝子はすつかり曇つて釣革の上から雨だれがぼた／＼膝の上へ落ちた。

づぶ濡れになつて雜誌社へ馳けつけた陽吉は二階の窓からぼんやり物凄い往來の光景を眺めた。屋根

死も、立樹も、電柱も、今にもじめ〳〵形が崩れ落ちさうにびしよ濡れになつて、重苦しい空の下に互に縋り合ふ様に並んで居る。向側の溝際に立つた行路樹が忽ち烈風の爲めに一本の小枝をびしりと折られて、青葉が茂つた其の小枝は僅かに樹皮によつて幹に縋りついて顫へ乍ら今裂かれた許りの白い、生々しい肌を見せて居る。然し共れは陽吉の眼に『生木を裂く様な。』と諺に引用される様な傷々しい感じを誘はなくつて、寧ろさつぱりとした、すが〳〵しい感じをさへ暗示した。彼は永い間或る不純な懊悩に纒ひつかれて居た自分の心が今日始めて綺麗に洗ひ淨められた様に感じた。而して淋しい微笑を湛へ乍ら今宵行はるべきとき子の父親との會見を想像して或る羞恥の豫感に戰き立つ可憐な自らの感情を見出した。彼はそつと向側の編輯室を覗いたが烈しい暴風雨に恐れてか、とき子は未だ其の姿を現さなかつた。

　晝過ぎに突然陽吉は赤坂の伯父の家から急用があるから來て貰ひたいと云ふ電話の知らせを受けた。雨を冒して彼が伯父の家へ行くと意外にも伯父の家では大騒動が持上つて居た。伯父は或る商業上の手違ひから生活に絶望し、前夜靈岸島から伊豆通ひの汽船に乘込んで此の恐ろしい暴風雨の最中を船上から相模灘へ投身してしまつたのであつた。

　茶の間には一門の人々が多勢集つて思ひもかけない此の慘事に就いて前後策を講じて居るところだつた。女達のしめやかな啜り泣きの音が方々で起つた。汽船會社から屆けてよこした形見の金時計や、指環や、夏羽織が佛壇の下に備へられて、線香の煙が薄暗い室内で愁ひに沈んだ人々の顔に戯れかゝつた。

『とにかく出來るだけ手を盡して死骸を探し出さうと云ふ事になつて、今から云ふ物を印刷させたのだ

がね。」

陽吉の父はさう云つて美濃紙へ二號活字で印刷した死體捜索の懸賞廣告を彼に見せた。「左記の特徴ある男子四月一日午前二時頃相模灘に投身せり。一週間以内に死體發見の御方へは金百圓、同二週間以内に發見の御方には金五十圓を呈す」と前書きがしてあつて伯父の年齢や、服裝や、身體の特徴が委しく記されてあつた。

集つた人々の中から若い、身輕な者だけが選定されて相模灘沿岸の各地方へ出張する事になつた。陽吉は鎌倉から鵠沼迄の區域を擔當する事となつて直ぐ車を驅つて東京驛へ赴いた。間も無く豪雨を衝いて走り出た列車の二等室にぼんやり腰を掛けた自分を見出した時、陽吉は始めて伯父の死が彼の一家に如何に重大な影響を與へるかをはつきり意識した。委しい事情を聞く暇が無かつた彼には伯父がどれ程の窮境に立つて居たのだかを推察する事は出來なかつたが、伯父の決意如何によつては伯父の資産と名譽とを以て充分切り拔ける事が出來さうにも思はれた。然し伯父にはもう此の上生きて行く力がなくなつて居た。昔榮えた陽吉の一門の衰滅を防がうとして最後迄戰つた伯父はもう力盡きて殪れてしまつたのだ。彼はふと或る歳の正月伯父の家へ年始の挨拶に行つた事を思ひ出した。伯父は新たに中庭をつぶして建増した茶の間で鳥を煮乍ら晝飯を食べて居た。而して陽吉に盃を强ひつゞ彼は諄々として自分の唯物的人生觀を說いて最後にかう附け足した。「人間と云ふ者は身體を丈夫にして八十迄は生きて稼がなければならない。」然し伯父は到頭八十迄生きて稼がなかつた。彼は未だあと廿一年の生命を使ひ殘して〓死してまつた。

陽吉は又一年程前に病死した他の一人の伯父の事を思ひ出した。其の伯父は今度死んだ伯父程の德望と信用とが無かつた代り、目的の爲めにはどんな手段でも厭はなかつたので彼が一代に造り上げた資產は幾十萬と云ふ莫大な物であつた。彼は病院へ這入つてからも特別に一室を借り切り、寢臺は厭やだからと云つて廿幾疊の疊を買ひ込んで室內へ敷きつめた。彼の死後逸話として新聞紙が傳へた處によると、伯父は病床から主治醫の博士に手を合せて『先生、どうぞ今度だけは命を助けて下さい。今度助かつたら何萬圓でも御禮を出します。』と哀願したと云ふ。一人の伯父の生命が肉體的に脅かされた時、彼の富も、彼の慾望も、其の前に何の權威を持ち得なかつた。他の一人の伯父の生命が精神的に脅かされた時、彼の德望も、彼の精力主義も、等しく其の前に何の權威も持ち得なかつた。かうして二人の伯父の死によつて陽吉の一門を代表するマテリアリズムも亦傷ましい滅亡を遂げてしまつた。

『伯父さん、伯父さん。』

人氣の少ない二等室の片隅で輕く眼を閉じ乍ら陽吉は心の中でかう叫んだ。彼は彼の一門を支配するマテリアリズムを極端に輕蔑して居たとは云へ、此の伯父の一生が全然過つて居たとは今俄かに斷定する事が出來なかつた。何故なれば伯父も亦與へられたる境遇と素質とに應じて最善の努力を盡して生きて來たからである。

六

曇つた窓硝子の外に灰色の雨雲が何處迄も何處迄も展がつて居た。豪雨と强風の中で夏の野山は蒼茫と暮れて行つた、恐らく又同じ凄じい風雨の中に物憂い朝を迎へる爲めに。

藤澤で汽車を降りた陽吉は電車に乘り繼いで片瀨へ行つた。而して電車の停留場の附近の茶店で片瀨村の漁師の網元の住所を聞いた。

『網元なら私共で極く懇意にして居りますがちよいとお教へ申しても知らない方にはわかりにくい處ですよ。一體どう云ふ御用で。』

客扱ひに馴れたらしい若い上さんが出て來て陽吉の姿を眺め乍らかう問うた。彼は死體捜索に就いて東京から網元へ依賴に來た者である事を告げて、應分のお禮はするから誰か網元の家迄案內して貰へまいかと云ひ添へると、上さんは奥へ這入つて急にお茶を入れて來た。

『其れでは私が御案內致しませう。街道へ出ると大分廻り道になりますが、濱を傳つて行けばなあに譯はございません。』

上さんはさう云ひ乍らかひ〲しく尻を端折つて提灯へ火をともした。陽吉は茶代を兼ねて五十錢銀貨を盆の上へ置くと、上さんは忙しい中にも自分の利益は忘れない樣に禮を述べ乍ら素早くレースで編んだ巾着の中へ銀貨を納ひ込んだ。

海から吹き寄せる烈しい風に火を奪はれぬ樣に提灯を袂で庇ひ乍ら素足に草履を引掛けてすた〲步いて行く上さんの後に續いて陽吉も暗い濱邊に足を運んだ。泥沼の樣に柔かく崩れた銀砂の中へともすれば下駄が潛り込むのを恐れて足許を見廻すと、處々自然に堀られた窪みの中へ雨水が溜つて何處からともなくさす幽暗な光の中に空の一片が切れて落ちた樣に冷たく閃めいて居る。眞暗な沖合には漁火一つ見えず、海は、つひ昨夜彼の伯父の生ける死骸を呑んだ海は、白蛇の樣な浪頭を擡げつゝ突進して永

刧の咒ひを陸地に浴びせかける。急にどつと吹いて來た風の爲めに上さんの持つた提灯の火が消されてしまつた。

「あれ！」

上さんは舌打ちをし乍ら立ち止つて袂からマッチを探し出した。陽吉は風上に立つて其れを庇つた。眞暗な闇に取り卷かれた人氣の無い濱邊で若い男女が二人寄り添つて立つて居る。髮のほつれ毛が垂れ下つた白い女の襟元と、鹽の香に交つて髮の匂ひがふと或る暗い、冷たい慾望を陽吉の心に唆つた。彼は努めて不快な連想を拂ひ退けやうとしてとき子の事を考へ出した。とき子は今頃何をして居るだらう？　恐らく今宵は彼が來るだらうと心待ちに待つて居るかも知れない。彼の女の父、彼の女の母はどんな態度で彼を迎へてくれるだらう。而してとき子の赤らめた顏、彼自身のうろたへた表情――。

「どうもお待遠さまでした。」

提灯の火はやつとついた。上さんは其れを再び袂で庇ひ乍ら濱邊を拔けて漁師町へ這入つた。明るい人家の間へ出て陽吉はほつと息を吐いた。

赤土の上へ疎らに敷石を並べた狹い路をいくつも曲つて行く中に上さんはやつと或る大きな茅葺屋根の家の前で足を停めて、「此處が漁師の網元でございます。」と敎へた。臺所に續いた暗い土間に大きな風呂が据ゑてあつて、薪の焔で向側の壁がどんより光つて居た。風呂の中には乳色の湯氣に圍まれた赤い子供の首が二つ浮んで、四つの眼が珍らしげに陽吉の方を見上げて居た。

上さんが先づ奥へ這入つて話をすると六十近い、太つた、實直さうな主人が出て來て慇懃に陽吉を招

じ入れた。彼は簡單に伯父の投身の顚末を語つて組合の漁船が沖合へ出漁の場合に死體搜索に盡力してくれる樣にと依賴し、懸賞廣告を十枚許り主人の手に渡した。

「あなたの實の伯父樣で。それはまあ、何と申上げてよいやら、誠にまあ、何と云ふお情無い事で。」

人の好さゝうな主人は心から同情した樣に幾度も傷ましげな顏をして懇ろに悔やみを述べてくれた。而して其れが少しも不自然に思へない程主人の氣持は素朴で、單純であつた。陽吉は骨肉の甥である自分が餘りに平然として居るのが恥づかしくなつた。やがて二人の男の子が湯から上つて出てちよこ〳〵と父親の傍へ走り寄つた。二人は裸體のまゝ父の肩の上からそつと懸賞廣告を覗いてみた。

「百圓としてあるぜ。見つけた者に百圓くれるのだとよ。」

年上の子の方がさう云つておろ〳〵陽吉の姿を見つめた。此の蒼白い青年の顏と百圓と云ふ金高とがどうしても一緖に考へられないと云ふ樣に。

主人は子供を後ろへ押し退けて自分の長男も一二年前此處の海で溺死したと云ふ話をした。片瀨から出た二艘の漁船が江の島沖で龍卷に襲はれて船が難破し、三十幾人の漁夫が皆溺死してしまつた。遺族達は每日僧侶を招いて濱邊で讀經をした。信仰の厚い遺族だけは死者の亡靈が枕許に現れた夢を見た。而して其の翌日屹度死骸が浮上つたが、不信心な者には到頭死骸が見出されなかつたと云ふ。

「御信心でございますぞ。何事も御信心でございますぞ。」

主人は敬虔な表情をし乍ら語氣を强めてから云ひ添へた。

上さんと連立つて元の茶店へ歸つて來た陽吉は上さんに禮を述べて別れを告げた。而して一人で棧橋を渡つて江の島へ行つた。

長い棧橋には彼の外に唯一人の影も見當らなかつた。暗い、恐ろしい闇が彼に正しい距離の目算を許さなかつた。どこ迄行つてもどこ迄行つても棧橋は盡きない樣に思はれた。怒濤と强風の爲めに橋桁はぐら〳〵搖れて今にも彼を載せた儘海中へ落ち込みさうな氣がした。彼は風力に押しつけられるのを恐れて蝙蝠傘を疊んでしまつた。大粒の雨が頰へ、額へ、襟元へ、礫の樣に痛く飛びかゝつた。

辛うじて江の島の橋番小屋へ辿り着いて彼は此の島の漁師組合の頭の家を尋ねた。番人の若い漁夫は先づ彼に橋錢を請求した後、組合の頭は自分の兄に當るが何の用事があるのかと尋ねた。陽吉は又懸賞廣告を五六枚取り出して簡單に用向を語ると、漁夫は此の大雨の中をわざ〳〵尋ねて行くのはお氣の毒だから之れから私が歸つて傳へてあげますと云つてくれた。

『こんな物を刷つて方々へわざ〳〵配るのは大した費用でせうな。——何です、此のなくなつた方は、華族樣ですかね？』

四角い硝子の箱へ入れて吊るしたラムプの下で漁夫は廣告を拾ひ讀みし乍らかう聞いた。陽吉は苦笑して唯の商人だと答へた。

七

電車で鎌倉へ歸つた陽吉はとき子の處へ『コンユヤカレヌヤウキチ。』と云ふ電報を打つた後、或る大

きな旅館へ車を走らせた。而して旅館の二階の海に面した六疊の室へ勞れた身體を投げ出した。

風呂へ這入つてから晩飯を食べるともう九時過ぎになつたが、彼は又旅館を出て降り頻る雨の中を警察署へと赴いた。今が一番盛りである筈の此の避暑地の街も凄じい風雨に脅かされて往來には華かな人影も見えず、兩側の家々は大概雨戸を下して深夜の樣に靜まり返つて居る。陽吉はふと三年前に友人と小さな家を借りて此の濱邊に一夏を過した記憶を思ひ出した。三年前若き日の華かな歡びの中に彼を迎へた鎌倉は、今宵かうして暗澹たる暴風雨の中に再び彼を迎へた。だがあの少女は？　其の頃毎朝陽吉が濱邊で出會つては無言の凝視を交したあの美しい少女はどうしたらう？　恐らくもう人妻となつて今年も亦此の思ひ出多い鎌倉に一夏を過して居るのではあるまいか。由井ヶ濱の穩かな漣波に今年も亦彼の女のふくよかな胸と腕とを抱かせ乍ら若き日の生きて行く歡びを感じて居るのではあるまいか。水色の縞の海水着を着て日に燒けて薄赤くなつた愛らしい膊へ帽子のリボンをきちんと結んだあでやかな少女の姿が古い、尊とい繪の樣に彼の眼の前へ現れた。だが然し彼はもう其の幻しを追ふ必要は無かつた。もつと鮮かな肉體が、もつと愛の籠つた双眼が闇を透して遠くから彼に迫つて來た。麗かな、神々しいとき子の姿が薄れ行く少女の幻しの上へぴつたり重つた。彼には瞬間二人の女が全く同じ者の樣に思はれたのである。

警察署の中はがらんとして線路に故障でも起つたのか、薄赤い電燈が今にも消えさうに儚なげにともつて居た。陽吉は受附の巡査に名刺を出して用件を述べると、巡査は立上つて彼を奧の窓際に居た巡査

部長の處へ連れて行つた。

「どうぞ此の方によくお話しなすつて下さい。」

取次ぎの巡査は陽吉の方を向いてさう云つた後改めて部長に擧手の禮をして恭々しく引下つた。彼は部長に輕く會釋してから此の警察署管内で死骸搜索に應分の盡力をしてくれる樣に依賴し、參考迄にもと懸賞廣告を一枚渡した。

「承知しました。出來るだけ盡力致しませう、明朝は暴風雨被害の實況を調査する爲め諸方へ巡廻する者がありますから、其れにも話して置きます。」

陽吉は禮を述べて警察署を立去つた。而して元來た道を旅館の前迄辿り着いたが、旅館へは這入らずに塀の間の狹い道を通つて裏手の海岸へ出た。

見渡す限り黑い海、黑い空、世界は永劫に其の中に封じ盡されたかと思はれる許りで、雨は少しも衰へず、寄せては返す怒濤の響と共に風の力も刻々に加はつて來る。濱邊の引上げられた漁船は海から這ひ上つた、而して今にも蠢めき出しさうな、巨大な怪獸の姿の樣に見えて、海岸の家々の火がどんより其の上に照つて居る。爽かな鹽の香が闇の中から彼の鼻を襲うた。彼は傘をつぼめ、帽子を抑へて廣い濱邊に唯一人海と空との永遠の姿の前に立つた。無限の闇に蔽はれて凄じい呪咀の聲を陸地に浴びせかけ乍ら荒れ狂ふ狂瀾怒濤は唯自然の無意味な現象と見るべく餘りに恐ろしかつた、餘りに嚴かな權威を帶びて居た。陽吉は前夜此の海の眞唯中に呑まれて行つた骨肉の伯父の事を考へた。長しへの愛人として

我が腕に抱かうとするときき子の事も考へた。幾度か内からも外からも死に脅かされて來た彼自身の半生をも顧みた。突如として彼の伯父を現世から奪ひ去り、突如として一人の女性を彼の永遠に愛する者として彼の傍らに送つた運命は、今宵此の茫漠たる海と空との前に唯一人彼を立たしめて、何を求め、何を希はしめるのであらう？

彼はもうアリストファネスの男女同體説(ハーマフロディイズム)を信じては居なかつた。彼はもうメーテルリンクが說いた樣に人々を妻として定められた愛の女性へと導く運命の星が常に頭上に輝いて居るとも思つて居なかつた。唯然し彼はゆくりなくも時と處を同じうして生れ合つた數多の女性の中から自ら進んで唯一人選び求めた最も愛する者を彼の凡ての靈肉の愛を以て充たしてやらねばならぬと信じた。而して其處にのみ未來の生活の基礎を定めやうと決心した。此の一年の間とき子との戀の懊惱によつて傷ましき迄掻き亂され、堰止められた宇宙と人生に對する淸らかな愛情が、今暗い伯父の死を背景として、晴れやかなとき子との戀を中心として、泉の如く彼の心に湧き上つた。彼は永い間捨てゝ置いた藝術の製作に對する烈しい欲求が蠢めくのを感じて來た。

陽吉はふと親しい友人の一人が此の春兩親に別れ、戀人を振り棄てゝ遠い北越へ漂泊の旅に登つた途次、新潟に近い越後の海岸で或る日の黃昏唯一人天涯に沈み行く落日の影を見送つて居ると急にたまらなく悲しくなつて砂濱に身を投げ伏し乍ら『おゝ神樣、私が惡ければ謝ります！』と叫んだと云ふ紀行の一節を思ひ出した。

「おゝ神樣、私が惡ければあやまります！」

彼ははしなくも思ひ浮べたまゝ其の言葉を海に向つて叫んでみた。不思議にも其れは曾て人類の何人によつても發せられた事が無い樣な嚴かな響を彼の心に轟き返した。彼は今海や、空や、森や、人類や、其等の凡てを支配し、其等の凡てを通じて生きる、大きな、見えざる力がはつきりと彼の心に働きかけたのを感じた。彼も亦砂濱に膝まづいて其の見えざる力の前に隷屬の安易と和らぎとを祈りたい氣になつた。

熱淚が溢れた眼を揚げて陽吉は再び海と空との永遠の姿を見た。彼はもう闇を恐れなかつた。而して闇を支配する見えざる力に安んじて自らの未來と希望とを托した。

翌朝彼は鎌倉の漁師組合を訪れてから更に鵠沼へ行つて、同じ樣に巡査派出所と漁師の網元に死體搜索を依賴し、午後三時過ぎの藤澤發列車で東京へ引返した。汽車が東京へ近づくに從つて雨は歇み、漸く海の果から空を蔽うた雨雲は剝げる樣に散つて行つた。而して陽吉が東京驛のプラットフォームへ降りた時、ちらほらと燈火が煌めき出した大都會の上に三日間見られなかつた晴れやかな日光が夢の國の樣によそ〳〵しくさし入つた。

彼は直ぐ俥を傭つて本所のとき子の家へと走らせた。豪雨で泥を洗ひ落された往來には大地の肌が痛々しく露出して、裂かれた木の枝がさら〳〵と其の上に舞つて居た。兩國橋を渉つて俥がとき子の家に近づくにつれてさすがに陽吉は胸がときめくのを覺えた。一年近い間夜毎にさまよひ歩いた其の往來へ

公然と俥を驅つてとき子を訪れる日の自分を見出した事が如何にも思ひがけぬ事の樣に思はれた。

格子先で俥を乘り捨てゝ中へ這入ると、とき子は待ち焦がれて居た樣に茶の間から現れて彼を導き入れた。長火鉢の前に坐つて居た父親は氣輕に「さあどうぞ涼しい方へ。」と云ひ乍ら釣りしのぶの風鈴が微かに鳴つて居る緣側近くへ蒲團をすゝめた。陽吉は長い睫毛と、大きな、よく光る眼を持つた、嚴かな、だが人の好さゝうな父親の顏を眼の前に据えて見た。而して辱しめられた人の樣に頰を赤らめて俯き乍ら默つて其の前に手をついた。（完）

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正五年十月三十日印刷納本
大正五年十一月一日發　行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印　刷　人　高木西三

發行所
東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話四下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正五年十一月三十日印刷納本
中央公論十一月號（第三十一年第十二號）

